青空浪人

他一編

山手樹一郎長編時代小説全集＝21

春陽堂

作品案内

女が手もつけられない男に案外ころりとなる傾向があるとすれば、実は男のほうも、はねっ返りで気が強くって、思いこんだら命がけという鉄火な女に、手をやかれることを望んでもいる。
山手文学いつもの大きな見どころは、この凄艶な姐御スターのご登場だ。抜け荷買いの嫌疑で牢死した父と、悲惨に果てた母の恨みの仇を求めて、南蛮手品の女芸人になって江戸へ出た長崎屋あや女。本編の読み出したら手放せない最大の面白さは、彼女のじゃじゃ馬ぶりにいつもぽかんとしながら、巧みに御していく青空浪人建部源太郎との恋模様にある。ヤングの諸君は、スタンダールの「赤と黒」の傲慢令嬢マチルドを、ふとほほえましく思い出すかも知れない。
また、純情娘久美と楽天侍猪村大助との爽涼な恋慕を描いた併収「朝霧峠」は、小説が薄汚れたものばかりになりつつある現代、こういう明快清冽な楽しみもあることを教えるものとして、初めて山手文学に接する読者にも格好の入門佳編である。

――文芸評論家　石井富士弥

山手樹一郎長編時代小説全集＝21

青空浪人 他一編

春陽堂

青空浪人 他一編

山手樹一郎長編時代小説全集＝21

春陽堂

春陽堂●450円
0193－200421－3066

青空浪人 他一編

山手樹一郎長編時代小説全集

21

春陽堂

青空浪人 他一編

山手樹一郎長編時代小説全集

21

春陽堂

●編集／解説

尾崎秀樹

●巻末付録執筆者

井口朝生
一条明
*伊藤文八郎
風巻絃一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
松永義弘
水野泰治

*本巻執筆者

目次

青空浪人……一
朝霧峠……三〇九

青空浪人

春の女狐(めぎつね)

江戸の桜が七分どおり咲きかけた春のよい、花曇りの空のどこかに月があって、町も道も花も、ちょうちんのほかげさえ、おぼろにうるんで見えた。とはいっても、この辺は屋敷町つづきだから、もう人通りもまれで、ほかげにも乏しい。猿楽町(さるがくちょう)通りから水道橋へ出た建部源太郎(たてべげんたろう)は、さてどっちへ行ったものかな、と迷いながら立ち止まった。

橋を渡って右へ行けばお茶の水、左は牛込、まっすぐ行けば春日町(かすがちょう)から白山(はくさん)へ出る。どっちへ行っても一晩ぐらい泊めてくれる友人か親類がないでもないが、今夜は堅苦しいあいさつはしたくないような気がするし、そうかといって、遊里へ行って軽薄な女のくぜつを相手に酒をのむほど浮いた気にもなれない。

——あしたからどんな運命をつかむか、いってみれば、おれの浪人すごろくの振り出しのようなもんだからな。

生来あまり物事に屈託するほうではないが、浪人第一夜だから今夜だけは静かな夜を送りたい。といって、はたごについてひとりで寝るのも少しわびしすぎる。窮屈でなく、わびしくなく、のんびりと静かでたのしい夜、たとえば、友あり、遠方よりきたりて杯をかわすごとく、あるいは恋人ありてたのしく将来の夢を語るがごとき夜がほしい。

——ぜいたくをいいなさんな、恋人もいねえくせに。

忠斎がいたら、さぞそういってカカ大笑するだろうと思い出したら、なんだか、おかしくなって、うふ、ふ、とひとり笑いが飛び出した。しかも、いつの間にか橋の欄干にほおづえをついて、見るともなく暗い水をながめているのだ

から、人から見たら、たしかに気ちがいに見えたにちがいない。

「もし、失礼でござんすが——」

はたして、ふいに背後から声をかけてきた者があった。

「おれかえ」

ふり返ってみると、若い女で、髪はいちょうくずし、紫ちりめんの羽織をぞろっぺいにひっかけて、どこから見ても、芸者か芸人か、あだっぽいみずぎわだった器量だ。あれえ、すはだしだぞ、こいつもいくらか気が変なのかな、と目をみはったとたん、ほのかに酒気がただよってきた。ああ酔っぱらい女かと見ているうちに、

「ほかにだれもいないから、あなた様なんですけれど、いまお笑いなすったのは、たしかにあなた様でござんすか」

と、妙に目をすえてきた。

「どうもおれらしいねえ。ほかにだれもいないところをみるとね」

「まあよかった。この辺には悪いカワウソが出るってきいたもんですから、それかと思って」

にこりともしないで男をからかってくるところをみると、この女こそ白ギツネのたぐいかもしれない。源太郎は黙ってまゆへつばをつけるまねをしてみせた。

「こん——」

驚いたことには、女はいきなり両手を胸にちぢめて、ひらりと橋の欄干へ飛びあがり、昼間ならさぞ燃えたつすそに白いはぎがあざやかだったろう。二、三間するすると走って、大胆にもさっと片足立ちに、片足をうしろへ高々とキツネの所作をしてみせた。ほおへびんのほつれ毛が二筋三筋、生ぬるい春のよいだけにすごいこともすごかったが、

「あぶない、よせ。落ちたらどうするんだ」

相手が酔っぱらいだけに、源太郎はそのほうをひやひやする。

「あら、あんた、案外度胸があるのね」
女はぴょんと橋の上へ飛びおりながら、はじめてにっこりわらった。
「おまえのほうがよっぽどいい度胸だ。おれは冷や汗をかいちまった」
「でも、少しはキツネに見えた？」
「キツネだってしっぽを見ないうちは、やっぱり女だから、落ちりゃ助けに飛びこまなけりゃならない。あんまりはらはらさせるなよ」
「落ちなけりゃいいんでしょ」
キツネに見えておどろいてくれないのが、女には不服らしい。
「絶対に落ちないとはいえないよ。サルも木から落ちるからな」
「あんた、サルが木から落ちるの、見たことあんの」
「そりゃないが、たとえばの話だ」
「たとえばの話だって、あたしは絶対に落ちないんだから、冷や汗なんか、かいてくれなくたっていいわ」
女はわざと欄干へ腰かけて、両足をぶらぶらさせてみせる。
「いい女のくせに、強情だな、おまえは」
「ええ、おかげさまでね」
「酒癖もよくなさそうだ」
「手癖も足癖も悪いわ」
「おへそも少し曲がっていそうだね」
「ふーんだ、あたしのおへそ、見たこともないくせに」
「そういえばキツネにおへそがあったかな」
「おいなりさんに聞いてごらんなさいまし」
「なるほど――じゃ、そうしよう」
いつまでこんなところで、女狐（めぎつね）めいた女と掛け合い話をやっていたところできりがなさそうだ。いや、こうして足をとめられているのさえ、既にキツネに化かされているような変な気がしてきたし、だいいちひとのへその心配より、自分の今夜の宿を早くきめなければならない源太

郎だから、あいかわらず白い足をぶらぶらさせてすそをなぶっている行儀の悪い女のほうへ、わざとぽんぽんとかしわ手を鳴らし、ていねいに拝んでから、さっさと歩き出した。
「薄情者――」
そのうしろからふわっと飛びついてきた女が、いきなり肩へいやというほどかみつく。
「痛いっ。――なにが薄情だえ」
「こんな寂しいところへ、女ひとりおいてけぼりにするなんて、あんた、それでも男なの」
「おいなりさんでも寂しがるのかねえ」
「寂しいんだから、そこまで送ってって、カゴを拾ってよ。あたし、歩くの、もういやんなっちまった」
左腕へからまりつきながら、案外しゃっきりと歩き出す。足はお茶の水のほうへ向かっているのだ。
「どこへ帰るんだえ、王子（おうじ）かえ、三囲（みめぐり）さまかえ」
「どっちでもいいわ。みんなしんせきだもの」
道は坂になって、登りきった左手に広い馬場があり、右手に神田川にそって、だんだん急坂がうっそうたる森につつまれてくる。このへんから昌平橋までの間を、江戸の詩人は小赤壁（しょうせきへき）と呼んで、けしきはいいが、追いはぎでも出そうな寂しい場所だ。
「あんた、とても好男子ねえ。気に入ったわ」
酔いどれ女は歩きながらも黙っていない。
「どうもありがとう」
「それに思ったより親切そうだし、あたしのいろにしてやろうかな」
「あいにく、おれは油揚げがあんまり好きなほうじゃないんだ」
「そんなことというとほんとうに化かしてやるから」
「勘弁してくれよ。肥だめの前で裸になって、ああいい湯だなんて、色消しだからな」
「いいじゃないか、あたしといっしょなら」

器量自慢で、日ごろ男にちやほやされつけているから、つい、そんなうぬぼれたことばが出るのだろう。
「ああおまえ、おれにおへそが見せたいんだね」
「いけ好かない。しょってるわ、この人」
自分がしょってるくせに。どすんとひじでわき腹をこづかれてしまった。
「おまえ、軽わざの太夫さんかえ」
粗野で、あばずれで、色っぽくて、女だてらに欄干などへ平気で飛びあがれるのは、まず両国あたりの曲芸の娘太夫のほかはないだろう。
「さあ、どうだか」
「太夫さんでも名人のほうだな、あのキツネは本物に見えた。おれはおくびょうだから冷や汗をかいただけですんだが、もう少し気の強いやつなら、きっと刀を抜いていたねえ」
源太郎も人が悪いから、ちょいと、おだててみる。
「急に口がうまくなったのね。おだてておへそを見ようったってだめだわ。男って、どうしてそういやらしいんだろう」
「そんなにいやらしいかえ、男って」
「まるでけだものだわ。お旗本のくせに、人を芸に呼んでおいて、ついでに手ごめにしようなんて――ふーんだ、地娘か腰元なら知らぬこと長崎あやめをなんだと思っているんだろう」
問うに落ちず、語るに落ちるで、とうとう白状してしまったようだ。それにしても、これが今東両国で江戸じゅうのすばらしい人気を呼んでいる長崎初のぼりの南蛮手品、長崎あやめ太夫とは、今夜が浪人第一歩の建部源太郎も、振り出しから妙な女にぶつかってしまったものである。

追っ手

坂を登りきってから、源太郎は立ち止まってうしろをふり返って見た。昼間なら市ガ谷の丘の上あたりに、富士山がまっ正面に見えるところだが、いまは丘も森も町も、おぼろに濃紺一色にはかかれ、飯田町から牛込へんの春の灯が点々と、はるかに下界になって目にしみる。
「いいけしきだねえ」
「けしきなんか、ちっとも見えないじゃないか」
はなはだごきげんがよくないとみえて、あやめ太夫はすぐ突っかかってくる。
「だって、春の灯が見えるだろう」
「灯なんか、春でなくったって、あたし、毎晩見てるわ」
「おどろいたなあ。おまえ、お旗本に手ごめにされそこなったからって、なにもここで、おれにけんかを吹っかけなくたっていいじゃないか」
「ばかいってないで、さっさとお歩きなさいよ」
あやめは、からんでいる腕をぐいぐいひっぱって歩き出すのである。どうもわがままな女だ。
「かわいそうに――」
「なにがさ」
「おまえのようにそうわがままじゃ、お嫁にもらいてがないだろう」
「あんたにもらってくれなんていいやしないから、ご安心くださいまし」
「ありがとう、助かるよ」
「ぶんなぐるから」
ぶんなぐるかわりに、どすんとまたひじ鉄砲がきた。左手に馬場の桜が、おぼろにたなびくばかりの花あかりを作って見えだした。それが一丁あまりつづくのだから、におうばかりみごとなふぜいである。
「こりゃみごとだ」
おもわず立ち止まろうとすると、
「あんた、どうしてそういなかっぺなんだろ」

と、女は、あけすけにけいべつしたような顔をする。
「どうしてだえ」
「さっきから、ただのものばかり、よろこんで見ているんだもの」
「そんなことはないよ。いまに木戸銭を払っておまえの手品だって見に行ってやるよ」
「ふ、ふ、木戸銭はまけてあげるわ」
「あとがこわいな」
「ぶんなぐってやるから」
が、今度のは、口だけで、自分もうっとりと花のこずえを見上げながら、
「でも、夜桜ってほんとうにきれいなもんねえ」
と、足を止める。まんざら風流っけのない女でもないらしく、人に先を越されると強情でへそまがりだから、つい、あべこべなことがいいたくなる性分なのだろう。
女はしばらく放心したように花に見とれている。いい気なもので、そのあいだじゅう、あいかわらず男の腕につかまりながら楽々と肩へよりかかっているのだ。年は二十歳を一つか二つ出ているかもしれない。白々とした膚が女になりきって、曲芸で鍛えたからだだからぜい肉はないが、すんなりと健康そうに引きしまった肢体に、あふれるような精気をみなぎらせているのうえんな女だ。
その源太郎の肩でくつろぎきっていた女のからだが、突然ぎくりとしたように立ちなおって、坂のほうへ耳を澄ます。
「どうかしたのか」
「だれかくるわ。追っ手かもしれない」
「追っ手――」
なるほど黒い人かげが三、四人坂をのぼりきって、いっさんにこっちへ駆けてきながら、やあいたぞ、あやめだ、太夫だと早くも見つけて口々に、たちまちばらばらと取りまいてきた。いずれもやくざふうのがらのよくないやつらで、

「太夫、こりゃいったいどうしたっていうんだ」
口をきったのはこの中でもあにき株らしい、目のぎょろっとした男だ。うしろのやつらがちょいと鳴りをしずめたのは、あやめのうしろに若い侍が立っている、何者だろう、いや、何者でもかまわないが、強いか弱いか、と瀬ぶみをしているのだろう。
「おや、岩さんですね。あたしを追いかけてきたんですか」
あやめはきょうまんな顔をして、びくともしていないようである。
「追いかけてきたってわけじゃねえが、黙って帰っちゃいけねえや」
「そうかしら。あたしはまた黙って帰ったほうがかどがたたなくていいと思ったもんだから」
「妙なことをいうね、太夫。今夜はうちの親分竹五郎のごひいき筋の公儀直参五百石神尾主膳さまが、ぜひ太夫の芸を一度見たいとおっしゃるから、うちの親分が金を積んで、おまえにお座敷をつとめてもらうことにしたんだ。そのお座敷の半ばに黙ってかってに帰るほうが、よっぽどかどがたつんじゃねえのか」
わざわざ公儀直参五百石を持ち出したのは、うしろの源太郎を威嚇しておこうという腹があるのだろう。
「だから、お座敷だけはひととおりつとめたじゃありませんか」
「そりゃ、手品は見た。手品のほうはすんだが、まだ、酒宴は終わったわけじゃねえから、とくべつに、お好み番組をという注文が出るかもしれねえや」
「そのお好み番組が気に入らないから、あやめは黙って中座しましたって、帰ったら親分にそうつたえてくださいまし」
「なんだと――」
「あたしは初め親分に、手品はかぎょうですからお目にかけますけれど、芸者じゃないんだか

らお座敷のお酌はしません、とちゃんとことわっておきました。そうはいっても、親分の顔もあると思ったから、今夜はお酒の相手も二つ三つしたんです。なんてえ殿さまだか旗本だか知らないけれど、ひとがおとなしくしていりゃつけ上がりやがって、供をせい、はい、手洗いに立つんだと思ってついて出たら、いきなり暗い小座敷へかかえこみやがって、そんなお好み番組までつとめさせられてたまるもんか。よっぽど、そのとき、あのおひらの長芋みたいな横っつらをひっぱたいてやろうかと思ったけれど、それだけはまあ胸をさすって、ちょっとお待ちなすって、女のたしなみ、口をゆすいでまいりますからとだましたら、逃げるでないぞ、逃げようといたしてもちゃんと手配りがある、いいえ、なんで殿さまの御意にそむきましょうと、いろ目を使ってみせたらデレッと目じりをさげて、早くいたせだとさ。岩さん、あのときおまえさんたちは山賊殿さまのお手伝いをして、あっけらかんと裏表をかためていたんじゃないのかえ」

「そ、そんなことはあるもんか」

「けっこうだわ。いいにいさんたちが手ごめのお手伝いなんか、あんまりだらしのいい話じゃありません」

「けど、太夫はいったいどこから屋敷を抜け出したんだね」

「ほ、ほ、あたしは綱渡りもできる女ですよ」

「やっぱりそうか、それで読めた。太夫、きのどくだが、おまえにはぬすっとのけんぎがかかっているんだ」

「なんですって――」

「あの小座敷の違いだなに、殿さまがのせておいた五十両のふくさ包みが消えている」

「ふーんだ。いいがかりもたいがいにおしよ、ばからしい」

「ばからしいか、ばからしくねえか、そんなことは殿さまの前で申し開きをしてくんな。おれ

たちは、ただおまえをつれて行きさえすればいいんだ」

「いやなこった。だれが行くもんか」

「かまわねえ、それ、女どろぼうをひっかつげ」

「がってんだ。神妙にしろ」

どろぼうとはうまいなんくせをつけたもので、日ごろ横車を押しつけている連中だから、たちまち、あやめを手どりにしようとひしめきたつ。

「まあ、待て」

見かねて、くやしがって歯がみをしている女をうしろへ押しやり、源太郎はやくざどもの前へ出た。

もどり駕籠(かご)

「へえ、じゃおまえさん、女どろぼうをかばうというのかね」

どうせ、ただではすまないと勘定にはいっていたらしく、岩あにいは人を食った顔をする。

「おまえたち、これをただの女だと思っているのか、ばちがあたるぞ」

「おや、変なことをいうねえ」

「変ではない。これは三囲(みめぐり)いなりのお使い姫だぞ。さっきたしかに、コーンと鳴いたのを、おれは聞いているんだ」

「なにをぬかしやがる」

「さては信用せんな。凡俗というものはきのどくなもんだ。おまえたちが知らずにこの女に手を出せば、手が曲がってしまう。帰って神尾主膳といういたずら者にそういいなさい。へたなワナをかけてお使い姫をとろうと思っても、こっちは神通力だからだめだとな。だいいち、この女にはへそがない。キツネだからな。知っているかね」

にこりともしない真顔の源太郎だ。

「おいおい、おまえさん、気はたしかなのか」

「たしかだとも。おれはおまえたちがかわいそ

うだから教えてやるんだ。いくら天下の旗本でも、神通力のおキツネさまにはかなわん。むりにつかまえようとすると、ぱっと姿を消して、その足で今度はお奉行さまの夢まくらに立つ。神尾の屋敷は賭場になって、毎晩ならず者が集まり、悪いことばかりしている、さっそく調べて取りつぶすがよい、と訴えられてみろ、主膳ばかりでなく、親分竹五郎はじめ、おまえたちまで、ただではすまなくなる。悪いことは申さんから、ここはおとなしく引きさがりなさい。あとでおれからよくお使い姫にあやまっておいてやる」

「てめえのいうことはそれだけか」

からかわれていると気のついた岩あにいは、ぐいと、ふところのあいくちへ右手をかける。

「ばかだなあ。刃物なんか抜いたって、おキツネさまがおどろくもんか」

「やろう——」

きらっとあいくちが夜目に白く、だっとからだごと飛びこんでくるやつ、ひょいとかわしてきき腕をつかみ、とっさに左で当て身をくれたのがあまりにも早かったので、やくざどもの目には、突っかけた岩あにいが、ひとりでそこへうずくまってしまったとしか見えなかったろう。いずれもぎょっとしたように一足うしろへさがった。

「そうれみろ、いわないことじゃない。この男は手足がすくんで、当分いざりになるな」

源太郎は足もとへ倒れた岩をきのどくそうにながめながら、大きなため息をついた。

「どうだ、おまえたち、うそだと思ったらあいくちを抜いてごらん」

「なにをっ」

それでも負け惜しみがあるから、三人一度にふところへ手をつっこんで見えだけは切ったが、思いきってかかってくる気にはなれないようだ。

「さあ、お使い姫さま、三囲さままでお供つかまつりましょう」

源太郎はもうそっちは無視して、あやめのほうへていねいにおじぎをした。目をつりあげて、三人のほうをにらんでいるあやめは、どろぼうといわれたのがとてもくやしいらしく、どうしても、ひとあばれしなければ気がすまないような顔をしている。その闘志にあふれたきぜんたる姿が、いい女ぶりだけになんとなく女ギツネめいてすごい。

「いけませんぞ、お使い姫さま。いまにこの凡俗どもはきっと後悔して、油揚げをあげにきます。どうぞ今夜のところは許してやってください」

あやめはぷいときびすをかえして、まるで男みたいにさっさと歩き出した。そのうしろ姿へ、源太郎はぽんぽんとかしわ手を鳴らして、もう一度おじぎをして、ゆうゆうと歩き出す。おぼろにかすむ花あかりの下だけに、だんだん無気味になってくるのだろう、だれもあとを追ってくる様子はない。

聖堂の土べいの前まで出ると、そこから下り坂になって、今度は湯島から外神田あたり下町一帯の灯が広々と見おろせてきた。

「おキツネさん、おまえどこまで帰るんだえ」

もうだいじょうぶと見たから、源太郎はつっと女と肩をならべた。

「知らない」

またしても邪険なひじ鉄砲だったが、

「あんたも相当なカワウソね」とあやめが笑う。

「それほどでもないよ」

「うそをおっしゃい。どこを押したら、油揚げを持ってあやまりにくるだなんて、そんな口から出ほうだいが出るんだろ」

あやめはあのとき、あぶなく吹き出しそうになったから、いそいで歩き出したのだ。

「悪党なんて案外迷信深いもんだから、あしたあたり三囲さまへ油揚げを持っていくだろう」

けろりとして答える源太郎だ。

「あんた、なんて名まえ――」
「カワウソ源太」
「でたらめいってらあ。じゃ、さっき水道橋の上で、なんだってひとりでわらっていたのさ」
「そうかねえ、わらっていたかねえ」
「だから、あたしがカワウソとまちがえたんだわ」
「ああそうか、思い出したよ。窮屈な親類の家へ泊まるのはいやだし、うそでかたまった遊里の酒も今夜だけはのみたくない。せっかく天下晴れて浪人になったためでたいおれの振り出しだからな。こんな晩は恋人としみじみ将来のことなど語り明かしたら、たのしかろうと思ってね、気がついてみたら、おれにはまだ恋人がなかった。つい、わらいたくなったのさ」
「ふーんだ。そんなに恋人がほしかったら、カッパの娘でもくどいてごらんよ」
「そうしよう。早くおまえのカゴを見つけておいて、――はてな、このへんでカッパの本場はどこかな。鐘ガ淵(ふち)あたりかねえ」
「源さん――」
「なんだえ」
「どうして、おまえさん、浪人したの」
「いうにいわれぬ子細があるんだ」
「うそつき。お腰元とでも、でれついているところを、上役に見つかったんでしょ」
「そんな気のきいた話があれば、橋の上でひとりでなんか、わらっていないよ」
「いいえ、お腰元のことを思い出して、喜んでいたんじゃない。いやなやつってありゃしない」
「だれがいやなやつなんだえ」
「あんたのことよ、いけ好かない」
「あは、は、おれはやっぱりカッパの娘しかくどけない、いけ好かないやつにできているんだな」
　坂をおりきって、ちょうど向こうの湯島一丁目のほうから、もどりカゴらしいちょうちんの灯がふらりとおぼろやみへ出てきた。

「ああ、来たきた。おーい、カゴ屋」
　気軽に源太郎が、そっちへ声をかけて駆けだそうとすると、
「いやだってば、いけ好かない」
　いきなりその男のたもとをつかんで引きもどし、びっくりして引きもどされた源太郎の肩へ、おこったようにどすんと肩をたたきつけた。

柳原土手

「おかしな女だねえ。いけ好かないったって、さっきカゴをひろってくれっていったのは、おまえじゃなかったのかえ」
　源太郎はあきれて女の顔をながめた。
「いいから早くことわってくださいってば。薄情な人ねえ」
　長崎あやめはおこった目で、ごうぜんとにらみつけてくる。そこへもうカゴ屋が駆けつけてきて、
「へい……カゴをおよびなすったのは、こちらさんで――」
　と、とんとカゴをおろしてしまったから、源太郎はちょいとひっこみがつかない。
「ほんとうに乗らないのかえ」
「乗りたくないんだってば」
　つんとそっぽを向いてしまうあやめだ。
「カゴ屋、すまんことをしたな。呼んだのはたしかにおれだが、急に乗りたくないといいだしたんだ。だちんをつかわすから、勘弁してくれ」
「いいえ、だちんなんかいりませんが、おかみさんは、カゴがきらいなんでござんすか」
「そんなことはない。ただ、いまは身持ちだものだから、流産するといやだというのだ」
「ゆっくり気をつけてやれば、そんな心配はござんせんがねえ」
「まあ、これを持っていってくれ」

いくらかのだちんを握らせてやると、すんませんねえ、おたいせつになさいまし、とカゴ屋はおじぎをして行ってしまった。

「源さん」

「なんだえ、おキツネさん」

そらきたぞ、と思ったから源太郎はにやにやわらっている。

「いつあたしが身持ちになったのさ。まだ亭主もないのに」

腕をつかんで引きつけて、許すまじき顔色だ。

「そうあげ足を取るなよ。ああでもいわなければ、ひっこみがつかないからなあ」

「いやだってば、女にそんな恥ずかしいぬれぎぬをきせて。どうしてくれるのよう」

「そんなに恥ずかしがらなくたっていいやね。女はどうせ亭主を持つものだし、亭主を持てば、たいてい身持ちになるもんだ」

「だれが亭主なんか持つものか、そんないやらしいもん」

「あれえ、どうしてそうおれをにらみつけるんだろうな。おれは別におまえのいやらしい亭主ってわけじゃないんだぜ」

「いいから、さっさとお歩きなさいよ、ぐずってありゃしない」

思い出したように腕をひっぱって、ぐんぐん歩き出す。さんざんしかられたりこづきまわされたり、そのうえどこだか知らないが、家まで送らせようというつもりなのか。

「ちょいとうかがうがね、おまえさっき、おれがせっかくカゴを見つけてやったら、薄情者だっておこっていたね」

「あたりまえじゃありませんか。あたしをカゴ屋におしつけておいて、あんたはひとりで鐘ガ淵へ女カッパでもさがしに行こうって腹だったんでしょう。あたしが東両国の竹五郎ってやくざに、どろぼうのぬれぎぬをきせられて、追いかけられているってのを知ってるくせに、ひきょうだわ、そんな」

「ああ、その薄情だったのか」

ずいぶんてまえかってな話だが、そういわれてみると、まんざらうなずけないこともない。

「竹五郎ってやつは、よっぽどあくどいやつのようだねえ」

「男ってみんなそうだわ。てまえかってで、うぬぼれが強くって、ずうずうしくって――あんたは少し違うけど」

「それは違うとも。おれは正直で、親切で、難をいえば多少まがぬけているだけだ」

「ふ、ふ、多少ぐらいかしら。それでもまがぬけてるっての、自分で知ってるだけ感心ね」

人の腕にぶらさがって歩きながら、いいたいことをいってのけるのだから、まったくあきれた女狐だ。

「ほめてもらってありがとう。どこまで帰るんだえ」

「両国橘町よ」

筋違橋をわたって、八辻ガ原からずんずん柳原土手のほうへひっぱっていく。まだよいで、下町へくると、ちらほら人通りが絶えないから、まさか若い女が男にぶらさがって歩けない。わざと人目をさけて寂しい道を選んだのは、どうしても家までぶらさがっていく気だからだろう。

「はてな、橘町へんに、どこか有名なおいなりさんがあったかねえ」

「ぶんなぐるから――」

「そうだ、おまえカゴへのらないんなら、そのへんへ行ってげたを買ってきてやろうか。すはだしじゃ足が痛いだろう」

「痛いわ、今ごろ気がついたの」

「申しわけございません。ここで待っていろよ。ちょいと買ってきてやるから」

「いやだったら。こんな寂しいところへ女がひとりで、夜鷹とまちがえられたらどうすんのさ」

「なるほど――」

「あんた、どうしてそう気がきかないんだろうな。あんたはたびをはいているんでしょ」
「わかったよ。黙ってぞうりをぬげばいいんだろう――そら」
源太郎はとうとうぞうりまでぬがされてしまった。女は手ぬぐいで足のどろをふいて、澄まして男のぞうりをつっかける。いい気なものだ。
柳原土手は神田川にそって、八辻ガ原から浅草橋の手前、郡代屋敷の裏までつづく火よけ地に作った土手で、ずっと柳が植わっている寂しい道だ。対岸は佐久間町一丁目から四丁目までつづき、和泉橋、新シ橋が両岸をつなぐ。その先が久右衛門町になって、酒井左衛門尉の下屋敷があるから、そのへんを左衛門河岸といい、少しさがって浅草橋となる。道は寂しいが、芽のふきそめたみずみずしい柳の枝がおぼろ月ににおい、神田川対岸の灯をあたたかく水にうかべて、春の夜は、うっとりと甘い夢のような大気の膚ざわりである。

消えた男

男の腕にぶらさがるように寄りかかって歩いている長崎あやめは、酒の酔いなど、とっくに消えているのだが、酔ったふりをして、悪態をつきながら、なんとなくこのばからしい男のそばが離れられない。だから、さっきいいかげんなんくせをつけて、せっかく男が拾ってくれたカゴを追いかえしてしまったのだ。
――どうしたっていうんだろう。
男と見れば、からだのほうから先にあんなに敵意を感じていたのに、とわれながらふしぎでたまらない。
あの晩の恐ろしい記憶を、いまだってけっして忘れているわけではないのだ。
自分は母の胸へ、夢中でしがみついていた。
「もうすぐだからね、泣くんじゃないよ」
母は青い顔をして、しっかりと自分を抱きし

めていた。若くて美しい母だった。屋根船はひどくゆれて、あれはたしか秋だったと思うが、波の音と風の音とが、五つの幼い自分には、地獄の悪魔がほえているとしか思えなかった。空には雲が走っているらしく、月かげがさっと船房をなでては、たちまち暗くなる。
長崎屋藤兵衛といった父が、急に抜け荷を買ったけんぎで、奉行所へつれていかれ、捕手がくるというので、母と自分は大番頭の重吉につれられて逃げ、屋根船にのって洲崎村へ身をかくす途中だった。船は大川から海へ出たのである。船をこいでいるのは重吉だった。
その重吉が、突然船房へはいってきた。鬼のようなひきつった顔をして、自分を母の手からむしりとり、
「騒ぐと、この娘を絞め殺すぞ」
と、いきなりのどへ手をかけた。
「重吉、かんべんして――おかあちゃん、いじめないで、あやちゃん、おとなしくするから、重吉」
こわくて、もう泣くどころではなかった。
母がどんなことをいったか、はっきり記憶はない。ただまっさおな顔をして、手をあわせて、娘だけは助けてくれと、哀願していたようだ。
――かわいそうなおっかさん。
重吉はその母のからだをねらっていたのだということは、自分が女になってから、思いあわされたことで――自分はそのまま絞め殺されて海へほうりこまれてしまい、気がついたのは、助けてくれた別の船の上だったから、そのときの世にも悲惨な場面は見ずにすんだが、重吉が母をどんなめにあわせたかは、いまこのからだが痛いほどに想像できるのである。
「ちくしょう、あいつだけは生かしておくもんか」
あやめが十六年ぶりで江戸の地を踏んだのは、その重吉をさがし出して、母のうらみを晴らす目的があるからである。

「乱暴だねえ、だれを生かしておかないんだえ」
「おっかさんを殺したやつさ」
「へえ、おまえのおっかさんはだれかに殺されたのかえ」
　その声が至極のんびりと聞こえたので、むかっとなったあやめは、
「大きらい、男なんて」
　いままでからんでいた男の腕を放すなり、どすんと肩で肩を突きとばして、がむしゃらにひとりで歩き出した。
「あれえ、おまえはまったく変わっているな」
　あきれたような男の声がうしろで聞こえたが、だれがもうおまえなんかに口をきくもんかと思う。男はみんないやらしいけだものなんだ。
　いや、あの男だけは、どうもそんなふうに見えない。だから、なお危険だと思う。うっかりすると、二十一というからだが、くやしいけれど、どんなまちがいを起こすかしれやしない。現にいまも男ののほうずさに、ついひきずられて、自分から男の腕へからみついていたではないか。
　正直にいえば、あの男だけは好いたらしいと、半分思いかけている。
　――ちくしょう、おっかさんのうらみを晴らすまで、男なんかに甘ったれていられるもんか。
　江戸へ出てきて、京橋大根河岸に長崎屋東五郎という唐物屋のあることだけはわかった。東五郎はまだ五十まえの男だが、はたしてそれが昔の重吉かどうか、まだよくわからない。
　東両国の竹五郎は、東両国一帯の盛り場をなわ張りにした香具師の大親分で、どういう関係があるのか、長崎屋をだんな筋にしている。あやめはでしのお春、お秋、一寸法師の豆蔵の三人をつれ、小屋芸人としては破格な千両という給金で、その竹五郎の小屋へ出ているのだが、わがままで気ぐらいの高いあやめが、珍しく竹五郎のきげんだけは取るようにしているのは、

太夫元だからというわけではなく、なんとかして長崎屋東五郎の昔を聞き出したいからなのだ。その昔を知っているようなら、父の藤兵衛がその後どうなったか、母はどうなったか、むろんふたりとも生きているとは思えないが、それらのこともわかっているはずなのだ。
　だからこそ、きょうも竹五郎のいうことをきいて、望まれるままに神尾主膳のお座敷もつとめたのである。が、いかに敵の様子をさぐり出すためでも、からだまでは張れない。
　――竹五郎が、あんまり無理をいうようなら、あたしにだって、考えはある。
　そう腹はきまっているあやめだ。
　それにしても、江戸へ出てきて、もうかれこれひと月、まだかたきのなんの手がかりもつかめないのは、あまりにもこっちが用心しすぎるせいだろうか。考えてみると、ひどくたよりなくなってもくるのだ。
　――あの男、ついてくるかしら。
　ようやく郡代屋敷の裏を抜けて、浅草見附へ出た。すぐ右手に西両国の明るい灯が見える。すたすたとそっちへ歩きながら、あやめはふりかえって見たくなるのを、むりにがまんした。
　――そんなに悪い男のようじゃないし、さんざん世話をかけたんだから、お礼ぐらい言って別れなくちゃ。
　そう思う。けれど、いままでずいぶん長い間、こっちが黙って歩いていれば、うしろから声一つかけてくれようとしない男なのだ。向こうがそんなに冷淡なのに、こっちからふり返って声をかけるのは、なんだか甘く見られるような気がして、きょうまんなあやめにはできない。
　――どうしてあんなに、あの男だけは薄情にできているんだろうな。
　いや、わざとあたしをじらして、心をひこうとしているんだ。あんなとぼけたふりをして、それが、あの男のずるい手なのかもしれない。ふーんだ、だれがそんな甘い手になんかのって

やるものか、と、あやめは腹さえたってきた。
「こんばんは、太夫――」
広小路を突っ切って、米沢町の通りへはいろうとすると、前からきた男にふと声をかけられた。しま物の対をきちんと着こなしたどこかのだんなとも見える小意気な三十二、三の男で、このごろよく楽屋やうちのほうまで、気のきいた届け物をしてくれるごひいき客である。実はおだんなの吉三というすごいスリの名人だから、太夫、とんだものまですられないようにお気をつけなさいよ、と楽屋番のじいさんから、からかわれたことがある。そういえば、ときどきうちの前へ立ち止まっていることがあるんですよ、とお春やお秋はまゆをひそめていたが、あやめはまだ一度も口さえきいたことはない。しかし、面と向かってあいさつされれば、そこは人気かぎょうだから、
「こんばんは――」
と、あやめはにっこりわらって、あいさつをかえさなければならない。
「毎度お届け物をしてくだすって、どうもありがとう」
「いや、きざなまねをするとおこらないでくださいよ。だいそれた気持ちがあるなんて、そんなんじゃないんだから」
「いいえ、とんでもない。いつもごひいきにしてくだすって――」
「その口の下から変なことをいうようだが、一度太夫に聞いてみたいことがある。ふたりっきりでなんて、そんな話じゃないんだから、だれかおまえさんの知った人、ご亭主のような人があるんなら、その人も入れて、どこかでゆっくりご飯でもたべてもらえないかねえ」
「ええ、そのうちに――」
けっしていつでもとはおせじにもいわないあやめだ。
「いいとも、そのうちに気の向いたときでけっこう。足をとめさせたね」

吉三は、わらいながら、広小路のほうへ歩き出す。
――なあんだ、どうせそんなことだろうと思った。
あやめはそのうしろ姿をちょっと見送りながら、舌でも出してやりたい気持ちだ。実は吉三なんかと立ち話にもせよ、しばらくつきあったのは、あの男がもう追いついてきそうなものだと、それが待たれたからなのである。
が、どうしたのだろう、すぐうしろから、ついてきてくれるとばかり思っていた源太郎の姿は、どこにも見えない。すると、ついてくるとばかり思って、薄情だの、もう口なんかきいてやるもんかだのと、あやめはいままでいい気になって、ひとりずもうを取っていたことになる。
「ばからしいってありゃしない」
おもわず口をとがらしてしまったが、さてどこかへ行ってしまったとなると、なんだかがっかりして、どうしてあたし、途中で腕なんか放す気になっちまったんだろうと、急にくやしくなってきた。
――あのカワウソめ、あたしをまくなんて、どうしてやろうかしら。
しかし、消えてなくなってしまったカワウソを、いまさらどうしようにも、やりようがない。といって、来るかこないかわからない男を、いつまで町かどに立って待っていたってしようがないし、だいいち、男を待つなんて、そんなことは死んだってしたくない強情なあやめだ。
「かまうもんか。かえってこのほうがあとくされがなくっていいんだわ」
あやめはひとりでぷんぷんしながら、急に家のほうへ駆け出した。

路地の奥

カワウソ源太の源太郎は、別にあやめをまいてやろうなどという、そんな悪気は、もうとう

あったわけではない。

なんで腹をたてたか、急に男みたいにすそをけとばしながら、ずんずんひとりで先へ行ってしまうやんちゃなあやめのうしろ姿を、

「気まぐれなおキツネさんだなあ」

とあきれながら、郡代屋敷を出はずれて両国広小路のほうへ曲がるまでは、たしかに見ていたのである。

家は橘町だと聞いてあるから、どうせ米沢町のかどをはいるんだろうと、いそぎもせず広小路へ出たが、このへんはまだ相当の人通りがある。そのかげにでもなったのか、夜のことではあるし、ちょいとあやめの姿が見あたらない。

「はて、どこへ消えたかな」

相手は気まぐれな女狐だから、どこかへ隠れていて、ふいにわっとおどかしにくるかもしれない。そう思ってきょろきょろあたりを見まわしていると、

「おや、だんな、どうしました、たびはだしで」

とふいに横から声をかけた者がある。

「やあ、おだんなうじか」

それがおだんな吉というスリだから、源太郎はにこりとわらった。

去年の春、今は長崎へ行っている友だちと向島へ花見に行ったことがある。浅草の雷門でその友だちにはぐれ、仲見世から観音堂まで捜しまわっていると、

「だんな、だんなは執念深いねえ」

と、いきなりこの男に話しかけられた。

「うむ、おれは執念深いほうだ」

先がそういうのに、なにもおれは執念深くないよ、と、ことわるにも及ばないから、あっさり、そういいかえしてやると、

「しょうがねえ、こっちへきておくんなさい」

その男は仲見世の裏の小料理屋へひっぱっていって、

「はい、だんなの紙入れ、まだ手はつけちゃいない、おかえししますよ」

と、いきなり自分の紙入れを目の前へ出された。雷門ですられたのを、こっちは少しも知らなかったが、その男の話によると、その男の行くほうへいつまでもついてきて、どうしても離れようとしない。しかも、別におこりもしないので、こいつ、ぽかんとした顔はしているが、よっぽど腹のすわった侍だな、と薄っ気味が悪くなったのだという。

「それはきのどくなことをしたな。おれは紙入れよりたいせつな友だちをまいごにしてしまったんで、血眼になっているんだ。その紙入れはせっかくだから、あらためてきこうに進呈するよ」――源太郎がそういってやると、

「こいつはおもしろい。だんな、そのお友だちってのを、あっしが半刻（一時間）の間にさがして、ここへおつれしようじゃありませんか。そうしたらあっしに、あっしも一度手にかけた紙入れだから、この紙入れをおくんなさい」

と、その男は友だちの身なり人相を聞いて飛び出し、半刻とたたないうちに友だちをさがしてつれてきた。

そのとき以来、心やすくなったのが、このおだんなの吉三である。

「おかしいねえ。たびはだしで今時分、どこへ行こうってんです、だんな」

あいかわらず変わっているなあ、というように、吉は源太郎の足もとを見てわらった。

「なあに、はじめからたびはだしでうちを出てきたわけでもないんだ」

「そりゃまあ、そうでしょうねえ」

「途中で女狐と道づれになってね、ちょろりとそうりをすられたんだ」

「女狐――」

「いままでいっしょに歩いていたんだがなあ。どこへ消えてしまったかな」

「どんな女狐なんです、だんな」

「そうだ、おだんなうじなら顔が広いから知っているかもしれんな。きこう今そのへんで長崎

あやめ太夫という娘手品の美人に会わなかったかね」
「会いましたよ、今そこで——だんなはあやめを捜しているんですか」
　吉はびっくりしたような目をする。
「うむ。そのあやめにぞうりをはき逃げされたんだ。橘町とかいっていたが、家を知らないかねえ」
「そりゃ知ってますがね。だんなのいうことは少し変だねえ。どうしてぞうりなんか、はき逃げされちまったんです」
「まあ、歩きながら話そう。とにかくあやめの家へ案内してくれ」
　いつまで立ってもいられないので、源太郎は吉を促しながら、水道橋のカワウソ問答からぞうりをはき逃げされたてんまつまでかいつまんで話した。
「へえ、なかなかおつな道行きをやったんですね、だんなは。あやめって娘もだいぶ変わってるそうだから、だんなとはいい相棒かもしれねえが」
　おだんな吉はひどく感心したような顔つきである。
「いや、おれのほうは別に変わっちゃいないが、あやめって娘はどうもわからん娘だ」
「そりゃわからねえでしょう。もともと手品なんてものは、種がわかっちまっては、ちっともおもしろくありませんからね」
　なかなかうがったことをいう吉三だ。
「しかし、太夫もちょいとまずいことをやっちまったなあ」
「どうしてだね」
「大きな声じゃいえねえが、東両国の竹五郎につむじを曲げられちゃ、あとがなかなかめんどうだろう」
「竹五郎ってのは、そんなにこわい神通力を持っているのかえ」
「まあ、神通力ってやつでしょうね。自分の思ったことは横車でもなんでも押し通す。どうしても通させなければ、あっさり眠らしてしまう。命知らずの子分がたくさんついていますからね」
「そう心配したもんでもあるまい。あの女狐も相当の神通力を持っているから、まさかむざむざとおへそを取られるようなことはなかろうさ」
「さあ、どうですかねえ。もっとも女はおへそといういい武器を持っているからな。そいつを切り札にしさえすれば、まさか命まではとはいわねえだろう」
「まず、そんなもんだろうな」
「あれえ、いやにだんなはおとなしいんですね。それでいいんですかえ」
「なにが——」
「だんなもそのおへそが目あてで、あやめの神通力にひかれていくんじゃねえんですか」
「いや、おれはぞうりが目あてだ」
「とかなんとかいって、この道ばかりは別だからな。なんなら吉が、ひとはだぬいであげやしょうか」
「あは、は、せっかくだが、おだんなうじのおへそを見せてもらってもしようがない。それより、どこかに手ごろな長屋はないかねえ。おれは今夜から寝るところがないんだ」
「へえ、それはまた、どうしたわけなんです」
「いろいろめんどうくさくなったから、きょうかぎり家老どもに暇を出してやったのさ。つまり今夜が浪人の初店(はつみせ)ってわけだ」
「あっさりしているなあ」
　けろりとしている源太郎の顔をながめて、吉はあきれていたようだが、
「ああだんな、その話はあとにして、この路地のつき当たりの二階家があやめの家でさ。あっしはここで待っているから、早くおへそでもぞうりでも、好きなものをもらっておいでなさい」

と、やお屋のかどへ立ち止まった。
「そうか。じゃ、ちょいと行ってくるから、待っていてくれ。すぐ玄関先ですむ用だ」
「なあに、少しぐらい、ゆっくりしたってようござんすよ。あっしは別にいそぐ用もねえんだから」
ひやかし半分の吉の声を背中へ聞き流しながら、源太郎はつかつかと薄暗い路地へはいった。
春のよいはようやくたけようとしている。

恋ごころ

「どうしたんです、太夫さん」
出むかえに出て、ひとりだからびっくりしている一寸法師の豆蔵に、長崎あやめはろくに返事もせず、ぞうきんを持ってこさせて足をふき、むっつりと茶の間の長火ばちの前へ行ってすわった。胸がむしゃくしゃしてしようがない。
「豆公、水――」
「へえ」
いそいで台所から湯飲みに水をくんできて、きげんが悪そうだから、一寸法師はへやのすみへさがって、そっとあやめの顔をうかがっている。年はあやめと同じ二十一だが、色の黒い福助によく似た大きな顔が四尺足らずの奇形児だから、なんとなく毒々しく、見なれない者には無気味でさえある。
おやじの甚作は普通の老人で、もう十何年も長崎一座の番頭をつとめていた。やんちゃなあやめだが、このきのどくな奇形児を弟のようにかわいがってきたので、父も子も心からそれを徳とし、特に豆蔵はまるで番犬のごとくあやめに仕えている男だ。
「太夫さん、とうちゃんや女たちはどうしたんです」
出かけるときはおやじの甚作がついて、お春お秋の女でしたちが、つきそっていったのだ。

それがたったひとりで帰ってくる、どうしてもふにおちないから、豆蔵はおずおずと聞いてみた。
「知らないよ」
あやめは、つっけんどんにいって、ぐったりと長火ばちのふちへ両ひじをつき、その手の甲へ形のいいあごをのせて、つんとしている。
どう考えても、あやめは女どろぼうのぬれぎぬをきせられたのがくやしいのだ。人気かぎょうの芸人をつかまえて、太夫元がその芸人に自分でけちをつけるなんて――いや、あれは追いかけてきた子分たちが、尋常では連れもどせそうもないし、侍が道づれになっているから、口から出まかせにひょいと思いついたいいがかりかもしれないが、それならそれで、ちゃんと親分竹五郎が立ち会いの席で、あの子分たちに両手をついてあやまらせなければ、長崎あやめの一分が立たない。
――ちくしょう、話がつくまでは、だれがなんていったって、舞台へなんか出てやるもんか。
心の中で、あぶらぎった竹五郎のげびた顔をにらみつけて、ひとりでむかむかとたんかを切っているうちに、ひょいとその竹五郎の顔が、あのとぼけたカワウソ源太の顔にかわってきた。
――なにをおこっているんだえ。おまえはおこり虫だなあ。
源太の顔が、おっとりとわらいかけてくる。急になつかしくなりかけてくる心を、あやめはむりに押えつけて、いけない、あんなやつのことを考えちゃ、ひとのことを身持ちだなんて、あいつはきっと、あたしを身持ちにさせたがっているカワウソだったんだ、しっかりしなくちゃ、と思いながら、けどあの男、どうしてあたしをまく気になったんだろうと、くやしいようなせつないような――
「こんばんは――」
がらがらとこうしがあいて、たしかに聞きお

ぼえのある声だ。
「長崎あやめ太夫さんのうちはここかえ」
　やっぱりついてきてくれたんだわ、と思ったとたん、あやめはわれにもなくかっと立ち上がるなり、取り次ぎに出ようとした一寸法師を押しのけるように、自分で玄関へ走り出ていた。
「やあ、無事に帰っていたね」——とたびはだしのままの源太が、人のよさそうな顔へにっこりと微笑をうかべる。
「今ごろまで、どこをまごついていたんです」
　つったたまま、わざときつい目をしてにらみつけるあやめだ。
「まごついていたわけじゃないよ。そこで、ちょっと立ち話をしていたんだ」
「いいから、さっさとお上がんなさいってば」
「いや、上がらなくてもいいんだ。もうこのぞうりをもらっていってもいいだろう」——男はどろたびをぬいで、さっさとぞうりをはこうとする。
「あんた、おいなりさんのうちだから、上がるのこわいの」
「そんなこともないが——」
「なければ、おいなりさんのお茶を一ついれてあげるから、お上がんなさいってば」
「お茶うけはやっぱり油揚げかえ」
「ぶんなぐるから——」
　男のたもとをつかんで、ひっぱりこむように茶の間へつれてきながら、いけない、なんだってあたしはこの男に、こうからみつきたくなるんだろう、あやめは自分がちょっと情けなくなった。とは、遠くのほうでそらぞらしく考えたことで、ほんとうはこの男をこうしてつかまえたのをからだじゅうが甘くよろこんでいるようである。
「豆公、一本つけておくれ。あたしはこの人に今夜送ってきてもらったんだから、お礼にたくさんごちそうしなくちゃ」
　男を長火ばちの前へむりにすわらせて、急に

うきうきしだしたあやめを、まだ玄関の二畳に立ったまま、一寸法師はぽかんとながめている。
「ああ源さん、この子はね、豆蔵といって、長崎一座のたいせつな道化師なんです。豆公、——ごあいさつをおしよ」
「へえ」そこへすわって、こんばんは、とおじぎをした一寸法師は、なんとなく暗い顔つきだ。
「やあ、わしはカワウソ源太という浪人者だ。こんばんは」
　源太郎は気軽におじぎを返したが、
「太夫さん、ごちそうになるのは、また今度にしよう。わしは表に友だちを待たせてあるんだ」と、思い出したように腰をうかせる。
「あら、もう女カッパをみつけちまったの」
「いや、カッパじゃない。おだんなの吉三という江戸っ子の友だちでね、今そこの広小路で出会ったから、家のことをたのんだんだ」
「あら、あんた、あの人の職を知ってるの」
　あやめはびっくりして目をみはる。
「知ってるよ。しかし、悪い男じゃない」
　源太郎はあっさりとわらっている。
「いやだなあ。じゃ、あんたも仲間」
「どうしておまえは、そう口が悪いんだろうな」
「口が悪いんじゃないわ。正直だから思ったことはなんでも黙っていられないんだわ」
「なるほど、物もいいようだねえ。とにかく、そんなわけだから、今夜はごちそうはおあずけにするよ」
「いやだってば——帰ると承知しないから」
　——あやめはだだっ子のように身をもんでにらみつけて、
「おだんななんかより、あたしのほうが先口（せんくち）なんだもの。いいわ、そのかわりおだんなさんをここへ呼んでやりましょう。いつもごひいきになって、あたしもまんざら知らないわけじゃないんだから。——豆公、表へ行って呼んでおい

で」と、まだそこにすわっている一寸法師にいいつけた。この分でいくと、なんでも、男のいいなりになってしまうおそれがじゅうぶんありそうだが、そこまでは自分で気がつかないあやめである。
「へえ」一寸法師はむっつりと立ち上がって、表へ出ていった。
「源さん、あんたほんとうに家をさがしてるの」
「うむ」
「うちの二階へ当分おいてあげましょうか」
「まあ、遠慮しよう」
「なぜさ」
「遠くて近きは男女の仲っていうからね」
「へーんだ。しょってるわねえ、この人。どうしてあんた、そうずうずうしいんだろう」
「ずうずうしいんじゃないよ。だれかさんとおなじで、正直だから思ったことは、つい口に出てしまうんだ」
「じゃ、いってごらんなさいよ。あんたほんとうはあたしが好き、それともきらい」
口にしてしまってから、はっと気がついた。あぶない火遊び——好きだといわれるのはこわいし、きらいとは、うそにもいわれたくないあやめだから、おもわずうろたえて真剣な顔になったとき、さいわいこうしのあく音がした。豆蔵がおだんなの吉三をつれてきたのだろう。
「豆公かえ」
——ほっとしたような、とうとう男の返事を聞きそこねてしまったような、あやめはちぐはぐな気持ちで、わかりきったことを玄関のほうへいそいで聞いていた。

おだんな吉の話

「太夫、さっきは失礼したね」
おだんな吉は茶の間へはいって、長火ばちのそばへはよらず、あやめと源太郎の差しむかい

を離れたところから、にやにやわらってながめながら、おうようにあいさつした。これがすりとはどうしても思えない堅気のだんなぶりである。
「いいえ、あたしこそ」
好きで呼んだのではない。呼ばなければ、男が帰ってしまいそうなので、しかたなく客にしたのだから、わがままなあやめは義理にも、ようこそなどというせじは口に出ない。
「そちらのおへそのだんな——」吉三はいたずらそうな目を、源太郎へ向けた。
「いや、まちがえては困るな。わしは太夫のおへそを見にきたのではない。ぞうりを取りにきたんだと、さっきもいったとおりだ」
「あわてて言いわけをしなくてもよござんすよ。だんなはへそ取りの名人だからねえ」
「あら、この人。そんなに女のおへそばかりねらうの、いやらしい」
あやめは、うっかり乗って、いやらしそうにまゆをひそめて——それが女のやきもちだ、やっぱりほれているな、とたちまち吉三に、見抜かれてしまったとは気がつかない。
「なあに、女のおへそばかりとはかぎらない。わたしも一度このだんなにはへそを抜かれたことがあるんだが——だんなはもうわたしのご身分を、太夫に話しちまったんでしょうね」
「いや、まだ話しはしないが、太夫は知っているようだよ」
「おやおや」わざと頭をかいてみせる吉三だ。
「吉つぁん、あんた、よくうちのまわりをぶらぶら見まわってくれるんですってね。だれのおへそがお目あてなの」
「それはむろん太夫のだがね。わたしのは外ぶらだから罪は軽い。だんなはいきなり茶の間の長火ばちの前までぞうりを取りにあがっちまうからな、ぞうりよりおへそのほうがよっぽど近いや」
「この人、どこへでもそんなにずうずうしく上

がっていくの、いやらしい」
　またいやらしいが出て、本気でそんなことを気にするのだから――これは相当なものだ、案外この女はうぶだが、そのかわり、ひどいやきもちやきだぞと、吉三は内心おもしろがっている。
「太夫は悪い人にぞうりなんか借りたもんさ。よっぽどしっかり腹巻きをしめていないと、あぶないねえ」
「へーんだ。だれがこんな人に――」
「とかなんとかいって。太夫はもう一度カゴ屋の前で、身持ちにされているんだってねえ」
「あんた、そんなことまで、もうこの人にしゃべっちまったの」
「おれは正直なんでねえ」
「しらない」
　あやめはぷっとふくれて、にらみつけて、もし人の前でなかったら、とうていただではすまなかったろう。
「おだんなうじは、まえから太夫がごひいきのようだねえ」
「まちがってもらっちゃ困りますよ。わたしのはおへそがお目当てじゃないんだから」
「まさか、紙入れじゃないんだろうねえ」
「おこるよ、だんな」
　それを吉三はわらいながらいって、つんと横を向いて、これはまだほんとうにおこっているらしいあやめの、おおまかにととのった美貌をちらっとながめ、
「実はねえ、太夫を一目見たときから、ふしぎでたまらないことがあるんでさ」と、源太郎に話しかけた。
「ふうむ、きこうにも太夫がおいなりさんに見えるかえ」
「ちゃかしっこなしさ。これはほんとうの話なんだ。あっしは十五の年まで、京橋大根河岸の長崎屋藤兵衛っていう唐物屋に奉公していたんだがね。その長崎屋のおかみさんに、太夫はう

り二つなんだ」
「――――」
　あっとあやめは聞き耳を立てたが、一度すねた意地で、けっしてそっちを向こうとはしない。
「ははあ、さてはきこう十五で、そのおかみさんのへそをねらったんだな」
「まさか、いくら手癖が悪くても、おかみさんには手は出さない。出したのはそこの小間使いのおくにのほうなんですがね」
「きこうが十五っていうと、もう十六、七年もまえになるねえ。ずいぶん古いのろけだな」
「なるほどねえ。考えてみりゃ、古いなあ。しかし、あっしはどうしても、そのおかみさんのことが忘れられねえんだ。身投げをしちまったせいもあるんですがね」
「身投げ――」
「あっしがぐれだして店を飛び出したのが春、その秋、なんでも抜け荷とかのけんぎで、だんなが牢へ入れられた。おきぬさんという名だったが、おとなしいおかみさんだったから、逆上して、ひとり娘のおあやさんを抱いて、大川へ飛びこみなすったというんだ」
「――――」
　あやめは、胸がふるえてくるのを、そっぽを向いて必死に押えつけている。
「その抜け荷のけんぎはどうにか晴れたが、晴れるまえにだんなは牢死して、親類じゅうで調べてみると、店がだいぶ左まえになっている。おまけに一度お上から目をつけられた店だし、主人夫婦から娘まで死に絶えているんだから、だれも金をつぎこもうという者がない。おまえの力でやっていける見込みがあるんならやってみろ、ということになって、大番頭の重吉ってのがいっさいをゆずりうけた。それが今の長崎屋東五郎なんでさ」
「すると、うまく店を盛りかえしたというわけになるんだな」
「表から見りゃあね」

「ふうむ、裏があるのかえ」
「ありそうだ、とあっしはにらんでいるねえ。重吉ってやつは、その時分、だんなと同じ年輩で先代からの小僧だから、店のほうはいっさい任されていたんでさ。目から鼻へ抜けるような才物でね、まあ、加賀騒動へ出てくる大槻伝蔵みたいなやつだ。だんなは太っ腹な、あんまりこせこせしたことはきらいだといったような人柄だから、重吉が細工をしようと思えばなんでもできる。あっしはまだ小僧で、くわしいことを知っているっていうわけではないが、店では堅い顔をしながら、かげでめかけを囲ってぜいたくなまねをやっているのを、ふっとしたことから見つけてしまってね、こいつ太いやろうだと思いだすと、その時分は一本気で生意気ざかりときているもんだから、もう重吉を信用しない。それがことばにも顔色にもちょいちょい出るもんだから、どうしたって憎まれまさあね。そこへもってきて、そろそろ色気のつくころだ、今いったおくにっていう小間使いに手を出してね、丸ぽちゃな、年はたしかあっしより一つ上の十六だった。おくにのほうでもまんざらではなかったらしい。いやだわ、だんなにいいつけてやるからなんていいながら、手を握っても、乳をつかんでも、大きな声をたてようとはしない。初恋ってやつなんですね、あの時分がいちばんたのしかった」
「やれやれ、うれしそうな顔だな、おだんなうじ」
源太郎がわらいだした。
耳を澄ましているあやめは、そんな小間使いがいたようでもあるし、いたとはっきり顔もおぼえてはいないが、古い自分の家の話だから、ただなつかしく胸が熱くなってくる。

迎えの駕籠

「あは、は、とんだ古いおのろけで恐縮でごさんすが、その古いたあいのないおいろごとが、あっしの歩く道をがらりと変えてしまったんだから、慎むべきはおへその道ってことになるんでさ」
「その後きこう、いっこうに慎んでいる形跡はないようだな。今もって太夫の家のまわりをぶらぶらしたがるようでは」
「まあ、まぜっかえさずに聞いてやっておくんなさい。これがそもそもおだんな吉っていうきんちゃく切りのできあがる発端なんでさ。——一度店の蔵のかげで、おくにとほっぺたをおっつけっこをしているところを、今いったおかみさんに、見つかってしまったことがあるんだ。おかみさんは、見ないふりをして行っちまったが、あっしはもう、百年めだと縮み上がってしまった。不義はお家のごはっとときまったもんだからね。ところが、いつまでたっても、別になんの音さたもない。さてはおかみさん、近目だったのかなと、安心してみると、そこはさかりのついた人間のあさましさで、またそろそろぼんのうの犬ってやつがうろうろしだした。今度は蔵の中でつかまえちまったんでさ。——いやだ、吉さんは、あたし、おかみさんにしかられちまったじゃないの、とおくにのやつが、べそをかきやがる。どきりとして、ほんとうか、おい。ほんとうだわ、人に見つかると悪いから、お店の者とふざけてはいけませんよ、ってやさしくいわれちまったのと、いいやがる。そうか、やっぱり知っていて黙っていてくれたのかと、そのときは、あっしも胸がじいんとなりやしてね、そのまま、ありがたがりっぱなしだと、あっしも今ごろは、おのつかないほうのほんとうのだんなになれたんだが、なにしろ目の前にすえぜんがいて、そっちもおへそを見てもらいたそうな顔をしているんだからだめでさ。むらむらとなって肩を抱きよせたとたん、人もあろうに、今度はぬっと大番頭の重吉がはいってきやがった」

「やれ、きのどくな」
「まったくきのどくを絵に書いたみたいなもんでさ。あっしは、いきなり重吉を突き飛ばして逃げて、ついでに思い切りよく長崎屋を飛び出してしまった。妙なもんですね。そんなわけでとうとう、おくにとは奇麗なからだで別れたが、いまだにそのおくにの夢は見ることがありますぜ」
「やっぱりおへそに未練が残るのかねえ」
「そうかもしれやせんね。とにかく、重吉ってやつはそういう男だ。あっしはもうお店を飛び出してはいたが、その秋、長崎屋にごたごたがあったと聞いて、こいつ、なにか細工がありそうだぞと、すぐぴんときましたね。なにも色恋のかたきだから憎いってわけじゃないが、たとえば、もし重吉のやつが店の金を使いこんでいて、そいつがだんなにばれそうになったとする、あいつのことだから、だんなを抜け荷の罪に落としてでも、自分の身の安全を図るだろうと考えた。そう考えてくると、日ごろこれといった病気のなかっただんなが、牢屋へはいってまもなく病気になるってのも変だし、その病死するまえに、いくらおかみさんが、世間知らずのおとなしい人でも、亭主のまだ罪がはっきりきまりもしないのに、逆上して身投げをするってのも変だ。だいいち、だんなが女道楽をしたとか、米相場に手を出したとか、そんな話もなかったのに、店が左まえになっていたなんて、あっしにゃふにおちない。ふしぎだらけだ。が、なにしろ、あっしはその時分、がきにちょいと毛のはえたぐらいの年ごろだったし、まもなく上方(かみがた)のほうへ修業というやつに出かけちまったんで、いまだにそれっきりになっているが――おかみさんの親切だけは忘れられない。だから、太夫の顔を見たとき、びっくりしちまってね、もしや長崎屋のおかみさんの血つづきにでもなっているんじゃないか、ぜひ一度聞いてみたいと思っていたんでさ」
その太夫はまだ意地の強い顔をして、つんと横を向いている。実は、あやめはうっかり、そっちへ顔が向けられないのだ。やっとわかりかかってきたかたきの いとぐち――それにしても、この吉三という男が、もと店にいた小僧だったとは、なんという不思議な巡りあわせなのだろう。口をきくと涙がこぼれそうで、あやめは早く平気な顔になろうと、いっしょうけんめいになっているのだ。
「きこうも、なかなかいいところがあるなあ」
源太郎が感心したような顔をする。
「そうですかねえ」
「太夫さんが旧主の おかみさんに似ているから、ぜひおへそを拝ましてもらいたいなんて、なかなか義理のかたい男だ」
「いやだったら、もうそんなおへそなんか。いけ好かないってありゃしない」
あやめの赤いくちびるからむちのような激しいことばが飛ぶ。死んだかわいそうなおっかさんが侮辱されているようで、たまらなくなってしまったのだ。
「あれえ、しかられちまった。どうしてそう急におへそが、おっと、お冠(かんむり)が曲がったんだえ」
源太郎はいっこうに動じないが、吉三はびっくりして、あやめの顔をながめている。それにしても、一寸法師の豆蔵はなにをぐずぐずしているのだろう。さっき台所口から出ていったきり、いまだに帰ってこないのだ。
がらりと玄関のこうしがあいた。
「ごめんよ。太夫はうちだろうね」なんとなくおうへいな若い声だ。
おこっているあやめは立ち上がろうともしない。
「どなた――」
「飯田屋一家の勘助でござんす。親分の名代できたんだ。ちょいと上がらせてもらうよ」
きかない気のあやめの目がちかりと光った。
勘助は竹五郎の一の子分で、まだ三十まえだが、身内の者からさえ、ひそかに恐れられている凶

暴な男だ。その勘助が先頭で、ずかずかと上がってきた五人づれの中に、さっき源太郎にお茶の水で当て身をくらった岩あにいもいる。
「やあ、お客さんか。こりゃごめんなすって」
そこに源太郎とおだんな吉がいるのを見ると、向こうも少し意外だったらしく会釈して、ずらりと五人ふすまぎわへ並んですわった。岩あにいがいそいで勘助に耳打ちしたのは、あれがお茶の水のキツネ侍だとでもささやいたのだろう。ささやかれた源太郎は、あいかわらず長火ばちの前を動こうともせず、ぽかんとあやめの顔をながめている。
「おそろいで、なにかご用でござんすか」
その用件はもうたいていわかっているが、あやめはびくともしていない。
「今もいったとおり、親分竹五郎の名代できたんだが、ここであいさつをしてもいいかね」
――勘助は源太郎とおだんな吉のほうを目でさす。
「かまわないわ。ふたりとも親類も同じ人ばかりなんだから」
「じゃ、ここで申し上げることにするが――太夫、今夜は、おまえ黙って神尾さまのお屋敷を抜け出してきたんだってね」
「ええ」
「なにか主膳さまが、お酒のうえで、太夫にご冗談をなすったそうだ。あとで主膳さまが、親分竹五郎に、少しいたずらがすぎた、悪いことをしたと、おあやまりなすったそうだ。そう出られると、神尾家は竹五郎の主筋にあたるんで、親分もああそうですかではすまされない。黙って屋敷を抜け出すというのは、太夫のほうにもおちどがあるんだから、ぜひもう一度よんできてくれ、みんなそろって清くあいさつをしたうえで、いっしょに屋敷をさがりたいからと、おれがその使者をいいつかったんだ。親分のいいつけで、表にカゴが待たせてある。すまねえが太夫、これからおれといっしょに、もう

一度神尾さまの屋敷へ行ってくれねえか。どんなもんだろうね」
――勘助はまことしやかに、すらすらといってのける。ちょいと聞くと、よく筋のとおった話のようにもきこえる。
「その返事をするまえに、一つおうかがいしたいことがあるんですがね」
――あやめがきっと青白んだ顔をあげた。
「どんなことだね」
「そこにいる岩さんが、お茶の水であたしに追いついたとき、小座敷の違いだなの上においてあった五十両の金がなくなっている、それを調べるんだから、なんでもつれていくと、あたしはどろぼうのぬれぎぬをきせられているんです。勘助さん、あれは親分のさしがねなんですか、それとも岩さんの口から出まかせなんですか」
切り口上で、いいたいことはだれの前でもきっぱりといってのけられるあやめは強い女なのだ。

八つ当たり

「岩、てめえ、たしかにそんなことをいったおぼえがあるのか」
勘助はオオカミのような目を、ぎろりと岩やくざのほうへ向けた。
「へえ、きっと連れてこいって、親分のいいつけなんで、ついその、ときのはずみなんでさ。悪気があったわけじゃござんせん」
「じゃ、太夫が五十両盗んだと、親分がいったわけじゃねえんだな」
「まあ、そのとおりでござんす」
岩は冷や汗をかいているようである。察するに、あのお茶の水であやめがひとりなら、有無をいわせずひっかついででも連れてもどるところだが、あいにく源太郎という侍の道づれがついている。なんとか口実をこしらえなければ、暴力はふるいかねるので、ついそんな口から出ま

かせをいってしまったのだろう。
「ばかやろう。冗談も品によらあ。人をつかまえてかってにどろぼうよばわりをして、どうもすいません、悪気があったわけじゃござんせんで、すむと思うか。よし、てめえ、太夫の見ている前で指を一本つめろ。それをわび証文のしるしにして、おれからあらためて太夫にあやまってやる。早くしろい」
「へい」
それがやくざのおきてとはいえ指を切るのはやっぱり痛い、人の痛いのは三年でもがまんできるが、いざ自分のこととなると相当度胸がいるから、岩やくざはさっと顔色をかえた。
「早くしねえか」
「小指でようござんすかねえ、あにい」
「どれでもいいや、好きなやつを切れ」
「そんなもんでござんすかねえ」
岩やくざはなんとかいってもらいたそうにあやめの顔を見ながら、しぶしぶとふところからあいくちを取り出す。黙っていれば、勘助はどうしても切らせずにはおかないだろうし、岩やくざもけっきょく切るよりしかたなくなるだろう。
「勘助さん、あたしは渡世仲間じゃないから、人の指なんかもらったってしょうがありません。やめさせてください」
あやめは、ばからしいというような顔をして、冷たくいった。
「じゃ太夫、岩のいったことは水に流してやってくれるのかね」
「岩さんが口から出まかせだというんなら、ここにたくさん証人もいることですから、今夜は堪忍します」
「そうか、そう話が、わかってもらえりゃ、これに越したことはねえ。岩、手をついて太夫に礼をいいねえ」
「へえ、太夫、さっきはつまらねえことをいって、どうもすンません、このとおりでござん

す」
そこへ両手をついて、頭をさげて、男一匹はなはだ器量は悪いが、それでも痛い思いをしてかたわになるよりはましな岩やくざだ。
「悪いと気がついたんなら、それでいいわ。これからもあること、口は気をつけてきくほうがようござんすね」
「ありがとうござんす。気をつけますでござんす」
ぬれぎぬの一件はこれでかたがついた。
「ところで太夫、さっきの話だが、そう心が解けたからには、神尾さまのお屋敷へいっしょに行ってくれるだろうな」
すかさず勘助が話をもとへもどす。
「せっかくですが、おことわりします」
あやめは、強い顔をして、ひどくそっけない返事だ。
「ことわる。――どうしてだね」
「あのお屋敷は気が向かないんです」
「冗談いっちゃいけねえ。こっちはこれこれだと、ちゃんと筋の通ったあいさつを持ってきているんだ。子どもの使いじゃあるめえし、太夫が気が向かねえそうですと、どのつらさげてそんな返事が持って帰れるものか。太夫、どうして、あのお屋敷は気が向かねえんだね」
「女を手ごめになさりたがるようなお屋敷、そりゃ殿さまは、冗談だとおっしゃっているそうですが、そんな冗談は、一度でたくさん、こわいんです」
「だからよう、殿さまはあやまるとおっしゃっているんだ。そういわれてみると、親分もお主筋のことだから、殿さまをあやまらせっぱなしにもしておけねえ。黙って屋敷を抜け出した太夫にも、おちどがあるんだから、もう一度顔を出してもらって、みんなで清くおいとまということにしてえ。こう親分が気を使っているんじゃねえか」
「とんだ気を使わせてすいませんでした。親分

にはいずれお目にかかって、お礼を申し上げます。けれど、あの殿さまはきらいですから、二度と顔を見たくありません。悪く思わないでくださいまし」

あやめは切り口上で、意地強くいってのける。いやだとなったらこんりんざいいやなのだからしようがない。

「ふうむ、おまえたいそうな見識だな。いつ将軍さまのお姫さまになったんだね。好きのきらいのと、ふざけちゃいけねえ。いってみりゃたかが小屋掛け芸人、年千両と給金がきまって、この一年は飯田屋竹五郎に縛られているからだだ。ちっとばかり人気のあるのを鼻にかけて、あまり大きな口をきくと、ひっこみのつかねえようなことになるぜ。女芸人はもっとあいきょうのある口をきくもんだ」

じろりとしり目にかけてすごみをきかせ、返事しだいでは、鬼にもなろうとほのめかす勘助だ。

「豆公、いるかえ」

台所のほうへあやめのかん高い声が飛ぶ。

「へえ」

いつの間に帰ってきていたか、一寸法師の豆蔵が色の黒い福助づらをむっつりさせながら出てきた。

「二階へ行って、あたしの手文庫を持ってきておくれ」

「へえ」

豆蔵はふすまぎわへずらりと並んでいる飯田屋一家へ、ふきげんな会釈をして玄関の三畳へ抜け、まもなく二階からしんちゅうの金具のついたがんじょうそうな手文庫を持ってきて、あやめの前へおいた。ずしりと重みがありそうである。あやめは帯の間からかぎを取り出し、錠をあけてふたをひらき、いきなりそれをさかさにぶちまけた。ごろごろところがり出したのは、二十五両包みが二十で五百両。

「ご名代さん、約束の給金のうち、前金でいた

だいた五百両、お返ししますから持っていってください。長崎あやめはしがない娘手品師、舞台で芸は売るが、からだまで売ったおぼえはありません。そんな根性の太夫元ならおつきあいはこれまで、お帰りになったら、親分によろしくいっておいてください」

「なんだと――」

勘助の顔色がさっと変わった。大阪で渡した前金の五百両、手もつけずに江戸へ下ったあやめもさすがだが、満座の中で、こんなはでなまねをされようとは思いもかけなかった。だいいち、この金はうっかり受け取れない。取ったが最後、飯田屋とあやめの縁は切れて、あしたから両国の小屋があけられなくなる。

といって、いまさら口がすぎた、すまねえ、とは男の意地で頭はさげたくない。長火ばちの前の侍のほうはそっぽを向いてたばこを吹かしているが、おだんなのほうは、さっきからおもしろいしばいでも見ているように、澄まして見物しているのだ。

「お武家さん――」

なんと思ったか、勘助はその源太郎のほうへ向きなおった。

「わしかえ」

「おまえさんだ。それから、そっちの指の長いだんな、おまえさんたちは太夫とどんなひっかかりのある人たちかしらねえが、ちょいと、座をはずしてもらいたいんだがね」

勘助がやぶからぼうに妙なことをいいだす。

「座をはずすと、どうなるんだえ」

源太郎は正直にわからなそうな顔をかくさない。

「今聞いてのとおりのいきさつで、おれも男の意地だから、こうなっちゃ、たとえ荒っぽいまねをしてでも、一度は太夫を親分の前へひっかついで行かなくちゃ顔が立たねえ。とんだそばづえをくわしちゃきのどくだから、座をはずしてもらいてえんだ。それとも、なにか文句があ

るんなら、外へ出て聞いてやってもいいぜ」
半分はあやめをおどかすのが目的なのだろう、勘助は味方の頭数をたてにそんな不敵な挑戦をしてきた。

大川ばた

「乱暴だねえ、きこうは」
源太郎はあきれて、苦笑するほかはない。
「むだ口はたたかねえで、さっさと返事をしてくんな。おれは気がみじけえんだ」
「いま返事をするよ」
のんびりと答えておいて、源太郎はからだじゅうでおこっているあやめの強い顔へ話しかけた。
「荒っぽいご名代さんが、わしに座をはずせっていうんだが、どうしようか」
「そんなこと、あんたのかってにしたらいいでしょ、あたしに聞かなくたって」
「そうかえ。おれが座をはずしても、おまえのおへそ、だいじょうぶかねえ」
「ぶんなぐるから」
あやめは目の色をかえている。
「ところが、一つや二つぶんなぐられたって、ご名代さんは太夫を親分の前へひっかついでいかなくちゃ、男が立たないって、力んでいるんだ。つまり、おへその好きな殿さまに、おまえのおへそを持っていって供えないと、親分さんも子分さんも、雷さまからトラの皮のふんどしを取りあげられるんだろうな」
「やいさんぴん、文句があるんなら外へ出ろ」
やっとからかわれていると気がついた勘助が、かっとなってどなりだす。
「おれは、さんぴんという名まえじゃないよ。カワウソ源太という、りっぱな名まえがある。おぼえておいておくれ」
「なにをぬかしやがる。黙って外へ出ろ」
「そうかえ。じゃ、いっしょに行くから、おま

えたち、一足先に玄関へ出るがいい」
「裏口から逃げようったって、そうはいかねえぞ」
「わかっているよ。逃げたってトラの皮のふんどしは雲にのって追いかけてくるだろうからね」
源太郎は平気でわらっている。
「太夫、このやろうをかたづけたら、もう一度話をつけにくるぜ。しっかり腹をすえて待っていてくんな」
勘助は念を押すように目を光らせておいて、仲間のほうへあごをしゃくりながら立ち上がる。
あとから四人、ぞろぞろと玄関へついて出る。
「源さん――」
あやめがきっと源太郎を見た。
「なんだえ、おいなりさん」
「あんた、かたづけられるほう、かたづけるほう――」
「なるべくかたづけられるほうにはなりたくないな」
「かたづけたら、もう一度ここへきてくれなくちゃいやだから」
「油揚げで一本つけてくれるかえ」
「つけてあげるわ」
「おへそも見せてくれるかえ」
「そんないやらしいこといっちゃいやだったら」
「わかったよ、もういわないよ。おだんなうじ、きこうはどうする」
「行きやすよ。こう見えても、あっしはだんなの後見役だからね」
おだんな吉は手早くたばこ入れを腰へしまいながら、ちょいと見えを切ってみせる。
「そうだな。やっぱりいっしょに行ってもらったほうがいいな。もし、わしがかたづけられるほうへまわりそうだったら、すぐ太夫に知らせ

て、おへそのしまつをつけてもらうことにしよう」
「いやにまただんなは、太夫のおへそばかり気にするんですねえ」
「あは、は、そうか、あんまりトラの皮のふんどし連はわらえないね。――では太夫、後刻また」
　源太郎は会釈をして玄関へ出ていく。
「太夫さん、おじゃましやした」
と、おだんな吉があとを追う。
――源さん。
　口ではひとをからかってさんざんおもしろがりながら、その実腹ではなんの未練げもなく、あっさり去りゆく男が物足りなくて、あやめははっと中腰になりかけたが、男にそんな甘い心を見すかされたら、それこそほんとうにおへそを取られるかもしれない、とすぐ用心する気になって、わざと長火ばちの前は立たなかった。
　そのくせ、どうしたというんだろう、路地へ消えていく男の足音へじっと耳を澄まして、けんかのことは少しも気にならないが、なんだかこれっきり、もう帰ってきてくれないような気がして、たまらなくあじけなくなってくる。
　――追いかけていこうかしら。
　ともすればそんな恋心が、前後の分別もなくからだじゅうへたぎり狂ってくるあやめだった。
「おだんなうじ、きこうはずっと離れていろ。けんかの渦中へまきこまれてはいかん」
　こうしを出るとき、源太郎は吉三にささやいておいて、ひとりでさっさと暗い路地を出た。
　往来に黒々とひとかたまりになっていた五人が、そらきたぞ、というように緊張したのがけはいでわかる。
「諸君、町の中はいかんぜ。人騒がせだからな。とにかく、大川ばたへ出よう」
　源太郎は先手をうって先に立ち、大またに村

松町から、若松町のほうへ出る。永井肥前守の屋敷へ突きあたって、左へまっすぐ突き抜ければ乙ガ淵だ。
　春の夜もやがて四つ（十時）に近いだろう。おぼろ月に満々たる潮をたたえた大川もしだいにふけて、遊興の屋根船もいまはおおかた帰りをいそぎ、ひっそりと弦歌をおさめているほうが多い。
「このへんでいいだろう」
　本多隠岐の下屋敷の土べいの前まできて、源太郎は川を背にしながらひょいと立ち止まった。
　それっと五人のやくざがかっこうだけは勇ましく、たちまち半円を描いて取りかこむ。
　一様にふところのあいくちへ手をつっこんで、勘助の合い図を待ちながら目を光らせている。
「おい、さんぴん――」
　まん中の勘助が、取って食いそうなつらをして、じりっと詰めよってきた。
「またさんぴんか。わしはカワウソ源太と名のったはずだがなあ」
「カワウソでもカッパでも、そんなことはかまわねえ。てめえは、あやめの間夫か、それともただの取り巻きか、どっちだ」
「そうだなあ、正直にいうと、まだどっちでもないな」
「じゃ、まるっきりあかの他人じゃねえか。そのあかの他人が、なんだっておれたちの仕事のじゃまをするんだ」
「きこうたちのほんとうの仕事はなんだえ。男の意地で、いやがる女をひっかついでいくのを仕事にしているのかえ」
「ふざけちゃいけねえ。あやめは東両国の飯田屋竹五郎が、年千両で縛ってある女だ。どうしようとあかの他人なんかに口を出されてたまるもんか」
「しかし、太夫はさっき、芸は買われたが、お

へそまで売ったおぼえはないといっていたじゃないか。そんな根性のトラの皮のふんどしなら、金はかえすと、五百両並べていた。なかなか筋のとおった掛け合いで、りっぱなもんだ」
「なにをぬかしやがる。いまになって、そんなかってな理屈がとおるもんか」
「すると、おへそまで売り申し候と、ちゃんと親分のところへ証文がはいっているのかね」
「一興行いくらと約束がきまって芸人が前金まで受け取ったからには、たとえ、からだをどうされようと文句をいわせねえのが、おれたち仲間の世界だ。へたに小生意気な理屈をこねれば、かたわにされたってしようがねえんだ」
「だからきこうの親分は、あやめをだましておへその好きな殿さまのところへつれていき、もう一度手ごめの手伝いをしろと、きこうたちにいいつけたのかえ」
「なんだと――」
「いくらトラの皮のふんどしの仲間のおきてでも、悪事は悪事だからね。多勢の力をたのんで、弱い者いじめをするのはよくないな」
「てめえ、じゃ、どうしても手は引かねえというんだな。飯田屋一家を向こうにまわして、たてをつこうというんだな」
「飯田屋一家でも何一家でも、無法にいやがる女のおへそをねらうやつがいればわしはそのおへそを助けてやるほうへまわるね」
「やろうッ」
命知らずのやくざ仲間でも、特に凶暴なのを売り物にして兄貴（あにき）とか、あにいとかに立てられている勘助だから、じゅうぶん油断を見すませておいて、あいくちを引き抜くのと、からだごとふいに、だっと突っかけてきたのとが同時だった。
「あぶない」
うっかり立っていたようでも、あらかじめ多少そうくるだろうと、わざと大川を背にしていた源太郎である。とっさに身をひねって、きっ

先をはずし、川へ向かって空を突いた敵の背中を、ぽんと左の手でたたきつけたから、
「わあっ」
川ばたで踏み止まろうとした勘助はどうしてもこらえきれず、両手を泳ぐように振りまわしながら、どぶーん、と自分からたあいなく大川へ飛びこんでいった。
「くそっ」
その横合いから岩やくざが、ここでなんとか一つてがらを立てておかないと、さっきの失敗があるから家へ帰って頭があがらなくなる。いわば死にもの狂いでおどりこんできたが、惜しいことにあいくちは、左のたもとをかすっただけで、
「どっこい」
源太郎は、すばやく一足さがりながら、伸びきった岩やくざの弱腰を一けり、
「しまった」
これも前のないのに絶叫したがまにあわない、水煙をあげて、たちまち大川へのみこまれていった。
「きこうたちはどうする」
またたく間にふたりをかたづけて、ゆうぜんと立ち直った源太郎に、こう声をかけられてみると、あいくちだけは一人まえに構えていたが、残る三人は、まだ追いまわしらしく、急におじけづいて、ばたばたと、両国橋のほうへ逃げ出した。
まるで盆のくぼをけあげんばかりのかっこうだ。
「まあ、そのほうが利口のようだね。水はまだ冷たいだろうからな」
源太郎はあとを見送ってわらっている。
「だんな、うまくいきやしたね」
下屋敷のかどからおだんな吉がのこのこ出てきた。
「うむ、どうやらかたづけられるほうへはまわらずにすんだようだ」

「で、すぐに太夫のうちへ引っ返して、おへその番をしてやりやすか」
「それには及ばないだろう。わしは自分のねぐらをさがさなくちゃならないからね」
「だから、おへその用心棒になってやりさえすれば、ずるずるべったりあそこがいいねぐらになりまさ、あっしの見たところじゃ、太夫のほうもまんざらじゃなさそうだし、いやらしいだとか、いけ好かないだとか、口では強そうにおこっていても、いまにきっと、自分のほうからおへそを見せたがるようになる。うまくやってるなあ、だんなは」
「あいにく、おれはトラの皮のふんどしはきらいでねえ。それよりおだんなうじ、腹がすいたな、どこかその辺に一杯やるところはないか」
　源太郎はさばさばと両国のほうへ歩き出す。あれえ、負け惜しみかな、あれくらいの女にほれられて、そんなはずはねえんだがな、と、おだんな吉には、ちょいと、源太郎の気持ちがわからない。

徒食の徒

　建部源太郎のカワウソ源太は、おだんなの吉三が借りている郡代屋敷裏、くわしくいえば久右衛門町代地の裏長屋へ、当分いそうろうをすることになった。
「だんなもひとり者だし、あっしもひとり者だ。なにも見えを張って、一軒借りることはないでしょう」と、吉のほうから誘われたからである。
「別に見えを張るわけではないが、おだんなうじは、このごろなんで生計をたてているんだね」
　この男はもときんちゃく切りだった。まさかいそうろうのふところをねらうようなまねもしないだろうが、いかに浪人者の身軽になったといえ、きんちゃく切りの家へ同居するのは困るから、念のために聞いてみたのだ。

「なるほど、だんなは歯にきぬをきせねえかたですね。そんな心配はしなくたってようござんすよ。そっちのほうは、もうとっくに足を洗っているんです」
　さすがに吉は苦笑いをしていた。
「すると、今の職はなんだえ。まさか遊んでいて食える身分でもなかろう」
「そうむきになってつっこまれると、ちょいと返事に困るんだが、まあときどき賭場へ顔を出しさえすれば、けっこうなんとかやっていけます」
「やっぱり徒食の徒か。あんまり感心はできないが、それでも、あのほうよりはましかな」
「なんのことです、その徒食の徒ってのは」
「一定の職を持たずに、遊んでむだ飯を食っているやつのことを、徒食の徒というんだ」
「なあんだ、じゃだんなだって、浪人すりゃ、これからその徒の組になるんでしょう」
「まあ、そういうことになるかな」
「おんなじ徒組のくせに、いやにこむずかしく人をおどかしっこなしさ」
　さていそうろうにはいりこんでみると、吉の家のいごこちはけっして悪くなかった。なによりも奇麗好きで、いつも家の中がきちんとかたづいているし、五軒長屋がふた側にならんでいる中の一軒だが、だれにもあいそうがよく腰の低いほうだから、三人寄ればかしましい女房たちにも、案外うけがいいようだ。ということは、ちょいとした用ぐらいは、なんでも気軽に足してくれることになるので、男やもめには至極ちょうほうである。しかも、吉はたいてい昼まえにふらりと出かけていって、どこをどう顔をきかせてまわるのか、夜ふけでなければ、めったに帰らない。まるで、この家は源太郎のために家賃を払って、一軒借りておいてくれるようなものだ。
「だんな、あれっきりだんなはあやめのあの字も口にしねえが、ちっとも気になりませんかえ」

三、四日たった朝、食後の一服をやりながら吉がふしぎそうに聞いた。
「そういえば、おいなりさんのおへそはその後無事かね」
源太郎はのんびりと茶をすすっている。
「とかなんとかいって、やっぱり気になることはなるんでしょう」
「おへそは飯の足しにはならんからな。まず糊口の心配のほうが先だ」
「おっしゃるぜ。だんなはいつ見ても、よく昼寝をしているっていうじゃありませんか。寝ていて飯になるのは女郎か地獄だ」
「なるほど、わしは毎日考えているんだが、侍なんていうものは世間へ出ると、まったくつぶしがきかないものだな」
「だから気どっていねえで、おへその用心棒に行ってやりゃいいんでさ。太夫のほうだって、きっと心待ちにしている。これだけは、あっしの目に、狂いはねえんですがねえ」
「おいなりさんは、無事に東両国へ出ているのかえ」
「出てますよ。いくら飯田屋竹五郎が横紙破りでも、太夫にへそを曲げられちゃ、小屋があけられない。あのあくる朝、自分で太夫の家へ出かけて、子分の不始末をわびたんでさ。つまり五百両ぶちまけられたのが耳にはいって、金で縛ろうとしたのが、あてがはずれたんですね。竹五郎ほどの悪玉に、とにかく頭を下げさせた太夫も一応はさすがだが、どっこい、相手にはそのまた裏があるんでさ」
どんな地獄耳を持っているのか、吉はなかなかくわしい。それにしてもこの男は、どうしてあやめにこう力こぶを入れているのだろうと、源太郎は黙って顔を見ていた。
「というのは、この間の晩の神保町の神尾主膳ね、これがまだけっして太夫のおへそをあきらめちゃいねえんです。竹五郎にとっちゃ、あそこの賭場は金箱だから、どうしても一度は太夫

をうむといわせなけりゃならない。そこへもってきて、その話を耳にした京橋の長崎屋東五郎が、あやめはぜひおれのほうへ世話をしろと、いいだしたそうなんです」
「きこうの初恋のじゃまをしたもとの番頭の重吉って男だな」
「そうですよ。あのやろうは、どこまでも人の恋路のじゃまをするようにできてるんですね。こいつがまた竹五郎にとっちゃ、いいだんな筋になっていて、いざというときにゃ、いつも金のやっかいになっている。だから、こっちも断わりきれない。さすがの竹五郎も間にはさまって、今度だけは弱りきってるって話でさ」
「おいなりさんは知ってるのかえ。両方からおへそをねらわれているということを――」
「そうれ、心配になってきた。長崎屋のほうは、まだたぶん知らないでしょうよ。けど、知っていようと知るまいと、ほうっておけば太夫のおへそは、きっとどっちかのものにされてしまう。相手はあくどい竹五郎だからね。男のくせに、だんなはそれでも黙って見ていられるんですか」
けしかけているような吉の口ぶりだ。
「きこうはまた、よほど太夫のおへそが気になると見えて、よくそんなくわしいことを知っているんだな」
「おきなせえ。あっしはこの間の晩も話したとおり、太夫が死んだ長崎屋のおかみさんに生きうつしだ。なにか縁びきに当たるんじゃねえかと、それが気になったから近づいてみたんだ。別にそうじゃないということになれば、もうどっちでもいいんだが、見ていると、あやめのやつ、ぷんぷんおこった顔をしながら、内心だんなにはどうやらほれているようだ。そんならひとつ橋渡ししてやろうと、いわば親切でほねをおってるんでさ。まちがえっこなしさ」
「おきなせえ。どうしても好きと好きなら、人にほねなんかおってもらわなくても、いつの間

にか人目を忍ぶ仲になる。遠くて近きはなんとやらいうからな、まあほうっておくことだ」

源太郎は、けろりとしてわらっている。

「じゃ、うかがいますがね、だんなは太夫が好きじゃねえんですか」

「好きにもきらいにも、まだこの間たった一度会ったばかりだ。おれはあいにくトラの皮のふんどしはしめていないんで、いい女を見ると、すぐへそがねらいたくなるほど、物好きにはなれないたちなんでね」

「もし太夫のほうで、どうしてもおへそをもらってくれ、といったらどうします」

「それは、そのときになって考えることだ。今からきめておくことはないさ」

「そうですかねえ。惜しいもんだな。ちっとばかし気は強いようだが、あれだけの女っぷりで、かせぎ人ときているから食う心配はいらない。しかも先さまには、ちゃんとその気があるんだ。だんなだって、どうせ今は徒組で、毎日からだをもてあましているんでしょう。うまくもちかけさえすりゃ、それこそ左うちわで、こんな夢みたいな話は、めったにないと思うんですがね」

「ありがとう。まあせいぜいよく考えてみることにしよう」

「変わってますねえ、だんなも」

少しも乗り気になってこようとしない源太郎の気持ちが、吉の常識ではどうも判断がつかなかったようである。

楽屋うら

長崎あやめ太夫は、その日も朝から小屋いっぱいに客が詰めかけた舞台で緋じゅすに金糸銀糸の縫いはくした肩ぎぬ姿もあでやかに、数番の南蛮手品を演じて見物の目をうばい、終わりに余興として、十間の舞台丈余のところへ、上手から下手へ張りわたした綱の上を、そのまま

の姿で左に日がさ、右に舞い扇を持ち、『春雨』の小唄三味線につれて、踊りの身ぶりを見せながら渡って帰る。これこそ種も仕かけもない鍛錬の妙技で、みずぎわだったのうえんな器量のうえに、ゆらゆらと春風にたわむれるちょうかと、あざやかに手ぶり美しい身の軽さだから、どっと小屋も破れるばかりわきたつかっさいのうちに、中入りの幕がおりた。

「太夫さん、ご苦労さま」

でしのお春、お秋に迎えられて楽屋へ引きあげたあやめは、さすがにじっとりとからだじゅうに汗ばんでいる。手早く肩ぎぬをはずし、はかまを取り、帯を解き去るなり、ここは女護ガ島だからだれに遠慮気がねはいらない。はでな舞台着を膚着ごと勇ましくぬぎすて、腰のもの一つになった。汗で白々と光沢を増した健康な膚、まだ男を知らぬまま、年だけにむっちりとうれた豊かな乳ぶさ、お春がわたす手ぬぐいを取って邪険に汗をふきながら、あやめはこのごろ少しも気が引きたたない。

――いやになっちまうな。

自分でも、うっとりするような膚を見るにつけても、ふっと源太郎の顔を思いうかべて、やりきれないほど、世の中があじけなくなってくるのだ。

あの晩、あの男はとうとう帰ってきてくれなかった。半分はたぶんそうだろうと覚悟していたし、いっそそのほうがいいんだと、自分をしかりつけて、男のことなんか忘れてしまうつもりだった。だから、歯をくいしばって、豆蔵にあとをつけておくれとは、わざといいつけずにがまんしたのである。

源太郎が、勘助たちをどこへつれていって、どう話をつけてくれたかはわからない。が、おそらくやっつけられるほうにまわるような、だらしのない人じゃないと考えていたから、勘助たちがもう一度引き返してくるかもしれない、などという心配はちっともしなかった。

——帰ってきたら、一本つけて、もし泊まるといったら、どこへ寝てもらおうかしら。男は泊めないことにしているんだから帰ってくれなんて、まさか、いえないし、とそんな言いわけを自分にしながら、実はあの男の足音ばかり心待ちにして耳をすませていた。

夜がふけて帰ってきたのは、甚作じいやにつれられたお春と、お秋だけで、やっぱりあの男は帰ってこなかった。

——それでいいんだ。あたしはおっかさんの恨みを晴らさなければならないからだし、そのかたきは長崎屋東五郎と、今夜はっきりわかったんだ。

あやめはもう一度、自分によくいいきかせて床についた。考えなければならないことは、いくらでもある。第一に、あしたは甚作じいやに五百両持たせてやって、憎い飯田屋竹五郎一家とは手を切ってやろう。長崎屋へのふくしゅうはどういうふうに手をつけてやろうかしら。それはたいせつなことばかりだのに、いつの間にか、あの男の顔が胸いっぱいに大きくのしかかってきて、もうどこへ行ったかわからないし、二度と会っちゃいけないんだと考えると、ぼろぼろ涙がこぼれてきた。

翌朝は竹五郎のほうから、自分できげんを取りにきた。

「子分のやつらが、どう勘違いをしたか、ゆうべはとんだ迷惑をかけたそうだ。神尾さまのほうも、酒のうえの冗談だったんだから、悪く思わないでくれとわびているくらいで、いまさらおれの顔がどうのこうのという問題じゃない。太夫は飯田屋にとっちゃ、うんともうけさせてもらうたいせつな福の神だ。その人気かぎょうの女のからだにきずがつけば、損をするのは、この飯田屋だからね。けさ子分のやつらにもよくいいきかせて、さんざん油をしぼってきたところだ。まあ、そんなわけだから、今度だけは、ひとつ、おれに免じて、いっさいを水に流しちゃくれまいか」

半分はうそだとわかっていても、そう下から出られてみると、それでもいやだとはいえない。こっちさえ腹をしめてかかっていればいいんだし、こんな男なんかに負けているようでは、とてもふくしゅうなどという荒仕事はできない。そう思ったから、

「せっかく親分がそういってくれるんですから、あたしも、なんにもいわずに、いままでどおり小屋へ出ましょう。そのかわり、はっきりおことわりしておきますよ。あやめは舞台で芸は売りものにしても、からだまでは売りません。ようござんすね」

と、念を押して手を打ったのだ。

人にはそんなりっぱな口をきいていながら、いくら自分をしかっても、あの男のことだけは忘れられない。毎日、ああいう気まぐれな男だから、きょうはふらりとたずねてきてくれはしないかと、そればかり心待ちにしているのだ。それがもう四日にもなるのに、あれっきり一度も顔さえ見せない。ということは、あの人はこっちで思っているほど、あたしのことなんか、ちっとも考えていてくれない、ということになりそうだ。

——そんな冷淡な男が、どうして、こう恋しいんだろう。別にどうしたって仲でもないのに。

勝ち気だから、ときどき腹がたってきて、くやしくてたまらなくなることさえある。そのあとからすぐ、どう考えても、あたしの好きになれそうな男は、あの人ひとりしかなさそうだ。男らしくて、親切で、ちっともいやみはないし、少しとぼけてはいるが、腹にどっしりとたのもしいものを持っているし。

——やっぱり、あの男でなくちゃいやだ。

と、からだじゅうが熱くなってくる。たまらなく恋しい。会いたい。そして会う手づるは、たった一つあるのだ。おだんな吉にたのめばい

いのである。吉三はたしかにあの人の居どころを知っているはずだ。

——きょうも小屋へきているんだけどな。

そこはかぎょうがら、舞台に立って一わたり小屋を見わたしさえすれば、どこにだれがきているか、たいてい一目で見つけてしまうのだ。

「太夫さん、もうおかけしましょうか」

へや着を持って待っているお秋が、いつまでも裸で鏡台の前へむっつりと立てひざをしているあやめに、おそるおそる声をかけた。このごろ、ひどく師匠がふきげんなのを知っているからである。

「ああ、かけておくれ」

「あの、吉三さんからおすしが届いているんですけれど——」

「そうかえ。あたしにかまわずに、おまえさんたちおあがり」

立ってとき色のしごきをぐるぐると巻きつけながら、呼びにやればすぐよろこんで来る男だけれど、とあやめはうわのそらで、まだそれを考えている。自分のほうから吉三を呼びにやるのは、なんだか胸の中を見すかされるようでいやなのだ。

ふっと水色ののれんの下がった楽屋口から、顔へおしろいを塗りたてた一寸法師の豆蔵が福助づらをのぞかせた。

「太夫さん、この間の吉三さんが、ちょいと会いたいっていってるんですが、ことわるんでしょう」

楽屋へは、めったに客を通さないことにしているあやめなのである。

「通しておくれ。この間の晩の様子を聞くんだから」

おこったように豆蔵をにらみながら、あわててそんな返事をしてしまった自分が、あやめは妙に気恥ずかしい。おや、珍しい、というようにお春とお秋が、そっと顔を見合わせていた。

——きょうはきっと楽屋へ通すかもしれねえ。

おせっかい

吉は、はじめから自信があった。だから、豆蔵に案内されて、ごたごたとほこりっぽい楽屋裏を抜けながら、おれを通すようじゃ、太夫の気持ちは読み筋どおりだ、とひそかにほくそえんでいた。わからないのは、あの落ち着き払った源太郎の冷淡ぶりである。これほどの人気者にほれられて、男が少しも心を動かさないなんて、どうしても考えられない。だいいちもったいないと思うのだ。ぐずぐずしていると、女なんかの気持ちは、いつどう変わってしまうかわからないものだ。なんとかうまく取りもって、早いとこまとめてしまわなくてはと、そこは徒食の徒で、おせっかいにできあがっている性分だから、自分のことのように気になって、今度はあやめのほうをけしかけにきたのである。

小屋がけ芸人の楽屋裏などというものは、いずこもおなじよしずと古幕で仕切りをして、ござを敷き、そこへ小道具やたばこ盆、さては食い散らしたどんぶりなどが所狭いまでにころがっていようという、わいざつでうすぎたなくてうらぶれ果てたものにきまっているが、あやめの楽屋だけは、さすがに大べやと一画を仕切って、狭いながら鏡台もりっぱだし、座ぶとんも真新しく、お春、お秋がしじゅう気をくばっているから、こぢんまりと、いつもよくかたづいていた。

「太夫、やろうが、こんな女護ガ島へ、やぼとわらわれるのは承知で、ちょいとじゃまをするよ」

吉はそんな如才のないことをいいながら、そこへ行儀よくすわった。おだんなというあだ名があるだけに、身なりもきちんと堅気で、知らない者が見れば、どこか相当な店のだんなでと

おるふうさいをそなえている。

「なんか、あたしにご用なんですってね」

鏡台の前へ横すわりのまま、あやめは、わざときつい目をして、はなはだぶあいそうだ。

口紅もおしろいも思いきって濃い舞台顔で、むぞうさに着こなしたへや着にぐるぐるとときいろのしごきをまきつけただけの姿は、膚に若さをみなぎらせて、まったくふるいつきたいような色っぽさだ。どうして、こんないい女に夢中になれねえんだろうな、と吉はまたしても煮えきらない源太郎がもどかしくなる。

「なあに、別に用というほどのことでもないが、通りかかったついでに、この間のあいさつをしていきたいと思いついたもんだから」

「どういたしまして。お忙しいのに、さっきもあたしの舞台を見物してくださって、毎度どうもありがとう」

「あれえ、わたしが小屋にいたのを知っていたのかね」

「舞台は高うござんすからね」

にこりともしないあやめだ。

「しかし、いつ見ても太夫の芸はあざやかなもんだね。感心しちまった」

吉は吉で、間の悪そうな顔一つ見せず、ぬけぬけと切り抜けてゆく。このへんが、この男の身上とでもいうのだろう。

「ああ、そうそう、毎度お届けものをありがとう」

「礼をいわれると恥ずかしいよ。この間の晩は舞台じゃ見られない一幕を見せてもらったんだから、ほんのおかえしさ」

ここまでいとぐちをつけてやったら、もうあやめの口から、あれからどうしたの、とそれとなくほれた男の様子を聞きたがりそうなもんだと、吉は女の返事を待っていた。が、あやめはそっぽを向いて澄ましている。あれえ、これも相当強情な女だな、と感心しながら、

「あれからこっちもまた大しばいでね、わたし

はとんだ大もうけさ」

と、つい自分のほうからしゃべっている。

「だいいち舞台がいいや、おぼろ月夜の大川ばたときているからね。カワウソだんなの度胸のいいのには、わたしもあきれちまった」

わざとゆっくり一服つけながら、顔色を見たが、まだこっちを向こうともしない。よしそれならどうしても、こっちを向かせてやろうと、吉は少し意地になってきた。

「太夫の家の前の路地を出ると、やつらが五人、そら来た、とあいくちに手をかけて、いきなり、カワウソだんなを取りかこもうとする。町の中はいけないよ、人騒がせだからね、大川ばたへ行こう、とだんながさっさと歩き出す。出鼻をくじかれて、そのぽかんとした顔つきといったら、見ものだったね。もう勝負はあったようなもんさ。大川ばたへ出ると、カワウソだんなはなんと思ったか、川っぷちへ立つんだ。あぶない、あんなところへ立って、突き落とされなけりゃいいが、とひやりとしたが、だんなは平気なもんで、さあここでよかろう、ってわらっている」

「――――」

強情にまだこっちに向かないが、どうやら耳だけはすませているようなので、それみねえ、と吉はいささかとくいだ。

「そこでまたおへその問答がはじまった。てめえは太夫のおへその持ち主か、ってオオカミどもが詰めよる。持ち主というわけではないが、女をおどかしてむやみにおへそを取りたがるやつがいれば、相手が旗本だろうと、親分だろうと、わしはそのおへそを助けてやるほうにまわる、とだんなは、きっぱりしたもんだ。うぬっ、くたばれ、と命知らずがひとり、ふいに突っかけた。あぶない、と身をかわしたが、カワウソだんながぽんとその肩を一つたたく。なにしろ川へ向かって突っかけたんだから、かわされたとなると前がない。わああっ、あぶねえ、とい

いながら、自分からどぶんと大川へ飛びこんでいきやがった。またひとり、くそっ、と突っかける。ひょいとかわして、弱腰をけると、こいつも自分からどぶーん、そのあざやかなこと、まったく太夫に見せたかったねえ」

「だんなはそれをぽかんと立って、見物していたんですか」

あやめがひょいとこっちを向いて聞く。そうれ乗ってきたと、吉はにやりとしながら、

「見ていたとも、胸がすっとしたね」

と、大げさにそっくりかえってみせる。

「五人にひとり、あたしなら、そんなとき、かなわないまでも助けだちに出ますねえ。失礼ですけれど、ぽかんと立って見物しているようじゃ、もしあの人が分がわるくて、川へでも突き落とされたら、だんなはさっさと逃げ出す組ですね」

——あけすけにけいべつしたような目をしてみせるあやめだ。

「驚いたなあ。太夫もなるほど歯にきぬをきせないほうだねえ」

吉はあきれて、あやめの顔を見ている。

「太夫さん——」

少しまえからはいってきて、用ありげに、待っていた甚作老人が、話の切れめに、声をかけた。

「なにか用なの」

「へえ、飯田屋の親分さんに呼ばれましてね、親分さんがいうには、ご苦労でも今夜またひとつ、お座敷をつとめてくれないか、けっしてこのあいだのようなまちがいはさせないからって、たのまれたんですがね」

「また神保町のお屋敷かえ」

「いいえ、今夜のは長崎屋東五郎さんとかの、小梅のほうの寮なんだそうで、夕方から花見の宴に客を招くことになっている。その余興にたって太夫をという名ざしなんだそうで、出ておけば今後もためになるお座敷だから、ぜひたのむというんですがね」

「あぶない、あぶない」

吉はおもわず口から出てしまった。じろりとそれをしり目にかけて、

「行ってみようよ、ためになるお座敷っていうんなら」

あやめはむぞうさに答えた。

「うけますか、太夫さん」

——日ごろにない二つ返事なので、甚作老人はほっとしながらも、耳を疑ったようだ。

「うけるわ。芸人なんだもの、芸だけ見てくださるお座敷ならどこへでも出ます」

「芸だけですむかねえ。相手が長崎屋じゃ、きっとおへそまで見たがる。断わったほうが安全じゃないかえ、太夫」

裏を小耳にはさんでいるだけに、人ごととは思えない吉なのだ。

「だんなにあたしのおへその心配までしてもらわなくたってよござんすよ」

あやめはぴしゃりときめつけた。

「わたしが心配するんじゃない。カワウソだんなが心配しているんだ」

「うそばっかし。あたしはまだあの人に、おへそを任せるなんて、そんな約束をしたおぼえはありませんからね」

「きっとだね、太夫」

「ご念にゃ、及びません。女の前でいやらしいおへそのことばかり口にするやつなんか大きらい」

「わかったよ。だんなにそのおもむきをよろしく取り次いでおこうよ」

「どうぞ、そうしてくださいまし」

つい売りことばに買いことばだ。そういい切ってしまってから、ひとりで顔が青ざめてくるあやめだった。

観音さま

「カゴ屋さん、おまいりをしてくるまで待って

いてくださいね」
「へえ、行っておいでなさいまし」
長崎あやめは雷門のそばでカゴをおりて、仲見世へはいった。お供は甚作老人である。
本所小梅の長崎屋東五郎の寮へ呼ばれていく途中で、いよいよかたきの家へ乗りこむのだから、いくら勝ち気なあやめでも、観音さまの加護にすがりたくなるのは無理もない。
——おっかさん、今夜こそ見ていてください。
十七年の深い恨みがからだじゅうにたぎっているあやめだ。そのかたきのほうからわざわざ自分を呼ぶなんて、なんという不思議なまわりあわせだろう。きっとおっかさんがみちびいてくれているにちがいない。あやめはそう信じて疑わなかった。
——見ているがいい。あたしは今夜おまえを生きながらの地獄へ突きおとして、かわいそうなおっかさんがあの船の中でうけた苦しみを、百倍にしてかえしてやらなければ承知できないんだから。
子どもを絞め殺しておいて、その同じ船房で若い母親のからだへ暴行を加えさいなむ、そういう恐ろしい直前の光景を、ありありと見せつけられているだけに、この十七年間重吉という悪鬼をのろいつづけてきたあやめなのだ。八つ裂きにしてやっても、まだあきたらない気持ちなのである。
「男なんて、どいつもこいつもけだものだわ」
やがてたそがれに近く、奥山の見せ物小屋もみんなとっくにはねているから、さしも人足のまばらになった仲見世を、あやめは小走りにげたを鳴らしながら、おもわず胸の中であの顔をにらみつけている。
「わあ、すげえ、なにをねえさんおこってるんだね」
仁王門のほうから、ひょろひょろ出てきた花見帰りらしい職人のふたりづれが、いきなり前

に立ち止まって、両手をひざに腰をかがめながら、下から顔を見上げるようにあごを突き出した。みずぎわだった女ぶりの年増が、目を血走らせて、ひとりで殺気立ちながら、やんちゃな歩きかたをしているのだから、目だたずにはいなかったのだろう。
——ばか。
にらみつけて、さっさとそのそばを通りぬけて、あやめはただ一つ心残りなことがないでもなかった。今夜小梅の寮でもし失敗すれば、重吉はむろん生かしてはおかないつもりだが、自分も生きては帰れないかもしれぬ。もう一度だけ、あのとぼけたカワウソ源太に会って、それとなく別れを告げていきたかった。いままで親切にしてくれた男はずいぶんいるが、なんの下心もなく、恩にきせるようなことをひと言も口にしようとさえしなかったのは、あの男ひとりだった。それだけに、あっさりしすぎていて、あれ以来二度とたずねてきてくれようともしない。正直にいえば、そうとわかってからなおさら、こっちの心も知らないで、とくやしくなりながら、あやめはやるせないまでに女心がつのってくるのだ。
そのくせ、おだんな吉に会えば、ついあんな心にもない憎まれ口をきいて、せっかく会えそうな手づるを自分からむしりとってしまう。
——あたしって女は、よっぽどあまのじゃくにできてるんだわ。
一方でため息をつきながら、一方ではそれでいいんだ、おっかさんのかたきをとりに行くのに、色だの恋だのと、そんな浮いた心でなにができるもんか、と自分で自分をしかりつけながら、仁王門をくぐる。昼間は石だたみの両側にならんでハトの豆や子どものおもちゃを売っている店も、今はきれいにかたづいて、さんけいの人もほんの四、五人、がらんとした境内のそこここにハトの群れが遊んでいる。
気がせくから、本堂の階段の下のさい銭箱の

前で拝んで帰るつもりだったあやめは、ふっと回廊を見あげて、おや、と目をみはった。そこに立ってぽかんと欄間の絵馬をながめているのんきな着流しの浪人者、その横顔がどう見てもカワウソ源太だ。

とわかったとたん、あやめはかっとからだじゅうが熱くなって、一気に階段を駆けあがっていた。身は軽いがげたばきだから、ときならぬはでな音をたてて、はでなすそをけ散らしながら、二、三段ずつやんちゃに、またたく間に駆けあがったはでな女を、そこに居あわせたほどの人たちが、みんなあきれてながめている。

「やあ、おいなりさんか――」

源太郎もおもわず目を丸くしてあっけに取られたようだ。

「あんたは、あんたはどうしてこの間、待ちぼうけをくわしたのよう」

人前もなく、いきなり男のたもとをつかんで引きつけ、あやめはいまにもからだをたたきつけてやりたい衝動を、さすがにあやうく押えている。

「まあ下へおりよう。こんな高いところでけんかをしていると、いい見せ物にされる」

源太郎はわらいながら歩き出した。

なるほど、だれの目もみんなこっちへ集まっている。が、気はたっているし、強情なあやめだから、かまうもんか、見ているやつがまぬけなんだ、と階段をおりながら、平気で男のたもとを放そうとしない。

「しかし、妙なところで出会ったもんだね」

「迷惑なの、源さん」

「はあてな、いやに殺気だっているぜ。まただれかにおへそをねらわれてきた帰りかえ」

返事のかわりに、どすんと肩をぶつけてやった。下で待っている甚作老人が、困ったような顔をしている。ああそうだっけ、あたしはまだ観音さまにおまいりをしていなかった、と気がつき、

「逃げると承知しないから――」

ぐいと一つ男のたもとを引きつけておいて、いそいでおさい銭を出し、さい銭箱の前へ立って鈴を鳴らした。目をつぶって、合掌して、

――南無(なむ)大慈大悲の観音さま、どうか、おっかさんのかたきが討てますように。それから、それから――

あとがつづかない。いや、いくらなんでもかたき討ち悲願のあとへ、すぐ男のことをたのむのはうしろめたいから、そっと合掌を解いた。

「じいや、おまえ一足先へ行って、業平橋(なりひらばし)のところで待っていておくれ」

「へえ。カゴはどうします、太夫さん」

「そうねえ、あたしはいらないから、おまえのっていくといい」

「いいえ、太夫さんがいらなければ返します」

「そうお――おまえのいいようにおしな」

あやめのわがままは承知しきっているから、老人は別に逆らいもせず、源太郎のほうへていねいにおじぎをして、仁王門のほうへ去っていく。春の日はようやくたそがれかけて、夕がすみがしだいに濃く、町のそこここに灯がはいりはじめている。

「太夫さんは、どこへ行くんだえ」

たもとをつかんで、どんどん随身門のほうへ歩き出すと、男はおとなしくひっぱられながら、のんびりと聞く。

「黙ってついてくればいいのよ」

なにから話して、なにから聞いてやろうかと、あやめはただ胸がわくわくするばかりだ。が、そのわくわくするのは、絶対に男にけどられたくないてまえがってなあやめなのである。

月の花道

随身門を出て、寺町の間をまっすぐ抜けると花川戸へ出る。花の盛りはややすぎたが、花見にうかれる酔いどれは葉桜になるまで絶えない

のが例年で、ことにこのへんは川一つへだてて向島をひかえ、北へたんぼを一つ越せば新吉原に葉桜があるから、夜になっても、酔いどれの足が絶えない。
「いやになっちまうな、うるさくて」
　連れが侍だからあくどくはからまないが、どこまで行ってもその酔いどれたちが、ついふらふらと顔をのぞきにくるので、あやめは腹がたってきた。
「しょうがないよ、天下の往来だからね」
　源太郎はいっこう気にもとめないでわらっている。
「どっか人のうろついていないところないかしら」
「ないねえ。どこへ行っても、お月さまから見ればわれわれがうろついていることになる」
「黙ってお歩きなさいってば」
　ごつんと一つ横っ腹をこづいてやる。
「ようよう、かかあ天下――」
　とたんに暗い路地口から出てきた酔いどれにひやかされてしまった。
「そら、ごらんなさいな。あたしばっかり悪者にされるじゃありませんか」
「心配しなくともいいよ。太夫は別に、かかあってわけじゃないんだからね」
「あんた今、どこにいるの」
「おだんなうじのいそうろうだ」
「あの人のうちはどこ」
「郡代屋敷の西のはずれの十軒長屋だよ」
「なにしにきょう観音さまへきたの」
「ただぶらぶらと、からだをもてあましているんでね」
「毎日ぶらぶら出歩いてるの」
「いや、きょう初めてさ。それまでは三日ほど昼寝ばかりしていたな」
「どうしてあんた、この間の晩帰ってこなかったのよう。ひとがせっかくお酒のしたくをしておいたのに」
　思い出すとくやしくなってくるのだ。
「お酒より、早く楽々と寝たくなったんだ」
「うちにだってふとんぐらいあります」
「そりゃまあ、そうだろうが、うっかり太夫のおへそへ手が出したくなると、恥ずかしいからねえ」
「度胸があったら、出してごらんなさいよ」
「ぶんなぐられるだけのことさ」
「うそばっかし。あんたはあたしが、こんないやしい女芸人だから、ほんとうはばかにしてるんでしょ。ちゃんと知ってるわ」
「そんなつまらないけんそんはしなくてもいいよ。太夫は日本一の手品師で、美人で、かせぎ人で、だからみんなにおへそをねらわれるんだ。おだんなうじが心配してねえ、ぜひ太夫のおへその用心棒に行ってやれ、とすすめてくれるんだが、あいにくおれにも自信がない。用心棒がふらふらとおへそをねらいたくなったんでは、まことに申しわけのないことになるからなあ」
「だから、あんたならねらったっていいっていってるじゃありませんか」
「しかし、この間の話だと、太夫は亭主のようないやらしいものは持ちたくないんだろう。いやらしくてもなんでも、亭主を持てば、おへそはとかく身持ちになりたがる。身持ちになると、綱渡りはできなくなるからね」
「ふーんだ、あたしならへっちゃらだわ」
「いくらへっちゃらでも、タヌキの綱渡りはあんまりみっともよくないよ」
「かまわないんだってば、憎らしい。文福茶釜（ぶんぶくちゃがま）みたいでかえってお客がよろこぶわ」
　じだんだをふみながら、おや、これでは自分から、おへそに手を出してもらいたがって、男をくどいてるみたいだと気がつき、あやめは急に恥ずかしいような情けないような、それにしてもどうしてこの男はこう冷淡なのだろうと、くやしさのほうが先に立つ。道はおぼろ月にぬ

れた吾妻橋をわたりきって、細川の下屋敷の横手へはいる。ここまでくるとさすがに人足は絶えがちで、ほどなく業平橋へ出るはずだ。

　業平橋へ出れば、一度はいやでも別れなければならない。このままではどうしても別れきれないあやめだ。

「源さん――」

「なんだえ」

「あたしこれから、小梅の長崎屋東五郎の寮へ、お座敷で行くのよ」

「ああこの間おだんなうじが、なかなか抜けめのないだんなだとほめていた長崎屋だね」

「そうよ。またおへそをねらわれるかもしれないわ」

「そうわかっているんなら、よしたほうが無事だね」

「うれしいわ。そういってくれるの、あんたひとりなんだもの」

「またはだしで逃げ出すようにでもなると、げたが損だ」

「だから、あんたを男と見こんでお願いがあるのよ。あたしが逃げ出してくるまで、業平橋のところで待っていてくれないかしら。あんたどうせからだをもてあましているんでしょ」

「なにも逃げだすのを覚悟でげたを損しに行かなくっていいだろう」

「そうはいきません。おへそをねらわれるかどうかは、行ってみなければわからないことだし、いちいちそんな心配をしていては、芸人になれませんからね」

「しかし、太夫がくるまで橋のそばに立っていて、つじ斬りとまちがえられやしないかねえ。お座敷は相当かかるんだろう」

「どんなにおそくたって、四つ（十時）までにはすむわ。五つ（八時）が鳴るまで、どこかでぶらぶらしていて、それから四つまで業平橋で待っていてもらえばいいわ。そうねえ、ぼんやり立っていて、つじ斬りとまちがえられると困るから、業平橋と寮の間を行ったりきたりしていればいいでしょう」

「太夫さん、おれをいやらしいご亭主とまちがえているんじゃないかえ」

「まちがえてやしないわ。どうせあたし、あんたにおへそ拾ってもらうつもりでいるんだもの」

　ずばりといってのけて、かまうもんかと思う。今夜はどっちみち、生きて帰れるか、死んで帰るかわからない。一生にたった一度の恋、生きているうちにおへそをもらってもらえないのは少し心のこりだけれど、もし死んでも恋しい男に骨は拾ってもらえると思えば、安心して死ねる。

「源さん――」

　おもわず男の手をさぐってたもとでつつむなり、その手を両手でせつない胸へ抱きしめ、

「死んだら、あたしが死んだら、寮へ死がいをもらいにきてくれなくちゃいやだから――」

　いっているうちに、感情がたかぶってきて、すうっと涙があふれ出す。どこからか、チョウジの甘いにおいがただよう土べいつづきの道で、さいわいだれも通らない。男はおとなしく女の胸へ手をあずけたまま、黙って歩いている。

「勇ましいんだねえ。死ぬ覚悟で芸をしに行くのかえ」

　しばらく歩いてから、男がのんびりとした声を出す。

「いやだったら、ひとの気も知らないで」

　とはいっても、おっかさんのかたきを討ちに行くのだとは、打ちあけられないあやめである。

「今夜も、あぶない綱渡りをやるのかえ」

「やるわ。いちばんあぶない綱渡りだわ」

「なるべく、落ちないようにするんだな。はだしで逃げてきてもいいように、ぞうりを買っておいてやろうか」

「いらないわ、またあんたの借りるから」
こういうのんびりした男が相手では、どうしてもしばいのような道行きにはなりそうもない。ふ、ふ、とおもわずわらわせられて、そのくせ涙がとまらず、
「もう黙ってお歩きなさいってば」
と、邪険に胸の手を乳ぶさの上へ押しつけながら、好きで好きでたまらない感情が火のように燃えてくるあやめだった。
「あれえ、だれかくるようだぜ」
土べいのはずれがもう業平橋らしく、だれかひとりしきりにこっちをすかして見ている。甚作老人らしい、と見たから、
「いいじゃありませんか、だれがきたって」
と、あやめはいとしい男の手をまだ放したくない。
「おれはかまわないがね。おへそをさぐっているようで、うわさがたつと、太夫さんの人気にかかわるだろう」
「胸におへそがありますかよう、ばかばっかし」
どうやらこっちがそれとわかったらしく、甚作老人がばたばたと駆け出してきた。六つ（六時）という長崎屋との約束が、すでに半刻（一時間）の上もすぎているのである。

野心のうたげ

長崎屋の小梅の寮は、業平橋の南詰めを北へ源森川へそってのぼり、名物梅飯茶屋の北隣になっている。
今夜の客はあけはなした座敷の正面に神尾主膳と、主膳の父でもとは鬼半といわれた町同心浦上半兵衛、それに相伴役として飯田屋竹五郎が加わり、主客あわせて四人、いずれも臭い縁につながる水入らずだから、まだお目あてのあやめはこないが、でしのお春お秋の酌で、もうだいぶ酒がまわっている。

――それにしても、長崎屋という男はあいかわらずすごい度胸だ。
今夜の竹五郎は、なんとしても酔いきれないのである。
はじめてあやめに目をつけたのは若い神尾主膳である。これはこの間の晩みごと失敗したが、どこからそれを聞いたか、
「飯田屋、おれが千両積もう」
と、東五郎が乗り出したのだ。
「だんな、千両はありがてえが、こいつばかりは、神尾さんのほうへ知れると、あっしがまずいことになります」
「よけいな心配はしなくてもいい。おれがちゃんとその段取りはつけてやる」
いいだしたら、あとへはひかない長崎屋だ。
十七年まえ、先代の主人藤兵衛を抜け荷のけんぎで牢へ送り、入牢中に一服盛ってまんまと長崎屋を横領した東五郎である。藤兵衛の毒殺をたのまれたのは当時の鬼同心浦上半兵衛で、直接手を下したのは、その時分牢役人だった竹五郎だ。鬼半のたのまれ料が千両、竹五郎は百両もらった。
まもなく鬼半はそれとなく役めをひいて、自分は隠居し、五百石の神尾主膳の家を買って、せがれを旗本にした。それと前後して竹五郎も牢番をやめ、東両国へ今のなわ張りをひろげたが、鬼半にとっても竹五郎にとっても、いまだになにかといえば長崎屋を金方にしている。それがあるから鬼半のせがれなど眼中にないのだろう。今夜は主膳にさんざんあやめを見せつけておいて、そのまま当分ここへ女を泊め、いやおうなしにめかけにしてしまえば、主膳も自然にあきらめるよりしかたなかろう、という腹なのだ。
「まあ、神尾さんのほうはそれであきらめるかもしれませんが、あやめって女がそう簡単に納得しますかねえ。なにしろ、いざとなるとヒョウのように荒っぽくなる女ですからねえ」

それさえなければ、だれよりも先に竹五郎がとっくに手に入れたいあやめなのである。

「そういう女(め)ヒョウだから千両積みたいのさ。おまえさんなどとは少し腕が違うんだから、まあ見ていなさい」

長崎屋はにやりとわらっていた。どんな手をつかう気か知らないが、もしあの逸品がうまく納得さえすれば、それこそまたとないけいぼうの花となるうえに、千両ぐらいの元金はあの芸で一、二年のうちにからだからたたき出してくれる。

「けっして損のいくしろものじゃありませんが、そのかわり一つまちがうと手をかまれます。お気をつけなすって」

半分はいやみもまじる竹五郎だった。

それにしてもあやめの着きかたが少しおそすぎる。長崎屋はあとにたのしみがあるから別に気にもせず、上きげんのようだが、

「おそいな。あやめはほんとうにくるのか」

さっきからひとりでじりじりしているのは、若い主膳だ。これはこの間失敗しているうえに、今夜の幕裏を少しも知らないから、あわよくば旗本の威勢をかさに、うまく寮の茶室へあやめをつれこんでやろうぐらいの腹があるのではないだろうか。

「殿さまはだいぶ、あやめの手品がお気に入りのようでございますな」

長崎屋がなにくわぬ顔をしてからかう。

「うむ。あやめの南蛮(なんばん)手品だけは神品だ。そういう長崎屋も、一度見れば、きっと病みつきになるさ」

「そうですかなあ、今夜ぜひその神品をゆっくりたんのうさせていただきましょう。おまえたち、師匠はたしかにいっしょに家を出たのだろう」

「はい、観音さまへまわるからと、途中で別れたんですから、もうそろそろ着く時分だと思いますけど」

それにしても少しおそすぎるから、お春もちょいと心配そうだ。

「途中でなにかまちがいでもあったかな。春は酔いどれが多いからな、太夫はなかなか美人だというし」

鬼半がただおざなりに口を出す。

「どうしてご隠居さん、酔いどれぐらいに驚くような太夫ではござんせん。なにしろ軽わざで鍛えぬいてあるからだでござんすからねえ。ただの娘っ子とは違います」

竹五郎はそういって、それとなく主膳と長崎屋の顔を見くらべた。そのびんしょうなのをよく知っている主膳はくやしそうだし、今夜そのからだをためしてやる気でいる長崎屋は好色そうな目を細めているからおもしろい。

「だんなさま、すいませんがちょいとお顔を――」

中年の女中がふすまのかげから呼んだ。

「わたしかえ」

長崎屋は失礼します、といって座をはずしていったが、それっきりしばらく手間取る。

「飯田屋、あやめになにかあったんじゃないか」

すぐそんなほうへ気をまわす主膳だ。困ったもんだな、この分では、もしあやめが長崎屋の手におちたとわかると、ただではすみそうもないぞと、竹五郎がひそかに心配していると、さっきの女中がこんどは飯田屋を呼びにきた。

小座敷に待ちうけていた長崎屋の顔色が、なんとなくけわしくなっている。

「どうかしましたか、だんな」

「竹五郎、妙なやつがたずねてきた」

「へえ、妙なやつといいますと――」

「岡(おか)っ引きの森七だ」

「森七――あの大阪へ帰ったはずの」

十七年まえ、藤兵衛の抜け荷を密告したのは、そのころ岡っ引きだった小田原町の森七というやつである。これにも百両やって、口をふさぐ

ために故郷の大阪へ帰させたが、それが今、あかだらけの印ばんてん一枚の姿で台所へやってきて、もう一度だけ五十両恵んでくれと泣きついているのだという。

「じゃ、やろう、おちぶれて舞いもどってきやがったんですね」

「そんな話だ。金は惜しくないが、口がうるさい。ここへ五十両用意しておいたから、これをおまえから森七にやってくれ。人目につくとおもしろくないから、当人は茶室の前に待たせてある」

「へえ」

「勘助と岩がきているはずだね」

「つれてきています」

「あとはおまえにまかせるから、この五十両はわたしの手もとへ返すには及ばないよ。わかったね」

「承知いたしやした」

「森七は裏口から出しなさいよ」

長崎屋は念を押しておいて、小座敷を出ていった。

「いい役まわりじゃないが、背に腹はかえられねえからな」

竹五郎はさすがに暗い顔をして立ち上がった。まんざら知らない仲ではない。どうせここへくるんなら、なんだって、借金をしてでも身なりをかざってこなかったんだろう。うっかりおちぶれた姿なんか見せるから、人に不安がられて、ついには命をねらわれることになるんだ。

――貧すれば鈍するというやつなんだろう。

玄関の供べやへ行って、勘助と岩を外へ呼び出し、やくざ仲間ではくどくどと理由をいってきかせる必要はない。

「いま裏口から、おれがひとり送り出すから、なるべく遠く離れて眠らしちまえ。ふところへ五十両持たせてやるから、そいつはてめえたちのものにしろ」

「わかりやした」

「このあいだの晩のように、てめえから、大川へ飛びこむんじゃねえぞ」

「へえ。一言もござんせん」

頭をかきながら、ふたりの子分がこそこそと表から出ていくのを見、竹五郎は庭づたいにおもやとは離れた林の中にある茶室のほうへ進んでいった。

春の夜は、ようやくよいをすぎようとしている。

――それにしても、あやめのやつはどうしたんだろうな。

ちょいと気になる竹五郎だ。

おのろけ

森七は疎林をもれるおぼろ月にぬれて、茶室の縁に、なるほど薄よごれた印ばんてん姿でうずくまるように腰かけていた。

「珍しいなあ、森七」

しおり戸から飛び石づたいにはいっていきながら、飯田屋竹五郎が気軽に声をかけると、両手でひざの上へかかえこむようにしていた頭をぐいと持ちあげて、

「なんだ、飯田さんか。こんなお恥ずかしいかっこうをさらして、めんぼくありやせん」

と、苦笑いをうかべる。

「いつこっちへ帰ってきなすったんだね」

「つい先月のことさ。ここでぐちをこぼしたってしようがねえが。てっとりばやくいや大阪を食いつめちまってね。まだ老いくちる年でもねえし、人間、七ころび八起きっていうこともあるから、もう一旗あげてやろう。それにゃやっぱり江戸だ、さいわい昔なじみの長崎屋さんはあいかわらずお盛んのようだしと思ってね」

「なるほど。人の運なんてもんは、いつどこでぱっと開くかわからない。まあ、しっかりやんなせえ。だんなにたのんだのは五十両だって

ね」
「そうなんだ。こんなかっこうで無心なんかにあがっちゃ迷惑がられる、とそいつは百も承知なんだが、背に腹はかえられねえ、二度とこんなまねはしねえから、もう一度助けてもらいたいと思ってね」
「そら、ここに五十両、たしかにだんなからあずかってきたぜ。持っていくがいい」
竹五郎はふところから二十五両包みを二つ取り出して、森七にわたしてやった。
「ありがてえ。恩にきやす」
さすがに金の顔を見ると押しいただいて、たいせつそうに腹掛けのどんぶりふかくしまいこむ森七だ。
「こいつはよけいな憎まれ口だが、今度くるときはもっとかっこうをつけてくるほうがいいぜ。だんなの顔にもかかわることだからな」
「きっと気をつけやす。けど、飯田さんは、いつも繁盛でうらやましいや。こういっちゃなんだが、長崎屋さんといい、浦上のだんなといい、あのときひっかかりの三人が三人ともめでたく栄えていなさるのに、あっしだけがうまくいかねえなんて、やっぱり役者が違うんですかねえ」
森七としては、むろん金が手にはいったうれしまぎれのせじのつもりだったろう。が、うっかりそんなことを口にするようだから、用心ぶかい長崎屋にきらわれるのだ。竹五郎にしても、これはあんまり気持ちのいいせじではない。
「森七、つまらねえことを口に出すもんじゃねえぜ」
「すんません。なあに、ほかの人じゃねえからつい、心やすだてに口に出たんで、てめえの首の飛ぶことでさ、だれが人の前で、あぶない話なんかするもんか。それだけは、安心しておくんなさい」
「その口を忘れちゃいけねえぜ。今夜はこの寮

に客よせがある。表門のほうは人目につくから、裏口へ案内してやろう」
「そうですか。すんませんねえ、どうかだんなによろしくいっておくんなさい。いずれ、なんとかかっこうがついたら、あらためて飯田さんのとこへもごあいさつにあがります」
「いつでもくるがいい、待っている」
茶室の庭を出て林の小道を裏木戸まで送り出し、木戸をあけてやって、
「じゃ、森七、気をつけていくがいいぜ」
と、親切にいってやる。外は浅い竹やぶになっていて、そのどこかに勘助と岩がかくれているはずだが、さすがに姿は見せない。
「ありがとうござんす。おやすみなさいまし」
森七はおじぎをして、すたすたと歩き出した。
——人間の命なんて、はかねえもんだな。
そのうしろ姿を見送りながら、たった五十両の金であんなによろこんで帰る男が、その五十両のためにあしたはどこかに死がいになってころがっているのかと思うと、竹五郎はなんとなく変な気持ちだった。むろん森七がかわいそうだなどと考えるほど、生やさしい根性の男ではない。が、罪もない先代長崎屋藤兵衛一家を、あんなに残酷なめにあわせておきながら、今も森七がうっかり口にしていたように、三人が三人ともこうして無事に世わたりがしていられる、悪運が強いとでもいうのかな、とわれながら感心させられるのだ。
——悪運ていえば、東五郎というやつは悪運のかたまりみたいな男だな。あいつにはどうもかなわねえ。
考えてみると、ねたましいような、こづら憎いような、しかしその東五郎が無事な間は、こっちも安心していられるのだから、まあきげんをとっておくよりしようがないのである。
なにくわぬ顔して竹五郎が座敷へもどってみると、ちょうど長崎あやめがいま着いたばかり

のところらしく、座は急に明るさをましていた。
「いままでなにをしていたんだ。おそいじゃないか」
そのあやめを前へ引きつけて、あたかも自分がこの家の主人のごとく、いや、当人はもうあやめを自分の持ち物とでもうぬぼれているのかもしれない、目をすえてなじっているのは若い神尾主膳である。
「そんなにおそうござんしたかしら。観音さまへお参りしてきただけなんですけれど」
にっこりわらいながらちょうしを取りあげているあやめは、このあいだひどいめにあわされかけたばかりだし、日ごろ、わがままいっぱいな女(め)ヒョウのことだから、ひとあらしなければいいがと心配していたほどのことはなく、案外きげんは悪くなさそうなので、竹五郎はひそかにほっとした。
「ただ観音さまへまわってきただけか。怪しいぞ」
「あら、殿さまはお目が高うござんすこと。怪しいなんて、どこでそんなことおわかりになるんでしょう」
「わかる、ちゃんとわかる。まっすぐ白状せい」
「ほんとうはあたし、観音さまに、どうか大好きなひとに会えますようにって、願をかけに行ったんですけど、ごりやくはてきめん、その帰りにぱったりそのひとに出会ってしまいました。まるで夢のよう――」
「どこのどいつだ。その大好きなやつというのは」
「当ててごらんなさいまし。とてもいいひとなんですから」
思わせぶりなながし目に、ちらっと恥じらいさえこもって――竹五郎の知っているかぎりでは、年こそ二十歳の上を二つ三つ出ている年増(としま)盛りだが、まだ男というものを知らないあやめだから、どこかに生娘らしいうういしさがう

れたからだいっぱいににおいこぼれるごとく、長崎屋東五郎が千両という大金を投げ出すだけのものはたしかにある逸品だ。
「よし、おれが当ててみようか、太夫」
胸に一物あって、竹五郎がわらいながら口を出した。
「さあ、当たりますかしら」
「おだんな吉だろう。このごろよく楽屋へきているっていうじゃないか」
「どうもおあいにくさま――」
「はあてね。もっともあの男は前身がよくないからな」
「どうよくないんだ」
はたして主膳は目の色をかえているようだが、そこは鬼半も東五郎もおとなだから、酒興のたわむれとしてにやにやわらってながめている。
「なあに、やろうはちょっと手癖がよくないんでしてね、あっしはまたその手癖で、堅い太夫もとうとうたいせつなものをすられちまったかなと思ったんだが――ああわかった。今度こそずばりと当てるよ、太夫」
「どうぞご遠慮なく――」
「カワウソ源太、そうだろう。太夫」
「ふ、ふ――」
にっこりとうれしそうにうなずいてみせて、春のともしびにほんのりと赤くなったあたり、しばいとは思えない濃厚なふぜいがある。
「何者だ、そのカワウソ源太というやつは」
「それが殿さま、ふしぎな縁なんでしてね、このあいだ太夫は神保町のお屋敷へお招きをうけましたね。殿さまがあんまりおからかいになるもんだから、うぶな太夫はおこってしまってお屋敷をはだしで飛び出した、その帰り道で出会って、親切にも太夫の家まで送っていったのが、カワウソ源太といういい男っぷりの浪人者なんでさ」
「なんだ、浪人者か。そいつはあぶないぞ、太

夫。そいつはきっとおまえをいい食い物にしてやろうと思って、ねこなで声を出しているんだ。そんなけしからん貧乏浪人にのせられてはいかん」

「少し違うんです、殿さま、あたしは食い物にされても、あのひとならかまわないと思って、いろいろなぞをかけてみるんですけれど、とぼけてばかりいて、相手にしてくれないんです」

「そ、それが貧乏浪人のずるい手だ。女を引っかけようなんていうすれっからしは、少し脈があると見ると、わざとじらす手を使うものだ。さんざんじらしておいて、じゅうぶん手もとへ引きつけ、それから骨までしゃぶろうという魂胆に相違ない。けしからんやつだ」

竹五郎の目から見ると、自分が骨までしゃぶりたそうな顔をして憤慨している主膳なのだからおかしい。

「殿さま、あの人のことを、そんなにひどくいわないでくださいまし。どんな魂胆があってもいいから、あの人が骨までしゃぶってくれる気になってくれたら、あたしどんなにうれしいでしょう。それだのにあの人ったら、ひとの気も知らないで、胸がせつなくってといえば、なにか食べあわせが悪かったんだろうなんて、憎らしいってありゃしない。いいえ、あたしも女のはしくれです。きっとほれた一念はとおしてみせますから、見ていてくださいまし」

あきらかにこの間の晩の主膳へ対してのつら当てだ、と竹五郎にはよくわかる。そして、それはまた竹五郎の思うつぼでもあったのだ。

「太夫、そんなに思っているなら、わたしがとりもってあげようかね」

長崎屋がわらいながら口を出した。

「お願いいたします。だんな」

「今夜、せっかく途中で出会ったんなら、ここへいっしょに連れてくればよかったねえ」

「あたしも、せっかく観音さまに会わせてもらったんですから、離れたくはなかったんですけ

れど、まさかお座敷へいい人といっしょに出るわけにはいかないし——でも、いいんです。今夜はむりにあたしのカゴへあの人をのせて、家へ行ってもらってありますから、帰ってから、ゆっくり、女の実意ってのはこんなものだ、というところを見せてやります」

「それはいい、それはいい。うれしそうだねえ、太夫」

「すいません。なんだか今から胸がわくわくして——そのかわりだんな、今夜はお座敷もいっしょうけんめいつとめますから。親分、そろそろしたくをしましょうか」

いつになく浮きたっているような師匠のきげんに、お春お秋は顔でわらいながらも、いぶかしそうな目をしているし、主膳は主膳でしっとにたえないのだろう。むっとした目に殺気さえ露骨にして、みなぎるようなあやめのようえんな姿を、にらみつけている。これ以上しばいがすぎてはあぶないと見たので、

「そうだね。では太夫、したくをしてもらおうか。皆さまさっきからお待ちかねなのだから」

と、竹五郎はうまく相づちを入れた。

あくどい手

その夜の長崎あやめは、目もあやな舞台衣装をつけて、お春お秋を相手の数番の手品に、いちだんとさえた芸を見せていた。手品がすむと、長崎屋の所望でふたたび衣装を着かえ、越後獅子とお夏狂乱を踊ったが、これがまたみごとのできで、ことに水もしたたるお夏の色っぽさは、日ごろしばい好きで、芸ごとには口やかましい鬼半でさえ、

「飯田屋、いただけるねえ」

と、目を細めたくらいである。

が、お座敷がすんで一度楽屋へひっこんだあやめは、いやお春もお秋も、二度と酒席へは姿を出さなかった。お酌はしませんというのが始

めからの約束で、着いたときそれでも二つ三つ酌をしたのは、ほんのあいさつがわりのおあいそうだったのである。
　とわかると、主膳は興ざめ顔にさっさと座を立って、父の鬼半といっしょにカゴで帰っていった。もっとも春の夜はようやくよいたけて、やがて九時に近かったろう。
「竹五郎、あやめはなかなかやるねえ」
　あとで東五郎がにやりとわらった。
「今夜は少し変わってるようです」
「どう変わっているんだえ」
「気ぐらいが高くて、座敷であんな男の話など、冗談にも口にする娘じゃないんですがねえ、ひどくうきうきしていたようだ」
「あれは神尾へのつら当てさ。ばかだんながそれを真にうけて、ひとりでやきもきしていたじゃないか。もっともあれだけはっきりと振られれば、若いからそうなるのがあたりまえだろうがね」
「あっしもそうだろうとは、みていやしたがね」
「しかし、カワウソ源太というのは、そんなにいい男なのかね」
　東五郎もいくらかはそれが気になるらしい。
「さあ、あっしもまだ会ってはいねえんですが、まあしばいでござんしょうねえ。あの娘が男にだまされるなんて、どうも考えられませんや」
　千両の売り物に、きずはつけたくないから、あっさりといっておく飯田屋だ。
「そんなに堅い女かねえ、あれは」
「だんな、手をかまれないように、気をつけておくんなさいよ」
　半分は手をかまれるだろうと、内心竹五郎はそれを望んでいる。
「なあに、そういう女にかぎって、一度男を知ると、ころりと貞女になるもんさ」
　それは飯田屋もまんざら経験のないことでは

ない。が、あやめだけは例外なのだ。
「まあ、だんながどうして手なずけるか、あっしは千両で買ってもらいさえすればそれでいいんですが、とにかくヒョウみたいな女ですからね」
「おまえさんなどとは腕が違います」
とろりとした目をして、もう自分のものになったも同じだと、いいたげな東五郎のあぶらぎった顔だ。
「へたをすると、命がけじゃないかと、あっしはそんな心配までしているんだが」
「飯田屋、そんなに心配するんなら、ちょいと見せてやろうか、来てごらん」
にやりとしながら、長崎屋は立ち上がった。
「どこへです、だんな」
　竹五郎は妙にどきりとする。
「きてみればわかるよ」
　廊下を二つ三つ折れて、そこがあやめ一座の楽屋にあてられている小座敷の前へ出た。障子にあかるく灯はともっているが、中はひっそりとして話し声一つしてない。
「あけてごらん」
　いわれるままに障子をあけてみて、竹五郎はあっと息をのんだ。
　もう帰るばかりに衣装道具が始末して、一方に片寄せてあり、お春、お秋、甚作老人が、それぞれの位置で茶をよばれていたそのままのかっこうで、がっくりと前へ突っ伏している。そして、あやめの姿はどこにも見えないのだ。
「だんな――」
「そんなに驚かなくたっていいよ。みんなくたびれて、うたた寝をしているのさ。もうしばらくそっとこのままにしておいてやろう。そこを締めておいておやり」
　こともなげにいって、長崎屋はそこの縁から庭げたをはいた。眠り薬を一服盛ったのだろう。やったな、と思いながら竹五郎はあとにつづく。まるで悪夢でも見ているような気持ち

だ。

　東五郎は庭をぬけて、疎林の中の離れのしおり戸をあけた。ここは灯はともしてないが、ぬれ縁の障子に春のおぼろ月が青白くけむっている。

「ここが今夜の千両のぬれ場さ。そっとあけて見るがいい」

「へえ」

　さすがに竹五郎は手がふるえた。細めに障子をあけて見ると、ほのかな光の中に、あやめがあおむけにぐったりところがされて、白々とした胸からすそのあたりの、正体もなく少しゆるみ乱れているのが、男の目に焼きつくようになまめかしく、うれきった女の膚の香さえ生ぬるく鼻をかすめてくる。飯田屋はごくりと生つばをのみこみながら、こうなってはどんな女ヒョウでもたあいなく思いのままだとおもい、このすばらしい女の肉体がやがてあぶらぎった五十男の手でさんざんにほんろうされる場面がいやでも濃厚に思い描かれて、急にむらむらっといい知れぬしっとさえ感じてきた。

「目の毒だ。いいかげんに締めておくがいい」

　長崎屋はわざと冷たい声でいいながら、

「しかし飯田屋、うまい細工だろう」

　と、内心のとくいはかくしきれない。

「かないやせん、だんなにゃ」

　障子をしめても、あやめのあやしくのうえんな姿がまぶたにありありと残って離れない竹五郎だ。

「けど、こういっちゃなんですが人形のようで、ちょいと張り合いがなくはありやせんか」

「人形でけっこう、あやめはたしかに千両で買いましたよ、いいかえ」

「へえ」

「そこで、森七のほうはどうなったね」

　女は女、仕事は仕事と、こんな場合でもちゃんと区別をして、けっして有頂天にはならない東五郎である。

「やろうは心配ありやせん。たしかにふたりにあとをつけさせやしたから、おっつけいい返事を持ってくると思いやす」

「きっと安心していてもいいね」

「だいじょうぶでござんす」

　口ではすなおに答えたが、このまま安心して人形いじりにかからせるのは、なんとしてもごうはらだ。

「だんな、かわいそうだが、やろうはやっぱり眠らせたほうがいいやつでした。ひどくひがみっぽくなっていやしてねえ、貧乏すると人間あんなにもばかになるものか、先代に一服盛ったあのときの立て役者三人が三人とも、ちゃんと繁盛しているのに、おれだけがおちぶれるなんて、役者が違うんですかねえと、変ないやみばかりいいやがる。もう十六、七年もたって、いいかげんにこっちは忘れかけているのに、面と向かって、そんなことをいわれると、あんまりいい気持ちはしない。こんちくしょうと、あっしも腹がたって——だんなはやっぱり目が高いと、つくづく感心しちまいました」

　せめてものいやがらせだったが、

「キジも鳴かずばなんとやらのたぐいさ。その返事はあした聞くことにして、じゃおやすみ」

　と、東五郎は暗い過去など歯牙にもかけていないようだ。

「あの連中はあのまま眠らしておきますか」

「そうだね、どうせ目がさめるのは真夜中だろうから、ふとんでもかけておいてやるさ。目がさめたら、おまえからうまくいって、連れて帰ってもらうんだな。そのかわり飯田屋、人形でもよかったら、お春お秋、どっちでもいいほうをおまえがかわいがってやるさ」

「ありがとうござんす」

　この悪党め、と竹五郎は腹の中で罵倒しながら、いまいましい茶室の庭を出た。

亡霊

——つまらないまねをしたかな。

東五郎はおもやのほうへ帰っていく飯田屋のうしろ姿を、しばらくじっと見送りながら、なにか後悔に似たものを感じていた。いい気になって、自分の獲物を見せびらかして、すばらしい獲物だけにちょいとうらやましがらせてみたかったのだが、竹五郎はあきらかに激しいしっとをおこしていたようだ。色恋というものは、ひょっとすると男を気違いにする。あの男も相当な悪党なのだから、こんなことから気持ちがこじれだすと、とんだことにならないともかぎらない。

——まあ今後はあんまりばかげたいたずらはつつしむことだな。

苦笑しながら、東五郎は茶室の障子をあけて静かに中へ身を入れた。

あやめは少し口をあけたまま、まだこんこんと正体もない。やや青ざめた顔色で、むっちりと盛り上がっている胸のあたり、膚も白々と、まったくこれはまたとないけいぼうの名花である。おもわずその顔に見とれながら、東五郎はもう飯田屋のことなどけろりと忘れていた。

いや、飯田屋はくやしまぎれに、人形じゃ張り合いがないだろうといやみをいっていたが、人形には人形のたのしみがあるのだ。そして、今夜は思いきり人形をあいぶしてやって、その人形が正気にかえったとき、どんな顔をするか——だが、しょせんは一度あいぶされたからだとあきらめて、あしたの晩からはきっと自分のほうから媚態を見せるようになる。

「ふ、ふ、かわいい人形さ」

のどもとまでこみあげてくるけだもの心をかみしめて、かっとからだじゅうが熱くなりながら、名花の胸をさぐろうと手をのばしたとたん、ぱっちりとあやめが涼しい目をあけた。

「あっ——」

絶対にそんなはずはないと信じきっているだけに、東五郎はぎょっと手をひいた。しかも、あやめの全身はまだぐったりとなったまま、あいた目はぽかんと天井を向いて動かない。まるで死人か、人形のような無気味さなのだ。

「あやめ——」

たしかめるように東五郎は、そっと名を呼んでみる。

「重吉——」

どこからともなく呼ぶ者があった。あやめの口から出たようにも思えるが、そのくせ、あやめのくちびるは少しも動かない。

「だれだ」

東五郎はおもわずあたりを見まわさずにはいられなかった。

「重吉、おまえは、あたしをおっかさんと、おなじめにあわせる気かえ」

ゆっくりと、細い声だ。

「なにっ」

「あのときも、船に、こんな月が、さしていたね」

どうやらあやめの口から出ているらしい。薬がいわせるうわ言なのだろうか。

「あたしはおまえに、しめ殺されて、海へすてられた。あたしは知っている。おまえは、おっかさんを手ごめにした。それから、おっかさんもしめ殺した。あたしはみんな知っている」

東五郎は全身に水をあびたように総毛立ってきた。

「だれだ、おまえ——」

「長崎屋藤兵衛の娘あや」

そういえば、自分が十七年まえに船の中で邪恋の獣欲をみたし、あげくの果てに絞め殺した藤兵衛の女房おきぬに、この顔は生きうつしである。実は自分の好みの顔だから千両出す気にもなったのだが、それがあのおきぬの娘あや——しかし、これがあのとき殺したはずの小娘あ

やなのだろうか。それともあやめのからだにあやの亡霊がのり移って、昔のうらみをいいにきたのだろうか。あやめの実体は、ただ目をあけているというだけで、正体もなくぐったりと身動き一つしないだけに、東五郎は額にあぶら汗がういてくる。
「今ごろ、今ごろそのあやが、こんなところへなにしに出てきたんだ。ばかばかしい」
「うらみを晴らしに、おまえをねらっている。毒殺されたおとっつぁんのうらみ、おっかさんのうらみ、晴らさずにおくものか」
「うぬっ」
東五郎はいい知れぬ恐怖に狂気のようになって、いきなり両手をあやめの白いのどへかけようとからだごとのしかかっていく。とたんに、あやめのからだがアユのようにおどりながら、白いこぶしが、がーんとこめかみへとんだ。
「ううむ」
それっきり東五郎は、がくりと意識を失ってしまったのである。

へそねらい

こめかみへ一撃をくった長崎屋東五郎は、どさりと前へのめり倒れたまま、それっきり動かなくなってしまった。
逆にすっと壁ぎわへ立ったそうはくなあやめの顔が、目にぎらぎらと憎悪をりんのように燃やしながら、じっと東五郎のがっしりした肩のあたりをにらみつけている。
「おっかさんのうらみ、おとっつぁんのうらみ――」
いっそぐさりと背中から心臓を一突きにしてやりたい、そんな衝動に駆られながら、器用な白い手がいつの間にか帯の間のあいくちへかかっている。が、このまま殺してしまうには、あまりにもうらみが深すぎる。こんな残忍冷酷で、どんらんあくなき野獣のような男は、生きながらの地獄へおとして、苦しめるだけ苦しめてやらなくては、気がすまぬ。
「そうだ、あたしはおまえが苦しみもがいて、狂い死にするところをこの目で見てやるから、覚悟しているがいい。今夜のはそのほんの手はじめなんだから」
手はじめとしては、今夜はうまくいったと思う。腹話術でこの男の旧悪をあばいてやったときの恐怖の顔、正気にかえってもう一度それを思い出したら、とにかく自分をかたきとねらっているあやめという女のいることを知って、どんなに肝を冷やすか、おそらく生きた気持ちはなくなるだろう。ここでひと思いに殺されるより、そのほうがこの男にとってどれほど苦しいことかわからないのだ。
いや、この男ばかりでなく、亡父藤兵衛に毒を盛った飯田屋竹五郎も、毒を盛らせた浦上半兵衛も、この男の口からあたしのことを聞いて、おびえあがるにちがいない。いい気味だ。
「重吉、竹五郎、鬼半、あたしは順々にひとりずつきっと狂い死にをさせてやる」
それにしても、東五郎というやつはなんという悪魔の心を持ったやつなのだろう。さっき控えの間へさがったとき、かたきの家のものはたとえ茶一杯でも飲みたくない、そう考えてあやめは日ごろの潔癖から、あの茶に手をつけなかったから無事にすんだようなものの、うっかり一口でも飲んでいたら、それこそみんなと同様眠り薬にかけられ、いまごろはこの男の毒牙にかかって取りかえしのつかないからだにされてしまっていたのだ。あやめはなんとなく身ぶるいせずにはいられない。
が、一方から考えれば、それを逆用したおかげで、竹五郎の口からおとっつぁんの毒殺されたことまでわかった。いまだに死にきれないふた親の亡魂が、いつもかげ身にそってあたしのからだをまもっていてくれるにちがいない。
「あたしは負けやしないから。おぼえているが

いい」

あやめは激しい闘志を新しくしながら、今は死がいのようにぶざまなかっこうをして、だらしなく意識を失っている東五郎では、なにをいっても張り合いがない、あとは次の機会にゆずることにして、するりと茶室を抜け出した。あたりを見まわして、だれもいないのをたしかめ、東五郎のはいてきたげたなど足にふれるのもけがらわしいから、たびはだしのまま、ひっそりとぬれているおぼろ月の庭へおりる。

しおり戸から裏庭へ出て、新鮮な夜気に、少しずつ頭がしずまってくると、急に業平橋で待っていてくれるはずのカワウソ源太の顔がまぶたにうかんできた。

——あの人、ほんとに待っていてくれるかしら。

じいんと胸があたたかくなって、まるでつきものでもおちたように、からだじゅうが甘くなってくるのだから正直なものだ。それでもさすがに、大望を持っている身で、いろ恋などに心をひかれていいものかしら、と多少うしろめたくないこともない。

——だって、しようがないわ。好きなんだもの。

今夜は東五郎に勝って、それでなくてさえおごりきっているあやめの奔放な情熱は、たちまちそんな良心を焼きつくしてしまった。

——かまやしない。あたし今夜からあの人と、どこかへ家を持とう。

それは実際問題からいっても、長崎屋東五郎ほどの悪党に正面きってあたしはおまえを生かしてはおかない、とはっきり今夜挑戦してきたからは、もう橘町の家へ住んで、今までどおりの長崎あやめではいられないのだ。それはまるでかたきに、返り討ちにしてくださいといって、あっけらかんと殺されるのを待っているようなものだ。あの家へはいままでどおり甚作父子(おやこ)とお春お秋を住まわしておくとしても、自分

だけはどこかへ隠れ家をさがさなければならない。

——あの人、すなおにうんといってくれるかしら。

隠れ家をどこへきめるかと考えるよりまえに、あやめはそのほうが心配になって、もしうんといってくれたら、どんなにうれしいだろうと、思っただけでも胸がわくわくしている。

あやめは裏口から竹やぶの小道へ抜け出し、われにもなく小走りになっていた。まっすぐ源森川へ突きあたって、川っぷちを左へ走る。片側は麦畑にそった寂しい道で、今じぶん人っ子ひとり通るはずはなく、向こうに業平橋が墨絵のように見えてきた。それがだんだん近くなると、片側の麦畑はふたたび暗い竹やぶになる。が、あやめの目は業平橋の上しか見ていない。

——待っていてくれるかしら。もし、きていてくれなかったらどうしよう。

胸がどきどきしてきて、人目もないところだから、なりふりもかまわずすそをけ散らして、足が早くなりかけた目の前へ、やぶかげからぬっと出てきて、ふいに道をふさいだ者があった。まぶかにずきんをかぶった侍である。

「だれ——おまえさんは」

気のせくあやめは、むっとして立ち止まった。

「通してください。あたし、いそぐんですから」

が、ずきんの侍は無言のまま、焼きつくような目をすえている。羽織はかまの案外りっぱな身なりからみて、あやめははっと思いあたった。

「あんたは、あんたは神保町の——」

とたんにうしろからひとり、ぱっと組みついてきたやつがある。

「なにするのさ」

そこは軽わざできたえているすばやいあやめだから、とっさに身をしずめるなり、そいつを

肩にかついで、いやというほど前に立った侍の足もとへ投げつけ、ひらりとうしろへ飛びのくところを、今度はふたり、

「めろう――」

両方からぐいと左右の腕を取ってくる。

「ちくしょうっ」

力まかせに振りほどこうとしたが、ふたりにひとりではかなわない。

「静かにしねえか。命まで取ろうというんじゃねえ」

両手を両方からねじあげられて、もうどうする力もない。

「助けてえッ――源さん」

「早く口をおさえろ」

やっと起き上がった若党ふうの男にいいつけた声は、たしかに神尾主膳だ。

「はっ」

ふところから手ぬぐいを出して、ほおかむりの若党がおどりかかってくる。

「諸君、こんばんは――」

おなじ竹やぶの中から、のんびりと声をかけて道ばたへ出てきたのは、源太郎のカワウソ源太である。

「だれだ、そのほうは――」

ぎょっとしたように、主膳はつかに手をかける。

「カワウソ源太――浪人者です」

「心得ちがいをいたしてはいかん。この女は身(み)にふらちを働いたゆえ、屋敷へつれてまいるのだ。黙って通れ」

天下の旗本をかさに、おうへいにあごをしゃくってみせる主膳だ。

「そういうきこうは、どなたです」

「浪人ごときそのほうに、名のる必要はない」

「名のらなければ、わたしはあなたがたを追いはぎとみる。それでもいいかね」

源太郎はにこりと笑ってみせる。

「無礼なことを申すと、手は見せぬぞ」

「そういばってはいけない。身分がある者ならなおさらのこと、顔をかくして女などをいじめると、家名にきずがつくからね」

「黙れっ。この女がふらちを働いたゆえ―」

「どんなふらちを働いたんだね。この女は長崎あやめという女芸人だ。口が少し悪くて、おてんばなところはあるが、理由なく他人にふらちを働くほど物好きな女ではない。わたしはよく知っている」

「そうか、きさまだな。この女を食い物にしようとしているけしからん浪人者というのは……」

主膳はやっと気がついたらしい。

「恐縮です。神保町のなんとかいう物好きな旗本は、しきりに太夫のおへそをねらっていると聞いたことはあるが、わたしはまだ女のおへそを食い物にしようと思ったことはありません。浪人はしても、トラの皮のふんどしをしめたがる人間には、下落していないつもりです」

「うぬっ」

ずぼしをさされた主膳は、かっとなって、いきなり抜き打ちに斬(き)りつけてきた。

「あぶない」

ひらりとかわしながら飛びちがった源太郎が、すっと川っぷちへ行って立ちなおる。

「くそっ」

振りかえりざま激しくおどりこんでくる二の太刀(たち)、ひょいと右へかわされて、空を切ったから主膳はいきおいよく川のほうへたたらを踏む。前が川だと気がついたときにはすでにおそく、

「わっ」

自分から悲鳴をあげて、どぶんと源森川へ飛びこんでいた。

「あぶないなあ――諸君、ご主人は泳げるかね」

源太郎は三人のほおかむりのほうへ、にっこりしながら聞いた。あっとどぎもを抜かれた家来たちはしりごみしながら、中間(ちゅうげん)ふたりの手が

おもわずゆるんだから、あやめは力いっぱいふり切って、
「源さん――」
ばたばたと男の胸の中へ夢中でしがみついていった。
「太夫さん、そんなにこわがらなくたっていいよ。殿さまは冗談に太夫さんをおどかそうとしたんだ。ねえ、諸君、そうだろう」
源太郎は女の波うっている肩を静かにたたいてやりながら、
「じゃ、そろそろ出かけようかね――諸君、さようなら、ご主人によろしく」
あっけにとられているその諸君のほうは、もう歯牙にもかけず、左手であやめをかかえるようにして業平橋のほうへ歩き出した。

男の愛情

「あれえ、おまえまたはだしになってきたんだねえ」
業平橋をわたって、森川の下屋敷の前へ出ながら、男ははじめて気がついたようにいった。
「今のところでげたがぬげたのかえ」
「手を放しちゃいやだったら」
肩を抱かれている男の手を、胸の上でしっかりおさえつけながら、あやめは今の興奮がまだおさまらない。
「ちくしょう、あいつも殺してやるからいい」
「殺すだなんて、そんな乱暴なことをいうもんじゃないよ。女のくせに」
「殺してやるんだってば、ちくしょう」
男の腕の中で身もだえしながら、もしこの人がきてくれなければ、あんなかたきの片割れにどうされていたかわからない不覚だっただけに、くやしくって、あやめはほんとうに殺してやる気なのだ。
「こわいおいなりさんだなあ」
男は苦笑したようである。

「源さん、もしあたしが今夜人を殺してきていたら、あんたどうする」
立ち止まって、ふいにむなぐらを取りながら目をつるしあげるあやめだ。
「話は歩きながらだってできるよ」
源太郎はなだめるように腕をつかんであやめを引きずりながら、
「太夫さんは小梅の寮で、まただれかにおへそをねらわれたんだね。だから、おれがいったのになあ、どうせげたを損しに行くくらいなら、やめたほうが利口だって」
と、人殺しのほうは本気にしないようである。
「ねえ、あたしが人殺しになったら、あんたどうしてくれるのよう」
「そんなことを聞かれたって、おれは別に太夫さんのご亭主ってわけではないんだから、どうしろなんてさしずはできないじゃないか」
「だから、ご亭主にしてあげるから、いってごらんなさいってば。あたしはちゃんと、あんたのおかみさんになりたいんだっていってるんじゃありませんか」
「そんなにほれてもらって、どうもありがとう」
「源さん、今夜はあたし本気なのよ。あんた、どうしてもあたしがきらいなの」
「むちゃいいなさんな。好きだのきらいだのといったって、太夫はまだおれがどんな人間だか、なんにも知らないはずじゃないか。あんまりあわててほれると、後悔するぜ」
「後悔なんかしないわ。あんたはあたしの会った男の中で、いちばん正直で親切で、たのもしい男だわ。だから、だから好きで、自分でもどうしていいか、あたし、わからなくなっちまったんだわ」
急に子どものように泣きじゃくりが出てきた。
自分でもこんなにあけすけに本心をさらけだ

そうとは思っていなかったが、よいからかたきの中で張りつめどおしに張りつめてきた心が、好きな男の前で安心して、ゆるみ解けてくると、もう意地もがまんもなくなってしまったのだ。ただ男の愛情がほしい。その男の愛情に思いきり燃え狂ってみたい。なにもかもいっさいをさらけ出してみせて、もしもこの男がそんな女は困るというのなら、あたしにはもう男の縁がないのだ。いさぎよくあきらめて、一生ひとりで暮らすからいい。

　そんな生一本な心になればなるほど泣けてくる。寂しくて寂しくてたまらないのだ。

「太夫はほんとうに人殺しをしてきたのかえ」

　しばらく歩いてから、男が落ち着いた声で聞いた。

「ことによると、死んでいるかもしれないわ」

「長崎屋東五郎かえ」

「あいつは、あいつはおっかさんのかたきなんです。おとっつぁんを毒殺したのもあいつなんです」

「かたき――」

　男はまた黙ってしまった。きっとびっくりしているにちがいない。やっぱりあたしは男に縁がないのかしら。それならそれでしかたがない。もう黙って別れよう。

「おまえが本気なら、夫婦になるよ」

　男が静かに、ぽつんといった。

「ほんとう、源さん」

「うむ。おまえはおれを無条件で信用してくれたんだから、おれもおまえのその生一本を無条件で信用しよう。おれはおまえが好きだ」

　沈みかけていたあやめの気持ちが、またしてもあらしのうずにまきこまれて、自分でもどうしてそんなまねをする気になったのか、いきなり男のうしろからのしかかるように首っ玉へしがみついている。

「うれしい」

「痛いなあ。耳へかみつくやつがあるもんか」

　男はわらいながら、ひょいとあやめをそのままおぶって、すたすた歩き出した。

　楽だし、安心だし、うれしいし、もう自分の男だと思うと、身も心もそのたくましい肩へすっかり投げかけて、あやめはぼうっと気が遠くなりそうだった。

「眠っちゃだめだぜ」

「眠りゃしないわ」

「じゃ、話してみろよ。おれはおまえのご亭主になったんだから、遠慮することはない。おまえは死んだ長崎屋の娘なのかえ」

「その話。うちへ帰ってからじゃいけないかしら」

　あやめはもう少しこのまま幸福でいたい。

「おれはかまわないが、人殺しをしてきたっていうから、心配しているんだ」

「人殺しなら、おかみさんにしてくれないつもりなの」

「いいがかりをいいなさんな。だから、おれはわけを聞くまえに、ちゃんと夫婦約束のほうを先にしているじゃないか」

「じゃ、これから人を殺しても、やっぱりおかみさんにしてくれる」

「物騒なことばかりいうぜ。おれは、人殺しなんて荒っぽいことは、あんまり好きなほうじゃないんだ。こう見えても、ごく気が小さいんでねえ」

「だって、どうしても人殺しをしなくちゃならないんだからしかたがないわ。別れるんなら今のうちだわ」

「あれえ、気が早いんだねえ、今夫婦約束をしたばかりだのに、もう別れるのかえ」

「いやだってば。だれが別れてなんかやるもんか。殺しちまうから」

　肩の手をするりと男ののどへからみつける。

「おっかないなあ。おまえは気が強くて、わがままで、気まぐれで、荒っぽくて、どうしても、一生ご亭主をしりに敷く女だとは思ってい

たが、ひょっとすると、ご亭主を絞め殺したくなる女だ、とまでは気がつかなかったな」
「そんなこと、いっちゃいやだ、ひとが冗談にいっているのに。あたし、きっといいおかみさんになってみせます。ねえ、そんなら、いいんでしょう」
　そして、はっと胸が重くなってきた。あたしはたくさんかたきを持っているのに、そしてもうそのかたきに挑戦までしてきているのに、はたしていいおかみさんになれるだろうか。こんなふうに、好きな男と甘ったれていてもいいのだろうか。
「ねえ、ちょっとおろして。あたし、すっかり話しちまいます」
「話なら、こうしていても聞こえるよ」
「いいえ、それじゃもったいないんだもの。ほんとうにまじめな話なんだから」
「変なことをいうとおこるよ。おれはなにも、色きちがいで、ふまじめにおまえをおぶってやっているんじゃないんだ。ほうっておくと、おまえは物騒なことばかり口走って、なにをやるかわからない。今夜のおまえは半分きちがいになっているんだ。まちがいがあるといけないから、おれの背中へこうして縛りつけておくんだ」
「じゃ、あんたは、あんたはきちがいをだますつもりで、さっきおかみさんにしてくれると、あたしをだましたんですか」
「そんなことをいうのが、もう半きちになっている証拠なんだ。おかみさんでもない、他人なら、だれが汗をかいておぶっているもんか。気楽なやん八をいいなさんな」
「すいません」
　ほんとうにそうだった。あたしはさっきから、妙なことばかし口走っている。腹がたっているからなんだ。それをこの人は、なにかあると見抜いているから、さからわないで、あたしのいうなりになっていてくれる。色恋ばかりではなくて、この人にはそういう男の深い愛情がいつもあふれているのだ。
　うれしい人、たのもしい人、そしてこわい人、そう気がついたとたん、今度こそあやめは男の肩へしっかりとしがみついて、とめどもなく涙がこぼれてきた。
　道はいつか大川へ突き当たって、ふけたおぼろ月がしっとりと夜潮にけむっている。

いけどりは千両

　長崎屋東五郎が意識をとりもどしたのは、あやめが寮をぬけ出していってから、いくらもたっていなかったようだ。
　むくりと起きあがって、夢のようにあたりを見まわしたが、あやめの姿はなく、ずきずきと左のこめかみが痛みだした。
　――ちくしょう。
　瞬間、もう一息というところで執念の獲物を取りにがした不覚が、歯がみをするほど残り惜しい。むろんそれとは別に、あやめが夢うつつのうちに口走ったのか、あやめのからだに殺した先代の女房の亡魂がのりうつってあんな呪咀(じゅそ)のことばをのべたてたのか、その幽鬼のような声をはっきりと思い出して、ぞっと背筋を寒いものが走る。
　――あやめがおきぬの娘。
　そんなことがありうるだろうか。あの晩、娘はたしかにこの手で絞め殺し、失神しているような女房のおきぬをさんざんにもてあそんだうえ、これも絞め殺して、二つの死がいを品川の海へ投げこんだのだ。それが、どうした潮のかげんか、翌朝おきぬの死がいだけが永代へ流れつき、絞殺とはすぐに知れたが、岡っ引きの森七にも検死の浦上半兵衛にも金薬(かねぐすり)がきいているので、
「――逆上の結果、娘を抱いて身投げ」
ということですんでしまった。娘あやの死が

いはついに見つからなかったが、これは子どものことだし、さかなのえさになって海の底へ沈んだか、沖へ押し流されてしまったか、実はきょうまであまり気にもかけていなかったのである。
　その娘がこの世に生きていたとしたら、いったいどういうことになるのだろう。
　東五郎はおぼろやみにじっと目をすえて、取りにがしたあやめのすばらしい肉体を想念の中でにらんでいた。
　あやめはだれに聞いたか、自分たちの過去の罪悪をちゃんと知っているらしい。が、それはもう十七年もまえのことで、なんの証拠も残ってはいないのだ。いまさらどう訴えて出ようもないじゃないか。また訴えられたところで少しも恐れることはない。
　もし用心しなければならないとすれば、あやめの直接のふくしゅうだけだ。
「ふん、あんな女ひとりぐらいの力でなにができるもんか」
　考えているうちに、東五郎はだんだん持ちまえのふてぶてしさを取りもどしてきた。今夜は不覚にもこめかみへ一撃くわされてしまったが、それはこっちが不用意だったからで、こうとわかってしまえば、二度とそんな手にかかるはずはないのだ。
「しかし、やっぱり生かしてもおけないだろうな」
　すると、のろい、恨み、おこって、あのすばらしい膚がこの手の中でぴちぴちとあばれくるう、それをじわじわと料理して、けっきょくは自分のものにして、それから人知れずやみに葬ってしまう。そういう残忍な妄想がくっきりとうかびあがってきて、東五郎はわれにもなく悪魔のような薄らわらいが、にやりとその貪婪な顔にただよってきた。
　だれか茶室の庭へはいってくる足音がする。
「だんな――」
　遠慮そうに呼んだのは、飯田屋竹五郎の声

だ。
「飯田屋かえ。あけておはいり。遠慮はいらないよ」
　案外冷静な東五郎の返事に、飯田屋のほうがなんとなくどきりとした。そこに、もう征服されてしまったあやめの、無残にもなまめかしい姿を予期したからである。
「ごめんなすって――」
　思いきって障子をあけた飯田屋は、おや、と思った。へやのまん中に、どっかりあぐらをかいているのは東五郎で、どこにもあやめの姿はない。
「太夫は、あやめはどうしたんです」
「逃げたよ」
「なんですって――」
　びっくりしながらも、妙にほっとした気持ちでもあった。
「あれは、やっぱりただの女じゃなかった」
「なにしろ、気の荒い女ヒョウですからね。しかし、そんなに早く眠り薬がさめたんですかねえ」
「いや、始めから飲んでいなかったのかもしれねえ」
　今になって、そう思いあたる東五郎だ。
「飯田屋、あれは死んだ先代長崎屋藤兵衛の娘おあやだったんだ」
「へえ、だって、その娘なら、あの当時おふくろが抱いて身投げ――」
「したにはちがいないが、死がいはあがらなかった。だれか漁師の舟にでも助けあげられたんだろう。そんなせんさくはいまさらどっちでもいいが、やっかいなのはあのときの裏をみんな知っていて、おまえもおれも、鬼半もかたきとねらわれていることさ」
「なんですって――」
　飯田屋は自分でも、さっと顔から血のひいたのがわかる。
「ほんとうだろうね、だんな」

「ほんとうだよ。おれたちをさんざん苦しめて、親の恨みを晴らさなくちゃ、気がすまないと、鬼女のような顔をしておこっていた」

　ほんとうだとすれば、それを人ごとのようにけろりとした顔つきで話していられる東五郎の気持ちが、飯田屋にはどうもわからない。

「なんだってまた、そんな女をだんなは黙って逃がしてしまったんです」

「こっちはなんにも知らないから、つい油断をしていてね、ここをがんとやられたのさ」

　東五郎は苦笑いをしながら、こめかみをなでてみせて、

「なるほど、思ったより荒っぽい女だね」

　と、感心している。

「ほうっておいちゃあぶない。すぐ追っ手をかけましょう」

「そのほうがいいな。おたがいに首をねらわれている女があるというのは、あんまり気持ちのいいものじゃない。ただし、なるべく殺さないほうがいいよ。いけどりにしてつれてくるんだ。こうしよう、いけどりに千両ほうびをかける。しようがなくて死がいにしたら、ただというのも気がのるまいから、まあ十両も出すかな」

「いけどりにして、そんな女をどうしようっていうんです」

「当分めかけにしてかわいがってやるのさ。ただ殺したんじゃおもしろくない。さんざん思い知らせてやってから、あとは女の出かたひとつだね」

　ずばりといってのけながら、その目が妙にふてぶてしく野獣のように燃えているのを見て、この男は腹の底からの悪魔だ、と飯田屋は内心ぞっと寒けがしてくる。

「だんな、ヘビの生殺しはあとがたたるといいますぜ」

「それがおれの道楽さ。なあに、たたりをこわがるからたたられる。平気でいてやれば、たた

りのほうで根負けがすらあね——ときに、おまえのほうの用は、森七のことかえ」

　あくまで気の強い東五郎だ。

「そうなんです。いま勘助と岩のふたりが帰ってきましてね、森七のほうはうまくかたづいたそうです」

「そりゃご苦労だった」

「その帰りに、そこの業平橋のところで、妙なものを見かけたっていいますよ」

「なんだ」

「神保町のばか殿さまが、源森川からぬれネズミになって、家来たちに助けられながらはいあがってきたというんですがね。さっき帰って、こんな時分まで、なんだってあんなところにまごまごしていたんですかねえ」

　あやめが逃げたとわかって、飯田屋もたいてい事情が読めたから、ついにやりと冷笑が出る。

「おおかた白ギツネに色気を出して、あべこべに化かされたんだろう。よせばいいのに、あんな二本棒の手におえるような白ギツネじゃない——はてな」

　東五郎は急に思いついたように、

「それが、今のことだとすると、白ギツネはまだ帰り道の途中だねえ。飯田屋、すぐに追いかけてみろ。どこへ身をかくすにしても、一度はきっと家へしたくに帰る、その道順で追いこむんだ」

　と、たちまち悪知恵が働き出す。

「違いありやせん。こいつはうっかりしていました」

　今は人ごとばかりではないのである。自分の首にもかかわることだから、飯田屋はせかせかと立ち上がった。

「いけどりは千両だよ。忘れなさんなよ」

　まだそんな念を押している、世にも執念深い東五郎だった。

朝帰り

あやめがまっすぐ両国橋町の家へ帰るとすれば、本所河岸を両国橋へ出てわたるか、吾妻橋をわたって並木町通りを浅草橋へ出るか、もう一つは船で元柳橋あたりへつけるか、三つに一つだ。そのうち、船のほうはあとの追いようがない。また追わなくても、走る足のほうが早いからかまわない。で、飯田屋は岩をつれて河岸っぷちを、並木通りのほうへは勘助にもうひとり子分をつけて、できるだけ早く追わせることにした。

どっちも夜ふけの道で人通りはないし、おぼろ月夜だから、追いつきさえすれば見のがしっこはない。

「親分、森七が飛びこみやがったのはここですぜ」

多田薬師の森の前を駆けぬけるとき、岩はくやしそうにその川を指さして告げた。ここまで勘助とふたりであとをつけて、ちょうど人通りがないから、勘助がいきなり背後から森七の背中へ突っかけたのだという。さすがに前身は岡っ引きだけに、深手をおいながらも森七は、

「わあッ」

と、悲鳴をあげながら、いきなり川へ飛びこんでしまった。ふたりはかれがふところに持っている五十両という金が惜しいから、うかびあがってくる森七を根よく見張っていたが、とうとうむだぼねになってしまったとがっかりしていた。

「ばかやろう、なぜ始めから川のほうを用心してかからなかったんだ」

飯田屋は苦い顔をしてしかりつけたが、目的は森七の口を閉じてしまいさえすれば、足りるのだから、それ以上はなんにもいわなかった。それに、今はそれよりもっとこわい敵が、目の前にいるのである。

そのあやめには、とうとう途中で追いつけなかった。やお屋の路地の奥の表戸をたたくと、るすばんの一寸法師がむっつりと出てきて、

「まだ、だれも帰らねえです」

と、かえって物問いたげな顔をする。

「太夫はたしかに一足先へ出たんだがな。急用ができたんで追ってきたんだが、しばらく上がって待っていてもいいだろうな」

念のために茶の間へ上がってみたが、ほんとうに帰ってはいないらしい。そのうちに勘助組も手ぶらで着いたので、もし太夫が帰ったらすぐ知らせるように、とわざと豆蔵に念を押し、今度は手わけをして裏表の路地をかためることにした。

しかし、その夜甚作おやじにつれられたお春お秋は真夜中ごろ、足をひきずって帰ってきたが、かんじんのあやめはついに帰らなかった。

翌朝、その知らせをうけた東五郎は、小梅の寮では連絡に不便だというので、柳橋の料亭青柳の離れへ本拠をかまえ、浦上半兵衛も招いて、あらためて三人で善後策をこらすことにした。すると、隠居はしていても、さすがに鬼半である。きのうせがれの主膳があやめを待ち伏せしたようだとわかると、さっそくそっちを調べさせて、あやめはカワウソ源太という浪人者といっしょに帰ったという事実をつかみ、

「なに、だれも源太の住所を知らない。そんなことはぞうさもなかろう。おだんな吉が懇意だというから、吉をつかまえてひっぱたいてみろ」

と、まったくあざやかなさしずぶりだった。

一方でそんな大活動が始まっているその朝、源太郎はふらりと郡代屋敷のおだんな吉の家へ帰ってきた。

「だんな、けさにかぎって朝帰りとは、ちっとばかしのんきすぎたねえ」

顔を見るなり、珍しく吉がくってかかるようにあびせかける。

「ふうむ。るすになにかいいことでもあったのかね」
「ありやしたよ。けれど、おまえさんは案外薄情にできているんだから、そうびっくりもしねえだろう」
「そんなことはない。たまにはびっくりすることもあるさ」
「そうかなあ。実はまた例のおへその話なんですがね、あやめがゆうべ長崎屋の小梅の寮へ、お座敷で呼ばれることになったんでさ。あぶないからよせって、あっしがとめると、あの女もまったくへそ曲がりにできてるんですね。あたしのおへその心配までしてくれるには及びませんと、どうしても強情を張るんだ。しようがない、こりゃだんなの口からとめさせなけりゃ、相手が長崎屋だから、今夜こそどんなことになるかわからないと思って、うちへ飛んで帰ってみれば、あいにくだんなはお散歩だって話だ」
「それはすまなかったなあ」
「あっしも徒組のおせっかいだから、なんとしても、あやめのことが心配になる。しかたがないから、自分で小梅へ出かけたんでさ。どういうものか、裏のしおり戸が少しあいている」
もう夜だからだいじょうぶだろうと思って、こっそり忍びこんでいくと、茶室の庭で人の声がしたという。
それが飯田屋竹五郎ともと岡っ引きの森七で、まもなく森七は五十両もらって寮を出た。ふたりの話に妙に気になることがあるから、森七をつかまえて聞いてやろうと思い、少しおくれてうしろからこっそり出ていくと、自分より先に森七をつけているやつがふたりある。
「勘助と岩だ。ははあんと、あっしはすぐぴんときたね」
案の定、多田薬師の前で勘助がうしろから突っかけた。どぶーんと川へ飛びこんだ森七は、それっきりうかんでこない。ふたりがあきらめて去ったあとで、かわいそうに、と思いながら

ぼんやり川をのぞいていると、いつの間にか岸近くのくいにしがみついて、頭だけ出しているのが森七だった。
「それから大ごとをして助けあげて、あそこの三沢っていう医者のところへおぶっていってやったんでさ。うそも方便ていいますからね。実は娘を身売りさせた金が五十両、そいつを追いはぎにつけられたんだそうです。とうまくもちかけて、療治をしてもらい、とにかく大けがだから、当分あずかってもらうことにしたんです。森七のやつ、ぼろぼろと涙をこぼしましてねえ、あっしはもと長崎屋に奉公していた吉という小僧で、そのころ大番頭だった重吉に追い出されたんだって話すと、びっくりしてね」
そんならおれを知っているか、知ってますよ。そうか、悪いことはできねえもんだなあ、とため息をつきながら、長崎屋東五郎の悪事を残らず話してくれたという。
「東五郎ってやつはひでえやろうさ。あっしが情けをかけてもらったおかみさんまで、実は手にかけていやがった——それはまあそれとして、ほんとうはこっちの心配しているのは、あやめのおへそのほうなんだ。あしたまたきっと見舞いにくるからと、力をつけておいて三沢を飛び出したとたん、たいへんなやろうにぶつかってしまった。だれだと思いやす」
「そんな無理をいいなさんな。わしは千里眼じゃないものな」
「ごもっともさんで——なにをかくそう飯田屋竹五郎が子分の岩をつれて、血相かえて駆け出しているんでさ。両国のほうへね。しかも岩のやろうが、ここですよ親分、森七が飛びこんだところは、とずうずうしく教えてやがる。あっしはまたははあんときたね」
こりゃあやめがうまく逃げたんだ。逃げたからあわをくって追いかけているんだ。そう思ってあとをつけてみると、はたしてそのとおりだった。ところが、あやめはどうしたことか、昨

夜とうとう家へ帰ってこない。
「真夜中に帰ってきたのは、甚作おやじとお春お秋なんでさ。飯田屋はご苦労にも夜明けまで路地で張り番でさ。徒組のおせっかいさんもそのご苦労の組だったんだが、夜が明けてやつらに見つかると少しぐあいが悪い。それに夜が明けてしまやあ、めったに手ごめにされるようなあやめでもないだろうから、あっしはひとまずうちへ帰ってきて、一休みしたんで、これからまた出かけてみようと思っていたところなんでさ」
「なるほど、するとゆうべはずいぶんいろいろなことがあったんだね」
「で、だんなはこれでもまだあやめのことが心配になりやせんかね」
「別に心配にはならないがね」
「ほんとうかね、だんな」
　あきれたような吉の顔が、なんとなくこわばってくる。
「そんなにだんなは不人情な男だったんかなあ」
「いや、不人情ではない。誤解してもらっては困るぜ」
「誤解はしねえが、不人情でさ。ほんとうはあやめはおまえさんにほれている女なんですぜ」
「うむ、そりゃよく知っているんだ」
「そのあやめが行くえ不明に――」
「いや、おれはあやめのいるところを知っているんだ」
「なんですって――」
　ぽかんとおだんな吉が口をあく。
「きこうに無断では悪いとは思ったんだが、あやめがおれに、どうしてもおへそをもらってくれといってきかないんだ。だからゆうべは事情やむをえず、朝帰りになってしまったんだが、まあ悪く思わんでもらいたいな」
　源太郎はちょっとてれたように、目でわらっている。

「ほんとうですかい、だんな」
「あれは承知のとおりまったくただっ子でねえ、いうなりになってやらないと、すぐおこりだすもんだから、けさはこれでも、やっとなだめて出てきたんだ」
「そうでござんしょうとも――ちっともあきれてなんかいやしませんや。だんなはどうしても長生きのできるたちなんだね」
「そうらしいな。まあ、おれだからあれのきげんがとってやれるんで、ほんとうはあれもきのどくな女なんだ」
「聞かされている吉も、きのどくな男でござんすさ」
「いや、まじめな話なんだ。きこうだから打ちあけるんだが、あれは先代長崎屋藤兵衛の娘あやなんだそうだ」
「えッ」
　吉は耳を疑いながら、今度こそほんとうにびっくりして、しばらくは二の句がつげない。

助太刀志願

――さあ、いそがしくなりやがったぞ。
　まもなくおだんな吉は、至極明るい顔をして十軒長屋を飛び出していた。
　だんだん話を聞いてみれば、これはまったく冗談ごとではない。あやめは昨夜東五郎をなぐりつけて、わたしは先代藤兵衛の娘だ、きっと親の恨みを晴らしてやるから思い知るがいいと大胆にも挑戦の火ぶたを切って、寮をぬけ出してきたのだという。なるほど、それじゃ昨夜は橘町の家へ帰れないわけだ。事実また帰れば、たしかに無事ではすまなかったのである。
「しかし、太夫も少し度胸がよすぎましたねえ」
　相手は長崎屋東五郎、浦上半兵衛、飯田屋竹五郎、どのひとりにぶつかっても、ひととおりやふたとおりではすまない悪党ぞろいだ。いく

らあやめが南蛮手品の名人でも、これは恨みを晴らすまえに返り討ちになってしまう公算のほうが大きい。
「どうもあれは少しむてっぽうすぎるんでねえ」
　カワウソだんなはもう十年も連れそっている女房のことを心配しているような顔つきをしていたが、まったく無理もない話だ。
「で、だんなはむろん、こうなりゃ女房の縁につながるかたき討ちなんだから、すけだちをしてくれる気なんでしょうね」
「そりゃすけだちはする。しかし、そのまえにあやめの身を守ってやるほうが先決問題だろう」
「及ばずながら、あっしもお手伝いしますぜ。たとえ四年でも五年でも先代長崎屋さんの家の飯を食わしてもらったんだ。太夫は主家の娘ということになる。黙って見ていちゃ人間の義理に欠けまさ」
「ありがとう。よろしくたのむよ」
「今、太夫はどこにいるんです」
「ゆうべはおれに少し縁のある駒形の、船新という船宿へ泊まったんだ。いずれどこかへ一軒さがさなくちゃならないが、とにかく手まわり品がなくては不自由で困る。豆蔵にいいつけて運ばせるから、すぐつれてきてくれというんでね」
「なあんだ、かたき討ちよりうれしい所帯を持つほうが先ですか」
「まあ、そのほうが無事だろう」
「まさか、でれついてるほうがおもしろくなっちまって、かたき討ちは当分よそうなんていいだすんじゃねえでしょうね」
「おれはそうなったほうがいちばん無事だと思うんだが、あやめはなかなか強情なんでねえ」
「かたき討ちもしたいし、新所帯も早く持ってみたいしってやつですね」
　まさかかたき討ちのすけだちの手始めが、お嫁さんの道具運びとはあんまり見当違いでがっ

かりだったが、自分のほうから主従は三世と持ちかけてしまったあとだから、どんな用でもいまさらいやだとはいえない。
　それにこの使いは、内容そのものは大甘ものだが、十重、二十重にかたきの目が光っている中を乗り切ろうというのだから、普通の男ではこなせない。そこに張り合いがないでもないから、おだんな吉は勇んで長屋を飛び出してきたわけだ。この使者がすむと、吉は元柳橋から船で、森七の見舞いに源太郎だんなを案内する約束になっている。
　あやめの家の路地をはいりながら、それとなくあたりへ気を配ってみたが、昼間だから、さすがに見張りらしいやつの姿は見当たらなかった。見当たらなくても、どこかにかくれているには違いないのだから、けっして油断はできない。
「こんにちは。太夫はいるかえ」
　吉は玄関のこうしをあけるなり、わざと外へ聞こえるような声でいった。
「はあい」
　出てきたのはお秋のほうで、これがふしぎと吉の初恋の娘、先代長崎屋の小間使いだったおくにによく似ている。年は二十四だそうだが、内気なおとなしい女で、色恋というわけではないが、ついこっちが親身になりたがるのを、向こうでもちゃんと知っていて、会えば目に親しみをかくそうとはけっしてしない気質のいい女だった。
「あら、いらっしゃい。太夫さんはあいにくるすなんですけれど」
　そのお秋がけさは寝不足そうな青い顔をして、つとめてにっこりと迎えるのだ。
「へえ。だってもう楽屋入りの時刻じゃないんかね」
「きょうはたぶん休みになるんじゃないかしら」
「なにか、取りこみでもあったのかね」

ふすまがあいているから一目で見える茶の間に、甚作おやじ、お春、豆蔵、みんなむっつりとした顔を集めているようだ。無理もない、たいせつな師匠あやめが昨夜以来、この人たちには生きたか死んだかわからないのだから、心配などというそんななまやさしいものではなかろう。

「ええ、少しごたごたしているもんですから」

　お秋はいっていいか悪いかちょっと困ったような顔をしている。その目の前へ、外からは見えないように、『豆蔵へ――あやめ』と上書きのある手紙をぽとりと落としてやって、

「じゃ、じゃまをしちゃ悪いな。また出直すことにしよう」

　早くとれと目にものをいわせ、お秋が心得てそっとそれをひざの下へかくすのを見とどけたから、

「さようなら――みんなによろしく」

　吉はなにくわぬ顔をして外へ出た。

――まずこれでよかろう。

　ぶらぶらとやお屋のかどを曲がって、大川ばたのほうへ歩きかけたとたん、

「吉、ちょいと待ちな」

　向こう側の路地からつかつかと出てきて、行く手へ立ちふさがったのは飯田屋一家の勘助だった。

ひも

　おだんな吉が勘助につれていかれたのは、柳橋の料亭青柳の離れだった。

「吉、おまえ長崎あやめの家へたずねて行ったそうだな」

　そこに待っていたのは飯田屋竹五郎ひとりで、いきなりおうへいに聞くのである。

　竹五郎の家はここからひとまたぎの東両国だ。なにもこんな金のかかる料亭へ自分を呼びこむはずはない。とすると、隣室に長崎屋東五郎がかくれているな、ことによると浦上半兵衛

もきているかもしれない、つまりここは昨夜から帰らぬあやめを、どうしてつかまえるかと苦心している敵の本部にちがいない、とおだんな吉は早くも見てとっている。

「行きましたよ。太夫はゆうべ出たっきり、まだ帰っていないそうで、ちょいと心配しているところでさ。親方のほうにゃ、もうなにかわかっているんでござんしょう」

　吉はそらっとぼけて、それとなく逆襲する。

「おまえはいったい太夫とどんな関係があるんだ」

「残念ながら、ひらき直ってそう聞かれるほどの関係は別にないんで、正直にいやあ、まあこっちがおかぼれしている、ただそれだけのことでさ」

「おまえはカワウソ源太っていう浪人者と懇意にしているな」

「よく親分知ってますね」

「そのカワウソの家はどこだ」

「実家は知りませんがね、カワウソのだんななら、この間うちから、あっしの巣にいそうろうしています」

「ふうむ」

　これには竹五郎も、ちょいと意外だったようだ。

「おまえの巣はどこなんだ」

「郡代屋敷裏の十軒長屋です。親分なんかに義理にも、ついでのとき寄っておくんなさいなどとはいえない裏長屋でさ」

「カワウソはきょう家にいるか」

「それがきのう出たっきりまだ帰らないんで、だから、どうも怪しいとあっしはにらんでいるんですがねえ」

「なにが怪しいんだ」

「太夫はこの間の夜、お茶の水でカワウソのだんなに助けられている。それ以来あの男ぎらいがだんなにだけはおへそをやってもいいと思いこんでいるんじゃないか、そんなそぶりがあっ

しにはちゃんとわかっている。ゆうべは太夫のほうからだんなを呼び出したんじゃないか、とあっしは気をもんでいるんです」

「ふたりがどこへ泊まったかわからねえか」

「それがわかっているくらいなら、いままでぐずぐずはしてはいません。あっしも男ですからねえ。そりゃ太夫のほうへは、こっちがかってにほれているんだから文句のつけようがないが、だんなはあっしがあやめに思いをかけていることを、よく承知しているんだ。こっちが先口と知っていて、いそうろうのくせにひと言のことわりもなく、たとえ太夫のほうからどう持ちかけたにせよ、横どりするというのは男の義理にかける。あっしはただじゃすませねえ」

もっともらしく憤慨してみせながらふと気がついたように、

「そういえば、親分のほうは大金をかけた芸人でしたねえ。こいつはもっと黙っていられないわけだ。お察しいたしやす。あやめが身持ちにでもなった日にゃ、それこそ綱渡りはできないし、だいいち人気が落ちる。心配でござんしょうねえ」

と、いかにも同情したようなことをいう人の悪いおだんな吉だ。

「もしあやめに会ったらそういっておいてくれ。前借を踏み倒してかってなまねをしていると、手がうしろへまわるから覚悟していろとな。ご苦労だった。もう帰ってもいいぜ」

「そうでござんすか。もう帰ってもよろしいんで——これはどうも、とんだごちそうさまになりました」

わざとていねいにおじぎをして、ふらりと外へ出たおだんな吉は、けちなやろうだな、せっかく料理屋へ人を呼びつけておきながら、頭からいばり散らすことは知っていても、ろくな茶一つ出すことは知らねえ、たいてい腹の底がわからあ、とすっかりけいべつしてしまった。

が、飯田屋は恐れるに足らなくても、うしろについている東五郎と鬼平は油断ができない。

——きっとだれかにおれのあとをつけさせているにちがいねえ。

そう考えたから、吉はけっしてふり返って見るようなまぬけはせず、ゆっくり広小路から大川ばたへ出て、源太郎が待っている元柳橋の船宿芳野屋へはいった。

二階へあがってみると、あきれたことにカワウソだんなはひじをまくらにごろりと寝ころんで、うつらうつらやっているようだ。

「ちぇっ、天下太平だね、だんなは」

「やあ、おだんなうじか。おそかったようだね」

だんなはもそりと起きあがって、渋い目をこすっている。

「朝っぱらから昼寝をしなくちゃいられねえほど、だんなはゆうべ太夫のおへそをなでまわしていたんですかえ」

「そういうわけでもないが、おれが眠りかけようとすると、腕をつねったり、鼻をつまんだり、寂しいから先へ眠っちゃいやだと、あれはまったくわがままにできている女でねえ」

「おきなせえ。のろけなんかいってられる場合じゃありませんや」

実は勘助につかまって、柳橋の竹五郎の前へ引っぱっていかれ、これこれだったとだいたいのことを話し、

「そんなわけで、たぶんあっしにはもうひもがついてきていると思うんだが、かまわず森七の見舞いに出かけますかね」

と、吉はあらためて源太郎の顔を見すえる。

「なるほど、敵もさるものだねえ」

カワウソだんなはハトのような目をぱちくりさせるだけで、急にはいい思案もつかないようだ。

「しっかりしておくんなさいよ、だんな。竹五

郎ってやろうはあんまり能のあるやつじゃなさそうだが、鬼半と長崎屋は一筋なわでいかねえやつらだ。それがふたりまで悪知恵と金にあかして、太夫を返り討ちにしようとねらっているんですぜ。腕をつねられたり、鼻をつままれたりして、甘い昼寝をたのしんでる場合じゃありませんや」

　吉はこの人のいい源太郎がだんだんたよりなくなってくる。

「それはよくわかっているんだ。だからわしもあれに、軽挙妄動はいけない、うっかりするとあべこべに、このおへそを取られるよって、ゆうべくれぐれもいい聞かせてあるんだ」

「あきれたもんだなあ」

「まったくあきれた気の強い女でねえ、だれがそんなまねをさせるもんか、こんどこそ三人ならべておいて、かぎょうの剣をひとりひとりののどへたたっこんでやるんだって、いきなりわしののどを両手でしめにくるんだ。おいおい、いくら手近にあるからって、おれののどでまにあわせるのはひどいよ、というと、これはあんたがうわきしたときにやる手なんだから、よくおぼえときなさい、とやられちまった」

　でれっとしてにゃにゃわらっているのだから、始末にいけない。

「おこるよ、だんな。あっしはおまえさんたちのやきもちのけいこの話なんか、どうだっていいんだ。ここをどう切り抜けるかって相談しているんですぜ。敵のひもは何本ついているかわからねえが、もうちゃんと裏表に目が光っているんですぜ。じれってえな、ほんとうに」

「それはよくわかっているんだ。じゃ、そろそろ出かけようか」

　カワウソだんなはふいに立ち上がって、床の間の刀を取りあげる。

「ど、どこへ出かけるんです。だんな」

「わしは橘町のあれの家へ行って、もう一眠りすることにしよう。きこうはご苦労でも、すきをみて、駒形のあれのところへ行って、どこか適当なかくれ家を相談してさがしておいてくれないかねえ」

「本気ですか、だんな。橘町の家は十重二十重に敵にかこまれているんですぜ」

「だから、おれがそこへ乗りこんでいけば、きこうのほうのひもは、自然無用になるだろう。それにな、おだんなうじ、相手は物騒な狂人ぞろいだから、どうしてもあやめが出てこないとなると、女でしたちをどんなめにあわせるかわからない。つまりおとりに使うんだ。かわいそうだからわしが行って、なんなら女たちのかわりにおとりになってやろう」

　うっかりしていたが、そんなことは絶対にないとはいいきれない。あっとおだんな吉が目をみはっているうちに、

「じゃ、よろしくたのむよ」

　源太郎はにっこりわらって、もうとんとんと二階からおりていってしまった。

　——あのだんなばかりは利口なんだか、ばかなんだか、ぐずなのか、しっかりしているのか、いまだにおれにゃどうも見当がつかねえ。

　吉はぽかんとしながら、いつまでも小首をひねっている。

一寸法師の目

　そのころ——

　春の潮が満々とあいをたたえている宮古川を目の下にながめながら、あやめは駒形の船宿の二階の窓に腰かけて、ひとりでたいくつしていた。

　さっきからつがいらしいカモメが二羽、川面(かわも)をすべるとみれば たちまち空へ身をひるがえし、追いつ追われつ、春陽に白い翼を輝かせながら、夢のようにたわむれ舞っている。

　——早く帰ってきてくれなくちゃ、つまりやしない。

むつまじげなカモメがうらやましくて、ついひとり言が出るあやめだ。たった一夜で、こんなにも離れがたい気になるものか、そばにいてくれないと思うと、むやみに男が恋しくて、それはまるでじっとしていられないような寂しさなのである。

――あたしはほかの女と少し変わっているのかしら。

われながらふしぎな気さえしてくる。一度女にされてみると、源太郎という男のなにからなにまで自分のものにしてしまわなくては気がすまない、いってみれば、二つのからだを一つのものにしてしまいたいような、激しい欲望に胸を焼かれてくるのだ。

「驚いたなあ。いくらおまえが南蛮手品の名人だって、おれのからだを溶かして飲んでしまうことはできないだろう」

「もしできたら、ほんとうにあんたを溶かして飲んじまってもいい」

「すると、おれはいったいどういうことになるんだえ」

「あんたがあたしになって、あたしがあんたになって、一つのからだの中にいればいいじゃありませんか」

「つまり、半分は刀を差して、半分はおしろいをつけて歩くのかえ」

「それだっていいじゃありませんか」

「よくはないよ。そんな化け物、世間の人が相手にしてくれなくなるぜ」

「世間なんてどうだっていいんだってば」

「だいいち、手が一本で足が一本じゃ、これからおまえを抱いてやることも、おぶってやることもできないぜ」

「じゃ、こうやってもう放さない。このままいっしょに死んじまう」

「たぶん、ひどいやきもちやきだろうとは思っていたが、おまえのは唐天竺にもない珍しい大やきもちらしいな」

「どうしてさ」

「人間にはそのために魂というものがあるんだ。夫婦は一心同体といってね、魂と魂はあの世まで一つに結ばれるが、からだは別々で、男は男の仕事をやり、女は女のつとめを果たす、そこに人生の妙味があるんだ。からだは別々でもふたりの魂が信じあっていれば、一つになったのも同じじゃないか」

「いや、いや、あたしは魂もからだもいっしょでなくちゃいやだ。もうこうやって離れない」

返事をしないと思ったら、ひとに首っ玉をあずけながら、すやすやと眠りだしたのだ。

「先へ眠っちゃいやだったら」

思いきり腕をつねってやった。

「痛いなあ」

びくっと目をあいたが、またすぐ眠りはじめる。鼻をつまんでやっても、ほっぺたをつねってやっても、もう正体がないのだ。

「人をこんなからだにしておいて、平気で先へ眠っちまうなんて――憎らしいってありゃしない」

でも、うれしかった。もうひとりじゃないのだと思うと、これが魂が一つに結ばれたとでもいうのだろうか、安心だし、からだじゅうがとろけていきそうな甘美な感情におおいつつまれながら、いつの間にか夢うつつのうちに自分も眠っていたのである。

けさ、ふっと目をさまして、朝の光の中ですぐ目の前にある男の顔を見たときには、ああそうだったっけと、やっぱり少し恥ずかしかった。が、すぐに胸がじいんとしびれたように甘くなってきて、それはなんという満ち足りた気持ちだったろう。

――あたしはもうこの人と、切っても切れない夫婦なんだ。いいおかみさんにならなくちゃ。

なんだか涙さえあふれそうになったのである。

「けさはおまえ、ばかにおとなしいんだね」

差し向かいで、朝のぜんについたとき、男は珍しそうにわらった。

「おとなしかないわ」

「へえ。じゃ、そろそろ溶かして飲みこむ手品にかかる気かえ」

「できれば、あたしほんとうにそうしちまいたいわ」

が、けさはそんなのんきな口げんかをいつまでしてはいられなかった。早く一軒持たなくちゃならないし、顔を洗うにも、髪一つすくにも、手まわりのものがなくては不自由でしようがない。だいいち、人の家の二階では気がねだし、るすの家のことも気になる。

「あんた橘町へ行って、そっと豆蔵を呼んできてくれないかしら」

朝飯がすむと、自分からそう切り出したのだから、現金なものである。

「おれのるすに、おまえ、一足も表へ出ちゃだめだぜ。わかっているだろうな」

源太郎はいやな顔一つせず、くれぐれもそう念を押して、ふらりと出ていった。

「すぐ帰ってきてくれなくちゃいやだから」

「わかっている」

階段の上まで送り出したあやめは、すっかり落ち着いたおかみさんの気持ちになっていて、男が下の女房にあとをたのんで出ていくのを、いつまでも耳で追っていた。

それが、もうとっくに午（ひる）がすぎて八つ（二時）に近いのに、まだ源太郎は帰ってこない。

——なにかまちがいがあったのではないかしら。

そんな不安もないではないが、それよりわがままで人一倍感情の激しいあやめは、なんだかこれっきり男に捨てられてしまったような気持ちのほうがだんだん大きくなってきて、そんなことはない、あの人にかぎってそんな男じゃない、と打ち消しても打ち消してもいらいらして

くる、いや、源太郎が恋しくて恋しくて矢もたてもたまらなくなってくる。

——あの人が唐天竺にもない大やきもちやきだっていうのは、こんな気持ちをいうのかもしれない。そう思って落ち着こうとするのだが、その下から、もし捨てられたのだったならどうしようと、泣き叫びたくなるのだ。

「捨てないで。ねえ、あんた。お願いだから早く帰ってきて——あたし百まで勘定する。その百までの間に帰ってきてくれなくちゃいやだ。死んじまうからいい」

そして、ふっと気がついた。こんなに思いつめていながら、自分がただ悲しいだけで、その悲しませている男を憎いとも殺したいとも、今は少しも考えられないのだ。

——だってしようがありゃしない。あの人はもうあたしのたいせつな夫なんだもの。

なんだかうれしいような悲しいような、ぽかんとした気持ちで、自分のからだに深くしみこんでしまった男のにおいをじっとかみしめているとき、すうっと音もなく階段の入り口のふすまがあいた。

「あっ、豆公——」

瞬間あやめはぎくりとして、自分のからだの中の男をのぞかれてしまったような思いに、われにもなく顔が赤くなる。

一寸法師の豆蔵は、そういうあやめをじーっと無気味な目で見つめながら、むっつりとうしろ手でうしろのふすまをしめた。それはいままで豆蔵が一度も見せたことのない不敵な男というものの目だ。あきらかにしっとにもえて、鋭くこっちのからだじゅうをさぐっている。

「豆公、その目つきはなに——」

ぶしつけにも女の弱点をあばかれたと気がつくと、あやめの羞恥（しゅうち）は火のような怒りにかわった。

「おまえは、おまえはあたしをばかにする気なんだね」

その激怒と憎悪にたけり狂っているようなすさまじいあやめの視線にあうと、
「そ、そんなことはねえです」
豆蔵はたたきつけられたようにへなへなとそこへひざをつき、たちまちいつもの忠実な下男根性にひんむかれた形で、もの悲しげにしょんぼり福助頭をうなだれてしまった。

復讐鬼

――なんであたしはこんなに腹がたったんだろう。
自分でもふしぎなほどくやしくて、あやめは激しい息を肩ではずませながら、しばらくは口がきけない。おまえの顔なんか、もう二度と見たくない、さっさとお帰り、とよっぽどどなりつけてやりたいのを、それもあんまりおとなげないと、何度かためらい押えているうちに、
――ああそうか、このかたわ者はあたしが弟のようにふびんがってやるのになれて、いつかあたしを思うようになっていたんじゃないかしら。
ふっとそこへ気がつき、あれはこの男のやきもちの目だったんだと考えると、急にばかばかしいような、こんなにおこっている自分がおかしくさえなってきた。
「豆公、あたしはあの人と、もう夫婦になってしまったんだからね、おまえ、それをおこっているんだろう」
あけすけにいってのけて、あやめは自分でもすっと肩の重荷がとれたような、いつもの声音にかえっていた。そして、どんな男にも、たとえそれは平気で行水の背中を流させたことのある豆蔵にさえ、からだをねらわれているような男の目に出会うと、すぐに反発して、総毛立つほど憎悪を感じてきたのに、あの人にだけはゆうべ、なにをされてもちっともいやではなかった、とひそかに思い出し、これがやっぱり魂で

ほれあっているからなんだろうと、あやめはまたしても胸が甘くなりかける。
「おまえ、あたしがあの人のおかみさんになったのが気に入らなければ、さっさと帰ってもいいんだよ」
「違うです。おれ心配しているんだ」
豆蔵はまだ顔をあげようとしない。
「なにを心配しているんだえ」
「男はこわいだ。もし太夫さんがあの男にいじめられるようだったら、おれあの男をきっと殺してやる」
「なにいってるのさ。あの人があたしをいじめるはずがないじゃないか。また女をいじめるような男に、あたしが身なんか任せるもんですか」
「太夫さんは、太夫さんは、好きな男ができたんで、もう親のかたき討ちはやめるんかね」
「なんですって――」
あやめはぎくりとした。その話はまだ、あの人だけにしかしてないのに、どうして豆蔵が知っているのだろう。
「おまえ、あの人に会ったんだね。あの人からその話を聞いたのかえ」
豆蔵はまだうつむいたまま、福助頭を強く振ってみせる。
「じゃ、だれからそんなこと聞いたのさ。顔をおあげったら」
「おれ、ゆうべ太夫さんが運ばれた小梅の寮の茶室の裏に忍んでいたんだ。おれ、太夫さんのからだにさわった男は、みんな殺してやる気だったんだ」
豆蔵の寸詰まりのからだいっぱいに、またしてもふてぶてしい殺気がみなぎってくる。顔をあげられないのはそのためだろう。
「まあ、おまえは――」
ひやりとして、青くなったのが自分でもはっきりわかるあやめだ。小梅の茶室に忍んでいたという執念より、とっさに源太郎のからだのほ

うが気になるのである。

「おれ、太夫さんがそんなに好きなら、あの人には手は出さねえです」

「ほんとうだろうね、豆公」

おもわず胸がどきどきと波打っている。

「太夫さんが好きなら、しようがねえだ」

ほっとため息をついているような豆蔵のからだつきだ。

「好きなんだから、あたしはあの人が好きなんだから、いいかえ、豆公きっときっと、変なまねなんかすると、あたしは承知しない。おまえを八つ裂きにしてやるから」

「おれ、太夫さんになら、いつ八つ裂きにされてもいいだ」

この男はあたしをおどしていると、妙に腹さえたってきたが、やっぱりこわい。かたわ者の一念で、なにをしでかすかわからないし、また曲芸には恐ろしいわざと腕力を持っているサルのようにびんしょうな一寸法師なのだ。

「豆公、おまえはあたしにそむく気なんだね」

「そんなことはねえといってるのに、それよりおれ、長崎屋の悪党のほうを心配しているだ。太夫さんはなんにも知らねえんだ」

「東五郎がどうしたっていうのさ」

「太夫さんが茶室を出ていったあとで、飯田屋にいいつけていただ。あやめをいけどりにしてこい、殺しちゃいけねえ、いけどりにしてきたら、千両ほうびを出そう。あんな物騒な女をいけどりにして、どうするんだねって竹五郎がきくと、当分めかけにしてかわいがってやる、ただ殺したんじゃ、おもしろくない。さんざんおもちゃにして、どうしてもおとなしくならねえようなら、あれのおふくろ同様、しめ殺して海へ捨てるだけの話だ。なあに、たかがあんな女ひとりぐらい、鬼に化けようと、ジャに化けようと、おれの目から見りゃかわいいめす犬にしか見えやしねえ、いまにきっと尾を振らせて――」

「黙らないか、豆公」

ぬけぬけと顔をあげてしゃべっている豆公の顔が、だんだん重吉ののろわしい顔に見えてきて、あやめは腹の底から憎悪がこみあげてきた。さぞ今ごろは自分のふくしゅうを恐れて、生きたそらはないだろう、いい気味だと思っていたのに、逆にこっちをおっかさんのようなめにあわせようとたくらんで、けだもののように舌なめずりをしている。もう承知できないと思った。

「ちくしょう、ゆうべいっそ一突きにしてやればよかった」

「今になって後悔してもだめの皮だ。重吉は鬼半や竹五郎を集めて、太夫さんをおとすワナをこしらえて、太夫さんがそれにかかってくるのをたのしみに待っているだ」

「だれがそんなワナになんかかかるもんか。甘くお見でない」

「それじゃ太夫さん、もしお春やお秋がやつらにつれていかれて、太夫さんのかわりにさんざん痛いめにあわせられていても、知らん顔をして見ていられるかね」

豆蔵は意地の悪い目をぎろりとさせる。

「ほんとうかえ、それは」

「そのくらいのことは平気でやる重吉じゃねえのかね」

「ちくしょう、あたしはやつらのところへこれからすぐ乗り込んで、思い知らせてやる。豆公、重吉たちは今どこにいるのさ。おまえ、知っているんだろう」

目を血走らせて、すっと立ち上がりながら、今は隠れ家どころか、すっかり復讐鬼（ふくしゅうき）に逆上してしまったあやめである。

行きちがい

源太郎がおだんな吉に別れて、元柳橋の船宿芳野屋を出たのは、もうかれこれ八つ（二時）

近かったろうか。そこから橘町のあやめの家は、つい目と鼻の間だ。むろん、やくざふうの怪しい男がふたり、ひもになってついてくるのは知っていたが、覚悟のまえだからうしろを振りかえって見ようともしない。

――うまく、まにあってくれればいいがな。

源太郎が心配なのは、ただそれだけだった。

やお屋のかどから路地へはいって、あやめの家の玄関をあけると、出てきたのは甚助老人だった。この間の晩は、この老人にも、お春、お秋にも会っていないから、きょうが初対面である。

「わたしは、カワウソ源太という浪人者だが、おじいさんは太夫から、わしの名を聞いたことはないかね」

くだけた調子で源太郎が話しかけると、

「へえ、よく存じていやす。どうぞお上がんなすって」

暗い顔の老人は、すぐ茶の間へ迎えてくれた。

家の中はひっそりとして、どうやら老人ひとりがるすばんをしているらしい。

「おじいさん、わしのくるのは一足おそかったようだな」

源太郎はそう直感したので、ずばりと切り出してみた。

「へえ、おそうござんした。だんな、太夫のほうはだいじょうぶでござんしょうね」

苦労人だけあって、老人はなかなか察しがいいようだし、ことばの様子では、とにかくあやめというかせぎ人を黙って盗み出した形になる自分に対しても、そう悪感はいだいていないようだから、これなら話がしよいと思った。

「あれのほうはだいじょうぶだから、安心してください」

「たぶん、あっしもそうだろうと思っていやしたが、こっちは少しやっかいなことになりました。だんなの前ですが、色恋というやつは、とかく人を気ちがいにしやすからね」

「ふーむ。ではもうなにか脅迫状のようなものでもきているのかね」

「これを見ておくんなさい」

老人がふところから出して渡したのは、普通の半紙に書いた結び文だ。

「さっき飯田屋さんから使いがきやしてね、太夫がるすでも小屋は休むわけにいかねえ。お春、お秋だけでもしかたがないから、代理をつとめてくれといってきました。おちどは重々こっちにあることだし、このうえ太夫元に損をかけちゃ悪い、そう思ったんでふたりを出してやりやしたが、まもなくこうしの中へこんなものを投げこんでいったやつがあるんでさ」

老人の話を聞きながら、結び文を解いてみると、

――お春、お秋の命が助けたかったら、今夜四つ（十時）までにゆうべのところへこい。

と、文面はただそれだけで、あやめ太夫へとしてある。署名はない。

「だんな、どうしたもんでしょうねえ。まさかお春やお秋の命までとりもしなかろうとは思うが、こんなものが舞いこんだうえは、なんとかしてやらなくちゃ、罪もないふたりがかわいそうだ。金持ちのわがままとでもいうか、長崎屋さんも罪なまねをしなさる」

深い事情を知らないこの人のいい老人は、これをただ東五郎の色恋ざたのいたずらと見ているのだろう。

「よろしい。わしがなんとかしてみよう」

「けど、太夫にいやな思いをさせないで、なんとかなりますかえ。あの気性だから、太夫に妙な注文でもつけると、なにをやりだすかわからない。あっしはそれを心配しているんでさ」

「いや、どっちへも傷をつけないで、なんとか無事にすむように考えてみるから、まあ、わしに任せておいてくれ」

源太郎は老人を安心させるようにいって、くれぐれもるすをたのみ、そうそうにあやめの家

を出た。ひもはあいかわらずしつようにあとをつけてくる。事ここにいたってはもうやむをえない。甚作老人もいうとおり、まさかお春、お秋を、こんなことで殺しもしなかろうが、だからといってほうっておけば、執念深い長崎屋のことだから、あやめを引きつける手段として、どんなむごいことをしないともかぎらない。とにかく今夜あやめをつれて自分が小梅の寮へ乗りこみ、東五郎と話をつけるほかはなかろうと、源太郎は腹をきめたのである。

——あれも相当強情だからな。東五郎を説得するよりも、あやめに法にしたがえといって聞かせるほうが一仕事だろう。

それもあらかじめ覚悟してきた源太郎だが、駒形へ帰ってみると、こっちのほうも一足おそかったようだ。

「なんですか、さっき一寸法師みたいな男がたずねてきて、しばらく二階で話していたんですが、急用ができたからちょっとうちへ帰ってくる。たぶん向こうで会えると思うけれど、だんなが帰ってきたらすぐ橋町のほうへきてくれるようにいってくれといいおいて、うちの船でお出かけになりました」

顔を見るなり、宿の女房がそう告げるのだ。

「吉三という男がたずねてこなかったかね」

「まいりました。太夫さんとほんの一足違いで、橋町へ帰ったと申しあげますと、じゃだんなと向こうで会えるだろうが、まちがいがなけりゃいいがなと、心配していましたよ」

「そうか。世話をやかせたな。いずれあらためて礼にくるから」

そういって源太郎は船宿を出たが、こうなってはいやでももう一度橋町へ引きかえすほかはない。それにしても、あやめはなんで急にうちへ帰る気になったか、気の強い女だから、おそらくかくれているなどということがばかくさくなってきたのではなかろうか。

——しようのない女だ。

それはそれとして、源太郎は今夜長崎屋と会うまえに、ぜひゆうべ飯田屋の子分たちに斬りつけられた森七に会っておく必要があるのだ。たぶんおだんな吉はここからの帰りに、川一つへだてた多田薬師横の三沢へ寄ったろうから、今からあとを追えばちょうど会えそうだ。ただ困るのは、そこへはどうしてもひもはひっぱっていくわけにはいかぬ。なんとか途中でまいてしまわなければならない。

そう思ったから源太郎は、わざとゆっくり並木町のほうへ歩き出した。ふたりのひもはうまく源太郎の目をまいている気なのだろう、四、五間あとから送りオオカミのように目を光らせながらついてくる。

そろそろ時刻は夕方に近いころだ。

死ぬ腹

「太夫さん、どこへ行くんだね」

もうよいすぎ、雷門の前でカゴをおりて、すたすたと吾妻橋（あずまばし）のほうへかかっていくあやめのあとを追いながら、一寸法師の豆蔵が不安そうに聞いた。ふいにきょう橋町の家へ帰ったあやめは、

「ついさっきだんながきていきやしたが、行き違いになりやしたね」

と、甚作老人が手短にるすの間のことを告げ、署名のない脅迫状をわたすと、

「ふーん」

そういっただけで、さっさと二階の居間へあがってしまった。それっきり、日が暮れるまで、なにをしていたのか、ひっそりと物音一つしない。日が暮れるとまもなく、ふだん着のぞろっぺいな姿のまま茶の間へおりてきて、

「豆公、おまえ玄関から出て、雷門の前で待っておいで」

と、いいつけるのである。

「どうするんだね、太夫」

びっくりして聞きかえすと、
「いやならたのまないよ」
むっつりとふきげんな顔のまま、ふた言とはいわずに二階へあがっていってしまった。気のせいかひどく目に険が出て、急にやつれたかとも思われる不敵な顔に見えた。
「豆、すぐ行きな」
おやじの甚作がため息をつくようにいう。
「うむ。きっと小梅へ行く気かもしれねえだ」
「うまく話がついてくれりゃいいが」
おやじはただ金持ちの色ごととしか考えていないようだが、豆蔵は自分からかたき討ちをけしかけている。それをかせにあやめの恋をなじり、毒づいたおぼえさえあるので、日ごろ気の強い太夫がなんとなく気ちがいじみた様子にさえ見えてくると、いったいどんなまねをしでかそうとするのか、ひそかに心配でたまらなくなってきた。
――ことによると、今夜は死ぬ気かもしれねえぞ。
そうなると、自分も生きては帰れない。それとなくおやじに別れをつげて、雷門へいそいだのだった。
あとからカゴでついたあやめは、なんのつもりかやっぱりふだん着のままで、豆蔵をさがそうともしなかった。が、まっすぐ吾妻橋へかかったところをみると、目ざすのはやっぱり小梅の寮にちがいない。
「豆公、ひもはついていなかったろう」
橋の中ほどまでくると、あやめがふりかえって聞いた。そういえば自分が家を出るときには、たしかに物かげに見張りらしいやつがいたのに、カゴにはだれもついてこないようだった。
「どこから家をぬけ出したんだね、太夫さん」
「二階の屋根からさ」
「小梅へ行くんかね」
「そうだよ。今夜は重吉のやつ、もう承知しない」
しかし、ふだん着のままで、別に武器らしいものはなんにも持っていないようにみえる。
「なんでやるんです、太夫さん」
「豆公、助け太刀なんかしてくれなくたっていいから、もしあたしが失敗して殺されたら、死がいが恥ずかしいめにあわされないうちに、家へ火をつけてしまっておくれ。いいかえ」
「へえ」
そのためのお供だったのかと、豆蔵はいまさらのようにぞくりと寒いものを感じる。
「あっちへ着いたら、おまえはなるべく、あたしの目のつかないところにいなくちゃいけない、わかったね」
「へえ」
「もう、口はきかないよ」
これで安心だと、あやめは思った。生きて帰ろうなどと、始めから考えてはいない。いや、うまく自分が生きて、おとっつぁんやおっかさんの恨みを晴らそうなんて、あんまり虫がよすぎると、やっと気がついたあやめなのだ。
――たった一夜きりの夫婦だった。
心のこりなのはただそれだけである。源太郎のことを考えると、この胸をかきむしって泣きたいほど恋しくなる。せっかく好きで好きでたまらない男に出会いながら、なんという因果な女に生まれたんだろうと悲しい。でも、このからだにはもう好きな男のにおいがしみこんでいて、死んでもこのからだはあの人のものなのだ。わずかにそう思って、あきらめようとしたとき、もしあたしのほうが失敗して、殺されるようなことがあったら、あの悪魔のような重吉のやつだから、死がいにいたずらをされはしないかしらと、ふっとそんなことが心配になってきたのである。
が、もう安心だった。いざというとき、豆公が火をかけてくれさえすれば、重吉にそんな暇はない。

――ちくしょう、あたしがどんなかたき討ちをするか、見ているがいい。
あやめはまるで物につかれた女のように、業平橋のほうへいそいだ。昨夜とおなじようなおぼろ月夜で、寂しい町筋にはもうほとんど人通りはなかった。思うまいと考えても、ゆうべはこの道をあの人の腕にぶらさがるようにして、さんざんだだをこねて歩いた姿が思い出され、じいんと胸が痛くなる。その胸をいとしくしっかりと両のそでで抱きしめながら、
――源さん。
恋しい名をそっと呼んでみずにはいられないあやめだった。
そのころ――。
小梅の長崎屋の寮の茶室では、東五郎と竹五郎がうずみ火の炉を中にして話しこんでいた。
「あやめのやつ、ほんとうに出てきやすかねえ」
あんな手紙一本で、女がわざわざ死地に飛びこんでくる、どうも飯田屋には信じられないのだ。
「なあに、あの手紙を見さえすれば、くることはきっとくる」
東五郎は自信がありそうだ。
「ほかの女とは違う。ゆうべあれだけのことをしておきながら、きょうだって平気で橋町の家へ帰ってくるやつだ。帰ればむろんあの手紙を見たろうし、見れば黙っていられるものか」
「そういえばそうですがね、あやめの腹にしてみれば、お春、お秋を取りもどすには、どうしてもだんなのいうことをきかなくちゃならないと、はっきりわかっているんですからね」
「なあに、あの男を用心棒につれてくるさ。負けると思ってこやしない。おれたちをやっつけられるといううぬぼれがあるからくるのさ」
「さあ、そこですがね、こっちから呼び出しをかけたんだから、こっちにどんな手配りがあるか――あやめはとにかくとして、あの浪人者なら考えそうなもんだと思うんですがねえ」
「そこがうぬぼれというやつさ。向こうはこっちの上を行く気で、なにか計略を考えてくる。まあ見ていなさい」
にやりとわらってみせる東五郎だ。そういえば、鬼半といわれる浦上半兵衛も、あの手紙でたしかにあやめは出てくると見たから、いっさいを長崎屋にまかせて家へ引き取ったのだ。三人のうちふたりまでそう信じているとすると、信じられない自分のほうが知恵が足りないことになりそうだ。
が、あやめのほうにどんな計略があるにもせよ、こっちには裏にも表にも伏勢があって、いざというとき一つ合い図をすればいちどきに斬って出ることになっている。そのくらいのことが考えつかないで、もしのこのこ引きよせられてくるとしたら、これもよっぽど知恵が足りない組だろう。もっとも飯田屋としては、たとえ自分がそう見ろとわらわれても、ふたりが出てきてくれたほうがありがたいにはありがたい。自分が毒を盛った先代長崎屋の娘に生きていられたのでは、とてもまくらを高くして寝られたものではない。
「しかし、せっかくのあやめが、ゆうべあんな浪人者なんかに女にされてしまったのは、ちょいとくやしいねえ」
思い出したように、長崎屋はまだそんなあくどいことを口にする。
「いいかげん興がさめましたね」
「うむ、興はさめたが、おれは昔から執念深い性分だからねえ」
なあんだと、飯田屋はあきれた顔だ。まだこの男はあやめにそんな野心を持っているのだろうか。自分をかたきとねらう女を、平気で手ごめにしたがる。そういえば主人の女房を、幼い娘をしめ殺してまで自分のものにした男だ。普通の人間ではないのかもしれぬ。
「だんなにゃとてもかないやせん」

「なあに、おれのほうもかたき討ちさ。たかが女芸人だと思って油断していたら、ゆうべはひどいめにあわせたからね。どうしても一度思い知らせて、どんな顔をするか見てやらないうちは、腹の虫が納まりそうもない」
　その鉄面皮な顔をながめているうちに、飯田屋はまたしても寒けがしてきそうである。
　ひたひたとだれか茶室の庭へ走りこんでくる足音がした。東五郎の手がつとふところへ行く。しのばせている短筒へ手をかけたのだろう。さすがにそういうところはひどく用心深い男でもあった。
「親分――」
「なんだ、岩か。どうした」
「やろうがやってきやしたぜ。カワウソ源太っていう浪人者が」
「ひとりか――」
　妙にぎくりとする飯田屋だ。
「ひとりなんで――玄関へかかりやしてね、みんなで取りまいたらにっこりわらいやがった。敵ながらいい度胸でござんすね」
「ばかやろう、なんだっていうんだ」
「長崎屋のだんなに会いたいっていうんでさ。たたっ斬っちまうんですか」
「待てっ」
　どうしようというように、長崎屋のほうへ目で相談すると、
「瀬ぶみにでもきたのかえ。とにかく飯田屋、おまえ、会ってごらん。なんていうか」
　東五郎はいささかがっかりした顔だ。
「承知しやした」
「どう出るか知らないが、あやめが自分でここへやってこないかぎり、話には乗らないことだねえ」
「そういうことにしやしょう」
　飯田屋はうなずいて、長脇差を取りながら立ち上がった。

南蛮ぐさり

――やっぱり出てこねえ気かな。
　飯田屋の去っていく足音を耳にしながら、東五郎はなんとなくおもしろくない。たぶんふたりで出てくるだろう。それも表からでなく、裏口からいきなりこの茶室へくる。きたら一応は黙ってここへ通せ、と伏勢にもかたくいいつけてあるのだ。よけいな助け太刀などはいらぬ。じゅうぶん引きつけておいて、このオランダ渡りの短筒さえ一丁あれば、男のほうは一発で撃ち殺し、あとはあやめひとりだ。びっくりして度を失っている間に、腕力にかけてねじ伏せて、さんざんおもちゃにしたうえで、母親同様しめ殺してやる。いや場合によっては当分監禁しておいてと、そんな計画まで立てているこわいものなしの東五郎だった。
　――なあに、いそぐことはねえ。そうだ、あの男をとりこにして、おとりに使えば、ほれた弱みでどうしても出てこずにはいられねえな。
　よし、と立ち上がったとたんに、するりと庭の障子があいた。
「あっ――」
　あやめだ。あんまり不意だったので、東五郎はわれにもなく短筒を取るなり、ぴたりとそっちへ向けていた。
「ふん」
　あやめはひややかに鼻の先でわらって、大胆にも自分でうしろの障子をしめきる。ふだん着のままのむぞうさな姿で、あいくち一つ持ってはいないようだ。
「よくきたなあ、あやめ」
　東五郎はあわてすぎた自分を内心少してれながら、一度出した短筒だからいまさらひっこめようもなく、わざとひざもとをねらいながら静かに毒づいた。あやめは黙って壁ぎわを背にして、床柱のほうへ寄っていく。

「ほめてやるぜ。さすがにいい度胸だ」
「重吉、罪もないお春やお秋をおとりに使うなんて、おまえも案外けちな男なんだね」
「で、おまえは自分のからだで、女でしたちを買いにきたのかね」
「あたしはけだものに天罰を下してやりにきたのさ。いまに泣きっつらをしないがいい」
「あやめ、この短筒がおまえの目にゃはいらねえと見えるな」
「めくらじゃあるまいし、ただそんなものこわくないだけさ」
「そうか。じゃ、もっとこわいようにしてやろう」
　すっと東五郎は一足前へ出た。
「男のくせに、なにさ、そのかっこうは。短筒を持っているのはおまえじゃないか」
　床柱を背に平気で立っているあやめを見ると、気が狂ったのではないかと、東五郎はかえって無気味なものを感じる。
「そんなにあたしがこわいかえ、重吉」
「よし、こわいかこわくないか、ためしてやる」
　短筒を突きつけたまま、つかつかとあやめのそばへ寄った東五郎は、つと左手を柔らかいのどへかけた。
「ばかなまねはおよし。あたしはおっかさんとは違うんだからね」
　別に逃げようともしないので、相手にどんな力があるか知らないが、たかが女だ。しかもすでにこっちの手がからだにかかっている。
「うぬ――」
　東五郎は短筒を放して、さっと両手の中へあやめの肩を抱きこみ、
「いけない――ばか」
　さすがに身もがきするのを、苦もなくそこへねじ倒した。もう野獣になりきって、勝ち誇った右手が荒々しく女のからだをさぐっていこうとするのを、あやめは必死に両手にふせぎなが

ら、
「あっ」
　東五郎はその手首へちくりと締めつけられるような痛みを感じる。はっと力がゆるんだ瞬間、いままで身をかばっていたあやめが、力いっぱい下からはねかえして、柔軟なからだがするりと向こうへ抜けて立った。
「やろうッ」
　つかみかかろうとしたが、東五郎は右手がきかない、ぎょっとして見ると、細い南蛮鎖（なんばんぐさり）が手首にかかっていて、その一端がいつの間にか茶室の半床の竹の床柱に巻きつけてあるのだ。
「やりやがったな」
　血相を変えて引きちぎろうとしたが、手が痛むばかりだ。
「重吉、おっかさんの恨み、おとっつぁんの恨み、あたしはおまえを生きながら焼き殺してやる。見ておいで」
　あやめはどこに持っていたか焼き玉を出して、炉の火を火なわに移した。
「おまえの命はその火なわが燃えつくすといっしょに地獄へ行くんだ」
「うぬッ――飯田屋、竹五郎、だれかいないか」
　東五郎は大声にどなり出した。
「ふ、ふ、だれがきたって、ちょっとやそっとでその南蛮鎖が切れるものか」
　反対側の壁ぎわへ立てひざをして、ひややかにせせらわらっているあやめの手に、さっき東五郎が捨てた短筒が握られている。
「竹五郎――竹五郎、だれかきてくれ」
　東五郎の額にあぶら汗が浮いてきた。
「だんな、どうかしましたか」
　声を聞きつけたらしく、やっとがらりと障子があいた。
「あっ」
　その子分たちのほうへあやめがつと短筒の口を向ける。

「おまえたち、手出しをすると命がないよ。あたしは今けだものを退治してやるんだ。この男はあたしのおっかさんを手ごめにして、しめ殺したやつだ。あたしのおとっつぁんの先代長崎屋藤兵衛を、番頭のくせに無実の罪におとして牢へ入れ、毒殺したけだものなのだ。そればかりじゃない。そのときまだ七つだったこのあたしを、おっかさんといっしょにしめ殺して品川の海へほうりこんだ悪魔だ。あたしはこいつを、生きながら焼き殺して、両親の恨みを晴らしてやるんです。おとっつぁん、おっかさん、見ていてください。あやめは、あやめは今やっと憎い重吉に勝ちました。見ていてください。おとっつぁん、おっかさん」

　いっているうちに、あやめの目からあふれるように涙が流れてくる。

　七、八人集まってきた飯田屋の子分たちは、思いがけない東五郎の悪業のかずかずに、もしそれがほんとうならとわが耳を疑い、筒口はこっちを向いているし、ただあっけに取られながらしりごみするばかりだ。

「うそだ。この女にだまされるな。早くたたっ斬れ。なにをぐずぐずしているんだ。竹五郎を呼んでこい。火なわが燃える。早くしねえか。どいつもこいつも、おれの恩を忘れたか」

　わずかに右の手だけが自由にならない東五郎だ。が、それがとうていのがれがたい地獄への道しるべだとわかると、恐怖に髪の毛をさかだてて、じだんだふんでもがき、わめき、悪鬼のような形相をあぶら汗でてらてらさせながら狂いまわらずにはいられない。

「そうだ、親分に知らせろ」

　やっと気がついたように、ばたばたと二、三人が駆けだした。おもわずみんな逃げだしたそうに、浮き足だったが、それもできず、といって、茶室へ踏んごもうとする者など、むろんあろうはずはない。

「重吉、竹五郎がきたってその鎖はどうにもならないよ。そのうちには焼き玉が火を吹きあげるだろう。おまえがかずかず人を苦しめた苦しみがどんなものか、めいどのみやげによく見ておおきよ」

　そういうあやめの顔はしだいにきびしく、人間とは思えない無気味なのろいの色にさえかえってくる。じりじりと火なわはやがて燃えつきようとしているのに、そっちをふり向いて見ようともしないのは、この憎むべき男を心ゆくまでばとうしながら、自分もいっしょに焼け死んでいく気でいるのだろうか。

天の裁き

　そのころ――

　飯田屋竹五郎は腕っ節の強い子分を数人、そっと次の間へ伏せておいて、ひとりでカワウソ源太の待っている座敷へはいっていった。

　がっしりとしたからだつきだが、案外色白なおっとりした若い男が、人のよさそうな顔をしてすわっている。なんだ、カワウソ源太ってこんな青二才なのか、と一目見るなり竹五郎はつい甘く見たくなる。

「おいでなせえまし。おたずねにあずかりました長崎屋東五郎は、あいにくカゼぎみで伏せっていやすので、てまえが名代に出やした。東両国に住む飯田屋竹五郎と申しやす、お見知りおきくだせえまし」

　わざと、ばかっていねいなおじぎをしてみせる竹五郎だ。

「さようか。拙者はカワウソ源太という浪人者です。どうぞよろしく」

「東五郎になにかお話があるんだそうですが、どんなご用でござんすね」

「話はなるべく早いほうがよろしかろう。率直に申し上げるが、たしかに当家へ長崎あやめの女でし、お春お秋がまいっているはず、師匠のあやめが心配しているので、どうかてまえにお

わたし願いたい」
「へえ、失礼だが、おまえさんは太夫のなんにあたんなさるんだね」
竹五郎はなにくわぬ顔をして聞く。
「まだ正式というわけではないが、まあ、亭主のようなものです」
にこりとしてみせながら、源太郎は少しも悪びれない。
「ふうむ。じゃゆうべから太夫をかくしているのはおまえさんだね」
「別にかくしたというわけではないが、あやめは、ああいうわがままなやつで、ここの帰りに、もう歩くのはいやだというものだから、浅草へ一晩泊まることにしたのだ」
「そりゃ泊まるのはどこへ泊まろうと、泊まってどんなまねをしようと、おまえさんたちのかってだが、こっちは大金を出してかかえている芸人だ。小屋を無断で休んでもらっちゃ困るじゃねえか。きょう一日の損害は、いったいどうしてくれる気なんだね」
竹五郎はみごとに逆を取ったつもりだった。
「そのことなら、いずれあやめから話があるだろうが、あれがいうには、一度拙者という亭主を持ってみると、もう芸人はいやだというのだ。身ごもりでもして、タヌキのような腹になって、綱渡りでもあるまい、今のうちに前金の五百両を親分にかえして、自由なからだになって、早くどこかへ所帯を持とうと、ゆうべふたりの寝物語で相談がきまったのだ。まあ、あしからず了解が願いたいな」
けろりといってのける源太郎の顔を見すえながら、なるほどこのやろうは相当なカワウソだと、竹五郎もいささかあきれ、よしそれならと、戦法をかえた。
「お若いの、こっちがおとなしくしていりゃ、たいそう身がってなことを並べたね。小屋掛け芸人が約束の中途で逃げ出したり、変替えをしたりすりゃ、おれたち仲間のおきてとして、か

たわ者にされても文句はいえねえ。へたをすれば命がねえってことを、太夫はよく知っているはずだ。おまえさんが太夫のほんとうの亭主なら、ゆうべの寝物語にそんな話は出なかったかね」
「出るには出たようだな。しかし、あれの話では、長崎屋さんにも親分にも、それより大きな貸しがある。どっちみち、あたしは命がけなんだからというから、女はそんな乱暴な気持ちを起こすもんじゃないと、わしはなだめておいた。つまり、親分たちの出ようによると、あれは気ちがいになる。だから、なるべく穏便に、お春お秋をもどしてもらいたいと思うんだがね」
「おまえさん、おれを脅迫する気だな。若いのにいい度胸だ、と一度は感心しておくが、あんまりつまらねえ寝言を口にすると、ただじゃすまなくなるぜ」
竹五郎の顔が、われにもなく険悪になってくる。どうやらこいつは、あやめからこっちの旧悪を聞いてしまっているようだから、生かしておいちゃあぶない、そんな殺意がつい顔につつみきれなくなるのだ。
「つまらない寝言かねえ。あやめのいうことがほんとうなら、あんまりつまらない寝言でもないようだがねえ」
「じゃ、どこにそんな証拠があるんだ。証拠を出してみろ」
「なんの証拠を出せっていうんだね」
これはみごとな逆襲だった。源太郎はまだ旧悪については、直接にはひと言も口にしていない。ただにおわしているだけだ。うっかりこっちから、証拠を求めたのは、いわゆる問うに落ちず、語るに落ちたたぐいだ。
「とにかく、きのどくだがおまえさんにゃお春お秋は渡せねえ。ふたりが助けたかったら、あやめに自分で話をつけにこいといいなせえ」
「すると、あの結び文にあったゆうべのところというのはここで、あの手紙の差し出し人は親

分と長崎屋さんが相談のうえ、と見てさしつかえないことになるね」
　これも痛い急所だ。
「なんとでも考えるさ。考えるのはそっちのかってだからな」
　理詰めにされると、竹五郎はもうふてくされるよりほかに能がない。そのかわり殺意のほうが、動かすことのできないものになってきた。
「親分、あんたは出家する気にはなれないかねえ」
　源太郎が突然妙なことをいいだす。
「なんだと――」
「わしはふくしゅうだとか、かたき討ちだとか、女はそんな荒っぽいことをしないほうがいいと思っている。どんな理由があっても、人が私に人を殺そうと思うのは行きすぎだ。そのために天下には法というものがあって、公平に人をさばいてくれる。そのさばきをもっと公平にやってくれるのは天だ。もし親分がおのれに省みて、やましいことがあったら、出家して天意にまつ。けっしてさしずするわけじゃないが、そのほうが罪に罪をかさねて余生をただ暗く生きていくより、自分が気が楽じゃないかと思うんだがねえ」
　それは淡々としたことばの中に、深く相手をあわれんでいるようなひびきがこもって、
「ふん、何をぬかしやがる。人のさしずなんかするより、自分の頭のハエでも追うがいいや」
　と、口ではせせらわらいながら、ふてぶてしい竹五郎の良心へひやりとふれてくるものがあった。
　――ちくしょう、どうしても生かしちゃおけねえ。
　その良心を踏みにじるように、むらむらっと、殺意がみなぎってくるが、なんの不安も敵意も感じていないような相手の静かに澄んだ目に出会うと、どうにも、次の間へやっちまえという声が出ない。

「親分、じゃ、わしはこれで失礼する。なるべくなら穏便に早くふたりを返してもらいたいな。脅迫するわけじゃないが、親分がゆうべ子分たちにいいつけて、多田薬師の前で殺させた森七という男は、さいわい一命だけは取りとめたようだ。それが天意だということを、よく考えて、長崎屋さんとも談合することだ」
　とどめの一言だった。森七が生きているとなると、敵にとってこんなたしかな生き証人はない。あっと竹五郎が顔色をかえたとき、
「親分、たいへんだ、たいへんだ」
　どかどかと廊下を二、三人走ってくる足音がして、どうした、なにがたいへんなんだ、と次の間の伏勢がおもわず一度に立ち上がったようだ。
「ばかやろう、静かにしねえか」
　破れかぶれの竹五郎が隣へどなりつける間に、走りこんできた子分がそこにつったったまま、
「親分、早くきておくんなさい。だんなが、だんながあやめに縛られて、もう焼き玉が破裂するんだ。早くしねえと、だんなが黒こげだ」
　と、しどろもどろにわめきたてる。
「なにッ、あやめが、焼き玉――」
　竹五郎がはっと立ち上がり、いや、こいつをどうしようかというように源太郎のほうをにらみつける。
「いっしょに行ってみよう。案内しなさい」
　ちらっとまゆをひそめた源太郎が、刀をとって、もう、気軽に立っていた。敵の中にいて、少しも敵を感じていない落ち着いた姿が、無気味なような、ときにとってたのもしいような、まったくけむにまかれた形である。

狂うあやめ

　離れの茶室では、南蛮ぐさりで右の手首を床柱に縛られた東五郎が、オリの中のクマのよう

にいよいよたけり狂っていた。
「おい、だれか、この焼き玉をつまみ出せ。千両だ、早くしろ。──ええ、竹五郎はどうした、いくじなし。飯田屋を呼んでこい。火なわがつきる。早くしねえか、助けてくれ。千両だ」
　怒号がついに悲鳴にかわって、その声さえ今はかすれてくる。焼き玉が爆発すれば、むろん東五郎は黒こげになる。その焼き玉はもうちょっとで手のとどくところに、ぶすぶすと口火が燃えつきようとしているのだから、東五郎は必死に左手をのばそうとしては、右の手首を細い南蛮鎖にひっぱられ、皮膚が裂かれて血だらけになってきた。痛い。痛いが命には替えられないから、うめいてはもがき、もがいてはうめき、さんばら髪になって、悪鬼のように踊り狂っている。
「めんどうだ、だれか、だれか、この右の手をたたっ斬ってくれ。千両だ。早くしねえか」
　が、庭を遠まきにしている子分たちも、いくら千両になっても焼き玉はこわい。しかも、あやめが近づく者は容赦なく撃ち殺そうと、これは白面の鬼女のようなひきつった顔をして、短筒を突きつけている。ひとりとして飛びこんでいこうという者はない。いや、むしろいまにも東五郎が生きながら黒こげになる地獄絵巻がまぶたにうかんできて、自分たちのほうが気が狂いそうだ。
「親分はどうした。もう焼き玉が火を吹くぞ」
「知るもんか。おれのせいじゃねえ。どうしたんだろうな。親分は」
　ただうろうろと青い顔を見せあわて、うわごとのようにどなりあうだけである。
「ふ、ふ、いいざまだねえ、重吉。もうすぐ焦熱地獄だよ。おっかさんのからだをいじめたおまえのからだが、おとっつぁんを殺したおまえの手が、生きながらめらめらと焼けただれていくのさ。あたしはこの目で、憎いおまえがもがき、狂い死にするのを、ちゃんと見ていてや

る。そら、ごらん、火なわはもう五分になった。今のうちだよ、重吉、ありったけの声をあげて、どなっておおきよ」
　狂女のように、あは、は、とわらいだしたあやめは、焼き玉が火を吹けば、自分の命もいっしょになくなることを知っているのだろうか。
「ああ、親分がきたぞ」
「親分だ、──親分だ」
　子分たちが、どっと歓声をあげたが、それもほんの一瞬のことで、駆けつけた竹五郎も、あまりにもすさまじいこの場の光景と、あやめの殺気にみちた短筒にけおされて、あっとそこへ足をくぎづけにされ、
「ちくしょう、ええまねをしやがる」
　と、ただぼうぜんと額にあぶら汗をうかべるだけだ。
「竹五郎、助けてくれ。なにをしているんだ、飯田屋。おれの、おれの恩を忘れたか」
　その耳へ東五郎ののろいのことばが針のように突き刺さってくる。
　──鬼の顔だ、ありゃ。
　ぞっとして、われにもなくあとじさりする。
「飯田屋、助けてくれ。竹五郎、たのむ」
　──鬼だ。鬼の声だ、ありゃ。
　ぶるぶるると、全身にふるえがきて、ならばこの場をまっ先に逃げ出したい。
「あっ、もうだめだ」
　だれからともなく、一度に叫んだとき、つかつかと源太郎が縁先へ進んでいった。
　あやめの短筒がぎょっとしたように胸板へ向いたが、源太郎とわかって、世にもぽかんとした顔になった間に、ひらりと茶室へあがった源太郎は、たっと焼き玉を庭先遠くけとばした。
「わあッ」
　その辺にいた子分たちが、ぎょうてんしてけし飛んだとたん、
　だあんッ。
　焼き玉は爆発して、花火のようにものすごい

火煙を吹き出した。かっとあたりのやみがまっかになって、一同が息をのんでいる間に、たちまちやみがもどってきた。
「なにすんのよう。じゃましちゃいやだったら、源さんのばかッ」
あやめが突然源太郎のほうへむしゃぶりついていって、ぴしゃぴしゃと、そのたくましい胸をたたきつける。
「おてんばだねえ、おまえは」
「知らない。ばかッ、ばかッ」
「さあ、いっしょに帰ろう。これだけのことをしたんだから、もう気がすんだろう」
じだんだ踏んでいるあやめの肩を抱いて、のんびりと背中をなでている源太郎だ。
「いやだ、いやだったら。殺してやるんだ」
夢中でどなりながら、しかしあやめは急に男の胸へ顔を伏せて、わあっと慟哭(どうこく)しはじめた。
「泣かなくたっていいよ。さあ、わしのいうことを聞いて、おとなしく帰るんだ」
源太郎はなだめるようにいって、あやめの肩を抱いたまま、ぬれ縁から庭へおりた。
「斬れッ。たたっ斬れ。ふたりを逃がすな、竹五郎」
東五郎がごうぜんとつったちながらわめいた。焼き玉の恐怖から完全にのがれたと見たとたん、もう人並みはずれた悪党根性を取りもどしていたらしい。
「鬼めッ」
その声に、まだもやもやとしていたらしいあやめの心がふたたびかっと燃えあがったが、源太郎のからだをかきのけるようにして、短筒を東五郎のほうへ向け、だあんと引き金をひいた。が、弾丸がとんでもない床の間の壁へはずれたのは、とっさに源太郎があやめの手を下から払いあげたからである。あやめの手を放れた短筒はどこへ飛んだか、やや遠くの植え込みの中で、からあんという音がした。
「な、なにするのよう、ばか、ばか」

またしても狂いだそうとするあやめの両手を、ひょいと両手でつかみとめて、
「どうしておまえはそう気が荒いんだろうな。人を殺せば、おまえも人殺しになるんだぜ」
と、源太郎は放そうとしない。
「いやだあ。放して、放してったら」
「そんなだだをこねるもんじゃない。おまえはもうりっぱに重吉に勝ったんじゃないか。さあ、おとなしく帰るんだ」
だだっ子のように、身もがきしてやめないあやめの両手をつかんだまま、むぞうさに背中へまわして、どっこいしょとおぶい、
「じゃまをしたね、諸君」
見るといつの間にか、飯田屋竹五郎の姿がそこから消えていて、子分たちはただぽかんと顔を見あわせているばかりだ。
「逃がすな、ふたりをたたっ斬れ。竹五郎、おいみんな、なにをしているんだ。千両だぞ。たたっ斬れ」
狂気のようにわめいている長崎屋東五郎の声だけが、いつまでも無気味に耳につく。

執念解脱

お春お秋のふたりが橘町の家へふらりと帰ってきたのは、その夜の九つ（十二時）すぎで、源太郎とあやめが家へたどりつくより一足早かった。東両国の飯田屋の二階に監禁されていたのを、竹五郎がどこからか帰ってくるとまもなく、
「もう帰ってもいい。夜ふけだから、そこまで子分の者に送らせてやろう」
と、いって許してくれたのだという。
「別にいじめられはしませんでしたけれど、二階の一間へ押しこめられて、逃げると殺すよと、子分の者がふたりずつ、かわりばんこに次の間へ詰めているんですもの、どうなることかと、あんまり気持ちはよくありませんでした」

「それに、ときどき子分たちが隣で、ひそひそ話しているのを聞いていると、どうせお師匠さんは長崎屋のものだし、ふたりは親分がもらうんだろう、親分はふたりともかわいがる気かなあなんて、いやらしいことばかり耳にはいるんです。男ってふたりよると、どうしてあんな話ばかりしかしないんでしょうねえ」

　お春とお秋が、かわるがわる訴えているところをみると、竹五郎がふたりをめかけにする意思があったかどうかわからないが、子分たちがふたりにいたずらをすることだけは堅く禁じておいたのだろう。

　その竹五郎が、飯田屋のあとをおもだった子分に任せて、どこへ行くとも行く先はいわず、翌朝早くひとりでわらじをはいたとわかったのは、その日の午近くであった。

　それといっしょに、長崎屋東五郎が、昨夜南蛮鎖で床柱につながれたまま何者かにあいくちを胸へ投げつけられて、即死したという知らせは、おだんな吉が持ってきてくれた。

「なんでも、東五郎があんまり悪態をつくんで、子分たちはみんなこわがって、だれも鎖を切ってやろうとする者がない。一度はそのまま親分のあとを追って帰りかけたが、そこは人情で、それもあんまり薄情だろうということになり、引っかえしてみるともう殺されていたっていうんですがねえ」

「そりゃ天から降ってきたあいくちだろう」

　源太郎は即座に答えたが、ゆうべの疲れで半病人のようになって、まだ二階で寝たっきりのあやめは、ふたりの話に背を向けたまま、眠ってでもいるのか、一度もこっちへ顔を向けようとはしなかった。

「だんな、当分おかみさんをつれて、湯治にでも行ってきちゃどうだろうな。まだ浦上半兵衛ってやつが生きている。つまらねえ細工をされるとうるそうござんすからね」

　おだんな吉はあやめのほうをうかがいながら、小声で注意してくれた。

「ありがとう。考えてみよう」

　源太郎は礼をいって、

「おだんなうじ、いざとなると森七はたいせつな生き証人だ。たいせつにたのむよ」

と、念を押すことを忘れなかった。

「なあに、そのほうはきっと引きうけたから任せておいておくんなさい」

　胸をたたいてみせて、まもなくおだんな吉は帰っていった。

　一寸法師の豆蔵がゆうべからまだ帰ってきていない。東五郎の胸へあいくちを打ち込んだのは、おそらくあやめにかわって豆蔵がやった仕事だろう。それがあやめを恋する豆蔵のせめてもの忠義だてだったのだ、とは源太郎にもすぐぴんときたが、これは最後まで口にすることではない。とすると、おだんな吉がいうとおり、早くあやめをつれて一時江戸を遠のいたほうがいいのではあるまいか。正直にいえば、自分にもとにかく脱藩という罪名があるのだから、当分江戸は遠慮したほうがいいのである。

「おい、眠っているのかえ」

　源太郎はあやめのまくらもとへ行ってすわった。

「なにか用——」

　こっちを向いて、ぱっちり目をあけるあやめだ。昨夜のあの気ちがいじみた一幕で、げっそりとやつれは見えるが、澄んだ目に、もうふだんの落ち着きだけはすっかり取りかえしている顔つきだ。

「なんだ、起きていたんなら、おだんなうじにひと言ぐらいあいさつをすればいいのに」

「恥ずかしいんだもの」

「恥ずかしい——」

「だってあの人、あたしがもうあんたにおへそをとられちまったこと、知ってるんでしょ、いやだわ」

「ばかだなあ。おだんなうじはおまえにおへそ

なんか見せろっていいやしないよ」
「あたりまえだわ。そんなこといったらぶんなぐってやる」
「お株がはじまったぜ。しかし、ゆうべはそのおへそが黒焼きになるところだったんだからな」
あやめは自分も黒焦げになることなど、まったく考えていなかったのだという。
「豆公、生きているかしら」
やっぱりそれが気になるらしい。
「おい、当分箱根へでも湯治に行ってこようか。江戸はうるさいし、知らない土地へ行けば、おへそを恥ずかしがらなくたってすむぜ」
「そうねえ。あんたとならどこへでも行くわ」
あやめはなんとなく天井を見上げながら、
「生きていてあたし、ほんとうによかった」
ぽつんとそんなことをいいだす顔が、どこかさえざえと女らしく、ふくしゅうの執念はもうきれいにぬぐい去られているように見えた。

山ウグイス

起きぬけに、といっても朝寝坊の癖がまだぬけない長崎あやめだから、もう朝日が高く、自分のほかにはだれもいない湯殿は、すがすがしいまでに明るかった。
――しあわせだなあ、あたしは。
青くすきとおった温泉に肩までひたりながら、あやめはうっとりとそう思うのである。
――ほんとうですよ、太夫さん。
それを祝福してくれるように、すぐ窓の外で山ウグイスが鳴いている。好きで好きで、どうしてこんなに好きになってしまったのだろうと、われながら好きでたまらないカワウソ源太と、とうとう夫婦になって、江戸から三日の旅、この箱根湯本の福住という湯の宿へ湯治に着いたのは、ついふつかばかりまえのことだった。
ちょうど若葉の季節で、三日の旅路もたのしかったが、ここへ着いてからはすっかり浮き世はなれて、まるでばかにでもなってしまったようなのんきさなのである。七つのときから、どうしてもおっかさんのかたきを討ってやるんだと、それればかり念願にして世をのろってきた自分に、こんなたのしい日がここにあろうとは、二十三になるきょうまで夢にも思いがけないあやめだったのだ。
しかし、その憎い母のかたき長崎屋東五郎は自分の目の前であんなにもがきわめき、死の恐怖にあぶら汗をしぼったうえ、翌朝は何者かに胸を刺し殺されていた。かたきの片割れ飯田屋竹五郎は恐れをなして四国の旅に出てしまったというし、いまだに無事に江戸に生き残っているのは、ただひとりもとは悪与力だった浦上半兵衛だけだが、
「これだってけっして楽じゃないさ。いつじゃじゃ馬に寝首をかかれるかと思って、一生びくびくして、くらさなければならないんだからね」
と、源太郎はいってくれる。
「源さん、じゃじゃ馬ってだれのこと」
ゆうべもその話が出て、しまいにはとうとう口げんかになってしまった。
「さあ、だれのことだろうな。たぶんカワウソにおへそをとられたどこかの奇麗な太夫さんのことだろうよ」
「はばかりさま。あたしはもうかぎょうはやめたんですからね。太夫さんなんかじゃありません。髪をごろうじてくださいませだわ」
「なるほど、大丸まげだねえ。りっぱだよ」
「変なほめかたねえ。女の顔を見て、りっぱだよなんて言いぐさがあるかしら」
「いや、とにかくりっぱなもんだ。そのまげになると、いまにきっとりっぱにおなかがふくれてくるもんなんだ。タヌキの綱渡りなんて、あんまりりっぱなもんじゃないから、太夫さんをやめたのは利口だなあ」
「あたしがかせがなくなったら、だれがふたり

を養ってくれるの。今は少しお金があるからいいけれど、あたし先が心配だわ」
「心配しなさんな。そのときはおれがなんとかする」
「ふーんだ。あんたにできることはつじ斬り強盗武士のならいぐらいなもんじゃないかしら」
「人聞きの悪いことをいいなさんな。今こそ浪人して、おかみさんのかせぎためた金で養われているが、いざとなると、これでもただのカワウソじゃないんだ」
「ふ、ふ、ひとのおへそばかりねらっているカワウソなんでしょ」
たあいもなくちゃかして、ちゃかされて、うれしい仲だけれど、いざとなるとあの人はほんとうに、なにをやりだすかわからない男なのだ。大胆で、底力があって、このあいだも小梅の寮ではだれも近づけない焼き玉のそばへ平気であがってきて、ひょいとつかんでほうり出したり、飯田屋一家がぐるりとまわりを取りまいているのに、あたしをおぶって、じゃまをしたねえ、諸君、とあいさつをして、ゆうゆうと引きあげたり、ほれぼれとするようなたのもしい男である。
それだけに、どんな訳があって主家を浪人したかはまだ聞いていないけれど、もし帰参でもかなうようになったら、それこそあたしなどそばへも寄れないんじゃないかしら。それを考えると、なんだかそら恐ろしい。——やっぱりあたしがかせいで、あの人はいつまでも遊ばしとくほうが無事なんじゃないかしら。
別れるなんて、死んだっていやだ。そんなときがもし来たら、いっそあの人を殺して、あたしも死んじまう。そうだ、どうしても別れられないように、早くあの人の子どもがほしいな。ふっとそんなことを考える。青い湯をとおして見るわれながら白々とした膚、むっちりと豊かな乳ぶさ、軽わざで鍛えぬいているからだだから、柔軟でよく均整のとれた四肢。

——いやだなあ。このからだみんなあの人にやっちまったんだけど、おなかが大きくなったら、どんなかっこうになっちまうかしら。
そこにあるふっくらとした自分の腹部をながめながら、あやめはなんだか恥ずかしくなってくる。
「あっ、そうだ。あたしたちまだお祝言というものをしなかったわ」
急にとんでもないことを思い出してしまった。世間の夫婦というものは、公方さまでも、裏長屋に住むそれこそその日かせぎの人たちでも、ちゃんと祝言の杯をしてからいっしょになるのが普通である。それでなければほんとうの夫婦とはいえないのだ。考えてみると、あやめのはあの夜駒形の船宿で、お床入りのほうが先になっている。好いて好かれて自然にああなってしまったのだから、それはそれでかまわないけれど、どうしても一度は世間のおきてどおり祝言をすませておかなくては、ほんとうのおかみさんとはいえないのじゃないかしら。そういうじままな夫婦のほうが、よけい夫婦別れをするようになるのが多いんじゃないかしら。
「いやだわ。まねごとでもいいから、早くお祝言の杯をしておかなくては」——ざあっと青い湯をかきみだして、あやめはいきなり湯ぶねから飛び出していた。
ほんとうですとも、太夫さん。さあ、おいそぎにならなくては。
窓の外の山ウグイスが、こんどはそうせきたてているように聞こえる。

箱根の狐

いそいでへやへ帰ってきてみると、座敷はもう、奇麗にかたづいていたが、源太郎の姿はどこにも見えなかった。
もっともあやめが目をさましたときから、源太郎はそこにいなかった。たぶんふろだろうと

思ったので、気にもしないで自分もあとから追ったのだが、いつもカラスの行水のような人が、それにしてはあんまり長湯すぎる。

気がついて、床の間を見ると、いつもそこにある刀かけの刀が大小ともなくなっていた。

「あら、どこへ出かけたのかしら」

妙にどきりとした。まさか自分を置いて逃げるはずもないけれど、黙って出かけるなどということは、一度もないことだし、ある身分のある侍が出先から帰ってきて、愛妾が昼寝をしているだらしのないかっこうをながめ、あいそをつかして色恋の夢からさめたという話を聞いている。あたしの寝顔を見て、あの人もついそんな気になったんじゃないかしら。

「もう朝寝をしないから、あいそなんかつかしちゃいやだ」

おろおろとふだん着に着替え、きちんと帯をしめなおしているところへ、女中が茶器を運んできた。

「おはようごぜえます」

「おはよう。あんまり早くもないわね」

侍のおかみさんがあわてているところを見られてはみっともないから、なにげなさそうにあいさつをかわして、

「うちの人、どこかへ出かけましたか」

と、さっそく聞いてみた。

「へえ、なんですか、そこらを歩いてくるから、ご飯はおかみさまがお目ざめになってからいっしょでいい、といって出かけました」

そう答えて、小娘の女中はなんとなく下を向いてわらっている。あの人のことだから、うちのおかみさんは朝寝ぼうでねえ、ぐらいのことはいったのかもしれない。

——憎らしいってありゃしない。起こしてくればいいのに。

しかし、置いて逃げられたわけではなさそうだから、ほっと安心するには安心した。

「あたし、ちょいとうちの人を迎えに行ってきますからね。まさか女がひとりで先にご飯にもできないでしょ」

あやめはそんな言いわけをいいながら、そそくさと宿を出た。ひとを朝っぱらから、こんなにびっくりさせたんだもの、つかまえて、うんといやみをいってやらなくちゃ、と、もうそんなわがままな気になっているあやめである。が、表へ出てから、あの人は上へのぼったか、下へくだったか、ちょいと迷った。下れば三枚橋へ出て、箱根の本街道に出るし、のぼれば裏道だが、谷川にそって若葉が美しい。

「のんきにけしきでもながめて歩いているんじゃないかしら」

なんだかそんな気がするので、あやめは上ってみることにした。

坂道で、一方はがけ、一方は谷川、一足ごとにその谷が深くなり、ウグイスは鳴いているし、まったくうっとりするようなながめである。

二、三町ものぼってくると、じっとり汗ばんできて、もうほんとうに山の中だ。裏道だから、まったく人にも会わない。

「あの人、どこまで行っちまったんだろう」

一坂のぼりきって、中休みといった平らな道へ出たので、立ち止まって息を入れていると、ちょうど向こうから雲助が三人、かわりばんこに山カゴをかつぎながらおりてきた。のぼり下り八里の難所をまたにかけてかせぎ場にしている連中だから、みんな六尺ゆたかな、岩のようなからだをしたやつばかりである。

——いやなやつらがきた。

男を男くさくも思っていないやんちゃなあやめだが、山の中だし、相手が悪いし、なるべく谷のほうへ道をよけて、背を向けながらかれらをやりすごすことにした。あざやかな緑の中に、年増盛りの水もしたたるような女が、薫風にはでなすそをなぶらせながら立ったのである。それでなくてさえ気が荒くてむてっぽうで、多分にけだもの心のある雲助どもの目につかないは

ずはない。たがいに目くばせしあいながら、にやにやとあやめの背後へ近づいてきた。
「おかみさん、カゴに乗ってやっておくんなさい。安くしておきやす」
ひとりがもみ手をしながら声をかけてきた。
「いりませんよ。あたしはついそこの福住に泊まっているんだもの」
「こりゃどうも、お見それいたしやした。そんなら福住さんまで乗ってやっておくんなさい。どうせ帰り道なんだから、ただにしておきます」
「せっかくなんですがねえ、あたしはわざわざ腹っこなしに出てきたんです。またこんど乗せてもらいますわ」
「そんなことをいわねえで、腹っこなしにゃ、もってこいのカゴなんでさ。乗っておくんなさいよ。なあ、みんな」
「そうだとも、うまく腹がこなれるようにゆすりやす。乗っておくんなさいな」
そういう間に大の男が三人、三方から逃げ道をふさいでしまった。あいているのは谷川に面した急ながけっぷちだけである。
「おまえさんたち、女だと思って、ばかにすると承知しないから」
おこらしちゃ悪い、こういうやつらは金をやって、おだてるにかぎるのだとよく知っていながら、勝ちっ気だからつい目にかどをたててしまった。
「いい器量だな、兄弟。あのおこった目なんてものは、まったく千両じゃねえか」
前後に人がないと見て、ひとりが急にあくどさを露骨にしてきた。
「目ばかりじゃねえや。腰つきだって千両万両だ。なあ、あにき、早いとこお連れ申して、三人でくじ引きで好きなだけ腹っこなしをおさせ申してあげ奉ろうじゃねえか」
「これ、てめえたちはなんということをいいやがるんだ。おかみさんに変なまねでもすると承

知しねえぞ」
まん中のあにきといわれるやつが左右のふたりをしかりつけて、
「おかみさん、ごらんのとおりの物知らずで、おこらせるとなにをやりだすかわかりやせん。酒手を少しばかしやっておくんなさいまし。やつらをうまくなだめて、つれて帰りやす」
もっともらしくぺこぺこと頭を下げながら、右手を出して進みながら油断を見すまし、その手がいきなりあやめの腕をひっつかもうとする。
「ばかッ」――そこはびんしょうで目はしのきくあやめだから、油断はない。いきなりぴしゃりと相手の横っつらを火の出るようにひったたいておいて、
「やりやあがったな、あま」
かっと組みつきにくるとたん、
「はあッ」――涼しい声といっしょに、あやめのからだが、さっとすそを散らしながら、三間ばかり離れたがけっぷちの松の枝へ、チョウのように飛んでつかまり大きくゆれた。
「わあッ、あぶねえ」
すかをくった雲助は、あやうく谷へ落ちこみそうになって、冷や汗をかきながらやっと踏みとまる。あとのふたりはびっくりして、ぽかんとあいた口がふさがらない。反動を利用したあやめは、もう軽々と松の枝へ腰かけて、両足をぶらぶらさせながら、
「おまえたち、目がつぶれないうちにさっさとお帰り。あたしはこう見えても人間じゃないんだからね。変なまねをするとばちがあたるよ」
と、三人のほうを涼しい目でにらみつける。
「じゃ、おまえはいったいなんなんだ」
ひとりがふしぎそうな顔をする。
「伏見稲荷のお使い姫さ」
源太とそもなれそめに、水道橋で出た縁むすびのたわむれがそれだったので、あやめはおもしろ半分、つい口に出てしまった。

「伏見稲荷のお使い姫——じゃ、おまえもキツネか」
　あやめはわざと黙って、にっとわらってみせた。
「あにき、とうとう出やがったぞ」
　ふたりがなにかぞっとした顔つきになって、横っつらをひっぱたかれたあにき雲助のそばへ寄る。
「そうよなあ。こいつだとすると、いよいよただはおけねえ」
　あにき雲助は凶暴な目で、じっとあやめを見すえるのだ。
「ただはおかねえってどうするんだ」
「熊八のかたきを討ってやるのよ」
「かたきを討つ——」
「あたりめえよ。たとえ伏見だろうが、お使い姫だろうが、キツネなんかにおれたちの箱根を荒らされてたまるもんか。だいいち、人間さまを殺すなんてふてえキツネだ。石を集めろ」
「どうするんだ、あにき」
「たたっ殺してキツネじるにして食っちまうんだ」
　なんだか妙な話になってきたようだ。
「だいじょうぶかなあ」
「こわけりゃてめえたちは見ていろ。べらぼうめ、まっ昼間じゃねえか。石をたたきつけてしっぽが出るかどうかためしてみてよ。しっぽを出しゃこの間のキツネにちがいねえんだ。おれは熊八のかたき討ちに、キツネじるにしてやらなけりゃ承知できねえ。いいからてめえたちは石を集めろ」
「よしきた」
　——あにき雲助が見張りをして、あとのふたりがそこいらじゅうから石を集めはじめた。

離れわざ

　——どうなるんだろう。

　あにき雲助がまたたきもしないでこっちをにらんでいるので、平気な顔はしているが、あやめは内心背筋が寒くなってきた。たとえ松の木をつたわって谷に逃げたところで、石をぶつけられたのでは逃げきれそうもないし、こんなとき逃げて弱みを見せると、こういう連中はよけい乱暴になるものだ。といって、いまさらキツネではない、今のは冗談だから勘弁してくれとはいえないし、またいってみたところで、ただで許してくれる相手ではなさそうだ。
　場所が逃げ場のない急崖へ突き出した松の枝の上だけに、あやめはどうしようもないのである。
「やい、女、キツネならしっぽを出せ」
　あにき雲助は集まってきた石の中から、大きな握り飯ぐらいのやつを二つ取りあげて、掛け合いだした。
「それとも神通力があるんなら、今のうちに消えてみろ——消えねえな。それみろ。いくら伏見稲荷のお使い姫でも、昼間はそんな芸当はできねえだろう。早くしっぽを出せ。正直にしっぽを出して、両手をあわせてあやまれば、次第によっちゃ勘弁してやらねえものでもねえ」
　あやめは返事のしようがない。少しずつ顔が青ざめてくるばかりだ。
「口がきけなくなりやがったな。ざまあ見やがれ、キツネが人間さまよりえらくてたまるもんけえ。熊八のかたきをとってやるから、覚悟しろ」
　あにき雲助は右手の石をさっと振りあげた。距離にしてわずかに三間ばかり、もうだめだと必死のあやめがおもわず松の枝の上へひらりともろ立ちになったとき、
「待った、待った——あぶない」
　大声に叫びながら、坂をのぼりきって駆けつけてきた者があった。のんびりとした着流しで、散歩姿というカワウソ源太である。
「あぶないなあ。おまえがたはあの女をどうし

ようというんだね」
あの人がきてくれた、夢ではないかしら、と思ったとたん、あやめは目まいがしそうになる。
「だんな、あれが女に見えますかえ」
あにき雲助はまだ石の手をふりあげたまま、じろりと源太郎の顔を見る。
「あれはキツネですぜ、だんな」
「この間兄弟分の熊八を食い殺して生血を吸った、伏見の白ギツネでさ。化かされちゃいけませんぜ、だんな」
いいところへ侍がきてくれた、と心じょうぶになったか、ふたりの雲助が口々に説明しだす。あやめがまたキツネのまねをしたんだなと、源太郎にはだいたいの様子がすぐのみこめたので、
「まあ、待ってくれ。あれはキツネじゃない。おれのかみさんだ」
と、わらいながら答えた。
「なんだって――」
雲助どもは顔を見合わせながら、
「いけねえや、あにき。だんなはもう化かされているんだ」
と、ひとりがきのどくそうにつぶやく。
「いや、化かされているわけではない。あれはたしかにおれのかみさんに相違ないんだ。とにかくここへ呼んで、なんでおまえがたをおこらせたか、よく訳を聞いたうえ、おれからも必ずわびをするから、ちょいとその道をあけてくれぬか」
「そんなうまい口を、まさか逃げるんじゃねえだろうな」
兄き雲助は油断なく、じろじろと源太郎のからだじゅうを見まわしている。こいつは源太郎をおすギツネじゃないかと疑っているらしい。
「けっして逃げはせぬ。わしたちはすぐこの下の福住に泊まっている者だ。まあ、かみさんをここへ呼んでから、ゆっくり話をつけるから、ち

ょいとさがっていてくれ」
「おい、みんな石を持て。油断しちゃいけねえぞ」
「がってんだ」
――三人は手に手に石を三つ四つ用意しながら、それでも三方へ少しさがって、いざといえば石の雨をふらせる身がまえだ。
「あやめ、おりておいで――」
源太郎は道ばたへ立って、おだやかに呼んだ。
「行ってもだいじょうぶかしら。そのにいさんたち、あたしを手ごめにするんだといって、とてもこわいんだもの」
安心すると、もうそんな毒舌が出るあやめだ。
「ばかをいいなさい。この人たちはなにかキツネに恨みがあって、おまえがそのキツネにどこか似ているんだろう。だから、手どりにしようとしたんだ」
源太郎はなるべくあばれ者の感情をかき立てないように、うまく取りなしておく。
「そうかしら。あたしキツネじるなんかにされるのいやだわ。あんたからにいさんたちに、よくことわっといてくださいよ」
「いいから早くおりておいで。話さえわかれば、この人たちだって、どうしてもおまえをキツネじるにしようとはいわないよ。キツネの肉はあんまりうまいものではないそうだからね」
のんびりした夫婦のやりとりを聞いているうちに、荒くれ雲助たちの顔から妙な殺気だけは消えていったようである。と見たあやめは、
「はあッ」
――涼しい掛け声といっしょに、あざやかに松の枝から飛んで人前もなくもうひしと源太郎の首っ玉へしがみついていた。
「あんたは、あんたは、ひとりであたしをおいて、今までどこへ行っていたのよう」
まったくあきれかえった女である。

巡礼娘

「ねえ、箱根のキツネって、そんなことほんとうにあったのかしら」

けっきょく、雲助どもに酒手をやってなだめ、源太郎があやめといっしょに宿へかえって、朝飯とも昼飯ともつかぬおそいぜんにつくと、あやめが思い出したようにふしぎそうな顔をした。

「さあ、まんざら作り話でもないんだろうね」

それは仲直りをしてから雲助どもが話してくれたことで、今から半月ほどまえ、この湯本の近くに同じようなキツネ騒動があったのだという。

小田原の雲助で、熊八と禿万(はげまん)が、箱根の関所まで客を送った。その帰りに十八、九とも見える巡礼娘(じゅんれいむすめ)が、ひとりで峠を下ろうとしているのを見かけた。

「ねえさん、帰りカゴだ、安くしておくから、乗ってくれないかね。峠は上りより下りのほうが足を痛めやすいんだ。ほんとに安くしておくよ」

巡礼にカゴをすすめるやつもないが、むろん、からかい半分だったのだろう。しかも、それが、身なりこそ旅のほこりによごれているが、色の白いびっくりするような美人だったというから、あわよくばという妙な野心も手伝っていたにちがいない。

「どうしようかしら」

巡礼娘ははじめ迷っているふうだったが、脈ありと見た熊八は、根よくつきまとって離れようとしない。

「ほんとうに安くしてくれますか」

「安くしておくともよ。どうせ帰りカゴなんだ。ただでもいいや」

とうとう話がきまって、熊八と禿万はその娘巡礼をカゴにのせ、三枚橋の近くまで下ってきた。もう夕暮れである。

「相棒、この辺で一服していこうじゃねえか」

野心のある熊八はそう声をかけておいて、カゴをどんどん松山へかつぎこんでしまった。

もう声をたてても、ちょいと本道まではとどきそうもないところまでもきて、カゴをおろしたが、娘巡礼はうつらうつらしているらしく、別に不審がろうともしない。

「ねえさん、ちょいとここへ出てくんな」

熊八は無遠慮にたれをはねあげて、カゴの中をのぞきこんだ。

「はい」

巡礼はぱっちりと涼しい目をあいて、カゴをおりてきた。

「ここはもう小田原ですか」

「寝ぼけっこなしさ。見てのとおり、ここは箱根の山の中だよ」

「そうでしょうね。小田原にしては寂しいところだと思いましたわ。何かあたしにご用なんですか」

無邪気というのか、大胆というのか、至極あどけない顔だったという。

「実はカゴ賃をここでもらいてえと思ってね」

「おいくらあげればいいの」

「なあに、どうせ帰りカゴだから、金はいらねえ、ただでいいから、そのかわりほんのしばらく目をつむっていてくんな」

「おやすいご用ですけれど、目をつむるとどうなるんです」

「ねえさんのからだが借りてえのよ。人里離れた山ん中だ、いくら声をたてたって、だれも助けにゃきてくれやしねえ。おとなしくおれたちのいうことを聞いたほうがおまえのためだろうぜ」

熊八はもうすっかりけだものの正体をあらわして、じろじろと巡礼のいかにも娘らしいからだじゅうを見まわしている。

「ああわかりました。ふたりであたしをなぐさ

もうというのですね」
「やっとわかったかね。そのとおりだ」
「ほ、ほ」
娘はわらいながら、落ち着いて雲助たちの顔をながめている。驚いて逃げようとでもしてくれれば、いきなり飛びかかってねじ伏せもできるが、こう落ち着き払っていられると、少しかってが違うので、
「わらったところをみると、おまえ、承知なんだな」
と、熊八はもう一度念を押した。
「なんだと――」
「あたしは人間ではありません」
「伏見稲荷のお使い姫です。妙ないたずら気をおこすと、たちどころにおまえたちの命がなくなりますよ」
「なんだってえ」
さすがに熊八は一足うしろへさがったが、どう見てもキツネには見えない。ちゃんとした人間のからだだし、しかも美人の娘だ。
「こんちくしょう、ふざけるねえ。キツネならしっぽを出してみろ」
「無礼なことをいってはなりません」
「無礼もくそもあるもんか。ようし、おれも天下の箱根八里をまたにかけて歩く熊八だ。あいつはキツネを抱いて寝たといわれるのも自慢の一つ、かわいがってやるから、おとなしくいうことをきけ」
むてっぽうと命知らずが自慢の種になる荒くれ雲助のこと、熊八はいきなり巡礼のむなぐらをひっつかんで、ぐいと引き寄せようとした。
「そなたは、命が惜しくないとみえる」
娘はその熊八の松の根のような手くびへ左手はかけたが、別に抵抗はしようとせず、そのまま熊八の胸へ抱きすくめられていった。今はその場へねじ伏せられて、あられもない姿を見せつけられるばかりと、相棒の禿万(はげまん)がごくりと生つばをのみこんだとき、

「あっ――」
熊八は娘を放して、がくんとその場へ棒立ちになった。
「どうした、熊八」
びっくりして顔を見ると、見ているうちにその仁王のような顔から血のけが引き、くずれるようにひざをついて前へのめっていく。
「わあっ、キツネだあ」
禿万はあとをも見ずに、その場を逃げ出してしまったのだという。
「あんた、その娘巡礼はほんとうにキツネだと思う」
あやめは真剣な顔をしているのだ。
「怪しいもんだね。正体はおまえとおなじで、きっと人間の女だろうよ」
「だって、その死んだ雲助のからだには、どこにも傷はないし、当て身をくったような跡もなかったっていうんでしょう」
「ちょうどうまく卒中(そっちゅう)でもおこしたんだろう。日ごろの心がけがよくないから、つまりばちが当たったんだろうな」
ただ話だけでは、源太郎にもそれ以上の解釈はできなかった。
「そうかしら、なんだかおかしな話ね」
「あやめ、おまえはまた、どうしてそうキツネのまねをしたがるんだえ」
源太郎は、あらためてあやめの顔を見た。この女は育ちのうえに、人並みすぐれた芸が身についているから、つい男を甘く見て大胆になりたがる。いつかは大けがのもとだから一度たしなめておこうと考えたのだ。
「ごめんなさい。もうしないから――そんな顔しちゃいやだ」
敏感なあやめは、すぐにそれと察したらしく、いそいではしと茶わんをおく。
「しかっちゃいやだわ。ごめんなさいって、あやまっているんだもの」
「別にしかりやしないが、おれは、おまえのか

らだを心配するからいっておくんだ」
「もうしないっていってるのに——あんたが悪いんだわ」
「どうしておれが悪いんだね」
「あんたが、あたしの眠ってる間に、ひとりでどこかへおいていくから、追いかけていく気になったんじゃありませんか。そしたら、雲助があたしを取り巻いて、いやらしいまねをしそうにするから、つい松の木へ逃げたんだわ。キツネのまねがしたかったんじゃないんだわ」
しかられるのがいやさに、いっしょうけんめいいいわけをしようとする。
「つまり、松の木がそばにあったのが悪かったんだな。もういいからご飯をおあがり」
源太郎は苦笑するよりしようがない。これ以上小言をいうと、どんなひねくれかたをするかわからないあやめだからである。
が、キツネのたたりはそれだけではすまなかった。食事がすんで、ぜんを下げるとまもなく、番頭があわただしくふすまの外へきて、
「ごめんください。こちらはたしかカワウソ源太さまのおへやでございましたね」
ときくのである。

キツネのたたり

「そうだ。はいりなさい」
「へえ」
「なにか用かね」
「はい、ただ今小田原から藤助という目明（めあ）かしの親分がまいりまして、急用でぜひだんなにお目にかかりたいといっていますが——」
「目明かしの親分がねえ」
はてな、長崎屋の一件がめんどうになったのかな、と源太郎はとっさに考えたが、色にも出さず、
「会うから通しなさい」
と、すわりなおした。

思いはおなじなのだろう、はっとあやめがこっちへすがるような目をして、何かいおうとしたとき、
「ごめんなせえまし」
目明かしは番頭といっしょにそこまできていたらしく、もうぬっと顔を出して、敷居ぎわへすわった。四十を一つ二つ出た年輩だろうか、働き盛りといったすばしこそうな男である。
「わしがおたずねのカワウソ源太だが、どんなご用だね」
「申しおくれました。てまえは小田原の藤助という御用の者でござんすが、役めのことゆえ、失礼はお許しを願います」
藤助はていねいに会釈をして、じろりと無遠慮な目をあやめに向ける。
「ご新造（しんぞう）さんでござんすか」
「ああ、家内だ」
「失礼でござんすが、しろうとではないようで」
「これは長崎あやめという女手品師だ」
なまじかくさぬほうがいいと思ったから源太郎は正直に答える。
「だんなは浪人（ろうにん）さんですか」
「うむ、気楽な浪人者だ」
「お住まいは江戸でござんすね」
「さよう江戸両国橘町に仮住まいをしている」
「昨夜はご夫婦づれで小田原の城下へ遊びでござんしたか」
「いや、昨夜はどこへも出ない。宿の者に聞いてもらえばわかるが、夫婦で仲よくここに寝ていた」
「だんなはなにか毛皮をお持ちじゃありませんか」
「いいや、そんなものは持たぬ」
「ちょいとお持ち物を調べさせておくんなさい」
「あやめ、荷物をみんなここへ出してごらん」
荷物といってもあやめの着替えがはいってい

るふろしきづつみ一つきりだ。
「いやだなあ、膚のものがはいっているのに、これひろげるの、源さん」
　あやめはまゆをひそめて、まったく侍の女房にはなりきれない口のききかただ。
「役めのことだ。恥ずかしがることはない。医者だと思いなさい。医者になら、どんなところだってみてもらうじゃないか」
「あたし病人じゃないんだもの」
　あやめはしぶしぶと包みのまま、目明かしの前へ押しやる。
　藤助は慣れた手つきですばやく包みを解き、ばらばらと中を見ただけで、すぐもとのように包みにして押しかえす。
「お世話をかけやした」
「もういいのかね」
「だんな、ご苦労でもこれからおふたりで、てまえと小田原まで行ってもらわなけりゃなりません」
　じろりとふたりの表情を読もうとする。
「役めのうえだというなら、行くほかはないだろうな。しかし、なにがあったんだね、小田原に」
　どうやら長崎屋の一件ではないらしい。事件は小田原におこったのだと見当がついたので、それなら心配することはないと、源太郎はひそかにしゅうびをひらく。
「実はキツネが出やしてね」
　目明かしははじめてにやりとわらって、たばこ入れを取り出した。九分どおりこのふたりは事件に関係なし、と見て取ったのだろう。
「キツネ――?」
　こんどは源太郎がぽかんとする番だ。
「くわしいことはお話しできませんが、ゆうべ小田原の俵屋という宿屋へ江戸から帰る勤番者がふたり連れで泊まったんですがね、そのうちのひとりがゆうべ死んでいた、というより殺されていたのを、連れのかたがけさ目をさまして

気がついて、大騒ぎになった。そのまくらもとのあたりに、キツネの毛が三本ばかり落ちていたんです」
　藤助はまたしてもふたりの顔色をじろりと見くらべる。
「なるほど」
「だんなは半月ほどまえに、この近くであった箱根のキツネの話を聞いていやすか」
「うむ。けさその話は雲助から聞かされたばかりだ」
「あっしはまたその雲助からさっき、けさ湯本へすてきな伏見いなりが出たという話を耳にしたんでさ。おりがおりだから、だれだって飛んできたくなるでしょう」
「無理もないな。で、われわれ夫婦はこれから俵屋へ、首実験につれていかれるわけだね」
　源太郎は察しが早い。
「ご迷惑でも、そうしていただくのがいちばん早わかりでござんすからね」
「わざわざそんなことしなくたって、あたしたちがゆうべここで寝ていたのは、この宿でちゃんと知ってるじゃありませんか」
　あやめはひどく不服そうだ。
「いや、そこが伏見いなりの神通力でね。寝ていると見せて、その実窓から飛び出し、小田原で一仕事して、また窓から帰ったのかもしれない、と親分は役めのてまえ、一応は考えてみなければならんのさ――そうだろう、親分」
「念には念を入れってことがありますからね」
　目明かしはさすがに苦笑している。
「キツネの毛が三本というのはおかしいねえ、親分」
「おかしゅうござんす」
「どんな死に方、というより殺され方をしていたんだね、被害者は」
「おとなしく寝たままのかっこうで死んでいます。傷というほどの傷はどこにもない。ただ右の手くびに、針で突いたほどの傷があって、その

まわりに天保銭ほどの紫色の斑点が出ている。それで毒殺じゃないかとわかったんで――」
「連れのかたは、まくらを並べていて、朝まで知らなかったという話だったね。取られたものはなんだね」
「それが、取られたものはなんにもないんだそうです。なるほど死人の胴巻きはふとんの下にあって、金もそのままのようです」
「連れの男はどうしたね」
「江戸の藩邸へ急使を走らせて、人のくるのを待っています。腹を切りやしないかという心配があるんで、それとなく人がつけてあるんですがね」
「遺恨か、それとも箱根のキツネのたたりか――どうも、そのキツネの毛というのが、やっぱりくせものだな」
　ということは、犯人は箱根のキツネの話を知っている者、ということになりそうだ。
「よろしい。われわれ夫婦もキツネにまんざら因縁がないともいえないのだから、いっしょに行ってみよう。その連れの男というのに会ったら、またなにかわかるかもしれない」
　あんまり奇妙な殺人事件なので、自分たちにけんぎのかかっていることなどはつい忘れて、源太郎はすっかり乗り気になってしまった。
「いやだなあ、あんたは。そんな物好きなまねをして、もしあたしたちまで箱根のキツネにたたられたらどうする気なのよう」
　あやめはいよいよまゆをひそめるばかりである。

目明かし根性

　まもなく三丁のカゴが湯本から小田原へ飛んだ。先頭が源太郎で、中があやめ、最後が目明かしの藤助である。その前後を藤助の子分たちが三人、わらじがけで走っていく。
　カゴが小田原の城下へはいって、俵屋の店先へおりたのは、まだ明るい夕方だった。
　俵屋は店で変死人が出たのだから、むろん大戸をおろして、きょうはかぎょうを休んでいる。
　くぐりから店へはいると、被害者が主持ちの侍だから、小田原藩からも藩士が数人詰めて、足軽が表裏をかためていた。
　死がいはすでに棺におさめられて、二階の現場から離れの一間へ移され、連れの男だという若い侍と、俵屋の番頭がひとり、ふたりで棺を守っていた。香の煙が立ちこめて、変死人だけにへやはなんとなく薄暗い感じだ。
「斎藤さん、このふたりの顔に見おぼえがありませんかね」
　先に立ってへやへはいった藤助が、無遠慮に若い侍に声をかけた。
　――そうか、おれたちにもけんぎがかかっていたんだっけな。
　うしろからつづく源太郎は、それを思い出して、苦笑しながら、若侍と顔を見あわせた。
「やあ、建部――」
「なんだ、新吉じゃないか」
　同時に声が出て、はっと互いに目をみはった。斎藤新吉とはいとこ同士の源太郎である。
「おどろいたなあ。いったいだれだ、ゆうべ殺された連れというのは」
　源太郎にとって、もうこの事件は他人のことでなくなってしまった。
「中村市之進なんだ」
　これもよく知っている。国もとの城代家老のおいで、腕も立つし、少し堅すぎるほどのりちぎ者だった。
「申しわけないことをしてしまった」
　新吉は苦しそうに吐息をもらして、下を向いてしまう。源太郎は江戸育ちだが、新吉と市之進は国者で、親友の間がらだっただけに、まくらをならべて寝ていながら、その親友の殺害されるのも知らずに眠りこけていた不覚が、いまさ

らのように骨身にこたえるのだろう。
なるほど、この分ではいつ腹を切らないともわからない。
「殺害というのはたしかなのかね」
むだだとは知りながら、源太郎はもう一度当人の口からそれを聞かずにはいられなかった。
「うむ」
新吉はうつむいたままはっきりとうなずいて、日ごろ兄のようにしている源太郎に出会って気がゆるんだか、ぽたりとひざへ大粒の涙を落とす。
「ご存じのかたですかえ」
目明かしの藤助がいささかあっけに取られた形で、横から口を出す。
「わしはついこの間子細あって主家を浪人したが、この斎藤新吉とは同藩のいとこ同士、棺の中の中村市之進とも友人の間がらだ」
「ふしぎな縁というやつでござんすね。して、だんながご浪人をなすった子細と申しますと――」
なるほど、これが目明かし根性というやつだろう。その子細によっては、市之進に遺恨を含むこともありうると、とっさに疑ってくるのだ。
「わしがつれている家内を見れば、浪人した子細はおよそ見当がつくではないか。聞くだけやぼというものだ。ただし、こうなってはわしもあとへは引けぬ。必ず下手人をあげるまではここを動かぬ覚悟だし、あすあたりは藩からもだれかくるはずだ。わしが浪人したくわしい理由は、その藩の者から聞いたほうがたしかだろう」
浪人はしても、主名がわかったからには源太郎も武士だ、目明かしごときにいちいちさしずされるのは、ひいては主家の恥辱にもなることだから、ぴしりと一本やりかえしておく。
藩士の身分は、藩がさばいてくれる。目明かしや町方の干渉はうけないのだ。

あやめがびっくりした目をして、源太郎の顔をながめている。

ねらわれた密書

「番頭、しばらく別室が借りたい」
殺されたのは同藩の友人で、その道づれはいとこの斎藤新吉とわかっては源太郎ももう他人のこととして傍観しているわけにはいかなかった。
それに、棺のふたをとって、ひととおり中村市之進の死がいを見せてもらい、右の手くびの針でついたほどの傷あとと、そのまわりに出ている紫色の斑点をたしかめながら、ふっと思いついたこともある。源太郎は一度新吉とふたりきりで話してみる必要があると考えたのだ。
「あやめ、おまえはここで待っておいで。親分とふたりなら、こわいことはないだろう」
「いやだなあ、あたし――」
別にこわくはないが旅先だし、しばらくでも源太郎のそばから離れたくないあやめだった。
「すぐすむのだから、そんなわがままをいってはいけない。――新吉、いっしょにきてくれ」
源太郎はかまわず新吉をうながして、棺のおいてあるへやを出た。あやめをつけておけば、目明かしの藤助も中座するわけにはいかないから、立ち聞きをされる心配はあるまい。そんなことまで計算に入れている源太郎だった。
「こちらでよろしゅうございましょうか」
宿の番頭がふたりを案内してくれたのは、裏階段をおりたすぐの座敷で、ちょうど今いた棺の座敷の下にあたっているようだ。
「けっこうだ。しばらく借りるぞ」
あたりはもう夕暮れていつもならこれからはたごは泊まり客でごったがえす時刻だが、俵屋はきょうかぎょうを休んでいるので、どのへやもがらんと無気味にしずまりかえっている。
「新吉、さあふたりきりになった。ほんとうの

ことを話してみろよ。及ばずながら、おれのできるだけは相談相手になってやる」

番頭が去ってから、源太郎はあらためて切り出した。

同じへやにまくらを並べて寝ていながら、連れが殺されるのをまるっきり知らずに眠っているということは、めったにありえない。

だいいち、下手人のほうから考えてみて、ふたり寝ているへやへ、ひとりの目をさまさないように、ひとりを殺しにはいる、まえもってなにか細工でもしておかないかぎり、とてもそんなまねはできないはずだ。しかも、下手人は金や品物が目的ではない。とすれば遺恨か、――いったいなんのためにキツネの毛を三本残して、キツネのしわざと見せかけようとしたか。この事件は表面から見ただけでは、まったく奇っ怪な殺人というほかはなくなる。

なにかわけがある。新吉はそれを知っていて、人にいえないでいると、源太郎はにらんだのだ。

「どうだ、新吉、話してみぬか」

「源さん、わしは武士にあるまじきことをしてしまった。なんにも聞かずに腹を切らせてくれ」

がっくりとうなだれたっきりの新吉の顔は、苦悩にゆがんでいるようである。

「市之進はなにかたいせつな、手紙のようなものでも持っていたんじゃないのか」

源太郎はかまわずつっこんでいく。遺恨ででもないかぎり、人ひとりを殺して、なにもとっていかないというはずはないのだ。

「うむ、実は市之進がたいせつに膚身につけていた密書がなくなっているのだ」

新吉がびっくりしたような顔をあげる。

「ねらったのは十八、九の、きれいな女狐(めぎつね)じゃないのか」

「ど、どうして源さん、それを知っているんだ」

明らかに新吉はろうばいしたようである。

「ずぼしらしいな。きみはゆうべ、その女狐に誘惑されて、まくらをならべて寝た市之進がいびきをかきだしてから、そっとへやを抜け出して、女狐のところへ忍んでいったろう。へやとへやとの位置から見て、わしはこの座敷のように思えるが、どうだ違うか」

「わしは恥ずかしい」

「女狐はたぶん愛情こまやかにきみを持てなしてくれたことだろう。と見せかけて、実は密書を持っていないかと探ってみた。が、きみはそれを持っていない。きみが持っていなければ市之進だということになる。女狐は手洗いにでも立つふりをして、このへやを出た。すぐそこの裏階段をのぼれば、そこに市之進が、ひとりでぐっすり寝こんでいる。毒針で殺して、難なく目的の密書を手に入れ、澄まして自分のへやへ帰った。まもなくきみは女狐と別れを惜しんで座敷へもどってみると、市之進はなんにも知らずに眠っているようだ。しすましたりと、自分のふとんへもぐりこんで寝てしまったが、眠っているとばかり思っていた市之進はけさ目をさましてみると死んでいた。そして、むろん女狐は早立ちをしてしまったあとだった。ざっとこんなところかな」

まるで見ていたようなことをいう源太郎だ。

「源さん、きみは、きみはあの娘を知っているのか」

日ごろは道楽っけがあって、小才のきくほうの新吉だが、あまりにもずばりといい当てられたらしく、まったくどぎもをぬかれたような顔をしている。

「いや、実物を見たことはないが、わざとキツネの毛を残していった小細工からみて、たぶん箱根の女狐だろうと見当をつけたまでだ」

「なんだ、その箱根の女狐というのは――」

「その話は、妙ないきさつからおれもけさ耳にしたばかりなんだがね」

半月ほどまえに、江戸へ向かうきれいな巡礼娘が、小田原の雲助に関所あたりからむりにもどりカゴにのせられた。松山の中へかつぎこんで、雲助どもが手ごめにしようとすると、自分は伏見いなりの使い姫だと名のり、なおもひとりがせせら笑って抱きすくめにかかると、そいつはばちが当たってころりとそこへ即死してしまった。

「つまり市之進がやられた伝とおなじじゃないかと思う。よく見ればその雲助の手くびにも、針で突いたほどの傷と、紫色の斑点が出ていたはずだが、雲助はからだいっぱいにほりものをしていたんで、役人もうっかり見落としたんだろうな」

そして、源太郎はけさあやめが、湯本でその女狐にまちがえられたことを、わらい話にして聞かせた。思い詰めている新吉の気持ちを、少しでも解きほぐしてやりたい心づかいからであった。

「しかし、こんなところで源さんに会おうとは、思いがけなかった」

「しかも、女房までつれてね」

「うむ。あやめ太夫(だゆう)の曲芸は一度誘われて、両国へ見に行ったことがあるんで、おやと思ったんだが、源さんもなかなかすみにおけないんだな」

新吉の顔にやっと微笑らしいものがうかんでくる。

「そうか。するときみも、家内のごひいき様のひとりなんだね。毎度ありがとう」

「くわしいことは知らないが、源さんはお納戸(なんど)金(きん)の帳じりがあわなくて、その責任から脱藩したように聞いている。つまり、つかいこんだ百両というのは、みんなあやめ太夫につぎこんだってわけかね」

「いや、わしは金などで女のきげんはとらない。ほんとうのことをいえば、わしはあやめの舞台さえまだ一度もみたことがないんだ。百両

のつかい道はちゃんと別にある」

たとえどうそれを流用したにせよ、無断で主家の金をつかっておいて、そんな女芸人などといっしょになっていることが藩に知れれば、とうてい無事にはすむまい。にもかかわらず当人は平気でいばっているのだから、新吉もいささかあきれているようだ。

「だいじょうぶか、源さん。気をつけないと、やっぱり疑われそうだな」

「おれのことは、まああとでいい。それより新吉、女狐にねらわれた密書というのはなんだ。その正体をきみは知っているのか」

人の心配をするだけ心にゆとりができれば、もうよかろうと見たので、源太郎は話をもとへもどした。

切支丹(キリシタン)騒動

「それが、絶対に人に話せない秘密なんだ」

当惑したように、新吉はまたしてもうなだれてしまう。

「それは密書というくらいだから、秘密にはちがいないだろうが、しかしきみはその秘密のために、いま死か生かの岐路に立っているんじゃないのか。武士としてあくまで秘密を守って、黙って死んだほうがいいか、それともわしに一応打ち明けてみて、その密書を取りもどす努力をしたほうが賢明か。それはきみの判断良識に任せるほかはないが、いったい市之進の持っていた密書というのは、とられっ放しにしておいても、人に迷惑はかからない性質のものなのか」

「いや、できれば密書はぜひ取りもどさなくてはならないんだ」

「それみろ。だから、どうせ死ぬ命なら、一応おれに相談してみてからだっておそくはなかろう。どうだ」

そこまで問い詰められて、新吉はやっと決断がついたらしい。

「源さん、いまおれが打ち明けることは、けっして口外しないと誓ってくれるか」

「建部源太郎は男だ。しかもきみとはいとこ同士じゃないか。あんまり妙なことをいうと、憤慨するぜ」

わざと開きなおってやると、さすがに新吉も気がついたらしく、

「悪かった。ひととおり話すから、聞いてくれ」

と、すわりなおった。

今から十年ばかりまえに、作州津山の城外に切支丹騒動という事件があった。

事の起こりはそれからもう十年ほどまえに、中原村の郷士田部郷右衛門の屋敷へ、武州高尾の行者だと称して、光善と名のる山伏しがわらじをぬいだ。四十を出たくらいな仁王のような男だったそうだが、この光善が加持祈禱をすると、ふしぎにたいていの病気はなおるといううわさがたって、田部の屋敷の内へ真光院という堂を建て、真光教という一派を起こして、約十年の間に数千の信者を集めた。

信者の中には津山藩の侍も大半加わっていたようだから、光善という男はよほど怪物だったのだろう。

一例をあげると、光善は加持祈禱をたのまれてもけっして礼金をむさぼらない。病気がなおった者は、自分の志だけ本尊の前へ供物をささげてくれればいいのだ。

が、日ごろ説教をして、病というものは必ず欲から発するものだ、死病だけは人間の持って生まれた寿命で、どうすることもできないものだが、そのほかの病は欲さえ捨てればきっとなおるものだと、吹きこんでおく。だから病気がなおった者は、いちばんたいせつな家宝を供物にする。そうしないと、せっかくなおった病気がまた再発するというわささえたったくらいだ。

こういう手段で、真光院は十年の間に数万両の財宝を集めた。そのくせ光善は人に無欲を説

くくらいだから、衣食住にまったく欲がなく、年中もめんの白衣でとおし、酒や魚肉はいっさい口にせず、むろん女は近づけない。信者から生き仏のようにあがめられるのは当然だった。

そして、真光院に集まる財宝をすべて管理し、生き仏さまの身のまわりの世話をするのは主人の田部郷右衛門で、郷右衛門はいつの間にか光善の家老役という位置になっていた。

しかし、あまりにも真光院が隆盛を窮めてくると、ねたむ者が妙なうわさをたてはじめた。光善の守り本尊としている不動明王は、まだ一度も開帳して見せたことがない。あれは不動尊ではなくて、おそらく切支丹仏だろうといいだした者がある。

それがだんだんひろまってくると、藩でも捨てておくわけにいかないので、時の町奉行西原勘兵衛が藩命をうけて、ある朝ふいに真光院を急襲した。が、光善も郷右衛門夫婦も前夜のうちにすでに逃亡していたのは、藩士の信者の中に早くもこれを密告した者があったからだろう。

むろん問題の守り本尊は光善が持って逃げたから、はたして不動尊だったか切支丹仏だったか、いまだに真偽のほどはわからない。しかし、不動尊なら夜逃げをする必要はなかろうから、やはり切支丹仏だったのだという説が信じられて、今でも切支丹騒動と呼ばれている。十年まえの話だ。

「そのとき、真光院には相当の財宝がそのまま残っていて、これは田部の屋敷といっしょに藩で没収したが、金はほとんどなかった。そんなはずはない、この十年間に、ずいぶん金も集まっているはずだし、郷右衛門はたびたび京大阪から商人を呼びよせて、目だたぬように品物を金に替えていたというわさもある、ことによると屋敷のどこかに埋めてあるのではないかという者もあったが、まさか藩で掘らせてみるというのも世間体があるから、そのままになってい

たんだ」
ところが、このごろになって武州八王子在から光善の弟だという男が、突然城代家老大巻監物をひそかにたずねてきたのだという。
用件は、兄光善は先年八王子在へ帰ってきて病没した。これはけっして切支丹でもなんでもなく、文字さえろくに書けない無学の山伏しだった。これが当地へきて十年の間生き仏とあがめられるに至ったのは、時の勢いとでもいうか、まったくの偶然と、田部郷右衛門のかげからの抜けめのない協力が成功したにほかならない。
では、なぜあのとき町奉行の取り調べをきらったかというと、第一に光善は自分の無学が信者に知れることを恐れた。それが知れれば、いつか生き仏からただの山伏しに下落してしまうのは当然だし、この辺がもう潮どきだと見たのと、そのころには黒幕の郷右衛門がだんだん増長してきて、金づかいが荒く、京大阪にまでめかけを持つようになった。光善としては、それにも不満があったので、いっそこの機会にと、事前に身をひいてしまったのだという。
その光善が死にぎわに弟にいいのこしていったのは、真光院へ集まる財宝は、始めから郷右衛門と山分けという約束だったので、田部はそれを湯水のごとくつかっていたが、自分の分は毎年屋敷内のほうぼうへ、ひそかに埋めておいた。それが千両箱にしておよそ百近く、十万両には達しなかったが、九万何千両かはあるはずである。
そのおぼえ書きを二枚の図面に作り、一枚は自分が守り刀として差して歩いた備前兼光のわきざしのさやの中に入れてある。もう一枚はこれと対の大小になっている大刀のほう、相州貞宗のさやの中へ入れておいたが、逃亡の夜これは蔵から持ち出すひまがなかったので、今は藩の蔵の中へおさまっているだろう。この二枚をあわせると、金を埋めた場所がわかるから、おまえの才覚でなんとかしてみるがいいという遺

言であったという。
「光善の弟というのはもう四十近い百姓で、助五郎というやつだが、その兼光のわきざしを持ってきて、さやの中から出たという図面をご城代さまに見せたそうだ。そして、もしほんとうに金が出たら、半分は藩へおさめるから、半分だけはわたくしのものという約束で、田部屋敷を掘らせてくれぬか。それにはどうしても、もう一枚のほうの図面とあわせて見なければならぬ。はたして貞宗の大刀が藩の蔵に没収されているかどうか、まずこれを調べてもらいたいと、ご城代さまにたのみこんだそうだ」
新吉の話はいよいよ本題へはいってきたようである。
「そこで、ご城代さまが市之進とわしを呼んでいうには、見ず知らずの百姓のいうことだから、あまりまともには取りあげられないが、もし事実田部屋敷から十万両近い金が出たとすれば、大いに藩の役にもたつことだ。その貞宗の大刀というのは、たしか先年没収して江戸屋敷の宝物蔵におさまっているはずだから、おまえたちが行って秘密に調べてこい。しかし、これは事実金が出るまでは、だれにも絶対に秘密だぞ。武士ともあろう者が、百姓のたわごとを真にうけて、とんだ人騒がせをやったとなると、お家の面目にもかかわることだからなと、くれぐれもいいつけられてきたんだ」
そこで、市之進と新吉はただちに出府して、なんとか口実を設け、宝物蔵の貞宗を見せてもらうことに成功した。さやを割ってみると、なるほど小さく折りたたんだ雁皮紙の図面が出てきたので、市之進がこれを守り袋の中へしのばせ、ふたりはおととい江戸を立った。
その日の泊まりは程ガ谷で、昨夜が小田原、その小田原への途中、大磯あたりから老僕をひとりつれた十八、九の旅の武家娘と道づれになった。声をかけたのは、むろん道楽っけのある新吉のほうで、物堅い市之進はたいせつな図面を

持っていることではあり、虫が知らせるとでもいうか、あまりいい顔はしていなかったという。
「いまさらこんなことをいうのは、ちょいと気がひけるが、はきはきとした娘でね、どこへ行くんだと聞くと、実は継母と折りあいが悪いので、三島のしんせきのもとへ行くところだという。それが小田原へはいる時分には、すっかり打ち解けた話しぶりで、どうもわしに気があるとしか思えない。おりいって相談したいことがあるから、ぜひ今夜ふたりきりで話を聞いてくれぬかというところまでいってしまったんだ。あとはだいたい源さんの想像どおりだ。わしは死んだ市之進に対して、なんとも申しわけないことになってしまった」
しょうぜんとうなだれてしまう新吉である。

事件の奥

「すると、その田部屋敷の埋蔵金の秘密を知っているのは、八王子在の百姓助五郎、ご城代大巻監物どの、市之進ときみの四人、おれは別として今のところそれだけなんだな」
源太郎のことばはなんとなく鋭い。いたずらに新吉の立場に同情しているより、この怪事件の真相を突きとめるほうが先だと考えたからである。
「うむ。源さんを入れて、今のところ五人だけだ」
この気迫に押されたように、新吉もしゃっきりと顔をあげる。
「百姓助五郎は、いまどこにいるんだ」
「ご城代さまの屋敷に泊めてある」
「きみはその雁皮紙の図面というのを見たんだろうな」
「どんな図面だったね」
「助五郎が持っているほうは見ていないが、江戸屋敷から出たほうは見ている」
「それがまったく小ばかにされたような図面

で、一枚の紙の上のほうへ北、下に南とへたな字で書いてあって、あとは右肩に小さな丸が一つ、左下に十文字が一つ、ただそれだけしか書いてないんだ」
「符号だな。おそらく助五郎の持っている図面の上へ重ねると、埋蔵金のあり場所がわかるようになっているんだろう。中原の田部屋敷は何千坪ぐらいあるんだ」
「さあ、三千坪ぐらいはあるだろうな」
「藩で管理しているのか」
「うむ。なにしろ問題の屋敷だから、そのままにして人の出入りは禁じ、足軽が交替でるすばんにあたっている」
「田部郷右衛門は、切支丹騒動のあったとき、いくつぐらいだったんだ」
「光善とおなじ年ごろだから、五十ぐらいだったろう」
「女房は——」
「三十八、九だったろう」
「美人だったか」
「うむ、美人だった。郷右衛門という男は器量好みで、そのほうもなかなかな達者だったらしいからね」
新吉はなんだっていまさらそんなことを聞くんだというような顔をしたが、
「おれもその女房をたびたび見たことはあるが、しかし、あやめ太夫ほどじゃなかったな」
「ありがとう。あれは特別だからね」
と、女の話になると、つい冗談が口に出る。
源太郎は悪びれずわらって受けながら、
「ゆうべの娘とはどうだ」
と、いきなり切りかえす。
「さあ、どっちかなあ」
苦笑しただけで、はっきりいいたがらないところをみると、これもすばらしい美貌だったにちがいない。
「田部夫婦には子どもはなかったのかね」
「娘がひとりあったはずだ。その時分まだ十に

はなっていなかったろう」
「その後田部夫婦の消息はいっさいわかっていないのか」
「だれも知らないようだ」
「ご城代さまも光善の信者だった、そんなうわさはないかね」
源太郎がとっぴなことをいいだす。
「まさか、ご城代さまはそうでもなかろうが、あの時分病人が出ると、家じゅうでもよく光善に祈禱をたのむのが流行していたからね、奥方さまのほうは松丸さまがハシカのとき、たしか信者になったことがあるはずだ」
監物の夫人は先君駿河守の妹君にあたるので、一藩では尊敬して奥方さまと呼ぶ例になっていた。
「新吉、ゆうべの娘は、たった四人しか知らない図面の秘密を知っていて、それをねらった、いったいだれがねらわせたときみは考えるね」
「それがおれにはどう考えてもわからないんだ」
「きみでないことはたしかなんだろう」
「おれが自分で墓穴を掘るはずはないじゃないか」
「むろん死んだ市之進がねらわせるはずはないからな」
「市之進はそんな秘密をけっして口外するような男じゃなかった。死者のために、これだけはおれが断言する」
新吉はいつの間にかきちんとすわりなおしていた。
「すると、あとに残るのはご城代さまと、百姓助五郎のふたりということになるな。きみはどっちを取る」
「しかし、たとえば助五郎がもう一枚の図面を手に入れたとしても、田部屋敷は藩で管理しているんだ、かってに掘るわけにはいかないし、たとえ掘っても十万両からの金を、人目につかず運び出すということは不可能だ。そんなばか

なまねをするはずはないと思うがなあ」
「もしご城代さまがそれを手に入れたとすればどうなるね」
「なんだって——」
「助五郎をだまして、もう一枚の図面をまきあげる手もあるし、めんどうなら斬ってしまえばいちばん早い」
あっと新吉の顔色が変わってきた。
「と、きめてしまうのはまだ早い。助五郎のほうからいえば、ご城代さまをだまして、自分の図面を売りつけるという手があるんだ。この場合は、田部屋敷の埋蔵金一件はすべて作りごとということになるんだ」
「しかし、現にねらわれた図面は、江戸屋敷の宝物蔵の刀のさやの中から出たんだぜ」
「その貞宗の刀は、十年まえには光善の手もとにあったということを忘れちゃいけない」
「教えてくれ。おれにはわからなくなってきた」
新吉はついにカブトをぬぐほかはなかった。

甘い夫婦

その夜、源太郎は今から湯本へ帰るのもたいへんなので、俵屋の番頭に案内してもらい、そこから四、五軒先の角倉屋というはたご屋へ一泊することにした。
あやめのきげんはあんまりよくない。つまらないけんぎをかけられたり、長い間目明かしなんかといっしょに、おもしろくもない変死人の座敷へほうっておかれたりしたからだろう。
「あやめ、どうしておまえそんなにふくれているんだえ」
源太郎は清め酒の杯をあやめにもさしてやりながら、ごきげんをとるように聞いた。
「しようがないわ。どうせあたしはおかめなんだもの」
「そんな遠慮をしなくたっていいよ。さっきも

新吉が、おれには過ぎた美人だって、うらやましがっていたんだ。あれは両国へたびたびおまえの舞台を見に行ったそうだよ」
「せっかくだけど、あたし、あの人虫が好かない」
にこりともしないあやめだ。
「どうしてだろうな。別に失礼なこともいわなかったようだがね」
「それだってきらいなんだからしようがないわ」
いじっぱりな女だけに、一度へそを曲げだすと、なかなかごきげんがなおらないのだ。
これをまた承知で女房にした源太郎なのだから、まだ一度もそんなことでおこったりしかったりしたことはない。もっとも、いっしょになっておこったりすねたりしていたら、のべつ幕なしに夫婦げんかをしていなければならないだろう。つまり、あやめはときどき子どもにかえるが、源太郎はいつもおとなのだ。
「あの人、女に甘いでしょ」
あやめが妙なことをいいだす。
「へえ。さては新吉のやつ、おまえにそっと色目でも使ったかな」
「そんな失礼なことしたら、ぶんなぐってやるわ。そうじゃないけど、なんだか女好きそうだもの」
たしかにずぼしだ。
女に甘いからこんどのような事件がおこってしまったのだが、
「いや、男はだれだって、女好きさ。女のきらいな男なんて、めったにないよ」
と、源太郎は新吉のために弁解しておく。
「じゃ、あんたもそうなの」
「ばかだなあ、おれだっておまえといつの間かいい仲になっていたじゃないか。あれは駒形の船宿の二階でだったたな」
「いやな人――」
ふいをつかれて、あやめはさすがにどぎまぎ

と赤くなりながら、二の句がつげなくなってしまった。
「ずうずうしい男さ。おれはおまえにぶんなぐられるのを覚悟で、黙っておまえのふとんへはいっていったんだからな」
「いやだったら、そんなこといっちゃ」
あやめはいそいで両手で耳をおさえ、ついでに目をふさいで、じいんと胸が甘くなってくる。そうされたことが、この人だけにはちっともいやではなく、そのくせからだじゅうがかたくなって、いっしょうけんめい背中を向けているうちに、ぽーっと気が遠くなってしまっていたのを、今でも忘れられないからだ。
そっと目をあけてみると、源太郎はもう澄ました顔をして、あいた杯にひとりで酒をつごうとしている。
あやめのすばやい手が、さっとそのちょうしをひったくって、
「はい、お酌――」
と、これも澄ました顔だ。
「おかみさん、どうもありがとう」
「どういたしまして」
どっちからともなく顔を見合わせて、にっこりわらってしまうのだから、もし人が見ていたら、あんまりばからしくて、おもわずちぇッと舌打ちの出るところだろう。
「少し相談があるんだがねえ」
改まって源太郎が切り出す。
「なあに」
「あの男は、おれのいとこにあたるんだ」
「でも、あんたは女好きじゃないからだいじょうぶよ。どうしてこう冷淡なのかしらって、あたし恨んだことさえあるんだもの」
あやめはどうしても新吉とはいっしょに見たくないらしい。
「まあ、おれはたいてい女では失敗しないつもりだが、いとこのやつは、どうやらそれで失敗してしまったらしいんだ」

連れそう女房にまで隠すこともないので、源太郎はさっき新吉から聞いた話をあらまし話して聞かせて、

「さて、そうとわかってみると、事は旧藩の問題だし、身内がそれにからんでいる。おれはどうしても一度作州津山まで行ってこなければならないんだ。そこで、おまえなんだがねえ」

と、いいかけると、

「あたし、あんたの行くところへなら、どこへだっていっしょに行きます。ひとりで残っているなんてまっぴらですからね」

あやめは先まわりをして、ずばりといってのけるのだ。

「そうかなあ。おれはその人殺しの女狐を退治に行くんだよ。もしまちがって、たたりがおまえにくると取りかえしがつかないと思うんだがねえ」

「かまわないわ。あんたは強い男なんだもの。そんなたたりなんかに負けるもんですか」

平気でわらっているのだから、始末におえない。

考えてみると、江戸にはまだ浦上半兵衛や神尾主膳の目が光っているのだから、ひとりでおいていくのも心配には心配なのだ。それに、普通の女とは違って、旅なれているし、荒修業で鍛えてあるからだだから、その点はそう足手まといになるようなこともあるまい。とすれば、いっそいっしょに連れていくほうが、安心ということになってくる。

「じゃ、いっしょに行くことにするか」

あやめは、あたりまえじゃありませんか、というような顔つきで、

「それであんた、その女狐が、ご家老さまのまわし者か、助五郎の手先か、もう見当がついているんですか」

と、この女らしい好奇の目を向けてくる。

「さあ、それは向こうへ行ってみないと、まだどっちともいえないねえ」

「女狐にたぶらかされた、女好きのあんたのいとこさんは、無事にすむのかしら」

「いや、その女狐のことを知っているのは、今のところ当人と、おれたち夫婦だけだ。新吉としては、むしろ、腹を切りたいところだろうが、それでは役めがすまない。万事はこの奇怪ななぞを解いてのうえでないと、犬死ににななる。だから、おれがいっしょに津山へ行ってやることにしたんで、死んだ市之進はきのどくだが、当分急病死ということにして、藩の手でかたづけてもらうよりしようがないんだ」

「あら、じゃあたしたち、あの人といっしょに旅をするの」

あやめはよっぽど新吉をけぎらいしたとみえて、またしても不服そうな顔をする。

「藩の検死はおそくもあさっては小田原へ着くだろう。おれたちはあすここを立って、三島で待ちあわせることにしてある。なあに、いくら新吉が女好きでも、おまえのおへそをねらうようなそんなばかなまねはしないさ」

「ふーんだ。そんなまねをしたら、あんたのいとこだってなんだってかまやしない、両方の目玉をかんざしで突きとおしてやるから」

「いいとも。新吉にもよくそういっといてやろう。おれのおかみさんは気が強いから、変な気はおこすなってね。もっとも、あれもゆうべの女狐で、女はもうこりごりしているだろうがね」

源太郎はそんなのんきなことをいって、恋女房をからかいながら、いずれ女狐とのいくさは津山へ乗りこんでからだと、そのときは簡単に考えていた。が、事実はそんなやさしいことではすまなかったのである。

おひかりギツネ

夜食をすませて、あすは箱根八里を越えなければならない。そのまえに、湯本の宿へ寄って、

払いをすませていかなければならないし、ここは一番立ちにしようと相談がきまり、朝が早いからまもなく床につくことにした。
　ここは二階で、かわやは裏階段をおりたところにある。あやめは長ジュバン一枚になってから、ふっと用たしに出ようとした。そういうところは女芸人の奔放さで、まだどうも侍の女房にはなりきれないあやめだ。
「あやめ、羽織をひっかけておいで」
　先に床についていた源太郎が、わらいながら注意をする。
「いまそうしようと思っていたのに、いやだなあ、いちいちそんな恥ずかしいことをいっちゃ」
　負け惜しみをいいながら、羽織をひっかけて、暗い裏階段をおりていくと、かわやの柱の前に掛けあんどんがかけてあって、ぼーっと黄ばんだ光がただよっている。
　なにげなく用を足してかわやを出たとたん、その階段のかげから、ふいにすっと出てきた老婆がある。なにかの行者でもあろうか、白衣を着て、白い手ぬぐいをかぶり、とろんとした目をじーっとあやめに向けた顔が、どう見ても鍋島のネコに似ている。ずいぶんきもったまはすわっているほうのあやめだが、ぞっとしておもわず一足さがってしまった。
「おかみさあん――」
　低いしゃがれた声で呼びながら、老婆はぬーっと顔を突き出し、
「あぶないことはやめるこっちゃ。西のほうへ行くとキツネのたたりがある。ご亭主さんにもすすめてな、箱根を越えてはならねえだ」
　まるっきり表情のない顔で、しわだらけのくちびるだけがもぐもぐと動く。
　あやめはただ目を大きくみはったまま、心臓が止まりそうで、声さえ出なかった。
「おひかりギツネのたたりはこわいでな、よくおぼえておきなされ」

　老婆はそのまま音一つたてず、いまあやめが出たばかりのかわやへ、すーっと消えていく。あやめは夢中で、四、五段一飛びに階段を駆けあがったが、
　――負けるもんか、あたしだって天下の長崎あやめじゃないか。
　むらむらっとそんなむほんぎがおこって、立ち止まった。正体を見とどけてやろうと思ったのである。
　が、老婆の消えたかわやはひっそりとして、物音一つしない。なんとも無気味で、胴ぶるいがやまず、
　――そうだ、いっそあの人を呼んでこよう。
　ふっとその気になったので、足音をたてないように、残りの階段を二段ずつ飛びあがり、自分のへやへ駆けこんだ。
「あんた、早くきて――」
「どうしたんだ」
「なんでもいいから、早くきてってば」
「お化けでも出たのか」
　源太郎はわらっていて、起きあがろうともしない。
「早くしなくちゃ、お化けが逃げちまうじゃないか。じれったいな」
「まあ、落ち着け。日本一のあやめ太夫が、そんなまっさおな顔をして、あわてていると、人さまにわらわれるぜ。気のきいたお化けなら、今から飛んでいったって、もうとっくに消えていらあね」
　なるほど、そういわれてみればそうにちがいない。それがお化けでなければなおさらのこと、わざわざつかまるまでかわやに待っているはずはないだろう。
「ああこわかった」
　あやめはおもわずそういいながら、ぺたんと源太郎のまくらもとへすわってしまった。
「どうしたんだ。しっかりしろよ」
　源太郎はやっと床の上へおきなおる。

「お化けが出るにしちゃ、少し時刻が早すぎるようだがなあ」
まだ四つ（十時）にはならないから、宿の者はむろんのこと、おそい客はこれからまくらにつこうとするころで、ほうぼうでにぎやかな人声さえしている。
「だって、ほんとうに出たんだものしようがないわ、ネコばばあなのよ」
「ふうむ。こんどはネコか。にゃんといった」
「いや、そんなにふざけちゃ」
さすがに笑うどころではなかったが、それでもたいていなことには驚かない男の、たのもしい顔を見ているうちに、あやめはいくらか人ごこちがついてきた。
「ねえ、こんどのこと、ただごとじゃないわよ。そのネコばばあがあたしの顔を見るなり、西へ行っちゃいけない、箱根を越えると、おひかりギツネのたたりがあるぞっていうんだもの」
「ふーむ、くわしく話してごらん」
どうやら源太郎が本気になってきたので、あやめは今の無気味な話をくわしく告げて、
「あんたがすぐに行ってくれれば、きっとそのネコばばあ、まだかわやにいたと思うんだけど」
と、惜しそうな顔をする。
「さあ、どうだかなあ」
「じゃ、あんたはやっぱりお化けだっていうの」
「口をきくお化けなんてあるもんかね。それは人間のおばあさんさ」
「そのおばあさんが、どうしてあした、あたしたちが箱根を越えるの、知っているんでしょう」
「壁に耳、障子に目っていうことがある」
そういわれて、あっとあたりを見まわすと、この座敷は二階のいちばんはずれになっていて、表廊下は往来に面し、出入りは裏廊下の一

方口で、三畳の控えの間がつき、隣との仕切りは壁になっているが、それでも聞こうと思えば、絶対に立ち聞きはできないともいえないだろう。
が、それより問題になるのは、その立ち聞きをしたネコばばあが、どうやら敵のまわし者くさいということだ。
「ねえ、じゃ敵のまわし者がここに泊まっているってことになるの」
「そうかもしれないな」
「だって、おかしいじゃないか。箱根の女狐（めぎつね）の話を知っているのは、あんたのいとこと、あたしたちだけでしょ。どこであたしたちを怪しいとみて、立ち聞きをする気になったんでしょう」
「まあ、待て。それよりもっと考えてみなくてはならんことがありそうだ。とにかく寝ることにしようじゃないか」
もし敵がいて、自分たちをどこからか見張っているとすれば、いまさらじたばた騒ぎだすのは見苦しい。だいいち、敵の手にのせられるようなものだから、源太郎はあやめに目くばせして、まくらにつくことにした。
むろん、へやのすみのありあけあんどんは消さないことにする。
――箱根の女狐は、おひかりギツネという名らしいな。
しかもおひかりギツネは何匹かの眷族（けんぞく）を持っていて、ネコばばあもその一匹と見るべきだ。
新吉の話によると、田部屋敷の怪行者は光善といい、真光教と名のっていたという。おそらくおひかりとはお光りギツネで、真光教から糸をひいているとみてさしつかえあるまい。おひかりギツネはいまだに新吉の身辺を眷族に見張らせておく。立ち聞きはむしろ俵屋で新吉と話しこんでいたのを聞かれたのかもしれない。しかし、おひかりギツネはすでに自分の必要な密図を、市之進から手に入れているのだ。つまり目

的は達してしまったのだから、もう新吉には用がないはずだ。眷族をつれて、一日も早く津山へのりこみ、埋蔵の十万両を手に入れることを考えるべきだ。

——はてな。

ここまできて、源太郎はふっと気がついた。

おひかりギツネは新吉に顔を見られている。だから、新吉の切腹を眷族に見張らせておいたのだ。万一切腹をまぬがれるようだったら、新吉が津山へはいるまえに命を取れといいつけてあるのかもしれない。

——案外めんどうなことになってきたぞ。

新吉の命をとろうというからには、自分たちも命をねらわれることになる。すでにネコばばあの口から、箱根を越えるなと警告しているのはそれだ。

「あやめ、起きているかえ」

源太郎はそっと隣の寝床へ声をかけた。

「なあに」

くるりとあやめがこっちへ寝返りをうつ。目千両といわれるきれいな目が、ぱちりとさえている。

「おまえは箱根を越えないほうがいいかもしれないな」

「あんたは——」

「おれはしようがないよ」

「なら、あたしも行くわ」

「おひかりギツネがこわくないのかえ」

「もうこわくなんかないわ。あたし焼き玉をたたきつけてやるからいい」

どうやらてきがい心に燃えてきたらしい。焼き玉を使おうにも、姿が見えない敵なのだから困るのだ。しかし、一度行くといいだしたら、てこでもあとへはひかない女だから、それ以上いうのはやめることにした。

「かわやへ行くんなら、いっしょに行ってやるよ」

あやめはにっとわらって、かむりを振っていた。

「じゃ、おれが見ていてやるから、安心しておやすみ」

実に親切な源太郎である。

山伏し

翌朝、朝飯をすませてから番頭を呼んでもらい、

「つかぬことをたずねるが、ゆうべの泊まり客の中に、六十ばかりの白衣（びゃくえ）を着たおばあさんはいなかったかね」

と、念のために聞いてみた。

「いいえ、ゆうべうちへお泊まりくだすった中で女のかたというのはご新造（しんぞう）さんだけでございます。どうかなすったんでしょうか」

「いや、これがかわやで会ってびっくりしたというから、ちょいと聞いてみたんだが、ここの家にその年輩のお年寄りはないかね。ちょいとネコのような顔をしたおばあさんだというんだがなあ」

「いませんです。うちの女中はみんな三十から下で、下働きに五十になるのがひとりいますが、これはネコより馬のほうに近いのでしょう。だいいち、白衣だなんて、そんなものは着たことがないようです」

「いや、ありがとう。これが寝ぼけたのかもしれない。ついでだが、白い着物に縁のある行者とか、坊さんとかいう人はどうだろう」

「それもございません。なんでしたら、宿帳をお持ちいたしましょうか」

同業から案内された客だから番頭はていねいである。それには及ばないと思ったので源太郎は宿賃を払い、あやめをつれて角倉屋を立った。

「あたし、寝ぼけたんじゃないわ」

あやめが不平そうに鼻を鳴らす。

「そりゃわかっているさ」

「でも、おかしいわね。あのネコばばあ、やっぱりお化けなのかしら」
「なあに、相手はキツネの眷族だもの、どんな細工でもできるだろう。いちいち驚いていたひにゃ、箱根は越せないからね」
源太郎は俵屋の前へかかって、
「おれはちょっと新吉に会ってくるが、おまえここで待っているか、どうする」
と、聞いてみた。
「ここで待ってるわ、あたし」
どうも新吉には好感が持てないらしいあやめだ。
「じゃ、すぐすむから、ここにいなくちゃいかんぜ。またネコばばあにでもつかまるとつまらないからな」
「まさか、もうおてんとうさまが出ているんだもの」
「それもそうだな」
源太郎はわらいながら、くぐりから俵屋へはいって、ちょうど昨夜の番頭が店にいたので、新吉を呼んでもらった。
朝が早いので、新吉はまだ寝ていたと見え、寝まき姿で出てきた。
「やあ、おはよう。もう立つのか」
新吉は渋い目をしている。
「ゆうべはよく眠れたかね」
「うむ、おかげで腹がきまったもんだから、今まで一眠りだった」
「そりゃよかった。じゃ、三島で待っているからな」
「ありがとう、どうかたのみます」
申しわけなさそうに頭を下げて、別になんにもいおうとしないところをみると、ここには別に変わったことはなかったらしい。
「新吉、この家に六十近いネコばばあはいないか。白衣を着ているんだが」
冗談のように聞いてみた。
「ネコばばあ——なんだそれは」

「いや、思いあたることがなければ、それでいいんだ。これは念のためにいっておくんだが、女狐はきみに顔を見られている。ことによるときみの命をねらうかもしれんからじゅうぶん気をつけたほうがいいぜ」
「そうかなあ。だって、おれの命をねらうくらいなら、あの晩生きていられないと思うがね」
きょとんとした顔つきだ。ともかくも一度女狐にかわいがられているだけに、そんなことは思いもつかないのだろう。
「これはおれの老婆心だ。じゃ、いずれ三島で会おう」
「すまないなあ。太夫にどうぞよろしく。うらまれているんだろうな、おれは」
「いや、あいつもいっしょに行くんだ」
「へえ」
「一日も別れているのはいやだっていうんだからしようがない」
源太郎は目をみはっている新吉を残して表へ出た。
早立ちの旅人たちが、もうちらほらと箱根をさして歩いている。
そっちのほうをじっとにらみながら軒下に立っているあやめの様子が、からだつきまでなんとなく殺気だって見えるので、
「どうした、あやめ」
と、ぽんと肩をたたいてやると、
「あんた、あたしまたキツネの眷族に会ったわ」
と、目をぎらぎらさせているのだ。
「冗談じゃない。おてんとうさまがこんなに輝いているのにかえ」
「だから、憎らしいじゃありませんか」
「やっぱりネコばばあだったのかえ」
「違うんです。もうあのかどを曲がっちまったけれど、こんどのは山伏しよ。ふたりづれの山伏しが通ったんです。おや、白い着物だと、ぼんやりネコばばあのことを思い出していると、

そのひとりのほうが、ひょいとこっちを向いて、四十ぐらいのいかつい顔をしたやつで、それがじーっとあたしをにらみながら、おひかりさまのたたりは恐ろしいぞ、忘れるな、ってつぶやくようにいって、すーっと行ってしまったんです。あたし、よっぽど追いかけてやろうと思ったんだけれど、あんたがここを動いちゃいけないっていうから、がまんしたのよ。くやしいわ」

「おいで、あやめ」

源太郎はあやめの手を取って、大またに歩き出した。ふたりづれの山伏しなら、遠くからでもすぐにわかる。ぜひ追いついてみたいと思ったのだ。若い侍が、ひどくあだっぽい年増(としま)の女房の手をひいてぐんぐん人を追い抜いていくので、抜かれた旅人たちは、びっくりして目をみはっていた。

「ひとりでだって歩けるから、いやだ、手を放して」

気がついて、あやめが何度もいったが、源太郎は手を放そうとしない。たいせつな恋女房だから、キツネにとられたくないのだろう。

やがて、小田原の城下を出はずれて、見とおしのきくたんぼ道へかかったが、まだふたりづれの山伏しらしい姿は目にはいらなかった。

箱根を越す

武士は怪魔を語るものではない、とされている。化け物だとか、魔物だとかいうものは、突きつめてみれば、たいてい正体がある。それを、ただ化け物と見、魔物と見て人に語るなどは、こっちのおくびょうをさらすようなものだからだろう。

しかし、この広い世の中に、ふしぎは絶対にないとは、人間の力ではまだいいきれないし、源太郎はまだ出会ったことはないが、幽霊だの化け物だのというものを、頭からないものだとは否定しないつもりだ。ただこんどの場合は少し違う。あやめが昨夜、角倉屋で見かけたネコばばあも、けさ俵屋の前で会った山伏しも、あきらかに目的があってこっちを脅迫している。人間を脅迫する化け物などありうるはずはなかろう。

これはおひかりギツネと称するやつが、田部屋敷の埋蔵金にからんで、何かたくらんでいる陰謀のうちの、一つのしばいと見てさしつかえない。おひかりギツネとは、箱根の山中で雲助を殺し、小田原の俵屋で市之進を殺した十八娘のことだと推定できる。そのおひかりギツネは、どうかして源太郎を津山へ行かせまいとしているようだ。しかも、新吉との密談を立ち聞きしたり、ネコばばあや山伏しをうまく使っているところからみると、相当の眷族(けんぞく)を有し、侮りがたい神通力と悪知恵を持った娘ということになる。

「あやめ、おまえもよく一度考えてみないかね。え」

湯本の宿へ帰って、旅のしたくをしながら、源太郎はあやめにいった。

「あたしに、なにを考えろっていうの源さん」

「おれの考えでは、こんどのおひかりギツネは、すこぶるたちが悪そうだ。もしおまえが生き血を吸われるようなことになると、おれはどうしていいかわからなくなるからなあ」

できればここで、自分がキツネ退治をやって帰るまで、おとなしく待っていてもらいたいと、源太郎は思うのだ。

「だから、あたしがキツネに生き血を吸われないように、あんたが守ってくれればいいんだわ」

「そりゃ、できるだけのことはやるがね。なにもおまえまでわざわざあぶないところへ近づかなくてもよかろうと思うんだがなあ」

「あたし、一日もあんたと別々にいたくないのよ」

あやめは、つんとして、うしろ向きになり、

せっせときゃはんをはきながら、
「あんたは、あたしのことばかり心配するけど、あたしだってあんたがもしや女狐に生き血を吸われるようなことがあったらどうしようと、とても心配しているの、ちっとも察してくれないんだもの」
と、おこったようにいう。
なるほどと、源太郎はちょいと虚をつかれた形で、
「ありがとう、あやめ。死なばもろとも、それならいいんだろう」
と、急にいじらしさがこみあげ、うしろからあやめの肩を抱きしめてやらずにはいられなかった。
その日、箱根八里を越えて、三島の宿へはいったのは、もうよいの口であった。道中だれか尾行しているのではないかと、源太郎はそれとなく注意を怠らなかったが、これといって怪しいものも目につかぬ。が、すでに二度まで警告を与えられているのを、押し切って津山へ向かう旅だから、おひかりギツネにねらわれていることは確実と見るべきで、源太郎はまだその正体を自分の目で見ていないだけに、なんとなく無気味な気持ちであった。
三島に太田屋というはたごがあって、小田原の俵屋とはしんせきにあたっているという。ここで待ちあわせようと新吉と約束してきたので、源太郎夫婦は太田屋へ着いた。連れを待ちあわせるんで、ふつかばかりやっかいになりたいからというと、番頭が二階のいちばん奥まった静かなへやへ案内してくれた。
ここも、裏階段をあがったすぐ右手の八畳の間で、左手へのびる廊下つづきには三へやばかり座敷がならんでいるが、夫婦がはいった座敷には隣がない。つまり裏階段を中にして、右の八畳は、廊下つづきながら独立した一へやになっているわけだ。
「番頭どの、若い夫婦づれだと思って、気をきかせたな。ここならめったに人にのぞかれる心配はない」

「いやな人——」
あやめはのんきな夫を軽くにらんでやったが、なるほどここはひとの通らなくてもいい廊下だから、怪しいやつがくればすぐわかると思った。
「おまえ、ふろはどうする」
「あとにするわ。知らない男がはいってくるといやなんだもの」
女はあまり旅をしないから、どこのはたごでも特に女ぶろというのはない。あやめが旅をして、いちばんいやなのはそれだった。
「亭主がいっしょについているんだから、かまわないだろう」
「いいからあんたひとりではいってらっしゃいよ。あたしはあとで女中さんと入れてもらいます」
「そうか。じゃ、おれは一ふろあびてこよう」
源太郎はさっさとたんぜんに着かえて、手ぬぐいをぶらさげて出ていった。
——男ってのんきでいいなあ。
あやめは源太郎の脱ぎすてた着物を手まめにたたみつけながら、そう思った。源太郎といっしょになってからは、いつの間にか源太郎の身のまわりのことは自分でしているが、そのまえにはお春お秋がついていて、自分が一座の太夫でもあり、師匠でもあったから、いつも着物は脱ぎっぱなしで、横のものを縦にしようともしなかった。
それが今はまるで、源太郎の女中もおなじである。なにからなにまで自分でしてやりながら、しかもちっともめんどうくさいとも、いやだとも思っていないのだから、われながら変わってしまったものだと、おかしくなる。
——あたしはもうまえの長崎あやめ太夫ではなくて、すっかりただの女にされちまったんだわ。憎らしい人ってありゃしない。

が、その憎らしい男のそばから、今は一日も離れていたくないのだからしようがない。たたみ終わった男の着物を、自分の道行きの上へかさねて、なんとなく甘い気持ちになっているとき、すーっと目の前の障子が一尺ばかりあいた。

どきりとしたのは、それまでそんな足音一つしなかったからで、見ると、はたして昨夜の白衣（びゃくえ）のネコばばあが、白い手ぬぐいをかぶって、立てひざをしながらじっとこっちをのぞいている。

「あっ」

「箱根を越えたね、おかみさん。おひかりギツネのたたりはこわいぞよ」

しゃがれ声で、まるっきり表情はなく、くちびるだけがもぐもぐと動く。あたりがぼうっと薄暗くなった感じで、あやめは声一つ出ない。

「三日の間に、たたりがある。三日だぞ、おかみさん。よくおぼえておきなされ」

すっと障子がしまった。それっきり、なんの物音もしない。

――そうだ、負けてなるものか。今夜こそ正体を見とどけてやらなくちゃ。

とっさにあやめはそう思ったが、あまりだしぬけだったので、じっとりわきの下へ冷や汗を感じ、どうにもからだがいうことをきかない。それに、障子をあけたら、まだそこにネコばばあが立てひざのままにやりとわらっていそうな気がして、くやしいが半分はこわいのだ。

静かに階段をあがってくる足音がして、聞きなれているから、あの人だなと思っているうちに、はたして前の廊下にかかり、さらりと障子があいた。

「いい湯だった。いっしょにくればよかったにな――どうした、顔色をかえて」

源太郎はまっさおなあやめの顔に、はじめて気がついた。

「ネコばばあが、たった今、ここへ――」

あえぐようにいいながら、目ばかりぎらぎら

させているあやめだ。

ネコばばあ

「ほんの一足違いだというんだね」

話を聞いて、源太郎は小首をかしげた。ほんの一足違いなら、この二階は自分があがってきた裏階段のほかにおり口はない、必ず出会うはずだ。それがだれにも会わなかったとすると、ネコばばあはこの二階に泊まっているやつのしわざにちがいない。

たとえば、あやめのほんの一足違いというのが、もう少し間があって、自分が階段へかかるまえに、下へ逃げていける間があったとしても、きょうは昨夜と違ってまだよいの口だ。女中や泊まり客が絶えず廊下を行ったりきたりしているから、そういう白衣のネコばばあなら、きっとだれかの目についている。

「あやめはそのネコばばあを、化け物だと思うかね」

やっと顔色の出てきたあやめに、源太郎は冗談らしく聞いてみた。

「まさか、化け物だとは思わないけれど」

「化け物でなければ、人間のおばあさんということになる。しかも、その人間のネコばばあは、これも人間のおひかりギツネの手先に使われて、おまえを二度まで脅迫した憎い悪ばばあなんだ。それでもまだおまえ、そのネコばばあがこわいかね」

「人間なら、あたしこわくないわ。ふいだったもんだから、ついびっくりしちまったんだけど――いいわ、こんど出たらあたし、きっと、あのネコばばあの目玉へかんざしを打ちこんでやるわ」

あやめはようやく持ちまえのきかない気を取りもどしてきたようだ。

「かんざしは少し乱暴だが、それくらいの元気があれば、相手は年寄りなんだから、おまえに

ならいけどりにできるかもしれないな。よしんばいけどりにできなくたって、近所におおぜい人が泊まっている宿屋なんだから、大きな声を出しさえすれば、みんな集まってくるじゃないか」

「そうねえ。どうしてあたし、そこへ気がつかなかったのかしら。あんなネコばばあにばかにされて、くやしい、あたし」

「まあいい。化け物はこれから本仕事にかかる気だろうから、まだいくらも出るさ。これからは自分が日本一の長崎あやめ太夫だという気迫を、いつも忘れないようにすることだ」

「でも、おひかりギツネが三日のうちにたたりをするって、ほんとうかしら」

　あやめはちょいと不安そうな顔だ。

「そりゃ、なにかたくらんでいるだろう。なにをたくらんだところで、しょせんは人間のすることだ。知恵と度胸くらべ、そう考えれば、悪人どもなんかに負けていられないじゃないか」

　源太郎は平気でわらっていた。二度の脅迫は二度とも、あやめばかりをねらって、まだ自分の正面へは一度も出てこない。女の弱点へつけこもうとするずるい小細工が見えすいている。油断はきんもつだが、けっして恐れるには足らないのだ。

「そうねえ、知恵と度胸なら、あんたはだれにも負けない男だし、あたしだって、もう天地がひっくりかえったって驚かないことにするわ」

「なるほど。天地がひっくりかえったら、おれだってちょっとびっくりするだろうな。だいいち、頭で歩くんだとすると、さぞ不自由なもんだろうからな」

「ばかばっかし。物のたとえじゃありませんか」

　女中が夜食のぜんを運んできたとき、源太郎はなにげなく聞いてみた。

「この二階の左のほうには、いく間あるんだね」

「六畳が三つ並んでいます」

「どんなお客さまが泊まっているの」

「岡崎へお帰りになるお侍さまが四人さん一組で、三へやともお使いになっています」

「みな若い人ばかりかね」

「ええ、みなさん二十代から三十代のおかたのようでございます」

　まだ娘々した女中は、どうしてそんなことを聞くんだろうというような顔つきだ。

「いや、わしのおかみさんは気が小さいもんだからね、へやをのぞかれるといやだって、心配しているんだ。だいじょうぶだよ、あやめ。向こうがお侍なら、そんな無作法なことはしないだろう。なあ、ねえさん」

「はい」

　小女は困ったように赤くなる。

「そういえば、この下の座敷に白い着物をきた行者のおばあさんが泊まっていないかね」

「いいえ」

「じゃ、おじいさんだったかな」

「いいえ、行者さんは、ひとりもお泊まりになっていません。この下はたしか、あきんどさんが三人、お百姓さんがふたり、みんなお年寄りではございません」

「どうもありがとう。手間を取らせてすまなかったね」

　小女をさがらせて、源太郎は考えさせられてしまった。ちゃんと岡崎藩と名のっている勤番者が、おひかりギツネの手先になって、ネコばばあに化けるとは、どうも考えられない。といって、下に泊まっている商人三人、百姓ふたりのどっちかが怪しいと見るには、逃げ場を考えておかなければならない位置から見ても、いつ勤番者が廊下へ出てこないでもない二階へ、そんな怪しげな変装までして、しかもまだよいの口、人をおどしにあがってくる度胸が出るだろうか。策としても、下の下なるものだ。

「なにかわかった、あんた」

あやめはすっかり源太郎の頭を信頼しているようである。

「うむ、だんだんわかってくる。まあ、あしたまで待ってみよう」

　こっちは新吉がくるまで、ここは立てないのだ。おひかりギツネの眷族はそれを知っているはずだから、これもことによると宿へ残るかもしれない。その残った組を怪しいと見る。そんなたあいのない目当てしかつけようがなかったのだから、その夜源太郎はわれながら情けなかったのだ。

　しかし、幸いというか、不幸というか、その夜はそれっきりネコばばあも山伏しも出なかった。

「かわやへ行くんなら、いっしょに行ってやるよ」

　源太郎は何度もあやめに聞いたが、

「いいわ、ひとりで行けるわ」

　さすがにあやめも、こんどはすっかり度胸をすえたと見えて、けっして源太郎に世話をかけようとはしない。そのかわり夜があけるまでろくに眠れなかったと見え、源太郎が目をさましたときにはぐっすりと死んだようになって眠っていた。

　源太郎が目をさましたのは、一番立ちをするらしい二階の勤番者たち四人が、起き出したけはいが耳についたからだ。

「天気まわりがいいんで、こんどの旅は運がいいな」

「うむ、雨はかなわんからな」

　やがて、そんな屈託のないことをいいあいながら、四人がぞろぞろと二階からおりていくのを、出あいがしらのようにして、源太郎は、こっちの廊下へ出て見送ったが、みんな武骨そうないなか侍ばかりで、ネコばばあに化けるなどという器用人らしいのは、ひとりも見あたらなかった。そして五つ（八時）をすぎるころまでには、源太郎夫婦一組を残して、昨夜の太田屋の泊まり客は、全部立っていってしまったのである。

三日めのたそがれ

　あやめが目をさましたのは、もう午（ひる）に近かった。

「どうだね、おまえはゆうべ一晩じゅう目をさましていたようだが、なにか怪しいことがあったかえ」

　源太郎がわらいながら聞くと、

「一晩じゅうネズミが騒いでたわ、天井で」

と、じゅうぶん寝足りたせいか、あやめのきげんは悪くないようだった。

「そうか。ネズミが安心して出るようじゃ、ネコばばあは出ないね」

　源太郎はそういって、またわらった。

　真昼の宿屋は朝が早くて夜がおそい女中たちの昼寝どきで、ひどくがらんとした感じになる。源太郎はあやめのために早めにふろを注文してやったりして、自分は念のために、左側の三つのへやを見てまわったり、帳場へおりていって、

「少したずね人があるんだが」

と、番頭にたのんで、念のために昨夜の宿帳を見せてもらったりした。

　女の泊まり客はあやめひとりで、そう年寄りというのも泊まっていないようだ。山伏しとか、行者とか、僧侶（そうりょ）とかいうたぐいはひとりもない。

　岡崎藩の四人は田口金兵衛三十九歳を筆頭に、山村伝右衛門三十七歳、倉本西造二十八歳、藤沢竜吉二十七歳とあり、番頭の話ではきのうの夕方宿へ着いたという。とにかく、この姓名だけは手控えに書きとっておいた。

「失礼でござんすが、ご新（しん）さんはいい筋のかたのようでございますね」

　番頭がおそるおそる聞いていた。

「手品師だよ。あれを手玉に取ったばかりに、わしは浪人したのさ」
「お奇麗でございますからねえ」
浪人したって損はないだろうといいたげな口ぶりに、源太郎は苦笑しながらへやへ引きあげた。
「なるほど、ご新さんはお奇麗でござんすねえ」
へやへ帰ってみると、湯上がりのあやめが、髪へくしを入れているところで、わが女房ながらほればれするほどあだっぽい。
「いやだわ、からかっちゃ」
「いや、帳場の番頭どんがそういって感心していたのさ」
「それで、ネコばばあの手がかりはなにかついたんですか」
「一つだけわかったよ。あんまり自慢にはならんがね」
「どうわかったの」
「あれはネコばばあではなくて、男がネコばばあに化けたんじゃないかと思う。なにか思いあたることはないかね」
「そうかしら」
あやめはまじめな顔をして考えていたが、
「いいわ、こんど出たらあたし、きっと化けの皮をはいでやるから」
と、くやしそうにいっていた。
斎藤新吉が太田屋へついたのは、その日のよいの口だった。
「やあ、こんどはいろいろと世話になります」
新吉は如才なく、あらためてあやめにあいさつをしていた。
「いいえ、なんのお役にもたちませんで」
あやめはことばすくなにあいさつをかえしながら、待っていたところだから、すぐに女中にぜんをいいつけ、まめまめしく取り持ちをする。
腹の中はどうかわからないが、まあこの分ならいっしょに旅ができそうだと、源太郎はいく

ぶんほっとした。
「どうだ、藩のほうはうまくかたづいたかね」
うまくいったから、今夜ここへこられたにはちがいないのだが、どんなふうにかたづいたかを聞いておきたかったのである。
「とにかく源さんに教わったとおり、わしは一度城代に会ったうえで必ず責任をとるから、ここは市之進が急病で死んだということにして、小田原藩のほうへは押し切ってくれとたのむと、きてくれたのが目付役の杉本さんだったんで、どうにかうまくまとめてくれたようだ」
目付役杉本平左衛門は、江戸藩邸でも腹のすわった人として知られていた。源太郎がお納戸金の帳じりがあわず、重役から謹慎差し控えをいいわたされたときも、
「源太郎、あんまり小細工をしてはいかんな」
と陰で笑っていた人だ。
「そうか。あの人なら別にくだくだしいことは聞かなかったろう」
「うむ。市之進はなにかご城代の密命でもおびていたのかと、ひと言聞いていた。おそろしく勘のいい人だね」
「なんと答えておいたね」
「ご推察に任せますと答えておいた。それよりしようがないものな」
新吉の顔は、おととい見たときよりずっと明るくなっている。覚悟ができたせいだろう。覚悟とは、あくまでも密書を取りかえして、おひかりギツネの正体をあばくことのはずだ。
「ときに、きみのほうへはおひかりギツネから、その後なんの音さたもないかね」
「おひかりギツネって、あの娘のことかね」
「うむ」
「別になんにもないが、こっちにはなにか変わったことがあったのか」
「おひかりギツネはわれわれ夫婦がきみといっしょに津山へ乗りこむことを、ちゃんと知っていて、非常にそれをきらっているようだ」

源太郎が簡単にネコばばあと山伏しの脅迫を話して聞かせると、さすがに新吉は、ふーむといって、目を丸くしていた。

その夜、こっちは夫婦だから、新吉は昨夜勤番者が泊まった六畳のほうへ引き取って寝たが、まくらについてから、

「おひかりギツネって目が高いのね」

と、あやめが妙なことをいいだした。

「どうしてだえ」

「おひかりギツネがこわがっているのは、あんただけなのよ。あの人、甘いからキツネのほうでもこわくないんだわ」

「おれが目をさましているうちに、早く眠らないと、また寝そびれるぜ。手をかしてやろうか」

そういってやりながら、おれもあんまり辛いほうじゃないなと、源太郎はわれながら感心してしまった。

その夜は、何事もおこらなかった。

翌日は三島を早立ちにして、沼津、原宿、吉原と、道がいいから少し無理をして九里近く歩き、蒲原へ泊まった。ここでも何事もなかった。そして、おひかりギツネが三日のうちにたたるぞといった。その三日めの朝がきたのである。

「あんた、いよいよきょうよ」

目をさますとすぐ、あやめは真剣な顔をして挑戦するようにいった。

「気にかけないほうがいいよ。おれがついているじゃないか」

「気になんかかけないわ。あたし、ちゃんと決心してるんだもの」

「どんなことがあっても、落ち着いて、良識で判断することだな」

新吉と三人になると、あやめはあんまり口をききたがらなかった。新吉はよく冗談をいいかけるが、ただわらっていて、けっして相手にはならない。

——よっぽど性があわないと見える。

源太郎も黙ってほうっておくことにした。

その日は、由井、興津、江尻と歩いて、府中泊まりである。きのう無理をしたうえに、きょうまた七里も歩くのだから、あやめの足を心配して、途中なるべく休み休み、ゆっくり歩いたので、府中の宿へかかろうとするころには、もううっすらとたそがれてきた。

「あやめ、手をひいてやろうか」

源太郎はおかまいなしに甘いことをいう。

「いいわ、平気よ」

しかし、あやめはだいぶうんざりしているようである。

「わしはけっして振りかえらないことにしよう」

わざと一足先を歩いている新吉は、まっすぐ向いたまま、わらったが、その新吉が急に振りかえったのである。

「源さん、あれだ。あの娘だ」

「あの娘——」

新吉の指さすほうを見ると、なるほど二十間ばかり先を、紫矢がすりの武家娘が、これも疲れた様子で、老僕をひとりつれながら、ゆっくりと歩いている。うしろ姿だから顔はわからないが、背のすらりとした、女としてはやや大がらの娘である。

「たしかに、あれにまちがいないかね」

「うむ。大磯で会ったときも、あのふたりづれで、あのとおりのかっこうだったから、見違えるはずはない」

すると、あの娘が恐るべきおひかりギツネということになる。そう思って見るせいか、ついている老僕は、頭こそしらがだが、からだつきのがっしりとした、いかにも強そうなおやじのようだ。

「よし、おれがあとをつけてみよう。きみはうしろへさがれ。顔を見られるとまずい」

源太郎は、つと新吉の前へ出た。

おひかり教

新吉は心得てすぐあとへさがったが、あやめは源太郎といっしょにならんで、どこまでもついてきたそうなかっこうだ。尾行はひとりにかぎる。ことにあやめは人目につきやすい女だから、いっしょではまずい。

「あやめ、おまえはお江戸へくだるとき、府中では泊まらなかったのかえ」

　源太郎は小声で話しかけた。

「泊まったわ」

「なんという宿屋へ泊まったね」

「たしか本通りの梅屋だったと思うわ」

「じゃ、一足先へそこへ行っておいで。すぐあとから行くから」

「いやだなあ、あたし」

　あやめはまゆをひそめて、そっと源太郎のたもとをつかんでいる。いやだなあとは、新吉とふたりきりになるのをきらうのだろう。

「おまえは、長崎あやめという見識を持っている女じゃないか。しっかりしなくちゃいけないな」

「どうしてさ。あたし、これでもしっかりしているつもりよ」

「だれにも負けちゃいけないということなんだ。わかるだろう」

　あやめは返事をしない。しかし、どうやらこっちの気持ちは通じたようだ。

　ともかくも、おひかりギツネという強敵が、いま目の前にあらわれているのだ。どれだけの知恵と力を持っているか、場合によっては命がけの勝負になろうというのに、たかが好ききらいの問題で、ここで手足まといになられては困る。好ききらいなどは人間のわがままで、新吉に負けない見識さえ持っていれば、たとえふたりきりになっても、なにも恐れる必要はないのである。

「あんただって、負けちゃいやだわ」

　しばらく歩いてから、あやめはぽつんといった。負け惜しみが強いから、じゃ一足先へ行っていますとは、どうしてもすなおに口に出ないのだろう。

「おれはだれにも負けるもんか。負けるのはたったひとり、おかみさんにだけさ」

「きらいッ。あんたは口ばかしうまいんだもの」

　とんと甘く肩をぶつけてきて、――うしろからまる見えの新吉は、敵を前にしてなんという夫婦だろうと、さぞあきれたことだろう。

　府中の町にはいるころ、日はとっぷり暮れた。が、空には八日ばかりの月があって、初夏のよいはすっきりとほのあかるい。

　町筋を五、六丁も行ったころ、おひかりギツネ主従はふっと左の横町へ曲がって、姿を消した。いまここで姿を見失っては、それこそ手がかりをつかみそこなうから、

「あやめ、行ってくるよ」

　源太郎はいいすてるなり、大またにあとを追って、その横町へ飛びこんだ。

　つい五、六間先を、おひかりギツネ主従はあいかわらずゆっくりと歩いて、ふりかえろうともしない。

　源太郎はいよいよひとりになって尾行するのだ。

　府中は徳川家の駿府城（すんぷじょう）がある城下町で、町筋九十丁、家数三千五百あまりある東海道五十三次の中でも繁華な町である。おひかりギツネ主従はいったいどこへ泊まる気なのか、横町から横町へいく度も曲がり、やがて寂しい寺町へかかってきた。

　その寺町を出はずれると、もう郊外に近いらしく、両側が竹やぶになって、少し行くと右手に築地（ついじ）べいをめぐらした屋敷が見えてきた。おひかりギツネ主従は、その門の中へすっとはいっていったようだ。

——武家屋敷らしいが、いったい何者の家だろう。

古びた門の前までできて、源太郎はちょっと迷った。ここがおひかりギツネの屋敷だとは、むろん考えられない。すると用があってたずねてきたか、それとも親しい屋敷で、今夜はここへ泊めてもらう予定か、泊まるのだとすれば、どうしても一度、この中へ忍びこんでみる必要がある。

そんなことを考えながら、じっと閉ざされた門の前へ立っていると、中からふいにくぐりがあいて、老僕が顔を出した。あっと思ったが、うっかりしているところだったので、いまさら逃げかくれするすきはない。

「建部源太郎さんでございますな」

意外にも老僕のほうから、声をかけてきた。

「なんだ、知っていたのかね」

ちゃんとこっちの姓名を知っているからには、尾行されていることも、はじめからわかっていたのだろう。こっちはつけているとばかりうぬぼれていたのに、なんのことはない、こうなるとキツネにひきよせられてきたようなものだ。

「おひかりさまは、何事もお見とおしでございますからな。おはいりください。おひかりさまがお目にかかるそうでございます」

「そうか。じゃ、案内してもらおうかね」

けっして悪びれるような源太郎ではなかった。

目つきの鋭い老僕のあとについて、くぐりから中へはいると、玄関までの敷石は雑草にうもれていて、どうもここはあき屋敷くさい。

察するに、おひかりギツネはこのあき屋敷を借りて、今夜はなにか一しばい打ってみせようというのだろう。どんなしばいを打つ気か、油断はできないが、そのかわり、おひかりギツネとじかに会えるのだ。陰で変ないたずらをされるより、このほうがかえって気は楽だ。

わらじをぬいで、玄関からあがり、書院の控

えの間とおぼしい八畳の座敷へ案内された。燭台に裸ろうそくがともされて、ふすまの左右においてある。

「お客人をつれてまいりました」

老僕がふすまに向かってすわり、おじぎをしながら声をかけると、

「おう」

次の間から返事があって、ふすまがすーっと左右にひらかれた。

源太郎はまだ正体のわからぬキツネなどにおじぎをする必要はないから、黙ってすわって正面を見ている。

——こりゃ大しばいだ。

ちょっとあっけにとられた感じである。

十畳ほどの座敷の正面床の間を背に、さっきの娘がいつの間に早替わりをしたか、水色羽二重の小そでに緋のはかまをつけ、髪もおすべらかしにかわって、どんすのしとねにこうごうしく着座している。馬子にも衣装というたとえがあるが、年ごろ十八、九、うりざね顔のすばらしい美人で、目に冷たい異様な鋭さのあるのは、この娘、やっぱりキツネでもついているのか。

左右に居ならぶ十人ばかりの眷族どもが、また変わっていた。みんな侍ばかりで、黒頭巾に黒装束、目ばかりがぎらぎらと無気味に、いっせいにこっちをにらんでいる。

ここにも裸ろうそくの燭台が六つばかり配置されてあった。

「建部さん、おひかりさまじゃ。おじぎをなさい」

老僕がもったいらしくいった。この老人は心からおひかりさまを信仰しているといった、うやうやしい態度である。

「やあ、こんばんは——」

源太郎は軽く会釈をして、

「この間うちから、ネコばばあだの、山伏しだのに、再三忠告させてくれて、どうもありがと

う」
　と、気がるに礼をいってみた。
「そなたたちは、なぜわらわの忠告にしたがわないのです」
　娘はあいかわらず冷たい目をして、神がかりのような声を出す。
「津山に少しやぼ用があるんでね、箱根を越さないわけにはいかなかったんだ」
「そなたたちは、命を召されてもよいというのですね」
「それがわしにはわからんのだ。いったいだれが、なんの目的で、われら夫婦の命を召されようというのか、ついでに教えてもらいたいな」
「黙れ、源太郎」
　右のいちばん上席の黒頭巾が、しかるように一かつした。
「われわれどもは、世の中の貧しき者、病になやむ者に、広く救いの手をさしのべたまう、ありがたいおひかりさまを教祖として、天下におひかり教をひろめんがために立ちあがった者だ。そのほうたち夫婦の者は、心にけがれがあって、おひかり教のじゃまをしようという者たちゆえ、箱根を越えてはならんと、教祖さまがおさしとめになったのだ。おひかりさまはなにもかもお見とおしだぞ。きょうまでそのほうどもが無事でいられたのは、なるべく罪人はつくりたくないという、おひかりさまのお慈悲からだ。ありがたく思って、ここからすぐに江戸へ帰りなさい。それでもまだ駿府から西へ向かうようなら、こんどこそ命はない。しかと申しわたしたぞ」
　上席の黒頭巾は、訳のわからない理屈を重々しくのべたてて、断固たる宣告をくだす。

魔の手

「きみは正気なのかえ」
　源太郎はまったくあきれてしまった。

「なにッ」
「正気でそれだけのことがいえるとすれば、失礼だが、頭はあまりよくないな」
　黒頭巾の目に、さっと殺気が走ったようだが、源太郎はいっこう気にもかけない。
「お宗旨のことは、それを信仰する人々のかってだから、わしはここで、諸君と議論しようとは思わない。世の中の貧しき者、病に苦しむ者を救ってやろうというのは、まことにけっこうなことだ。大いにやってください。しかし、いくらおひかり教でも、じゃまになるものは殺すなどというのは、はなはだてまえかってだと思うね。きみたちはまるで、わしを脅迫しているんだからね。お宗旨は人を脅迫しちゃいけない」
「黙れッ、脅迫ではない。おまえらはおひかり教に邪心をいだく者たちだから、命を召されるのだ」
「それがわしにはよくのみこめないのだ。邪心をいだくにも、いだかないにも、おひかり教などという宗旨は、わしは今夜ここへきてはじめて耳にしたんだからねえ」
「おまえがたははじめてでも、おひかりさまは、なにもかもお見とおしなのだ」
「まあ、よろしい。諸君は少し黙っていてくれたまえ。なにもかもお見とおしのおひかりさまに、じきじき話してみよう」
　源太郎はわらいながら、頭の悪い黒頭巾を押えて、
「おひかりさん、きみはなにもかも見とおしなんだから、どうしてわしが津山へ行きたいのか、理由はわかっていると思う。わしはいとこの斎藤新吉のために、きみの持っている田部屋敷の密書がほしいんだ。それさえ返してもらえば、わざわざ津山まで行かなくてもすむのだ。きみはもうその図面を見てしまったのだから、不要のはずだ。ここでわしにかえしてもらえないかね」

と、ずばりと切り出してみた。
「そなたは、命が惜しくないのですね」
じろりとにらむようにして、おひかりさまはまだそんな脅迫がましいことをいう。
「ありがとう。あいにくまだ命は惜しいんだ。なにもかもお見とおしのとおり、わたしはまだあやめと夫婦になったばかりなんでねえ」
「お帰り。帰ってあやめの身にどんな災いがふりかかっているか、見てやるがよい」
自信ありげに、にこりともしないおひかりさまだ。
「すると、わしがいうことをきかないから、きみがあやめにばちをあてたというのかね」
「お帰り。おひかりさまのいいつけにそむく者は、みんな命を召されるのです」
「それはたいへんだ。とにかく心配になるから、わしはこれで失礼しよう。――あ、そうそう、ネコばばあさんや山伏しどのに、よろしくいっておいてくれたまえ。あやめは気が強いから、こんど出たら目玉へかんざしを打ちこんでやるといって、おこっているんだ。もしけがでもするときのどくだからねえ」
もう切りあげどきだと見たから、源太郎は、そんな冗談を口にしながら、すっと立ち上がった。
来るならこい、とは思っても、自分から刀を抜きたがるような源太郎ではない。これでおひかりギツネの正体も見たし、およそどんな目的でこんなまねをやっているのかという見当もついたような気がする。
頭が悪いといわれて、一時はひどく殺気だっていた黒頭巾どもも、源太郎のゆうゆうぶりにけおされたか、それとも今夜は脅迫だけと、おひかりさまに堅く申しわたされているのか、さいわい立ってくるようなけはいも見せなかったので、源太郎はさっさと玄関へ出てきた。
「おまえさんは、いい度胸だな」
玄関まで送ってきた老僕が、嘆息するように

いった。
「ほめてもらって、ありがとう」
「おひかりさまを甘く見てはいけねえだ」
「わしは頭がいいから、心配してくれなくてもいいよ」
源太郎はわらじをはいて、老僕に別れを告げた。くぐりから外へ出て、さて気になるのはあやめのことである。
あまりたよりにならないとはいっても、斎藤新吉がついているのだし、あやめもただの女ではない。そうむざむざとおひかりギツネの手にのるようなことはあるまいと思うが、しかし無事な顔を見ないうちは安心できないのだ。
途中源太郎は、尾行がついてはいないかと何度も注意してみたが、それらしい様子はどこにもないようだ。
尾行などつけなくても、おひかりギツネは見とおしかな。
そんなばかな話はあるはずがない。とすれば、敵にしてもこれからどんな小細工をするにもせよ、こっちの泊まっている宿を突きとめておく必要があるはずなのだ。それには尾行より手はないじゃないかと考えてきて、はっと気がついた。
ことによると、敵は先手をうっているのではなかろうか。おひかりギツネ主従はさっき自分が尾行しているのをちゃんと知っていた。ということは、こっちが今夜府中へはいるということを知っていて、あれだけのしばいをやってみせたので、こっちがあの娘を見かけたとき、敵はすでにこっちを見つけていて、逆に新吉とあやめに尾行をつけておく、それなら、なにもいまさら送りギツネをつけなくても、今夜の宿はもう知れているはず。
――こいつ、案外油断は禁物だぞ。
今は自分に尾行がついていないことが、かえって不安になってくる源太郎だ。
さっきの寂しい寺町を足早に逆行して、とに

かく人通りのある町へ出なければ、道を聞くことができない。やっとにぎやかな通りへ出て、まだよいのうちだから、人に聞き聞き、本通りの梅屋は思ったより近いところにあるのがわかった。

「斎藤新吉という者が、女づれでさっき着いているはずだが」

梅屋の玄関へ立って番頭に聞くと、

「へえ、お着きになっております。建部源太郎さまでございますか」

と、番頭がなんとなくあわてた顔をする。

「そうだ。斎藤がどうかしたのかね」

「いいえ、ご新さんのほうが」

「なにッ」

さすがに源太郎はどきりとした。

「あれはわしの家内だが、あやめがどうしたというんだね」

「とにかく、お上がりくださいまし、お座敷でおつれさまがお待ちかねでございますから」

なるほど、店先で立ち話もみっともない。新吉に会って聞くのがいちばん早いと思ったので、源太郎はいそいでわらじをぬいだ。

闘志

番頭に案内されて、新吉の待っている座敷へ行ってみると、はたしてあやめの姿はない。

「源さん、とんだことになった」

顔を見るなり、新吉が待ちかねていたようにいう。

「あやめはどうしたんだね」

「実はそのことなんだ。ついいましがたここへ江戸の町同心鈴木清兵衛という者が、ふいにあやめさんをたずねてきてね、少し取り調べたいことがあるから、駿府の町奉行までいっしょにきてくれというんだ」

「江戸の町同心――」

これはまた思いがけない話だ。

「うむ、それは困る、これはわしのしんせきの者の家内で、いまその者はちょっと用足しに出ているんだ。ともかくあやめの夫たる者が帰ってくるまで待ってもらいたいと、わしはいったんだが、きのどくだがそういうわけにはいかぬ。長崎あやめには、江戸で長崎屋東五郎という者を殺したけんぎがかかっているので、おとなしくいっしょにこないというなら、なわをかけなければならない。どうせ今夜は駿府の町奉行所へ泊まるのだから、その建部源太郎という者が帰ってきたら、町奉行所へすぐよこしなさい。必ず悪いようには取り計らわぬというんだ」

「それで、あやめは納得して、つれていかれたのかね」

「そうなんだ。ここでなわをかけられるのはいやだ。うちの人が帰ってきたら、一目会いたいから、すぐお奉行所へくるようにいってくださいといいおいてね、しっかり者なんだねえ、涙一つ見せずに、つれられていったんだ。わしは、なにがなんだか訳がわからない。いったい、どうしたというんだろうな」

「あやめは歩いていったのかね」

「いや、先方は手まわしよく、宿の前へ町かごを用意してきたんだ」

長崎屋東五郎殺害のけんぎで、江戸から同心が追ってくるということは、まんざらありえないことではない。そして、その申し開きはちゃんとできるように、手は打ってあるが、まだ一味の浦上半兵衛、そのせがれの神尾主膳が残っていて、それらの小細工がうるさいから、源太郎はあやめをつれて、しばらく箱根へかくれていたのだ。しかし、たとえ江戸から鈴木清兵衛という同心が追ってきたとしても、どうして今夜ここにあやめが泊まっているとすぐにめぼしがついたのだろう。源太郎はいまおひかりギツネに脅迫されてきたばかりなので、ふっと、いろいろな疑問が一度にわいてきた。

「鈴木という同心は、ここへひとりで乗りこん

できたのかね」
「いや、岡ッ引きがひとりついてきた」
「江戸からの召しとり状を見せてもらったか」
「さあ、それはうっかりしていたな。なにしろ。あんまり突然なんで、わしもあやめさんも、多少どきまぎしていたんでね」
「新吉――」
源太郎はむらむらっと、怒りがこみあげてきた。
「われわれは小田原以来、すでにおひかりギツネと、戦いを開始しているんだぞ。たとえ江戸役人と名のってきても、なぜ一応は疑ってみてくれる気にはなれなかったんだ。だいいち、ここは駿府町奉行所の支配下だ。常識で考えてみても、江戸の同心が単身のりこんでくるべきものじゃない。必ず土地の町方（まちかた）に届け出て、案内させるのが慣例のはずだ。それだけじゃない。むろん、あやめが事実奉行所へつれていかれたのなら、これはやむをえないが、それならそれで、行く先はちゃんと駿府城内ときまっている。わしが帰ってくるのなど待たず、きみひとりで、一応はあやめのカゴのあとをつけてみるぐらいの親切気があったっていいじゃないか」
一言もなくうなだれてしまう新吉だ。
われわれはいったい、だれのために、こんな苦労をしているんだと、口まで出かかったが、それだけはやっと思いとまった。無能な人間を、ここでいくら責めてみたところでしようがない。問題は一刻も早く事実をたしかめることなのだ。
「わしはこれからちょっと町奉行所へ行ってみてくる」
源太郎はいそいで立ち上がった。
「すまん。わしに、わしにできることがあるんなら、なんでもいいつけてくれ」
「いや、きみはわしが帰ってくるまで、ここにじっとしていたまえ。おひかり教のやからは相当の力を持っているようだ。じゅうぶん気をつ

けないとあぶないぜ」
そういいおいて源太郎は宿を出た。本通りはまだよいの灯があかるい。
――待てよ――町奉行所は夜どおしだから、別にいそぐ必要はない。もしあやめがおひかり教の魔の手につかまったのだとしたら、ことによると、さっきのあき屋敷へ運ばれていったのではなかろうか。
このほうが先だと、源太郎はとっさに思案が変わった。
「かわいそうに――おまえにはなんにも罪はないのになあ」
にせ物にもせよ、本物にもせよ、同心にひかれて、カゴにのっていくあやめの心細さを思うと、源太郎はふびんで胸が痛くなる。
それにしても、もしほんとうに東五郎殺しのけんぎで、あやめが江戸へ送りかえされるとしたら、自分はどっちへついていったものか、さすがに、ちょっと迷わざるをえない。
「いや、むろんあやめについていくべきだ。新吉は男だから、よく策さえさずけてやれば、なんとか切りぬけることもできよう。しかし、あやめは自分で見ていてやらないと、また浦上の手にかかって、牢内で一服盛られる恐れが、じゅうぶんあるんだ」
そんなことを考えながら、さっき歩いた道を思い出し思い出し、どうやらあまりまちがえもせず、寂しい寺町へかかってきた。ここはもうほとんど人通りはない。
向こうからちょうちんの灯が一つ、ぶらぶらと近づいてくる。からカゴだ。はっと頭にひらめくものがあったので、
「カゴ屋――」
と、源太郎はその前に立ちふさがった。
「へえ、乗ってくれるかね、だんな」
「帰りカゴだろう」
「そうですよ。安くしておきまさあ」
「あの竹やぶの屋敷へ行ったのか」

「あれえ」
よく知ってるなあと、気味の悪そうな顔をするので、こういう連中はへそを曲げるとおしになってしまう。
「そら、酒手だ」
源太郎はにっとわらいながら、いくらか握らせて、
「送った女は、なかなかべっぴんのようだったが、芸者かえ」
と、すこぶる慣れた調子だ。
「だんな、せっかくだが、この酒手はかえしやす」
「いや、いいから取っておけ。口どめされているんなら、むりに聞かなくてもいいんだ。行ってもいいよ」
「そうかなあ。それじゃ、あんまりすまねえ話だ」
「かまわん、かまわん。おやすみ」
源太郎はさっさと歩き出した。これだけわかれば、もうすっかり聞いたもおなじである。
「どうもすみません。——だんな、お気をつけなすって」
それが、せめてものカゴ屋の厚意だったのだろう。カゴ屋はそのまま行ってしまった。
カゴ屋に口どめまでしたとなると、江戸の同心鈴木清兵衛というのは、いよいよおひかり教一味のまわし者にちがいない。そして、あやめはあのあき屋敷へかつぎこまれている。
——待っていろよ、あやめ。いますぐ助けてやるからな。
源太郎は満々たる闘志が、全身にみなぎってくるのを感じた。今夜こそ、場合によっては剣の舞も辞さぬ覚悟である。

蔵の中

源太郎はあき屋敷の門へしのびよった。くぐりの桟をひらいて、そっと押してみると、苦もなくあくようである。

念のために、そこへうずくまって、しばらく中の様子に耳を澄ましてみたが、ひっそりとして物音一つしない。まさか自分がこんなふうに、すぐここへ引きかえしてこようとは、夢にも考えないだろうから、おひかり教の一味は例の座敷へあつまり、あやめはもうあのおひかりギツネの前へ引き出されて、いいなぶり物にされているのではないだろうか。
歯をくいしばって、くやしがっている勝ち気なあやめの顔が、目に見えるようである。
——あやめ、いま行ってやるからな。
源太郎は静かに戸をおして中へはいり、あたりを見まわしながら、うしろざまに戸をしめた。星あかりに人けのないのを見さだめて、雑草にうもれた敷石づたいに、見おぼえの玄関先へ進む。
さっきとおなじように、玄関の障子はあけっぱなしになっているが、中は暗くて、なんの物音もしない。もっとも、おひかりギツネと対面した座敷は、玄関から右廊下づたいに行って、左へ折れ、たしかまた右へ曲がったところだった。
——よし、ふんごんでみろ。
寺町であのカゴに会った時間からいっても、あやめはまだこのあき屋敷のどこかにいるはずなのだ。源太郎は意を決して、わらじばきのまま家へあがった。
中はまっ暗だ。手さぐりで廊下へ出て、雨戸にそい、いつふいに斬りつけられるかもしれないから、全身の神経を耳にあつめて、少しずつ前へ進む。
どこまで行っても、まっ暗だ。ほこりくさいにおいがひやりと鼻をうって、まったく人のけはいは感じられない。
——ひょっとすると、裏からでもみんな逃げ出したあとかな。
第一のかどを左へ折れた。さっきの座敷に灯がともっているとすれば、もうその光がどこか

へさしてくるはずだが、それもない。
　手さぐりで、しかも一足一足八方へ気をくばりながら進むのだから、それはすばらしい根気がいる仕事だった。
　やっと第二の廊下を右へ折れると、ぼーっと向こうの廊下へ左から暗い光がただよっているのが目についた。
　――しめた。
　しかし、それはさっきの座敷の前を通りこしたあたりらしい。
　とにかく用心深くそこまで行ってみると、そこに左へ折れる廊下があって、光はその廊下を五、六間すすんだ正面からただよってくるのだ。
　灯の光があるからには、人がいるにちがいない。足音をしのばせて近づくと、どうやらそれは土蔵の中らしく、とびらをあけっぱなした土蔵の床のまん中に、ぽつんと一つ手燭がおいてあった。人のかげはどこにも見えない。
　――はてな、これはなんのおまじないなんだろう。
　土蔵には二階があるらしく、戸口をはいったすぐ左手に階段があるが、上はまっ暗だ。用があるから、だれかここへ手燭を持ってきたのだろうが、いったいこんながらんとしたあき蔵へ、なんの用があるんだろう。
　そこまで考えて、はっと気がついた。ことによるとあやめは、この土蔵の二階へ運ばれているのではないか。
「よしッ」
　つかつかと蔵の中へはいり、手燭を取ろうとすると、それをおもしにして、なにか書いた紙が一枚ひろげてある。
　――おひかりさまの罰と思え。
　あっと思ったとき、蔵の高い内ごうしががらがらと、急に締まる音がした。
「しまった」
　飛びついていったときには、どんと締めきっ

たとびらのかぎが外からかかり、
「あは、は、ばかめ」
　嘲笑といっしょに、左右の表戸がばたんと締めきられていた。
　そのあおりで、手燭の灯があやうく消えそうに、はたはたとゆらめく。
「しまった」
　もう一度叫んで、さすがの源太郎もぼうぜんとそこへ立ちつくしてしまった。
　四方を厚い壁でかこまれた土蔵の中は、もう、なんの物音もきこえない。
「あやめ、――あやめ」
　それでも源太郎は手燭をとって、あやめの名をよびながら、いそいで二階へあがってみたが、むろんそこもがらんとしたあき蔵で、あやめのかげさえなかった。
　源太郎は完全におひかりギツネ一味のわなにおちたのである。
　そのころ、あやめはよいに源太郎がすわらせられた八畳の間に、がんじがらめにされ、さるぐつわまでかまされて、人々に押えられていた。
　あやめはカゴからこの玄関の式台へおりたとき、すでに怪しいと気がついた。いくら駿府の奉行所でも、奉行所の玄関がこんなにがらんとしているはずがない。
　が、そのときはもう岡っ引きふうの男と、出迎えに出た若党ふうの男に、
「神妙にしろ」
　と、左右から両方の腕をとられ、どうにもできなかったのだ。
「神妙にはしますけれど、いったいここはどこなんです」
「黙って歩け」
　江戸から自分を召しとりにきたという同心鈴木清兵衛がしかりつけ、手燭をとって先へ進む。
　――あき屋敷らしい。
　すると、この江戸の同心てやつはうそなんじ

やないかしら、さっきはたしかに、駿府の町奉行所へつれていくと、自分でいっていたのだ。ほんとうの同心なら、こんなあき屋敷へひとをつれこむはずはないのである。

——おひかりギツネの手にひっかかったのかもしれない。

そう気がつくと、あやめはなんとなく、はっとした気持ちだった。

ほんとうに長崎屋殺しのけんぎで、江戸の同心に召しとられたのでは、自分が直接手をくだしたわけではなくても、その意志だけはあったのだから、申しわけはたたないかもしれない。このまま江戸送りになり、伝馬町の牢へつながれて、もう恋しいあの人の顔を二度と見られなくなる、ただそれが悲しくて悲しくて、身も世もなかった。

が、これがおひかりギツネのわるだくみなら、あたしだって天下の長崎あやめだ、なにも恐れることはない、油断を見すまして、力いっぱい戦ってやるだけだと、急に勇気がわいてきたのだ。

「はいれ」

裸ろうそくの燭台があかるい座敷へ押しいれられて、みると、正面にすわっているのは、意外にも神保町の旗本神尾主膳である。

——なあんだ。

あやめはだんだん様子がわかってくるような気がした。主膳は亡父を牢内で毒殺した悪与力、浦上半兵衛のせがれで、しかも自分に横恋慕をしている男だから、どんなまねをするかわからないが、これだって相手のほうがわるだくみなのだから、そうこわくはない。

「あら、殿さまなんですか、あたしを召しとらせたのは」

そこへ押えつけられるようにすわらせられながら、あやめはいじの強い顔をしていってやった。

「そうだ、神妙にしろ。おまえには長崎屋東五郎殺しのけんぎがかかっているんだぞ」

主膳はいたけだかになってにらみつける。

「殿さまは、いつお奉行さまになったんです」

男の腹の底はちゃんと見えすいているから、負けずにやりかえしてやると、

「めんどうだ、縛ってしまえ」

主膳は早くも、けだものの本性をあらわしたようだ。

変死はだれ

いくらあやめが気丈で、からだが軽わざじこみでも、はじめから大の男に両方の腕をおさえつけられていたのでは、どうしようもなかった。たちまち手足になわがかかり、さるぐつわまでかまされたとき、

「神尾どの、どうやら建部がきたようです。灯を消して、しばらく声をたてぬようにお願いします」

と、黒頭巾の男がいいにきた。

「承知した」

すぐに燭台の灯が消され、そのやみの底で、ひとりがあやめの足を押えつけ、ひとりは胴、ひとりはごていねいにもさるぐつわの上から口をふさいだ。

——あの人が助けにきてくれた。

一瞬あやめは飛び立つ思いに、うれし涙さえにじみ出て、あの人ならきっとあたしを助けてくれると、じっと耳をすましたが、それっきりいつまでたっても、ことりという物音一つしない。

かすかな足音でも耳についたら、ふいに死にものぐるいであばれ出してやろうと、わざと身うごき一つしなかったのに、けっきょくはむだだった。

——なにかのまちがいだったのかしら。

それはずいぶん長い時間のように思えた。やがて半分絶望しかけた時分、どこかそう遠くな

いところで、突然がらがらどすんと、重い戸の締まる音が、しーんとしたやみの底だから、異様に耳についた。

「うまくいったようだな」

ふっと主膳のつぶやくのが聞こえる。

なにがうまくいったというのかしらと、あやめの胸は、急にふるえだす。いままで鳴りをひそめていたらしい足音が、何人か走りまわるように聞こえ、やがて灯を持った男が、この座敷へもきて、燭台へ灯をうつした。その男も黒頭巾で顔をかくしている。

「源太郎はわなにかかったらしいな」

主膳がわらいながら、その男に聞くと、

「みごとに蔵へ閉じこめました。おひかりさまにそむいた罰ですな」

と、その男は冷ややかに答えて出ていった。

蔵へ閉じこめる、そして、おひかりさまの罰、あやめはこんどこそ、ぞっと背筋へ悪感が走った。

——やっぱり、おひかりギツネだ。主膳もおひかりギツネの眷族なのだろうか。

これは思ったより、たくらみの根が深そうだ。いったい、あたしたちをどうしようというのだろうと、おそまきながら恐怖さえ感じてくる。

「神尾どの、おひかりさまがご対面なさるそうでございます」

ふすまの向こうから、おごそかにいう声が聞こえ、まもなくすーっとふすまが左右に引きあけられた。

それは源太郎が見たときと、おなじ光景である。あかあかと裸ろうそくがともり、正面に緋の袴のおひかりさまが着座して、その両側に黒頭巾が威儀を作っていながれる。

——これは美人だ。

主膳も、同心だという鈴木清兵衛も、岡っ引きらしいふたりの男も、いささかあっけにとられているようだ。

「神尾どの、あやめはたしかにおうけとりなさいましたろうな」

上席の黒頭巾が重々しくいう。

「たしかにからめとり申した」

「それなるあやめという女は、教祖さまに邪心をいだき、身もちよからぬ不浄の女ゆえ、おひかりさまがあなたを当地までお呼びになって、おさげわたしになったのです。どうぞ、おひかり教の功徳をお忘れなさらぬように」

「かたじけない」

主膳はおうようにおひかりギツネのほうへ会釈をしてから、

「清兵衛、あれを——」

と、鈴木同心に目くばせした。

「はっ」

鈴木はふところから重そうな金包みを出して、扇面をひらいた上にのせ、それへ差し出した。

「失礼ですが、おひかりさまへお供物のしるしでございます」

「さようか。それはご奇特なこと」

末座の黒頭巾がうやうやしく取り次ぎに立って、金包みを上席黒頭巾のところへ持っていった。

「主膳どの」

おひかりさまが、じろりと主膳の顔をまともに見すえて呼んだ。

「はっ」

おもわず主膳が頭をさげたほど、それは神がかりの声だった。

「道中でその女の膚にふれてはなりません。必ず不時のたたりがあります。お忘れなさらぬように」

「はっ」

胸の中を見すかされたような気がしたのだろう。主膳はちょっと赤面したようだが、そこはわがまま育ちの負けずぎらいだから、

「江戸へつれてまいったら、膚にふれてもかま

わんだろうな」
　と、ぬけぬけと聞きかえした。
「江戸へまいったらごかってに——しかし、そのおなごはおひかり教の怒りのふれている者、けっしていい報いはございません」
「どんなたたりがありますな」
「三年たたぬうちに、不慮の変死をとげます」
　ずばりといい切るのだ。
　こうはっきり断言されると、主膳もあまり気持ちがよくなかったのだろう。
「ついでだから、参考のためにうかがっておくが、蔵の中の建部源太郎はどういう運命になるだろう」
「わらわはまもなくこの地を去ります。主膳どのも江戸へお立ちになるでしょう。ここはあき屋敷になります。あとはあの男の運命しだいでしょう」
　おひかりさまは冷然たるものだ。
「変死とはかぎらんのかな」
　人のことだと思って、主膳はいくぶんからかい顔だ。
「変死はあなたがなさるのです」
　おひかりさまはしっぺがえしに、ぴしりと一本きめつけて、
「もう、しめよ」
　と、左右の者に命じた。
　するするとふすまがもとのようにしまる。
　主膳主従はしばらく身動きもできないようだ。
「とにかく、まいりましょうか」
　やがて清兵衛が、いがらっぽい声でいった。
「うむ、まいろう。元助、あやめをおぶってこい」
　主膳は決然と立っていいつけた。
——いやだ、源さんひとり残して。死んだってここを動くもんか。
　かっとなったあやめは、背負われまいと、むちゃくちゃに身もがきしてみたが、

「おとなしくしねえか、あきらめの悪い女だ」
　と、手足の自由がきかないのだから、けっきょく男たちの力にかなうはずはなく、軽々と元助の背中へのせられてしまった。

運命の火

「落ち着け、源太郎」
　蔵の中の源太郎は、手燭を前において端然と静座してみた。
　二階も下も、壁という壁は、どこか脱出口はないかと、念入りに調べまわったが、むろんこれは徒労に終わった。二階には相対した壁に窓が向かいあって二つあるが、これは太い鉄棒がこうしのように植えつけてあって、人の出入りはとうてい不可能だ。
　ここを自分から脱出する方法は、二つしかない。厚い壁を切り破るか、床板をはいで、縁の下の土に外まで抜け穴を掘っていくか。さいわい刀という武器があるから、これは両方ともやってできないことはないが、どっちも相当時間のかかる仕事だ。
　それにここはあき屋敷だから、だれもとりこに対して食事の手当などしてくれる者はあるまい。つまりおひかり教の一味は、自分をここで餓死させるために、こんなところへ運びこんだのだ。それが、この紙に書いてある、
「おひかり教の罰と思え」なのである。
　いったい、どうしておれは、こんなおひかり教の罰をあてられなければならないのだ。
　かれらの仕事のじゃまになるからである。
　かれらの仕事とはなんだ。
　田部屋敷の埋蔵金十万両を掘り出すことである。
　財宝を得るのが目的で、人を殺すような宗門ではない。かれらはおひかり教ではなくて、おひかり組ともいうべき盗賊の集団なのだ。おひかりさまと称する十八娘の教祖が首領であるこ

とは、さっき見たとおりだ。
「そうか、あの娘は十年まえに津山を逃亡した真光院光善の娘だ」
　源太郎の頭は死生の窮地におちいって、だんだん火のように燃えてくる。もう半分ほどになった手燭のろうそくが、ぱちぱちとまたたいてゆれる。蔵の中は、まるで古沼の底のように、しーんと物音一つない。
「待てよ、光善という山伏しには妻子がない。魚肉を口にせず、いっさい女を近づけないのが信者をあつめた、とも新吉は話していた」
　しかし、田部郷右衛門には当時八つになる娘があった。その郷右衛門は美人の妻を持ちながら、京へまでめかけを持って、真光院に集まる財宝を湯水のごとく乱費していたという。
　どうして光善が、それを十年間も黙って見のがしていたのか。
「田部の娘というのは、ほんとうは光善が田部の家内にうませた子だったんじゃないかな」
　だから、津山を逃亡するとき、光善は田部の妻と娘をつれていく。そして死ぬとき、その娘に田部屋敷の埋蔵金の秘密をうちあけた。娘はその埋蔵金を手に入れるために、今日のおひかりさまとなった。それなら話の筋が通りそうだ。
「しかも、光善は無学ないかさま山伏しではあったが、田部屋敷にいた十年間は、藩士の間にも相当以上の信者をあつめ、困っている者にはひそかに金を施し、深い恩義と信仰が植えつけてある。その光善の娘がおひかりさまと名のって乗り出せば、命がけで働く信者が、津山には、藩士の中にも、百姓町人の中にも、かなり残っているはずだからな」
　これは容易な敵ではない。
と思うと同時に、源太郎には、始めからもう一つ、別に疑惑があったのだ。
　田部屋敷の埋蔵金は、たとえ何万両あるにもせよ、不正を働いてあつめたという金ではない

のだから、これはその娘なり、あるいは光善の弟なりが名のって出れば、そっくり当人へわたしてやるべきである。まして助五郎という百姓は、半分は藩へ献納するといっているのだ。
　それを、なぜ城代家老大巻監物は、おいの中村市之進、斎藤新吉のふたりを使って、秘密のうちに事件を処理しようとしたのか、取りようによっては、その半金、もしくは全部を自分のものにしたかったのだと、見られてもしかたあるまい。
　では、なぜ監物はそんな大きな財宝を手に入れたかったのか。そう考えたとき、源太郎は当然監物の夫人が先侯の妹で、当主のおばにあたることを、考えてみずにはいられなかったのである。監物夫妻の嫡子真太郎は、当主とはいとこ同士にあたり、場合によっては津山の藩主になり得る資格がある。
　監物にその野心があるから、田部屋敷の埋蔵金をひそかに私したかったのではないか。あるいは埋蔵金発掘の話を持ちこまれてから、そういう野心をおこしたか、いずれにせよ、一つにはそこに疑惑を感じたから、源太郎は一度国元へ乗りこんでみる気になったのだ。
　しかし、今のところ事実はおひかりギツネのほうが、そのうわてを行っているようだ。
「あの娘はこのままほうっておくと、埋蔵金を掘り出すために、まだ何人の犠牲者を出すかわからない」
　そのためにも、いや、現在おひかり一味の手におちているあやめのためにも、一刻も早くこの蔵の中を脱出しなければならない。
　源太郎はじっとくちびるをかんで、手燭の灯をにらんでいた。
　ろうそくは、もう三分の一になっている。これがともりきってしまうと、蔵の中はやみになる。この灯のあるうちに、なんとかくふうをしなければならない。
　――負けるな、源太郎。おまえのありったけ

の知恵をしぼってみろ。
　くそッと思う。あやめがまっさおな顔をして、救いを求めている。
「早くきて、あんた、早く助けて」
　そういう声がはっきりと耳につく。
「待っていろ、あやめ。いま行ってやるぞ」
　源太郎は頭の毛がかきむしりたくなってきた。
　あせっちゃいかん。落ち着いて考えることだ。
　もう一度ぐっと腹に力をいれて、始めから考えてみる。ここを抜け出す方法は、自分でこの蔵を破るか、人に外から蔵の戸をあけてもらうか。二つの道しかない。
　自分で蔵を破るのは、壁をこわすにしても、地下へ抜け穴をほるにしても、少し時間がかかりすぎる。食糧と水も得られない体力では、つづかないかもしれぬ。
　では、外から戸をあけてもらう方法はどうだ。それには人を呼ばなくてはならない。ここはあき屋敷だし、近所に人家はなさそうだったし、とてもわめいたぐらいでは、声はとどくまい。
　はたはたと、またしてもろうそくがまたたいた。
　ふっとそこへ気がついた。
「この灯で人を呼ぶ」
「しめた」
　源太郎はこの思いつきに、おもわず歓喜した。火事をおこせばいいのだ。二階には窓が二つある。この窓をあけ放して、中でたき火をするのだ。まきは床板をはがせば、いくらでもできる。
「万一、ほんとうの火事になると、蔵の戸があくまえに、自分が焼け死ぬぞ」
　が、そんな心配をしていたのでは、この苦境は切りぬけられぬ。非常の場合には、非常手段しか得られぬ。

　一かばちか、運を天にまかせてみろ。ここで死ぬような命なら、とてもおひかりギツネ退治などむずかしいということにもなる。
「よし、やってみろ」
　決断はついた。
　源太郎は小刀をぬいて、たんねんに蔵の床板をはがしはじめた。厚さ一寸もあるかと思われる六尺板だから、それを一枚はがすのもけっして容易な苦労ではなかった。
「落ち着けよ。せいては事をしそんずるぞ」
　何度か自分にいいきかせた。
　ろうそくは刻々にともれていって、すでに残りすくない。灯が消えてしまっては万事休するのだ。
　とにかく一枚だけはがした床板を二階へ運び、小刀をなたにして、できるだけ小さく端から割っていった。
　まきはできた。それを二階のまん中へ山形に積んで、まず両方の窓をいっぱいに開く。冷たい夜風がさっと吹きこんできて、残りすくない手燭がはたはたと鳴る。
「あぶない」
　ひやりとして、あわてて灯をまもりながら、さっきのおひかりさまの呪文の紙へ、その火をうつした。手早く山形のまきの下へ入れる。
　それがぱちぱちと細い木切れにうつって、次から次へと火がうつり、やがて運命の火はまきにうつりはじめた。夜風にあおられて、ぱっと炎が大きくなると、蔵の中は生きかえったようにあかるくなった。煙が一方の窓へむくむくと吹き流れていく。
「生きるか、死ぬか」
　源太郎はそのまっかな炎をにらみながら、はじめてゆっくり額の汗をそででぬぐった。

淫獣

府中から江戸へ二里半、その中間に小吉田村

という立場がある。あやめを縛ったままカゴにのせて、そこまで夜道をかけた神尾主膳は、稲葉屋というはたごへ宿をとった。

府中でカゴをひろったときも、このはたごについたときも、あやめは主膳の愛妾だが、旅の途中で気が狂ったので、余儀なく縛って江戸へつれて帰るのだとふれこませ、どうやら、それでとおっているのは、ともかくも、主膳は用人鈴木清兵衛と、中間元助をつれている旗本だったからである。

しかし、主膳はその夜、まくらについてもどうしても眠れなかった。長い間思いをかけていたあやめがわが手にはいって、次の間に縛ったままふとんの中へころがしてある。

つい、四、五日まえ、江戸の屋敷へ突然、おひかり教の使者だというなか侍がたずねてきて、

「長崎あやめという女は、なにかあなたに関係のある者だそうですが、お心あたりがあるなら、府中まで受け取りにきていただきたい」

と、告げた。どうしてあやめが手にはいったのだと聞くと、てまえはただおひかりさまのいいつけで使いにきたので、くわしいことはなにも知らない。もし、それでは信用できないとおっしゃるなら、お出向きくださらなくてもけっこうですと、はなはだぶあいそうな返事だった。

こっちはじゅうぶん執念のかかっている女のことだから、半信半疑ではあったが、この男と今夜府中へはいり、まったく夢のようにあやめを手に入れはした。

が、このあとあのあき屋敷で見たおひかりさまと称する若い女は、妙に妖気をふくんでいて、そのいうことがまた、なんとも小づら憎かった。途中であやめのからだにふれてはならぬ、たたりがあるぞというのである。

おひかり教の正体がなんであろうと、あのおひかりさまというあやしい巫女のような女が何

者であろうと、そんなことはどっちでもいい主膳だが、たたりがあるといわれては、やっぱり無気味だ。

しかし、あやめのからだに燃えるような野心がなければ、なにもわざわざ府中くんだりまで出向いてはこなかったのだ。現在手のとどくところにいるのにと考えると、断ちがたいぼんのうに駆りたてられて、なんとしても寝つかれず、しまいには腹さえたってくる。

――いったい、どんなたたりがあるというのだ。おれの手にはいれば、あの女はもうおれのものだ。だいいち、武士ともあろうものが、あんな巫女まがいの妖言に惑わされるなどとは、くそッ、おれはやせても枯れても天下の旗本神尾主膳ではないか。

主膳はむくりと床の上へ起きなおって、あたりをにらみまわした。

夜はやがて九つ（十二時）をまわって、さすがにはたごじゅうしーんと寝しずまっている。清兵衛と元助は別間に泊まっているし、ここはさいわいいちばん上等な別むねになっている座敷だ。だれに遠慮することもない。

主膳は引きつけられるように立ち上がって、次の間のふすまをあけ、つかつかとあやめのまくらもとへよった。うれきった女のはだのにおいが、締めきったへやの空気をほうじゅんにかもしよどんでいるごとく、それだけでも主膳を淫獣にするにはじゅうぶんであった。

と知るや知らずや、手ぬぐいでさるぐつわをされたまま、まくらをあてがわれているあやめは、ついに疲れきってしまったのだろう、ぐっすりと深い眠りにおちている。ほの暗いありあけあんどんのほかげに、がっくりと無残におちた丸まげの根が畳にしかんばかりにふさふさと、まゆをすこし八の字によせているのは、眠っていても、手足を縛られている苦痛を肉体に感じているからだろう。

淫獣はあやめの眠りこけているのに安心し

て、ごくりとなまつばをのみこみながら、肩までかけられているふとんをそっとはぎかえした。縛られたままからだをくの字になまなましい女体がくっきりと目にやきついてくる。なわめに締めつけられて、こんもりと盛りあがって見える豊かな乳ぶさ、しなやかな曲線をうかせている腰、えもんもすそもくずれたままの姿態は、淫獣の欲情をいやが上にもかきたてずにはおかない。

「もうおれのものだ」

主膳はうめくように歓喜の声をもらしながら、その手を静かに乳ぶさの上へはわせた。重い弾力が手のひらの中にはっきり感じられて、おもわず握りしめたい衝動に駆られる。

さすがにあやめの全身が一瞬敏感にびくっとなったので、はっと顔を見たが、まだ目をさました様子はない。よほど深い眠りにおちこんでいるのだろう。

それが淫獣の心をいよいよ大胆にさせた。手足を縛ったままでは、女のからだは自由にしにくい。

「なあに、たとえ目をさましたところで、ここまでくれば男の力だ」

主膳はにやりとほくそえんで、このすばらしい獲物をたのしむように、足にからみついているなわめを用心深く解きはじめた。それがすむと、こんどはうしろへまわって、手首から腕、胸へとかけてあるなわを、たんねんに解きすてる。

あやめは無意識のうちにも、窮屈だったからだじゅうが楽になったのだろう、なんとなくのびのびと手足を投げ出すようにして、静かにあおむけになる。

有頂天になった淫獣が、いまは思いのままだと、その両肩に手をかけ、わがもの顔に上からのしかかっていこうとしたとたん、眠っているとばかり思ったあやめの全身にすさまじい殺気がみなぎり、かっと怒りの目をあいたのと、はねおきるようにしての猛烈な当て身が、主膳の

あけっ放しのみぞおちへ走ったのと同時、

「あっ、おのれ」

主膳ががくぜんとうろたえたときにはもうおそかった。うーむと淫獣は醜い顔をゆがめて、がくんとからだを二つに折り、たあいなくそこへ投げ捨てられ、投げ捨てたあやめは、女ヒョウのようなびんしょうさで、逆にすらりとそのわきへ立ちあがっていた。

「ばか、――けだもの」

それでなくてさえ潔癖なあやめにとって、思えば長い間のしんぼうだった。いやらしい主膳の手がからだじゅうをはいまわるたびに、がまんができなくて、何度身もがきしそうになったかしれない。それをじっとしんぼうして、なわの解けるまで待ったのは、たぶん主膳はそんな気になるだろうし、なにをしようにも、まず手足の自由を得てからだと考えたからである。

「このけだものを、どうしてくれようかしら」

あやめはこみあげてくる憤怒に、いまはぼろ布のように足もとへころがっている主膳の大きなずうたいをにらみつけていたが、はっとわれにかえった。そんなことより、人のこないうちに一刻も早くここをぬけ出さなくてはならない。たいせつな夫が、あのあき屋敷の蔵の中に閉じこめられて、生死の境にあるのだ。

「ちくしょう、おひかりギツネめ、もとはといえば、みんなあの女の憎らしいたくらみから出ているのだ。源さん、待っていてくださいよ」

源太郎のことを考えると、心配だし、恋しいし、もう矢もたてもたまらなくなってくるあやめだ。あたりへ耳を澄ましてみたが、さいわいだれも起きてくるようなけはいはない。あやめはするりと廊下へ忍び出て、手早く雨戸を一枚あけ、そこから暗い庭へ飛びおりた。からだの自由さえ取りもどせば、たいていのことには、びくともしないあやめなのである。

番頭の話

人ひとりとおらない深夜の街道を、あやめは一里あまり、府中へ府中へと足にまかせて急いだ。歩きながら、えもんをつくろい、帯をしめなおし、こづまをはしょり、こわれた髪をくし巻きに結いなおした。

今はほかのことはなにも考えられない。まっ暗な蔵の中に源太郎が、どんなに心を苦しめているか、ただそれがふびんで、かわいそうでたまらない。女ひとりの夜道を、こわいだの、寂しいだのと思うひまさえなかった。

どこまで行っても、きれいな星空がつづいた。

やっと府中へたどり着いてから、あやめははたと当惑させられた。

「そういえば、あのあき屋敷は、いったいどの辺なのかしら」

宿からはカゴだったし、あき屋敷からは元助の背中へのせられて運び出されたのだから、ただ寂しい寺町だとは見ていたが、どこをどう曲がって街道筋へ出たのか、まるっきり見当がつかないのだ。

「しょうがない。一度梅屋へかえって、いやなやつだけれど、あの人のいとこに相談してみよう」

もともとあやめは新吉という男が、小田原で会ったときから虫が好かなかったが、今夜にせ同心が梅屋へ自分をつれにきたとき、ろくに満足な口もきけないで、ただおろおろしていた。それを思うと、あんまりたよりなくて、腹さえたってくるが、今はそんなこともいっていられない。

本通りの梅屋は、むろん表戸をおろしていたが、戸をたたくと、かぎょうがら番頭がすぐくぐりをあけてくれた。

「こんな夜ふけに起こしたりして、すみませんでしたね」

あやめが土間へはいって、きのどくそうにわびをいうと、

「おや、ご新造さんじゃありませんか。どうなすったんです」

と、番頭はびっくりした顔をしていた。

「あたし、とんだ災難にあってしまったんです」

「そうなんだそうでございますね」

番頭がさも同情したような目をするので、

「おや、知っていなさるんですか、番頭さん」

と、あやめはちょっと意外だった。

「へえ、あれは九つ（十二時）まえでござんしたかね、だんなさまがお帰りになりまして、そんなお話でござんした」

「まあ、じゃ、うちの人はここへもどってきているんですか」

飛び立つ思いのあやめだったが、

「はい、一度おもどりになりまして、行きとどいたおかたですな、すっかり勘定をすませて、またすぐお立ちになりました」

と、がっかりさせるのである。

「どこへ立つとはいっていませんでしたかしら。それにしても、どうしてあの蔵の中から出られたんだろう」

「そのことなんです。だんなはご新造さんがあの江戸の同心につれられていくとまもなく、ここへお着きになりましてな」

「いいえ、あの同心だという男がにせ者で、ほんとうは悪いやつの手先だったんです」

「そうだそうでございますな。だんなはおつれのかたがなにかお話のようでしたが、これから駿府の奉行所へ行ってくるからと、ここをお出かけになりました。そのとき、ことによるとこれはおひかり教とかいう一味のしわざではないかと、とっさに気がつかれたそうで、寺町のあき屋敷へ乗りこんでみた。その道で、ご新造さんをのせていったらしいもどりカゴに出会ったか

ら、もうまちがいないと思った。そこで、あき屋敷へ忍びこんでみると、蔵の中に灯がともっている、ここだと思って、中へはいったところを、表からとびらをしめられてしまったんだと、おっしゃっていました」

「そこまでは知っているんです。そのときはあたしもまだ、そこにとりこになっていたんですから」

「なるほどな。そこでだんなは、どうしたらここから出られるかと、いろいろ考えたあげく、さいわいろうそくの灯がある。それで蔵の二階へあがって、火事に見せるためにたき火をしたというんです。一つまちがえば自分がこんがりと焼け死ぬんだがと、わらっておいでになりましたが、たいした度胸でございますな」

　番頭は心から感嘆しているのである。

　あやめはうれしくなってしまって、

「うちの人って、ときどきそんな乱暴なまねをしたがるんで、あたし心配が絶えないんです。それで、だれか助けに行ってくれたんでしょうか」

　と、ついのろけまじりになる。

「なんでも、いきにご新造さんをのせて行ったもどりカゴに、酒手をやっておいた。ご新造さんの様子を聞き出そうとしたんだが、これは義理がたく口を割らなかった。が、その酒手がきいたと見えて、カゴ屋は一度家へ帰ったが、どうも江戸の同心というやつがくさい気がする、半分は好奇心なんですな、あのあき屋敷でどんなまねをするんだろうと、気になってしようがないから、もう一度出なおしてみた。すると蔵の二階から火事が出ている、飛びこんできてくれたんで、やっと助かったとだんなはいっていました」

「まあ、よかった」

「半分は度胸だが、運もよかったんですね。九つすぎにここへお帰りになって、おつれさんのことを聞きますから、いいえ、おつれさんもだ

んながお出かけになるとすぐ、心配になるからといって、あとを追うようにお出かけになったきり、いまだにお帰りがありませんと申し上げますと、そうかといって、しばらくご思案のようでしたが、わしは家内がおひかり教の一味につれていかれているので、ぐずぐずしてはいられない。これから、すぐ鞠子へ追いかけてみる、つれの斎藤新吉がもどってきたら、これこれでと話してやってくれと、今のお話をなさいましてな、ご新造さんのふろしき包みを持って、ここをお立ちになりましたんです。——いったいご新造さんは、どこにおいでになったんです」

　番頭はこっちの話を聞きたそうにする。

「すると、うちの人はすぐ鞠子へ向かったんですね」

「へえ」

「つれの者はそれっきりもどらないんですか」

「まだおもどりになりません」

　新吉は女好きらしいから、口ではうまいことをいいながら、どこかそんな家へ遊びに行っているのではないだろうか、いわば新吉のために自分たち夫婦はこんな苦労をさせられているのにと考えると、あやめはまたしてもむかむかしてくる。

　——でも、あの人が助かっていてくれて、ほんとうによかった。

　源太郎は江戸から神尾主膳がきているとは知らないから、てっきりおひかり教の一味にあたしがつれていかれたと思いこみ、あとを追ってくれたにちがいない。いっそあたしも、このまま鞠子へ行ってみることにしよう。あやめはそう覚悟して、

「番頭さん、こんな真夜中にお騒がせして、すみませんでしたね。実はあたしはおひかり教の手から、ほかの悪者の手にわたされて、江戸へつれていかれるところを、途中から逃げ帰ってきたんです。これからすぐ、うちの人のあとを追ってみますから、もし、つれの者が帰ってき

たら、ついでにそう耳へ入れておいてください」
と、そうそうに立ち上がった。
「ご新造さん、おひとりで夜道を、だいじょうぶでございますか」
「いままでだって、ひとりで夜道をかけてきたんですもの。行って行けないことはないでしょう」
心配してくれる番頭に、いくらかの祝儀をおいて、あやめはふたたび深夜の往来へ出た。時刻にして八つ半（三時）近くでもあろうか。
が、もう半刻もすれば初夏のことだから東が白む。それに行きさえすれば、こんどはきっと恋しい源太郎の無事な顔に会えるのだから、あやめは足も心も軽い。
「いきなり飛びついていったら、あの人どんな顔をするかしら」
それはかりがたのしみなあやめだった。

恋女房を追う

一方、源太郎は――
九死に一生を得て、蔵の中を脱出することはできたが、なんとも気がかりなのはあやめの身の上である。
一度梅屋へ帰って聞いてみると、
「おつれさまも、心配だからといって、すぐにお出かけになったまま、まだお帰りになりません」
と、いう番頭の返事だ。
あんなに堅く、他出するなといいつけておいたのにと、一度は腹をたててみたものの、新吉にすれば自分のために起こった事件なのだ、男としてじっとしてはいられない気持ちだったのだろうと、同情できないこともない。が、いまだに宿へ帰らないというのは、どうしたことだろう。自分のすぐあとから宿を出たとすれば、

かれこれ二刻（四時間）にもなる。むろん新吉は一度奉行所をたずねたろう。そこで鈴木清兵衛というのはにせ同心だったことが、ほぼわかる。そのかえりに、なにか起こったのだ。
「おひかり教一味にとっては、新吉もまた見のがしておけない敵ということになるからな」
たぶん、その網にひっかかってしまったのだろう。
いずれにせよ、新吉は男だ。今となってはそっちより、あやめのほうが心もとない。ああいう残忍性のあるおひかりギツネのことだし、あやめはあやめで強情無類の女だから、あくまでも、おひかりギツネにたてをつくだろうし、へたをすれば殺される可能性がじゅうぶんある。
「行く先は必ず鞠子だ」
狡智のおひかり教一味が、自分を蔵の中へ閉じこめている府中に、いつまでぐずぐずしているはずはない。ことによると、はじめから、一駅先の鞠子に宿を用意しておいて、府中であんなしばいを打った、そのくらいのことはやりかねないやつらなのである。そう考えたから、源太郎はちゅうちょなく府中をあとにした。府中から鞠子へは一里半の道のりで、時刻からいえば、あやめが稲葉屋を飛び出したのと、ちょうどおなじ時分だった。
――はてな。
やがて鞠子の宿へかかろうとする松並み木まできて、源太郎ははっと全身を神経にした。まったく人通りのない、しいんとした深夜の空気になにか異状な剣気というようなものを感じる前方だ。星あかりにやみをすかして見ると、たしかに黒い人かげがうごめいている。ひとりやふたりではない。
「えいっ」
「とうっ」
切迫した気合いの応酬がぴーんと耳朶をうってきた。
――何者だろう。

源太郎はあやめのふろしき包みを小わきにかかえて、大またにそっちへ進んでいった。
人間というものは、とかく自分を中心にして物ごとを考えやすい。自分がおひかり教一味に、ついさっきまで苦しめられていたところだから、すぐ頭へひらめいたのは、その黒頭巾どものことだった。しかも夜の微風に、なんとなくあやめの甘い肩のにおいがふっと鼻をかすめただようのは、ふろしき包みにしみこんでいる移り香のせいだろうか。
きてみると、往来へ半円を描いて剣陣を作っている四、五人は、夜目にもまさしく見おぼえのある邪教黒頭巾の一団で、松の木をたてにとり、ただひとり必死にこれに対抗しているのは、意外にもいとこの斎藤新吉である。
「やあ、頭の悪い諸君、勇ましくやってるな」
源太郎はそこへ立ち止まって、わざとのんびりと声をかけた。
ぎょっとして、近いふたりが飛びのくように源太郎のほうへ白刃を取りなおし、
「だれだっ」
と、ひとりがおこったように聞く。
「わからんかね。きみたちに府中で蔵の中へ閉じこめられた建部源太郎だ。見忘れるとは薄情せんばんだな」
「あっ、建部――」
一味の五人が五人とも、がくぜんとしたらしく、半円陣が急に源太郎をもふくめて、行く手へ通行止めの形に変わった。
「おひかり教というのは、やたらに人を殺したがるんだね」
「黙れっ。おまえたちはおひかりさまに邪心をいだくものたちだから、こらしめられるのだ」
ひとりが例のふくみ声で宣告する。
「そんなことはない。さっきもいったとおり、われわれは正しい人間なんだ。それが証拠には、きみたちがあき屋敷の蔵の中へ閉じこめて、餓死させようとしたにもかかわらず、天は

ちゃんと、この建部源太郎を蔵の中から救い出してくれたではないか」
「うぬぼれてはいかん、あれは天が救ったのではなくて、おひかりさまが神通力でカゴ屋をうごかし、もうこりたろうと、命だけはお助けくだすったのだ」
「なにっ」
カゴ屋に助けられたことまで知っている。さすがの源太郎もおもわず目をみはった。
「おひかりさまはなにもかもお見とおしだぞ。なぜおまえはおひかりさまのいうことを聞いて、江戸へ帰らないのだ」
「そんなことは、わしに聞くより、神通力のあるおひかりさまに聞いたほうが早かろう」
「なにっ」
こんどは黒頭巾のほうが返事につまったようだ。
「諸君はどうして、わしのいとこをこんなところで待ち伏せしたんだね」
「この男はわれわれのあとをつけようとした。おひかりさまがこらしめてやれとおおせになったのだ」
「そうか。ただこらしめるだけで、斬るのが目的でなければ、刀をおさめたまえ。わしはむやみに刀を抜いて、人をおびやかすのはきらいだ。まして諸君は、ともかくも神を信仰する人たちではないか、追いはぎや強盗のまねは感心しないな」
ふろしき包みを小わきにかかえたまま、柄(つか)には手をかけようともしていない源太郎なのだ。
「おまえはここから、江戸へ帰れ。おひかりさまの申しつけだ」
「そんな無理をいっては困る。わしはおひかりさまに、恋女房のあやめをとられているんだ。それをかえしてもらわなくては、江戸へ帰れないじゃないか」
「あやめは、もう江戸へ向かっている。自分の手でさがすがよい」

「それはほんとうかね」
源太郎は信じられない。そんな手にうっかりのせられてたまるもんかと思う。
「あやめはひとりで江戸へ向かったのかね」
「ひとりではない。あやめは一度おひかりさまのお怒りにふれた者ゆえ、神尾主膳の手にわたされたのだ」
「なにっ」
源太郎の顔色がさっと変わった。
「江戸の神尾主膳が、自分で府中へ出向いてきたのか」
「おひかりさまが呼びよせたのだ」
「ふーむ」
神通力だとか、お見とおしだとかいう子どもだましは信じもしないが、とにかく一味は相当の人数で、おひかりギツネはそれらを手足のごとく使っている。もし神尾主膳を江戸から呼びよせようとすれば、それはやってできないことではなかろうが、この一味は主膳があやめに執心をいだいていることを、だれからさぐり出したのだろう。いずれにせよ、もしほんとうにあやめが主膳の手にわたされたとすれば、事態はこの一味のとりこになっているより、あやめにとってはもっと悪いことになるのである。
「帰れ、源太郎。早く主膳を追って、あやめを助けてやれ。それがおひかりさまのおいいつけだ。わかったであろうな」
勝ち誇ったように黒頭巾がいう。
「いや、諸君のごときかぶり物をしている眷族(けんぞく)の言は、失礼ながら信用できぬ。もし、それがほんとうなら、わしをおひかりギツネの前へつれていきたまえ。おひかりさまの口から、もう一度事実を聞いてみることにする」
源太郎はきっぱりと逆襲に出た。

闘志

「おひかりさまを疑ってはならん。ここから早くあやめを取りもどしに引きかえしたほうが、おまえのためだ」
おひかり教信者の黒頭巾はおごそかに、もったいらしくいう。
「わしは諸君のいうことは信用できんのだ。いったい諸君は神尾主膳がどういう人物で、あやめにどんな感情を持っている男か、それを承知しているのかね」
そういっているうちに、源太郎はむらむらっと怒りさえ感じてくる。
「おひかりさまは、なにもかもお見とおしだ」
「そうか。で、主膳があやめに邪恋(じゃれん)をいだいていることを知っていて、あやめを主膳の手にわたしたんだな。おそらく諸君のことだから、あやめは手足を縛られたまま わたされたんだろう」
からだの自由さえきけば、なんとかして逃げてくるだけのくふうとわざとは心得ているあやめなのだ。それがついに宿へ帰っていなかったところを見ると、手足を縛ってわたされたに相違ない。
さすがに黒頭巾どもは黙ってしまった。
「諸君はあやめが建部源太郎の妻だということを承知しているはずだ。その人の妻がどういうめにあわされるかを知っていて、野獣のごとき男に、しかも手足を縛って女をあたえる。まるで飢えたオオカミのおりの中へ赤ん坊を投げこむごとき残忍をあえてやったのだ。それでも、諸君は人間といえるか」
「いや、お見とおしのおひかりさまは、そういう心配のないように、ちゃんと主膳に申し渡してある。あやめを吟味にかけることはかまわぬが、必ずからだにふれてはならん。万一いいつけにそむくと即座に神罰をこうむって、主膳の命はなくなるはずだ」
黒頭巾はもっともらしい抗弁をする。
「諸君はそんな気やすすめのようなことばを信じて、自分の妻子を野獣のおりの中へ投げこむ勇

気があるか」
「おひかりさまは神通力をお持ちになっている」
はたしてかれらはそんな愚かなことを、心から信じているのだろうか。
「よろしい。ともかくも諸君はわしの妻の手足を縛って、野獣に投げ与えたことは事実だ。たとえ神通力があるにもせよ、ないにもせよ、わしは人間として、そういう残忍冷酷な行為は黙視できぬ。わしをおひかりさまのところへつれていきたまえ」
「神罰をこうむってもいいというのだな」
「だれがわしに神罰をくだそうというのか」
「おひかりさまはお見とおしだぞ」
「おひかりさまがお見とおしなら、建部源太郎は正義を愛し、正義とともに生きる日本の武士だ。やおよろずの神々の前で、おひかりさまと対決しよう。案内したまえ」
決然と挑戦していく源太郎だ。あやめが事実主膳の手におちたとすれば、そのたどるべき運命は知れきっている。あえてそういう残酷な手段をとった者があるとすれば、たとえそれが神神であろうとも、源太郎は敢然とそのやおもてに立つだけの勇気と、人間としての正しさを自負している男だ。
その烈々たる闘志に、五人の黒頭巾どもはいささか圧倒された形で、なんとなく顔を見あわせている。
「早くしたまえ。諸君が犠牲にしたあわれな女の命が、こういう間にも刻一刻ときざまれているんだ。万一おひかりさまにそれを救う神通力がなければ、わしは自分の手で、あやめを救いに行かなければならんのだ。諸君はいまさら、わしをおひかりさまに対決させる責任をさえ回避しようというのか。ひきょうだぞ」
むちのような源太郎のことばが飛ぶ。
「よし、おひかりさまがなんと仰せられるか、ともかくも案内しよう」

しわがれ声の黒頭巾がやっとそういって、仲間に目くばせした。ひとりがうなずいて、ぱっと鞠子の宿のほうへ駆け出す。おそらくおひかりギツネに注進をしようというのだろう。
いちいち注進をうけなければ、こういう場合の処置がとれないようなおひかりギツネなら、お見とおしも、神通力もあったものではない。
「新吉、聞いてのとおりだ。いっしょに神罰をうけに行こう」
あやうく目の前の危難をまぬがれて、まだぼうぜんと道ばたにつったっている新吉に声をかけると、
「ありがとう、源さん。しかし、あやめさんのほうはだいじょうぶかねえ。なんなら、わしだけでも一足先に、府中へ引きかえしてみようか」
と、そばへ寄ってきながら、心から申しわけなさそうだ。
「心あたりがあるのかね」
「そういわれると、困るんだが――」
「成算のないことはするもんじゃない。徒労になるばかりだ」
どうしてこう軽率なんだろうなと、源太郎はつい皮肉が口に出る。
四人は無言で鞠子のほうへ歩き出した。源太郎がそれにつづくと、新吉も肩をならべてきた。
考えてみると、どうして、どこで新吉はこのおひかり教の一団に出会って、あとをつける気になったのか、それはまだ少しも聞いてはいない。が、あらためて聞いてみたところで、そこからなにか新しい事実がつかめるとは思えないから、源太郎は別に聞こうともしなかった。源太郎はもうこの男にすっかりあいそうをつかしているのである。
そんな問題より、源太郎にはほかに考えなくてはならない重大なことが、いくつかあった。
おひかりギツネはどうして神尾主膳とあやめの因果関係を知ったか。キツネはまた、今夜自

分がカゴ屋にあの蔵の中から助け出されたことまで知っている。

　お見とおしなどということは信じられないとすれば、だれか人の口から耳にはいったにちがいない。主膳のことは、おそらく小田原で新吉に話しているのを、一味の見張りに立ち聞きされていた、そう考えて考えられないことはないが、カゴ屋のことはどうにも見当がつかない。

　完全に蔵の中へ閉じこめた自分を、だれかが助け出しはすまいかと考えて、張り番をひとり残しておくなどということは、どう考えてもありえない。だいいち、一味の目的は自分を江戸へ帰すことにあるのだから、張り番が府中に残っていたとすれば、その口からあやめが主膳の手におちて江戸に向かうことを告げさせるはずだ。

　たとえば、なにかの理由で敵の耳が梅屋にあったとする。自分が梅屋の番頭に子細を話しているのを聞いて、その男が先まわりをしてこの連中に告げたのだとすれば、府中からこの連中のあとをつけている新吉は、それを目撃しているはずである。

「新吉、この連中はきみがあとをつけたときから、人数は五人だったか」

　源太郎は念のために、そっと新吉に聞いてみた。

「うむ、五人だったと思う。どうしてだね」

「あとからきみを追いぬいて、この連中に加わった者はないかね」

「それはない。始めから五人だ」

「そうか、それならいいんだ」

　そう答えながら、源太郎はふっと気がついた。自分があの蔵の中へ閉じこめられたのは、まだよいがすぎようとする時分で、カゴ屋に助け出されたのは、やがて九つ(十二時)に近かった。どうすくなく見ても二刻(四時間)は蔵の中にいた。そのあいだじゅう、自分が梅屋を出るとすぐあとから飛び出したらしい新吉は、どこでなにをしていたのか。またこの連中は五人だけ、どうしてそれまで府中にぐずぐずしていたのか――?

　源太郎は突然、はっと頭にひらめいたものがあった。

仮面をはぐ

　鞠子の宿は町の長さ四丁、家数百軒ばかりの小さな町だ。深夜のことだから、むろんしーんと寝しずまっている。いったいどこのはたごを起こすかと見ていると、黒頭巾どもはどこも起こさずに、すたすたと町を通りすぎてしまった。すると、おひかりギツネは鞠子には泊まっていないことになる。

　鞠子から岡部へは二里の道程で、その中間に上り下り一里の宇津谷峠がある。

「キツネは峠にいるんじゃないかな」

　新吉は妙に緊張したような声を出す。

「そうかもしれんな。山のほうが人を化かしいい」

「だいじょうぶか、源さん。変なわなにかけられるとつまらないぜ」

　つまるつまらないの問題で、こんな危険をおかしているのではない。こっちはあやめの命を賭けているのだ。

「わななどは恐れぬ。こんどというこんどは、わしは義憤に燃えているんだ。ほんとうにおこっているんだ」

　源太郎がきっぱりといいかえしたので、新吉も黙りこんでしまった。

　道はやがて峠にかかる。宇津谷峠は立場があって、人家がばらばらとつづいていたが、それもすぐ尽きて、峠はしだいにけわしく森が深くなってきた。先頭はいつかわき道へそれているようである。そのころから人数はもとの五人になっているようだ。小道はクマザサが深くなり、まもなく道が少しへいたんになってきたと思う

と、木の間がくれの向こうにたき火の火がちらちらと赤く見えだした。
　そこは破れ堂をかこんだ松林の中で、たき火はそのぬれ縁の前でたかれ、黒頭巾の眷族を十人ばかりしたがえたおひかりギツネが、今は道中だから緋のはかまではなく、府中の宿はずれで見かけたときの腰元姿で、行儀よくぬれ縁に腰かけていた。冷たい面だちではあるが、暗い破れ堂を背景に、横からたき火のあかりをうけて、あざやかに浮き彫りにされているこの十八娘は、まったく妖姫のような美貌をそなえている。
「おひかりさまの御前だぞ、下におれ」
　源太郎がつかつかとその前へ進むと、わきにひざまずいている上席黒頭巾が、しかるように声をかけた。御前だから、おなじようにひざまずけというのだろう。
「山賊の手下ども、なにを申すか」
　源太郎はぴしりとやっつけて冷笑する。
「無礼な、おひかりさまに対して、山賊とはなにごと」
「山賊でなければ、きみたちは殺人鬼だ。見ろ、その血のついている自分の手を」
「おのれ、許さんぞ」
「許さんのはわしのほうだ。まちがってはいかん。きみたちは今夜、わしをあき蔵へ閉じこめて生き殺しにしようとした下手人だ。そのうえ、わしの妻あやめを、だましにかけてつれ出し、手足を縛って野獣に売った残忍窮まる悪魔だ。自分たちがかってなまねをしておきながら、許さんぞとは、どこから出る音か」
「おまえたちはおひかりさまのお怒りにふれている者どもだから、再三こらしめをうけるのだ。いく度申し聞かせても、おひかりさまのお心にそむいて、西へ向かおうとする。早く心を入れかえぬにおいては、今度こそ命を召されるぞ。それでもよいか」
　上席黒頭巾はもったいらしく宣告を下す。

　このあいだじゅう、当のおひかりギツネは身じろぎ一つせず、じいっと冷たい目で源太郎を見すえている。いい度胸だ。
「よろしい。わしは元来刀にかけて物をいうことは好まん男だ。自分の命もたいせつにするかわりに、人の命もけっしてそまつには思わぬ。たとえ悪人でも、わしはなるべく自分の刀にはかけぬ主義できた。そっちでいままでは手心を加えてきたというなら、わしも自分の主義で、いままではなるべく穏便にと心がけてきた。しかし、今夜はそっちの返答いかんによっては刀を抜く。そのつもりで返事をしていただこう」
「そのほうには、まだおひかりさまの神通力がわからぬとみえるな」
「きみたちはまだ愚にもつかぬ神通力を、わしにしいる気か。もしそれほどの神通力があるなら、わしの妻あやめを無事に主膳の手から取りもどして、一刻の間にここへつれてきてみろ」
「それはそのほうどもの心がけしだいじゃ」
「そんな詭弁は許さぬ。われわれ夫婦は心の正しい人間だ。心がけからいえば、神々の前へ出ても恥じぬ者だ」
「それなら、なにゆえおひかりさまのいうことを聞いて、おとなしく江戸へ帰らぬのだ」
「おとなしく江戸へ帰らぬから、わしを蔵へ閉じこめたり、あやめを野獣のごとき男にわたしたりしたのか」
「そうじゃ」
「いったい、おひかりさまの目的はなんだ。おまえの目的はなんにあるんだ」
「神秘は他人にもらすものではない」
「頭の悪いことをいうな。あやめを無事にここへつれもどさなければ、おまえたちを人間とはみとめないぞ。それでもいいか」
「おかしなことをいう男だ。人間でなければなんとみとめるのだ」
「人情を無視する鬼畜、殺人鬼、黄金に目がくらむ冷酷な黄金魔――人間ならばそのかぶり物

をとってみろ」

「なにっ」

黒頭巾どもはあまりにもしんらつな源太郎のばとうに、おもわず殺気だっていっせいに刀のつかへ手をかけた。

「やめろッ、おひかりギツネに神通力があるなら、なにもおまえたちが刀を抜くには及ばんではないか」

一同ははっとしながら、どうしましょうかと相談するように、おひかりギツネの顔色をうかがう。おひかりギツネはあいかわらず冷たい顔つきで、源太郎を見すえている。

「今から十年まえ、光善という武州高尾山の山伏しが、藩を追われて津山の田部屋敷を逃亡した。そのとき田部の女房と、当時八つになった田部の娘お光をいっしょにつれている。そのお光はことし十八になった」

そんなことばが、ふいに源太郎の口から淡々と流れ出した。

「光善には以前から田部屋敷の庭へ埋めてたくわえておいた小判が十万両あるが、むろんそのときはそれを持って逃げるひまはなかった。お光はこんどそれを掘り出そうとしたが、一枚の図面は、貞宗の名刀のさやの中にあって、その貞宗はその後江戸の藩邸の蔵におさまっている。その図面を手に入れるために、お光は自分の手にある一枚の図面を持って、小判が出たうえは半分を藩に献納するからと、城代家老まで、もう一枚の図面を江戸屋敷から取り寄せてくるようにと、願い出た。城代家老はそれを承知して、中村市之進、斎藤新吉のふたりに、その取り寄せ方を命じた。むろん、これは密命である」

黒頭巾どもはあっけにとられた形で、源太郎の顔をながめている。

「お光は始めから、その十万両を半分藩に献納する意志などはなかった。父の残しておいてくれたものだから、当然全部をわがものにすべきだと考えている。そこで小田原の宿で市之進を

毒殺し、まんまと江戸にあったもう一枚の図面を手に入れた。その半月まえに、お光は巡礼娘に化けて江戸へ潜行する途中、箱根峠で雲助をひとり毒殺して、その毒のきき方をためしている。ここまでわしがいったら、もうあとはわかるだろう」

源太郎はじろりと一同を見まわしながら、

「わしはあえて人の秘密をあばこうとするおせっかいな人間ではない。お光が実父光善の遺産を全部わがものにしようというのにも反対はしない。また諸君らが故人光善の恩義にからまれて、お光の仕事に助力しようというのにもけっして異存をさしはさむものではない。ただ人を殺してまでも黄金を手に入れようとする、そんな神通力をふりまわすのは不賛成だ。人間として許せない。どうだ、諸君はこれでもまだ、おひかり教の仮面をかぶって、あくまで黄金魔になる気か、返事を聞こう」

と、条理をつくして、きぜんたる態度に出た。言ってみれば、もののみごとにおひかり教の仮面をはいだのである。

天の星

「そうか。では三島の宿のネコばばあも、府中での江戸同心も、みんなこの女のやらせたしばいだったんだな」

うしろに立っていた新吉が、あきれたようにいった。

「さよう。箱根の雲助にあやめがキツネとまちがえられたのが悪縁のはじまりで、小田原からわれら夫婦はこの事件にまきこまれた。不幸にして、きみがわしのいとこだったために、わしはきみのためにお光から、奪われた図面を取りかえしてやろうと、おせっかいにも決心した。しかし、それはきみにとってははなはだ迷惑だったようだ」

くるりと振りかえった源太郎は、新吉の顔を

見ながら妙なことをいいだす。

「迷惑――?」

新吉はわけがわからないというように目をみはる。

「新吉、もういいかげんに仮面をぬぎたまえ。きみはいつからお光の情夫になったか知らんが、おそらく小田原で市之進を毒殺した前後から、お光に一味して、田部屋敷の十万両をわがものにしようという欲心を起こしたのだろう。だから、わしの友情が、かえってきみにはじゃまになった。白状したまえ、そのとおりだろう」

新吉を一味として考えれば、おひかりギツネのふしぎはわけもなく解決する。つまり、今夜府中でのことは、すでに小田原で新吉にめぐりあい、市之進が毒殺された夜の真相を源太郎がずばりといい当てたときから、計画された。思ったより鋭い目を持っている源太郎につきまとわれては、なにもかも、暴露されてしまうおそれがある。そこで、ネコばばあと山伏しを使って、あやめを三度までおどし、この事件から手をひかせようとした。

が、そんなことでは手ぬるいとわかると、主膳とあやめの因果関係を利用しようとたくらんで、江戸へ人を走らせ、邪恋の鬼になっている主膳を府中まで呼びよせた。まず源太郎をあき屋敷へ引きつけて脅迫しておき、そのあとで、あやめを梅屋からつれ出す。このあとへ源太郎が帰って、新吉から子細を聞き、梅屋を出るとすぐ、新吉はあき屋敷へ先まわりをして、あき蔵の用意をさせた。そして、源太郎を蔵へ閉じこめ、あやめを主膳の手に渡し、自分たちはただちに鞠子へ向かって出発する。そこまでは計画どおりにいったのだ。

新吉としても、いとこ同士の源太郎だから、命までとろうとは、さすがに考えてはいなかったのだろう。だから、一日かふつかぐらいたったら、源太郎を蔵から出してやるつもりで、一味の者をひとりだけ、梅屋へ残しておいた。それ

が、源太郎は、自力で思ったより早く蔵から助かり、梅屋をたたき起こした。残された一味のひとりはそれと知って、一足先に鞠子へ飛ぶ。

当然源太郎が帰るまでは梅屋にいなければならない新吉が、鞠子にいるのだから、新吉はなんとかそのつじつまをあわせなければならない。そこで、お光をここへ先行させておき、自分は宿はずれでさっきああいうしばいをうった。とっさのことで、時間に狂いのあることまでは、ついうっかりしていたのだろう。その時間の狂いに気がついた源太郎は、はてなと疑問をおこし、はじめて新吉を敵の一味として考えてみて、すべてのなぞが解けたのである。

「源さん、さすがにきみは頭がいいな。ほめてやるぜ」

そこまでつっこまれては、もう新吉もとぼけきれない。急にずぶとい冷笑を顔にうかべ、

「そこまでわかっているんなら、きみはいさぎよくこの仕事から手をひいてくれ。それとも、むしろ、おれたちの仲間入りをして、きみがいうところの黄金魔になるか、どっちにするね」

と居直るようなことをいいだす。

「新吉、きみは悪魔に良心を売ったのかね」

「いや、おれはただ黄金魔になっただけだ」

「あやめを主膳の手にわたした責任などは少しも感じないかね」

「いいじゃないか、あんな女のひとりやふたり。黄金さえあれば、あれ以上の逸品がいくらも手にはいるんだ」

けろりとして、そんな悪態を口にする新吉だ。

「きみは親友中村市之進を、承知のうえでお光に毒殺させた。お光がいま左の手にはめている南蛮わたりの毒仕かけの指輪は、まだ何人の人命を犠牲にするかわからない。場合によってはきみもその犠牲者のひとりにされる。それでもきみはよくこの先で使われる気かね」

「忠告ありがとう。せっかくだがお光はわしの女房だ、よけいな水はさしてもらいたくないね」

「それはきみの本心だな」

「くだらんことをいっていないで、きみは早くあやめのところへ行ってやりたまえ。ひょっとすると、まだ無事でいるかもしれない。今夜の泊まりはたしか江尻のはずだ」

「忠告ありがとう」

源太郎は静かにいいかえしながら、新吉の目の色にも、お光の冷たい目にも、異常な殺気があるのを見のがさなかった。

「わしは、あやめのことが心配になるから、忠告にしたがって、これで失礼する。しかし、今夜かぎり、わしはきみたち黄金魔の敵だということを、はっきりおぼえておいてくれたまえ」

きっぱりと挑戦するやいなや、源太郎は、すっと新吉のそばをすりぬけた。万一、お光が飛び道具を用意していると、じっとしていては危険である。むしろ新吉をおこらせて、乱闘にみちびいたほうが安全だと考えたからである。

「くそッ」

はたしてその手にのった新吉は、いきなり背後から抜き打ちをかけてきた。ひらりと前へ飛びぬけた源太郎は、それだけお光から遠くなるし、新吉が間へはいるので、もう飛び道具にそげきされる心配はない。

「よせッ。おまえのやせ腕では源太郎は斬(き)れぬ」

「うぬッ、――斬れ、斬れ。こやつはおひかりさまの敵だ」

新吉の怒号に、おひかり教の黒頭巾ども十数人は、目の前で邪教の仮面をはがれても、まだ信仰の夢からさめきらぬか、いっせいに抜刀して、源太郎を包囲してきた。

「ばか者どもッ」

源太郎は奮然と抜きあわせて、小道のほうへ斬って出る。

今は邪教徒に天誅(てんちゅう)を加えるより、ともかくもあやめを主膳の手から救い出すほうが先だ。夜の明けぬうちに、ぜひ江尻まで引きかえさなくてはならぬ。

「えい、――とうッ」

めったにというより、これまでけっして刀を抜いたことのない源太郎だが、腕は名人斎藤弥九郎から抜群の折り紙をつけられている。面もふらず右を斬って左へ払い、だっと前へ囲みを破ると、狂信者の黒頭巾は少しも死を恐れぬらしく、行く手へ行く手へと先まわりをして、入れかわり立ちかわり死にもの狂いでしつように斬って出る。

――困ったやつらだな。

二、三人に手を負わせればと、軽く考えていた源太郎は、いささかあてがはずれて、もう手かげんはしていられなくなった。

――やむをえん。わしはあやめのために、ここで手間取ってはいられないのだ。

源太郎はしつような敵に業を煮やして、断然、烈剣をふるいながら、ふたり斬り、三人倒し、前へ前へと出る。

しだいにたき火のあかりが遠くなり、もう一息と勇躍したとき、

「一同、さがりなさい」

ぴーんと、耳にひびくような女の声がして、いつの間に前へまわったか、お光が残忍な目を火のようにぎらぎら燃やしながら、二、三間先からぴたりと短筒(たんづつ)を向けてきた。

黒頭巾どもがぱっとその前から左右へ飛び散る。

じっとしていては危険だから、源太郎はその左の敵を追うように、

「えい」

一刀をあびせかけながら、横へ飛んだ。とたんに、

だあん。

お光の短筒が火を吐いて、谷にこだまし、い

つ進路を誤っていたか、源太郎の跳躍したのは急崖のふちだったので、あっという間に足を踏みはずし、瞬間、からだが宙にういた源太郎は、きらめく天の星のほうへ落ちていくような錯覚におそわれていた。

辻堂の朝

あやめが大胆にも一里半の夜道をひとりで鞠子の宿へはいったのは、もう真夜中のころだった。

憎むべきおひかりギツネの一味も、それを追ってきた夫源太郎も、この宿のはたご屋のどれかに泊まっているはずだ、とはわかっていても、まさか今ごろ一軒一軒戸をたたいて、聞いて歩くわけにはいかない。まして、女の身でそんなまねをすれば、よけい怪しまれるだろう。しかたがないから宿はずれの辻堂を借りて、うつらうつらしながら夜明けを待つことにした。

ともかくも、夫はあぶない命が助かっている。そして、助かったとなると、その足で休みもせず、自分の身を心配して、すぐにおひかりギツネのあとを追ってくれたのだ。その愛情の深さを思うと、あやめは胸が熱くなってきて、寂しいだの、つらいだのということは少しも感じなかった。

それに、あの手足を縛られて、憎い主膳にからだをねらわれながら、どうすることもできずにもがいていたことを思えば、この辻堂のほうがまだしも天国である。

——いまに見ているがいい。こんど主膳にあったら、きっとそのままではおかないから。

くやしがりのあやめは、あれを思いこれを考えているうちに、堂の羽目板にもたれながら、ついうとうとしたらしい。はっと目のさめたときには、もう夜がすっかりあけていた。しかも、一番立ちの旅の人たちが、なにか高声に話しながら宇津谷峠のほうへいそいでいく。昨夜

から疲れきっているからだなので、自分ではつい、うとうとしたぐらいにしか思えなかったが、案外ぐっすりと眠ってしまっていたにちがいない。

——だれにも見られなくてよかったわ。

あやめはひやりとして、いそいですわり直した。女が口をあけて眠りこけているかっこうなど、けっしてみっともいいものではないし、だいいちこんな辻堂などで眠っているところを見つけられたら、それこそドロボウとまちがえられてもしかたがないのだ。

いそいで髪を直し、えもんをつくろい、何様か知らないけれど、正面のご神体に合掌して、一夜の宿を借りた礼をのべ、そっと辻堂から表へ出た。

さて、鞠子の宿へ引きかえしたものだろうか、それともここに待っていれば、どうせおひかりギツネの一味も、それを追う源太郎も、ここを通るはずなんだからと、ちょっと迷っているうちに、一度人が通りはじめた街道は早立ちの人々が次から次へと峠のほうへ、しばらく人足が絶えない。どうしようかと、鞠子のほうばかり見ていると、

「やあ、あやめさん、——あやめさんじゃないか」

と、ふいにうしろから声をかけた者がある。ぎょっとしてふり返ると、意外にも斎藤新吉だ。

「まあ、新吉さん」

日ごろはあんまり好感の持てない新吉だが、新吉は源太郎といっしょのはずだと思うから、あやめはおもわず目を輝かす。しかし、その新吉が峠のほうからきたのはどういうわけだろう。

「うちの人は、うちの人はいまどこにいるんです」

そういう気もそぞろなあやめの様子を見て、新吉はまったく意外だった。どうして神尾主膳の手から無事に逃げ出せたろうと、ふしぎでた

まらない。

新吉は昨夜、といっても数時間まえに、一味の者といっしょに宇津谷峠で源太郎を追い、数丈の谷底へ追いおとした。用心深いお光は、

「新吉、夜があけたら一度谷底を調べてください」

と、冷たい顔をして命令するのである。

このおひかりさまは一度小田原で膚を許し、ちゃんと夫婦約束までしていながら、けっして新吉を亭主あつかいにはせず、自分はあくまでおひかり教の教祖を気どって新吉をあごで追い使うのだ。そのときも、

「なに、だいじょうぶだ。こんな谷底へ落ちて、命があるはずはなかろう」

と、一度鼻であしらってみたが、

「あの男には悪魔がついています。だいじょうぶではありません」

おひかりさまはけんもほろろに、頭から高飛車だった。

小生意気なキツネつきめと、ちょっとむかっきはしたが、お光はキツネでもついているか、ときどきよく物をいいあてる。十万両の金を掘り出すまでは、けんか別れになってもつまらないし、——悪魔がついているとは、お光のてまえがってないいぐさだが、源太郎は頭といい腕といい、たしかに強敵にはちがいない。どんなことで、ひょっと命があったとすると、こんどねらわれるのは、友情を裏切って二度まで源太郎を死地におとした自分のほうだ。この目で死がいを見ておけば、こんなたしかなことはないので、

「よかろう。それではおひかりさまのおことばにしたがうことにいたしましょう」

と、わざとていねいに頭をさげた。

そして、夜のあけるまで、そのがけの上でたき火をして待ち、今夜は会うのは島田の宿ときめて、おひかりさまは眷族にまもられ、一足先に峠を越していった。

新吉は残された黒頭巾ふたり、これは同藩の菊川文助、金田万兵衛という足軽たちだが、これといっしょに道をまわって谷底へおりてみた。

谷底は横倉村へ出る間道になっているようだが、はたしてどこをさがしても源太郎の死がいは発見できなかった。数丈のがけに雑木が茂っている。あるいはその枝にでもひっかかっているかと、相当念入りに調べてみたが、それらしいふうもない。

「命運のいいやつですな」

「おひかりさまのいうとおり、あの男はたしかに悪魔がついているのかもしれません」

足軽たちは目を丸くしていっていた。この連中はともかくもお光をおひかりさまとして、心から信仰もし、おそれてもいるふうだ。

いずれにせよ、源太郎が生きているとなると、新吉は冗談どころではなくなる。

「たとえ命があったにしても、けがぐらいはしているはずだ。そう遠く行けるはずはないから、おまえたちはこの道を横倉村のほうへ出て、途中よく人家を調べてみてくれ。おれは宇津谷のほうへ出て、ことによったら鞠子まで行って見てくる。落ちあうところは、峠をおりた河原町ときめておこう」

ふたりにわかれて、鞠子へ引きかえす気になった新吉には、もし運よく源太郎がどこもけが一つなく助かっているとすれば、むろんまずあやめを救いに江尻へ向かうだろうという胸算用があったのだ。

そのあやめにこんな場所で会う、しかもあやめはまだ源太郎に会っていないようだとわかると、新吉はあらためて計算をたてなおさなくてはならなくなる。

金しばり

「あやめさん、どうしてあんた主膳の手をのが

れたね。わしは源さんのいいつけで、これからあんたを救いに江尻へ向かうところだったんだ——無事で、よかったなあ、ほんとうに」
　まるで手を取らんばかりにして、けろりとそんなうまいうそが口をついて出る新吉だ。
「じゃ、あの人は、あたしが主膳に売られたことを、もう知ってるんですか」
「うむ。ついさっき宇津谷峠の山中で、やっとわかったばかりなんだ」
「山の中で——」
「そうなんだ。われわれもゆうべから大活躍だったんだ。あやめさんは源さんが、府中の妙なあき屋敷へ誘いこまれ、おひかりギツネのやつにあき蔵へ閉じこめられたのを知っているかね」
　新吉はうまいところで、さぐりを一本入れてみる。
「知ってます。梅屋の番頭に聞いてきました」
　なんにも知らないあやめは正直である。
「ああそうか。梅屋へ寄ってきたのか。それでわれわれが鞠子へ向かったとわかったんだな」
「そうなんです。あたしもあのあき屋敷へつれていかれて、おひかりギツネから主膳の手へ売られたんです。手足を縛られて、途中なんとかいう宿屋で、もう少しのところで主膳の手ごめにあおうとしたんですけれど、ちくしょう、こんど出会ったら主膳のやつ、きっとかたきをとってやるからいい」
　今出たばかりのさわやかな朝日の中で、はつらつと怒りに燃えているあやめの顔、姿は、みなぎるような年増盛りの血をみなぎらせて、これはまったくすばらしい逸品だと、新吉はひそかに目をみはらずにはいられない。お光もこれに劣らぬ美貌だが、どこかひどく冷たい感じで、それにくらべると、あやめのほうがはるかに色っぽくて、男心をひきつけるものがある。
「しかし、手足を縛られていて、こんなことをいっちゃ失礼だが、よく主膳の毒牙をまぬかれたなあ」

「ばかだから、あたしが眠りこけていると思って、手足のなわを解いたんです。そして、のしかかってくるところを、ああいやらしい」
　あやめは潔癖に右手でいそいで両肩を払い清めながら、きれいなまゆを深くよせ、
「だれがあんなやつに、死んだってあたし、——いきなり主膳のみぞおちを一突きにして、さっさと窓から逃げ出してやったんです」
　と、この夫のいとこに少しでも身の潔白を疑われたくなくて、ついくわしい話になっていた。
「さすがにあやめさんだな。こっちはまたそんなことは知らないから、わしは駿府の奉行所へ走ったり、どうもあの江戸の同心はにせものらしいとわかると、さあ気が気ではない。源さんは出ていったっきり帰らないし、ともかくもひとりでこんどは宿屋という宿屋を聞いて歩いた。まさか、あき屋敷へ行ったり、そこからすぐに江尻へ向かうなんて、考えもつかないんでね、てっきりどこか宿屋だと見当をつけたんだ」
　新吉はあやめの話を聞いているうちに、すっかり善後策をたてなおしていたのだ。
「うちの人とは、どこで会ったんです」
「わしは府中の宿はずれで、おひかりギツネの一味らしい片割れが鞠子へ向かうのを、偶然にも見かけたんだ。そのあとをつけて、一味の連中が米屋というはたごへつくのを見とどけ、府中へ引きかえして、もし源さんが帰っていたら告げよう、帰っていなかったら梅屋の番頭にことづけを残していこうと思って、途中までくるとそこで源さんにぱったり出会った。カゴ屋に蔵の中から助け出された源さんは、あやめさんがおひかり一味にさらわれて、てっきり鞠子へ向かったと思いこんだものだから、すぐ府中を立ってきたというんだ。正直にいって、源さんはよっぽどあやめさんにほれているんだな。あやめにもしものことがあったら、わしはもう生

きていたくないって、しみじみいっていたぜ」
　そんなうれしがらせを忘れない新吉だ。
「あたしだってそうなんです」
　おもわずあやめはかっと胸が熱くなって、どこか話に変なところがあるとは、ついうっかり聞きのがしていた。
「そうだろうねえ。つまり相ぼれってやつなんだな。それであやめさんゆうべそんな夜中に鞠子へついて、よく宿屋が起きてくれたねえ」
「いいえ、この辻堂で夜を明かしたんです」
「へえ、この辻堂でね。寂しくなかったかね」
「いいえ、あの人のことで、胸がいっぱいで、寂しいなんて考えている暇なんかありゃしません」
「ごもっとも――」
　新吉はちょいとおどけてみせながら、急に真顔になる。
「そこで、ふたりになればこっちも気が強い。源さんはあのとおりたのみになる男だからね。ところが、鞠子へ引きかえして、すぐに米屋をたたき起こしてみると、ついいましがた、その人たちはお立ちになりました、なんでもあなたがたがおいでになるまえに、府中からひとりお連れさんがお着きになりまして、それからまもなく、つごうで今から峠越えをすることになったからと、そういってたったというんだ。あとでわかったんだが、あき屋敷の近所に一味の見張りがひとり残っていて、源さんが蔵から助け出されたのを見ると、すぐ鞠子へ注進に走ったらしいんだ」
「まあ、それで逃げ出したってわけなんですね」
「と、われわれもはじめは思って、時を移さずあとを追ったんだが、実は逃げたんじゃない、山の中の破れ堂のあたりへたき火をして、わざとわれわれをおびき寄せたんだ」
「おびきよせて、どうしようっていうんです」
　あやめはどきりとしておもわず目をみはる。

「おひかりギツネが眷族十数人を左右にしたがえてね、自分は正面破れ堂のぬれ縁に腰かけておさまり、源さんとわしとがその前に立った。ちょいと見ものだったな」
「おひかりギツネはなんだっていうんです」
「つまり、われわれふたりに味方になれっていうんだ」
「まあ、ずうずうしい」
「源さんもそういった。さんざんわれわれを苦しめておいて、いまさら味方になれとは、虫がよすぎるではないか。おまえたちはいったいわしの妻のあやめをどこへ隠したんだ、まずそれから聞こうとね。するとおひかりギツネのやつが高慢な顔をして、にやりとわらってね、いままではおまえたちをためしたのです。あやめは江戸から迎えにきた神尾主膳という者にあずけてあります。今夜はたぶん江尻泊まりでしょうと、ぬけぬけとぬかしたもんだ」
「うちの人、黙ってなんかいなかったでしょう」
　勝ち気なあやめの目がきりきりとつりあがってくる。
「むろん黙ってなんかいるもんか。人の妻をけだもののような男にわたして、それもおまえたちのことだから、手足を縛ってわたしたにちがいない。そういう残忍冷酷なやつは人間とみとめない、斬って捨てると出たんだ。おひかりギツネのやつ、落ち着き払ってね、そなたたちがおひかり教の味方になれば、あやめは無事に手へもどる。わが神通力をもって、主膳はあやめのからだにふれられないように呪縛してあるのだ。もし味方になれないというなら、即座に呪縛を解いて、あやめのからだを主膳の自由にさせるがよいかと、すごいことをぬかすんだ」
　あやめはおもわずからだじゅうがかたくなってしまった。
「うちの人、なんて返事をしたんです」
「さすがに源さんも、これには困ったようだ

な。わしもおもわず息をのんでしまった。すると、そこはやっぱり源さんだ、よろしい、そのほうに事実それだけの神通力があるなら、味方にならぬものでもない。それはあやめの無事な顔を見てからのことだ。先へあやめを主膳の手から、取りもどしてみせろとやった。しかし、おひかりギツネのやつ、ちょいとふしぎなことをぬかしたな」

　新吉は思い出したように、小首をひねってみせる。

「どんなことをいったんです」

「それではおひかり教の神通力を見せてやろう。斎藤新吉はここから江戸へ向かうがよい。きょうじゅうには必ず無事にあやめを手に入れることができるだろう。源太郎は自分といっしょに島田の宿で、新吉の帰りを待つがよいということになってね、夜の明けがたに峠で別れてきたんだが、こんなに早く無事にあやめさんに会えるところを見ると、おひかりギツネの神通力もまんざら口から出まかせじゃないのかな」

　わざと変な顔をする新吉だ。

「あたしはおひかりギツネなんかに助けてもらったんじゃありません。ちゃんと自分の力で逃げ出してきたんです。そんなキツネなんかにだまされてたまるもんですか」

　あやめは承知しない顔つきで、きっぱりといい切るのだ。

「わしもそれは信ずるがね」

「あの人は、どうして自分であたしを迎えにきてくれなかったんです」

「いや、源さんはかわいい女房のことだから、自分で迎えに行くといったんだ。ところが、おひかりギツネがそれは承知しないのだ。つまり、源さんに逃げられては困ると、用心したんだろうね。源さんほどの男だからおひかりギツネもぜひ味方にしたい腹なんだろうな。なんのかんのとはいっても、おひかりギツネだって女だからね。たのもしい男にはすがりたくなる

さ」

　なにくわぬ顔をして、新吉はあやめのしっと心をたきつけてみる。

「うちの人はどうなんです。あたしが無事に助かれば、あんないやらしいおひかりギツネの味方になる気なんですか」

　きかない気だけに、あやめはたちまち、やきもちの火の玉になってきたようだ。

「さあ、そこまではまだ、源さんとふたりきりで話す暇はなかったんだ」

「行きましょう、新吉さん。あたしはいやだ。おひかりギツネの前でりっぱにいってやる、あたしは自分ひとりで主膳をやっつけてきたんだから、うちの人はおひかり教の味方なんかにしませんと。神通力があるんなら、ここであたしを殺してごらんと、たんかを切ってやります」

「りっぱだなあ、よし、行こう。おひかりギツネは、わしのためにも親友のかたきだ。いまからあとを追えば、うまく行けば藤枝あたりでおひかりギツネの一行に追いつけるかもしれない」

　そういう間にも、きっとくちびるをかんで、もうさっさと峠のほうへ歩き出すあやめだ。

　――うまく行った。

　これで当分はおれのそばを離れることはできないあやめだ。この人質さえあれば源太郎の手足を金縛りにかけることができるし、このすばらしいあやめの膚をわが閨房の花とながめることも自由だと、新吉は内心悪魔のごとくほくそえまずにはいられなかった。

銭占い

　その夜、島田の宿へ着いたおひかり教の一味は、いつものとおり、二、三軒のはたごへ、目だたぬように分宿した。腰元姿のおひかりさまが、供のじいやをつれて泊まったのは紀伊国屋という上はたごの奥の離れで、宿帳には京の公

卿成田日野大納言様奥方づき腰元光、子細あっての不動院へ代参の帰りというふれこみであった。

おひかりさまはときどき銭占いをやる。それがよく当たるので一味の者から畏敬されていたが、今夜は自分のために試みていた。行者の娘で神がかりになっているから、そういうときのお光の顔は、あんどんの灯かげに妖しいまでにさえざえとして、近よりがたい秋霜のようなきびしさを備えてくる。

一文銭を五つ手にしたおひかりさまは、端座して修験者の印を結び、はらりと畳の上へその銭をまいた。

「なにを占いまするな」

心得て、老僕喜平が静かに聞く。

「源太郎の命、あやめの吉凶――」

つぶやくように答えてからかっと目をひらき、銭をにらんだときには、すでに神がかりになっているのだ。

銭は二個が表、三個が裏、表の一個は、やや遠く離れて畳のへりへかかり、その下の左右に裏が二個、その左の裏の一個のすぐ下に表と裏が一個ずつ並んで、表のほうが裏のほうより少し上へ頭を出している。

「源太郎の命はいかがでござりますな」

「生きている」

お光の目には離れた表の一個がたくましい源太郎の顔に見えてくるのだ。

「あやめの吉凶は――」

「半吉半凶――」

下の表の一個があやめで、その上にある裏の一個が主膳、あやめはたしかに主膳の手はのがれたが、別の裏の一個に押えられている。その押えている裏の一個はだれか、お光の頭はまだうかんでこない。

「源太郎は生きている。三人の目には触れていない。しかし、たしかに生きている。強い男だ」

裏の二個が新吉と足軽ふたりに見えてきた。新吉の顔が妙にうとましい。源太郎のたくましい顔になんとなくひきつけられてくる。お光はわれにもなく、五個の銭に自分の姿を求めていたが、どの銭の相も気にいらぬ。右の裏の一個がいちばん源太郎に近いが、それでも少し遠すぎるのだ。むしろ、もっと遠く二個の裏の銭に押えられているあやめの銭のほうが、激しく源太郎銭のほうへ手をさしのべながら、いまにも飛びついていこうとする勢いに見える。

――おまえは殺されるがいい。

お光はあやめ銭をにらみつけながら、憎くてたまらなくなってきた。焼きつくように源太郎銭がほしい。が、源太郎銭は超然と遠くへ離れて、自分など見向こうともしない。いや、高いところからやさしくきぜんと、あやめ銭のほうへ両手をさし出しているのだ。

――憎いやつ、ふたりとも殺してやる。

じっとりと汗ばみながら、ふっとお光はわれにかえった。

「ごめんくださいまし」

次の間で女中の声がして、静かにふすまがあいた。

「なにか用かね」

喜平が聞いている間に、お光は前の銭占いをくずして帯の間へおさめた。

「斎藤さまとおっしゃるお連れさまがお着きになりました」

その声の下から、新吉がもうわが座敷へでも帰ってきたようななれなれしい顔つきで、ぬっと座敷へはいってきた。

「やあ、お帰り。どうだったな」

それでも喜平はあいそうよく迎えたが、お光はおひかりさまの冷たい顔に返って、じっと新吉を見くだしている。

「山歩きは楽じゃないな」

新吉はわらいながら平気でおひかりさまの前へすわった。

「あの男は死んではいなかったでしょう」
お光は冷たい声で、ずばりといった。
「さすがにおひかりさまは、なにもかもお見とおしだねえ」
いくぶんひやかしぎみの新吉だ。
「あの男の行くえはまだわかりませんね」
「残念ながらかいもくわかりませんな」
それを平気でいってのけるずぶとい顔を見たとたん、今の銭占いのわからない裏の一個がすっと解けてきた。
「あやめとはどこで会いました」
「へえ」
おどけた顔をしながらも、新吉はたしかに驚いたようである。
「ついでに、どこで会ったか当ててごらん」
わが女房だといわぬばかりの口ぶりが、埋蔵金を掘り出すまではだまして利用しなければと思いながらも、お光には妙にいやらしい。
「あの男に命をねらわれるのは、だれよりもそなたですよ」
「心配しなさんな、勝負はこっちの勝ちだ」
「それは、ぜひ勝ってもらわなければ困ります」
「とにかく、あやめに会ってくれ。要領は、源太郎がおまえと賭けをした。あやめが主膳の手から無事にもどったら、おひかり教の一味になる。つまり、おまえの神通力を信用するということになって、おれがあやめを迎えに行ったんだとだましてあるんだ。今夜まだ源太郎に会わせられないということを、あやめにおまえの口からうまく納得させてくれ」
「つれておいでなさい。会いましょう」
お光は取り澄ましていう。きらいでもいやらしくても、目的を達するまでは新吉といっしょに仕事をしなければ、どうにもならないくされ縁になっている。しかも、源太郎はお光にとっても強敵なのだ。きらいな男ではないが、自分の味方にならない以上、どうしても生かしてはおけない人間である。おそらく新吉は、あやめをおとりにして、あの男をおびきよせようというのだろう。
「新吉、あの男のわなはよっぽどじょうぶにこしらえておかないと、またしくじりますよ」
「だいじょうぶだ。おれだって命は惜しいからな」
新吉はにやりとわらって、あやめを迎えに立つ。

恋はくせもの

新吉が出ていくとまもなく、渡り廊下へ女にしては少し荒っぽい足音がして、それが次の間のふすまの前でぴたりと止まった。
どうやら息をととのえているようである。お光が老僕と顔を見あわせていると、
「ごめんください」
と、はっきりした張りのある声が呼ぶ。
その声になんとなく闘志のあふれているのを感じて、敏感なおひかりさまの顔が急に鋭く引きしまってくる。
「おはいりなさい」
老僕の返事にふすまがあいて、大丸まげもつやつやしいあやめが、恐れげもなく控えの間の八畳へはいってきた。のびのびと均整のとれた柔軟なからだだが、恋いこがれる夫を取りもどしにきたのだから、おのずとみなぎるような年増ざかりの情熱をたたえて、いきいきとみずぎわだった女房ぶりだ。
おひかりさまのお光が水の精なら、あやめは火の精か、あやめが咲き狂う緋ボタンなら、お光は妖しい白虹を吐く白ボタンか——お光は座敷の床の間を背に、あやめは控えの間の敷居ぎわに、ふたりの美女は行儀よくすわってひたと顔を見あわせる。
——あの火のような顔。
おひかりさまは、今はじめてしみじみとまと

もに見る濃艶なあやめの美貌に、むらむらといい知れぬしっとさえ感じてきた。この女体が、あの男らしい源太郎のあいぶの前に、炎のごとく燃えくるうのかと思うと、なんとなく殺してしまいたくなる。

あやめはあやめで、こうごうしそうにかまえてはいるが、どこかに氷のような残忍さをたたえているお光の高慢ちきな顔を見て、

——このキツネつきめ。

と、つい憎悪の感情がかくしきれなくなる。

あやめはわざと両手をついてまず皮肉なあいさつをしてやった。

「おひかりさま、夫源太郎が毎度お世話になりまして、ほんとうにありがとうございます」

「そなたはよくあの主膳の手から無事にのがれてきましたね」

これもつんと澄まして、あくまでもしらじらしいおひかりギツネだ。

「おかげさまであたしには、いつも夫の一念がついていてくれますから、どんな悪魔でも顔負けしてしまうんです」

「けっこうですね。源太郎もあやめは貞女だからとよろこんでいました」

「あたしたちはどんなに離ればなれになっていても、魂だけはいつもいっしょだものですから——ほ、ほ、それだけ情合いが深いとでもいうのでしょうか」

とろんと溶けそうな顔をして、強欲なキツネつきなんかに、この夫婦の情合いがわかってたまるものかと、あやめは勝ちほこった気持ちだ。

「魂はたいせつにしなければいけません」

「あの、うちの人はこちらにごやっかいになっているそうですけれど、どこにいるのでございましょう」

「いま大井川へみそぎにやりました」

「みそぎ——？」

「そなたが助かって、はじめておひかり教のありがたさがわかった、ぜひ信徒になりたいと申しますから、けがれた魂をよく洗ってくるようにと、申しつけたのです」

これはみごとなしっぺがえしだった。

「あら、わざわざ洗いに行かなくたって、うちの人の魂はとてもきれいだのに」

あやめは負けずにやりかえしてやったが、魂のことになると神がかりのほうがどうしてもうわてだ。

「そう思うのはまだそなたが俗人だからです」

「だって、あの人はいまさら魂を水で洗わなくても、火で焼かれてきれいになっているはずでしょう」

「それだから、そなたは主膳の毒手からのがれることができたのです」

この女狐め、自分であたしを主膳に売っておいてと、あやめは急に腹がたってきた。

「おひかりさまこそ人の魂を売ったり焼いたり、まるで悪魔のような魂をお持ちのようでござんすね」

「それがそなたの魂の行というものです。そなたはいつも源太郎の魂といっしょだといいましたね」

「二世も三世もいっしょなんです」

「人をおこったり疑ったりしている間に、そなたも大井川へ行ってみそぎをしておいでなさい。源太郎だけがいくら魂を洗っても、つれそうそなたの魂がそうけがれていては、とても救われません。自分で大井川へ行って、源太郎に会って話を聞いたほうが、ここで迷っているより早いでしょう」

それはたしかにそうだし、源太郎に会えさえすれば、文句のないあやめなのだから、おもわず、おひかりギツネの顔をながめずにはいられなかった。

「うちの人はほんとうに大井川へ行っているのですね」

「おろかなことを——人に聞くより、行って見

たほうが早いではありませんか」

あけすけに頭から冷笑されて、勝ち気なあやめはかっとなってしまった。

「恐れ入りました。では、うちの人に会って、よーく意見してやります」

そんな負け惜しみをいいながら立ち上がったが、なんともくやしい。どうして源さんはこんなキツネつきに負けてしまったのだろう。いいえ、いやだ。あたしはきっとあの人を思いかえさせてみせる。死んだって、こんなやつの信徒にするものか。それぱかりが気になって、実はまるっきりだまされていたんだとは、さすがのあやめもついうっかりしていたのだ。

「お光さま、いけにえはなるべく少ないほうがいいですぞ」

老僕喜平が暗い顔をする。

「あれは新吉のいけにえです。光の知ったことではありません」

お光はきつい顔をしておこっている。

「じいや、これを持ってあやめのあとをつけておくれ。新吉があやめにかなわぬようなら、いてもらっても役にたちません」

「かしこまりました」

喜平はお光から短筒をわたされて、すなおに立ち上がりながら、恋はくせものだなと、しみじみ思った。

毒蛇の呪い

喜平を出してやったお光は、八畳の間へひとりですわりながら、右の中指にさしているオランダ渡り毒仕掛けの指輪を、じっとながめていた。平うちの赤銅に金で毒蛇が象眼してある幅五分ほどのぶさいくな指輪で、これをはめて相手のどこかを強く握ると、ヘビの舌の先から毒針が出て、またたく間に相手を死にいたらしめる。

「むやみに使ってはいかんが、おまえは弱い女

に生まれたのだから、いざというときの身のまもりにしなさい」

そういって、父光善が死ぬとき短筒といっしょに形見にくれたものだ。そして、その指輪はすでにふたりの命を奪っている。最初の箱根の雲助は源太郎がいったとおり、この指輪のききめをためすための犠牲者だったが、ふたりめは中村市之進だった。

はじめ、埋蔵金を掘り出すまでの犠牲者を銭占いで占ってみたとき、五人という数が出ている。するとあと三人のいけにえが出るはずである。それをお光は昨夜まで源太郎、あやめ、最後に新吉と思っていた。

源太郎は味方につかぬかぎり、埋蔵金を掘り出す強敵である。普通の女ならあやめは見のがしておけるが、なまじ身についた男まさりの芸を持っているだけに、これも生かしてはおけない。新吉は一度膚まで許したが、きらいだから殺す。

なんとなく、そうはっきりきまっていたのが、さっき銭占いをやり、いま喜平を出してやってから急に変わってきたのだ。

――あの強い男は殺したくない。

新吉のかわりに、源太郎がもし味方についてくれたら、どんなに心じょうぶでうれしいだろう。源太郎が妙に殺したくなくなったのは、あの府中のあき屋敷へ誘いこんで、はじめて口をきいたときからだった。恐ろしい敵にはちがいないが、新吉などとは比較にならぬほど男らしくて、たくましくて、敵ながら、ひそかにため息が出るほどあっぱれだと思った。

ひきょうなやつなら、とっくに指輪で殺していたほうが簡単だったのである。だからといって、じゃまになる敵なのだから、ヘビの生殺しのようにあき蔵の中へ閉じこめてもみた。宇津谷峠で、ああまですべてを見抜かれてしまっていては、どうにも助けておくわけにはいかないと覚悟して、谷底へ追い落としもした。

が、常人ではとても助からない大難を、両方ともとにかく切り抜けてきている。まったく強い男だ。その強さたくましさにたまらない魅力さえ感じてきて、

——ことによると、ぜひ味方につけろという天の啓示かもしれないわ。

ふっと、そんな気持ちさえしてきた。

そこへ、ふいに新吉があやめをつれてきた。あやめを大井川へやれば、新吉はきっとあやめのあとを追っていく。どうせあやめは、新吉のいけにえにされるのだ。それは、あたしのせいではない。

——あやめさえなければ、あの男もあきらめて、いつかは、あたしの味方になってくれる気になるだろう。

しかし、じいやが今夜ふたりを始末してくれれば、いけにえは四人、あとひとりだ。そのひとりが、この指輪の毒にかかる。それはだれだろう。

お光はじっと指輪の金のヘビを見つめる。無気味な長い舌を吐いている毒蛇。この舌はだれの命をねらっているのだ。

——あの男だ。

はっきりと源太郎の顔がまぶたにうかんできたので、お光ははっとした。

——そうだ、源太郎がどうしてもいやだといえば、あたしはあの男をいけにえにしなければならない。

いやだわ、殺すのはと、お光は必死に戦いはじめる。が、あの男は容易に味方になろうとはしないだろう。つい腹がたってくると、この毒蛇はひとりでにあの男を刺してしまうにちがいない。

「そのとおりだ」

毒蛇はそういっているようである。

「いいえ、あの男だけは刺してはいけません」

「五人めだ、あの男は」

毒蛇はきらっと長い舌をふるわせる。

「いいえ、あの男はあたしが殺しません」

「では、五人めの身がわりをよこせ」

「あたしが、あたしが自分でなります」

とっさにそう答えて、お光はわれながら、ぞっと総毛立ってしまった。

毒蛇の長い舌が、宿命を暗示するようにきらきらとおどっている。

「あの男か、それでなければあたし」

それは世界のはての断崖へ、ぎりぎりと追い詰められたような暗いやるせない気持ちだった。この毒蛇はふたりの結ばれるのを、のろいきらっている。これは毒蛇のしっとなのだ。

「いやだわ。あたしはあの男は殺さない」

お光はかっとなって、おもわずのろわしい指輪を指からはずし、帯の間へ押しこんでいた。いまわしい呪縛から解放されたように、急にほっとした気で、こんどこそ見つめている明るいあんどんのほかげの中へ、源太郎の男らしい顔がありありと微笑しながら、うかびあがってきた。

「あたし、あたし、あなただけは殺しません」

うっとりその顔にささやきかけて、からだじゅうが甘い微笑の霧につつまれようとしたとき、すっと廊下のふすまがあいた。黒いつむじ風が氷のように吹きこんできてたちまち甘い微笑の霧を吹き散らす。

「おひかりさま、神尾主膳さまがまいって、お目にかかりたいと申しているそうですが、いかがいたしましょう」

宿の女中ではなくて、足軽金田万兵衛が取り次いできたのだ。この離れから渡り廊下をわたったところに信徒のへやがとってあって、離れの入り口をまもるようになっている。おそらく用心深い喜平が出かけるとき、信徒にも宿へも、直接離れへは取り次がぬようにと、いいおいて行ったのだろう。

「江戸の主膳どのですね」

「はい」

きっとあやめに逃げられて、相談にきたにちがいない。

「お通しなさい」

「はっ。だれかひとり、おそばに控えさせましょうか」

「それには及びません」

侍に生まれながら、女を追いまわす以外に能のない主膳など、頭からばかにしきっているおひかりさまだ。

「夜中、突然失礼する」

旅じたくの主膳は、ここをたずねあてるとすぐ飛びこんできたらしく、ほこりに黒ずんだ醜悪な顔をして、無遠慮におひかりさまの前へきてすわった。

「ほう、今夜はお腰元さまですな」

その端麗な姿に、ぶしつけな目を細めて、にやりとする主膳だ。

「主膳どの、あなたはおしえにそむいて、あやめの膚にふれようとなさいましたね」

おひかりさまはけいべつするように、この無作法者を見すえてやる。

「恐縮――つい酒のうえでな。これだけは神さまでもしようがない。大目に見ていただくことにして、どうでしょうな、なんとかおひかりさまの神通力で、もう一度あやめをつかまえてもらうわけにはいかんだろうか」

ぬけぬけとして、なんともあつかましい男である。

「わらわは女衒ではありませぬ」

「それはわかっている。おひかり教の教祖さまだから、天下の旗本がこうして頭をさげてたのむんだ。奉納金五十両という大金をかけたあやめですからな。ただにおいをかいだだけで逃げられたとあっては、天下の旗本の顔が丸つぶれになる。なんとかしてくださらんか」

「そのお心がけではむだでございましょう。せっかくお渡ししても、また逃げられます」

「いや、こんどは断じて逃がさん。たとえ三年たたぬうちに変死しようとも、わしは命にかけて、きっとあやめは一度わがものにしなければ承知できないんだ」

不覚にも当て身までくわされている主膳だから、執念の鬼になるのも無理はなかった。けだものの執念もここまでくれば、人をぞっとさせるものがある。敏感なお光は、この男にはもうおどしも理屈もききそうもないと見てとったので、

「命もいらぬというのでしたら、もう一度だけ、今あやめがいるところだけを教えましょう。これからすぐ大井川へ行けば、あやめに出会えるはずです。あとはご自分でおつかまえなさい」

と、冷たく教えた。今から行って、生きたあやめに会えるか、それとも死がいになっているか、それはこの男の運次第である。

「ほんとうだろうね、おひかりさま」

「そのかわり神罰を覚悟なさらなければなりません」

きっぱりといいわたすお光だ。

「あやめの膚にふれると、ほんとうに変死するというのかね」

いかにもむてっぽうな主膳でも、変死というのはあまり気持ちがよくないらしい。

「神さまの仰せつけにそむくのですから、やむをえません」

「長くて三年かね」

「短ければ三日のうちでございます」

「ふーむ」

まじまじとお光の顔を見ていた主膳の目が、追い詰められたネコのように、さっと凶暴な光をおびたと見る間に、

「あっ、な、なにを――」

がくぜんとしたが、もうおそかった。まともに襲いかかった主膳は、行儀よくすわっていたお光ののどへ右手をかけ、左手で口をふさいで、からだごとのしかかるように、あおむけに

押し倒したのである。それはあっという間のひょうへんぶりで、思いも及ばなかったことだけに、お光はどうしようもない。はでなすそを乱して、わずかに手足をばたばたと身もがきさせながら、上から男の強力にしっかりと押えつけられ、
「くやしい。こんな、こんなけだものに」
と、思ううちに息苦しくなって、もう身もがきする力さえない。

魂の声

「どうせ死ぬときまれば、ついでにおひかりさまの肩ももらってやる」
不敵な淫獣は命がけだけに、いやがうえにもぼんのうにかりたてられ、きらきらと燐のように濁った目を燃やしている。
「おい、神通力があるんなら、早く今のうちに不思議をあらわさねえか」
憎いやつ、せめてあの指輪さえはずしていなかったらと、くやしいうちにも、お光は意識がかすんでくる。
「人並みに苦しそうな顔をしてるところを見ると、おまえもただの女だな」
もう声はたてられないと見ると、淫獣の左手は大胆にも胸へすべりこんでくる。が、あやめのときの失敗があるから、のどへしっかりとくいこんでいる右手は、少しもゆるめようとしない。
「ふ、ふ、天下の旗本をさんざん小ばかにしやがって、太い小娘だ。こんどはおれの神通力を見せてやるから、おとなしく観念するがいい」
そのいやらしい左手が、毒蛇のようにからだじゅうをはいまわると思ううちに、お光はあたり一面の霧の中へ閉じこめられていく。
「やっと神さまがお眠りあそばしたようだぞ。ふ、ふ、こうなっちゃいくらおひかりさまでも神通力は出せないだろう。たあいのないもん

だ」
ぐったりと手足を投げ出して、意識を失った女体をながめながら、淫獣がごくりとなまつばを一つのみこんだとき、
「女狐は死んでも、化けて出るよ主膳さん」
ふいにうしろで静かな声がした。
「あっ」
飛びあがらんばかりにがくぜんとしてふり返ると、ぬれ縁の障子が一枚あいて、頭から左のほおへかけて白い布をぐるりと巻きつけた旅姿の男がぬっとそこに立っていた。まったく思いもかけない建部源太郎である。
「げ、源太郎――」
主膳はあえぎながら、刀のつかに手をかけた。
「生きていたのか、きさまは」
「わしも神通力を持っているんでね」
自分から刀ざたはけっして好まない源太郎だ。
「おい、この小娘はおまえにも敵なはずだ。黙って引き下がってくれ」
主膳は気がついたように、そんなずるいことをいいだす。
「悪いりょうけんだな。男というものは暴力で女をもてあそぶものじゃない」
「じゃ、きさまはこんなところへ、なにしにきたんだ」
「わしはきこうが、目の色を変えて、この宿へはいるのを見た。きこうの行くところに、もしや、あやめがいるのではないかと思ったので、あとを追って庭へまわってみたのだ」
「あいにくだなあ。あやめはここにはおらん」
「それは自分で調べます。きこうはおとなしくここを引き取りたまえ」
「なにっ」
「神罰がこわかったら、あまりあくどいまねはせぬがよろしい」
「ふーむ。せっかく、おれが段取りをつけたの

を、あとからきて横取りしようっていうのか、虫がよすぎるぞ」
「黙って引きさがりたまえ」
もう口をきくのもあさましい。
「そうか、よし」
主膳はうなずいた。どう歯がみしたところで、残念ながら、腕ずくでは源太郎にはかなわない。自分の目的はこの女狐ではなくて、あやめにあったことに気がついた。あやめは大井川にいる。よし、この女狐は源太郎にくれてやるかわりに、あやめをこっちのものにして、この男の鼻をあかしてやろうと考えたのだ。
「きこうにそう見こまれたんじゃしょうがない。おれは帰る、きこうこそ、つまらんまねをすると、神罰があたるぞ」
「わしは神々に恥じぬ男だ」
「そうか。じゃ、神々によろしく」
主膳はふんと鼻の先で冷笑して、せかせかと廊下へ出ていった。
まだぐったりと正体のないお光だ。源太郎はつかつかとそのそばへ寄り、お光のからだを抱きおこして、その背筋へ右のひざがしらをあて、右手で胸をさすりながら、ぐいと活を入れる。
「あっ」
「気をたしかに持て」
「苦しい——水、水」
息は吹きかえしたが、お光は肩で弱い息を吐きながら、からだはたあいなくうつぶせに前へくずれていく。まっさおな顔だ。源太郎は水差しの水を茶わんにつぎ、ふたたびお光を抱きおこして、黙って水を口へ持っていってやった。その水をむさぼるようにのんで、お光はやっと畳へ両手をつき、せつなげにからだをささえた。
「あやめが大井川へ行ったというのは、ほんとうかね」
源太郎が静かに聞く。

はっとお光は、からだじゅうがかたくなってしまった。実は活を入れられるまえに、お光はすでに意識を取りもどしていた。意外の人にあぶないところを助けられて、その人がどんな態度に出るかと、そのまま気絶しているふりをよそおっていたのだ。源太郎はりっぱだった。主膳を追い払って、ちゃんと自分を介抱してくれたので、ついその気持ちに甘えてしばいをしていたのだが、しかしけっきょくこの男は自分のものではないのだ。目の前で水におぼれようとしているから、飛び込んで自分を助けてはくれたが、この男の心の中には、あやめしかない。
それは当然なことながら、お光はがっかりして妙に腹さえたってくる。
——なんと返事をしてやろうかしら。
どうせ、あたしのものではないんなら、もうどうなったってかまやしない。いっそ殺してしまおうかしらと、そっと帯の間の指輪へ手が行ったとき、がらりと廊下のふすまがあいた。
「それ見ろ、源太郎がおひかりさまを手にかけたぞ。斬れ、斬れ」
先頭に立ってわめいたのは主膳だ。
「うぬっ」
「それ、逃がすな」
どう吹きこまれて、どう血迷ったか、例の黒頭巾が四、五人、抜刀するなり座敷へ乱入してきた。お光はと源太郎が見ると、まだぐったりと畳へ手をついたまま顔をあげようともしないのだ。
「これ、主膳にだまされてはいかん」
一応説明しようと源太郎は立ちあがったが、お光がこの始末では、黒頭巾どもに容赦のあるはずはない。
「黙れ。おひかりさまのかたき」
「そこ動くな」
敵の剣陣は狂ったごとく、われさきに斬って出ようとするので、今はこれまで、源太郎もつ

いに抜刀しなければならなくなった。廊下の入りロで、にやりと主膳が悪魔のようにわらっている。

三人め

　源太郎に抜刀されてみると、狂信者の黒頭巾どもも、相手が強敵であることは再三見せつけられているので、おもわずはっとひるんで見えた。
　——なるべくなら血を流したくない。
　常にそれが念頭の源太郎だから、そのすきにすばやくぬれ縁からひらりと暗い庭へ飛んだ。
「あっ、逃げたぞ」
「逃がすな、追え」
　黒頭巾どもは口々にわめきあいながら、敵が逃げ出すと急に強くなって、われさきにと庭へ飛び出していく。離れはたちまち潮がひいたようにひっそりとなって、そこにぐったりつっ伏しているおひかりさまのお光だけが取り残されてしまった。その乱れたままのかっこうが、いかにもまだ正気がつかないように見える。
　——はてな。
　行きがけのだちんに狂信者どもをけしかけ、源太郎に腹いせをした神尾主膳は、すぐに大井川へあやめを追っていくつもりだったが、正体もなくつっ伏しているお光の、妖しくもなまめかしい姿を見せつけられると、一度ねらった獲物だけに、なんとなくまたしてもむらむらとしてきた。さいわいおもやとは離れたところだけに、宿ではいまの騒ぎをだれも知らなかったらしく、女中ひとり駆けつけてくるようなけはいもない。
　——せっかく落ちている宝物だからな。拾わないのはかえってみょうりにつきるて。
　淫獣はにやりとしながら、もう廊下のふすまをしめていた。足音をしのばせて、障子のあいているぬれ縁へいそぎ、じっと庭へ耳を澄ましてみる。源太郎はすでに裏口から往来へのがれたのだろう。それらしい物音さえしない。

　——まず、ここもよし。
　主膳は障子をしめきって、するりとお光のそばへしのび寄った。それさえ気がつかぬらしく、お光はただせつなげに肩で息を切っている。
「おい、どうした」
　ぐいとうしろから肩を抱きおこし、声を立てるようならもう一度絞める気で、主膳はすばやく右腕をのどへまわした。
　ぐったりと抱きおこされたお光は、まだ正気がつかぬといったふうに、のどへからんだ淫獣の腕へつと右手ですがるようにして、ぼんやりと薄目をあける。が、その指にいつの間にか毒蛇の指輪がはまっているのを、むろん主膳は気がつくはずもなかった。
「しっかりしろ、おまえが、やぼな声をたてさえしなければ、おれだって、なにもあんな手荒なまねはしたくないんだ」
「主膳ですね」
　お光の声にはまったく力がない。
「うむ、主膳だ。こんどはおとなしくしているんだぜ。おとなしくさえしていれば、おまえはあすからでも、天下の旗本の奥方さまに出世できるんじゃねえか」
「そなたは、そなたは神罰が恐ろしくないのですか」
「また神さまか。正直にいうと、おれは神さまより、このおまえのきれいな膚のほうがずっとありがたい」
「たちどころに神罰があたってもいいのですか」
「いいとも——」
「死んでもいいのですね」
「ふ、ふ、おまえの神通力が勝つか、おれの男の力のほうが強いか」
　そんなずぶとい放言をしながら、主膳はむせ

るような女の膚の香にいんとうな目を細め、みだらな左手が、もうぐいとお光の内ふところへすべりこもうとする。ぎくりとしたお光は、のどの主膳の腕へかけている指輪の手に力を入れて、ぐいと握りしめた。とたんにそこを針の先でちょいと突かれたほどの痛みをちくりと感じて、

「あっ、変ないたずらをしちゃいけねえ」

と、主膳はおもわず手をゆるめる。

「いたずらではありません。いま神罰が当たったのです」

急にお光のからだがしゃっきりとなって、いまわしい主膳の手を払いのける。

「おっと、そうはさせるもんか」

自分では両手に力を入れて、のがさじとしっかりお光のからだを抱きすくめたつもりだったが、その手がしびれたように少しも力がはいらず、その間にお光はするりと主膳の胸から抜け出して、その前へきちんとすわりなおした。激しい憎悪(ぞうお)をあらわにした、世にも冷酷なお光の白い顔である。

「くそッ、ど、どうしたんだ」

主膳はだらりと両手をひざへ突きながら、すでに全身が痛いようにしびれてくるのを感じ、はじめてぞっとしたようである。

「おまえは神罰をうけて、いま死ぬのです。思い知るがいい」

「なに、死ぬ？　神罰だと――」

恐怖にさっと顔をゆがめながら、しだいに目の前へ黒い霧がのしかかってくるので、それを払いのけようとわずかに両手を泳がせ、

「許してくれ。わしが悪かった。助けてくれ。きっと改心するから、助けてくれ」

と、自分でははっきり哀願したつもりだが、もうことばにはならず、目がぎらぎらと死の恐怖におびえおののき、そのままくずれるように前へのめり倒れてゆく。

「憎いけだもの、地獄へおちるがいい」

お光はまだ手足をぴくぴくけいれんさせて、断末魔のうめき声をもらしている主膳の無気味な姿をしりめにかけ、すっくと立ちあがった。これが三人めのいけにえである。いや、大井川であやめと新吉が喜平の短筒(たんづつ)に命をおとしていれば、これが五人めのいけにえだったことになる。

――あの男はどうしたろう。

お光は源太郎の顔を思い出し、どうにも未練がすてきれず、急にあんどんを吹き消して、ぬれ縁からたびはだしで庭へ出た。

――あの男をどうしても自分のものにするか、それとも、銭占いにはなかったが、六人めのいけにえにしてやるか。

気もそぞろに裏口から往来へぬけ出すお光は、きっと狂恋のくちびるをかみしめていた。外はどんよりと曇って、星かげ一つない生ぬるい夜空である。

人のこころ

そのころ――

宿を出たあやめは、暗い夜道を足にまかせて大井川へいそいでいた。源太郎があんなおひかりギツネなどの口車にのせられて、みそぎに行ったというのが、どう考えてもくやしい。もしほんとうにキツネにだまされて大井川なんかで裸になって、ぼちゃぼちゃ水を浴びていたら、あたしはどうしよう。あんまり情けなくて、涙も出ないんじゃないかしら。

考えただけでも泣き出したくなってくるあやめだ。それに、源太郎がそんなばかげたまねをするということは、自分より若くてきれいなおひかりギツネのほうが好きになって、ごきげんとりにやるのだとしか思えないだけに、あやめは気が気ではないのである。

「そんなことがあったら、あたしは死んでしま

うからいい」
世界じゅうでたったひとりの男だと思っているのに、もしその男にきらわれたとしたら、あやめはとても生きている気はしない。悲しくて、とうとう涙があふれ出てきた。
「あやめさん、――おい、あやめさん」
島田の宿を出はずれて、向島の並み木道へかかったとき、ふいにうしろから呼んでいる声が耳にはいった。
「あら、新吉さん」
追ってきたのは源太郎のいとこの斎藤新吉で、
「ずいぶん早い足だねえ。そんなにいそいでどこへ行く気だえ」
と、もうなれなれしく肩をならべてくる。
やがてよいをすぎて、大井川は暮れ六つで川止めになっているから、このあたりはぱったり人足は絶え、両側は黒々と広い水田である。
「大井川まで行くんです」
あやめはもともと新吉は虫が好かないから、さっき宿を出るときは、声もかけずにきてしまったのだ。
「大井川へなにしに行くんだえ」
「おひかりギツネのやつ、あの人はいま大井川へみそぎに行っている、うそだと思ったら、自分で行って見てくるがいいっていうんです」
「ふーむ。おかしいなあ」
新吉はそういって、急に立ち止まった。
「なにがおかしいんです」
つりこまれたようにあやめもつい立ち止まる。
「どうも変だと思ったから、実はあとを追いかけてきたんだが――」
「なにが変なんです」
「こんなこと、話してもいいかなあ」
なんとなく煮えきらない新吉だ。
「話して悪いことなら、あたし聞かなくてもいいんです」

男のくせにうじうじと、そんな思わせぶりなところが、あやめにはいやみでむしずが走る。ぴしゃりといってのけて、さっさとひとりで歩きかけたが、
「あやめさん、源さんは大井川へ行ったっていないぜ」
と、妙なことをいいだすのだ。
「じゃ、うちの人はどこにいるんです」
やっぱり立ち止まらずにはいられない。
「ほんとうはあの離れのおひかりギツネの座敷にいたはずなんだがねえ。あやめさんはあっていないのかえ」
ちょっと当惑したような新吉の顔つきだ。
「なんですって、新吉さん。それ、まさかうそじゃないんでしょうね」
あやめはさっと顔色の変わるのが、自分でもはっきりわかった。
「じゃ、やっぱりかくれたのかな。罪なまねをするなあ」
見ると、そこに三十坪ばかりの松原があって、昼間はそこへ掛け茶屋が出るのだろう、ヨシズ張りの小屋が店口をヨシズで囲ってある。
「とにかく、しばらくあそこを借りよう」
一つの床几へ自分が腰かけて、前の床几へあやめをさそう。
「うちの人が、いったいどうしたっていうんです」
「正直にいうと、わしがさっき離れへ行ったときは、源さんはたしかに宿のどてら姿で、おひかりギツネとなにか話しこんでいるところだった」
「なんですって――」
かくそうとしてもかくしきれないしっとの色を見てとって、新吉はうまく乗ったぞと、内心ほくそえむ。
「おひかりギツネのやつ、どう源さんを抱きこんだか知らんが、源さんのひざへもたれかかって、でれっとしてやがる。わしはむっとしたか

ら、源さん、そのかっこうはどういうわけかねと、つい皮肉が口に出た」
　あやめは必死に怒りを押えているようである。
「あやめは助かったかね、新吉と、源さんがわらいながら聞くんで、うむ、助かった、いまここへつれてくるから、自分で会ってみるがいい。——ご苦労だったな、いや助かったとわかれば、別に会うこともないんだ。どうせ主膳に縛られていったあやめだから、無事なからだじゃあるまい」
「そ、そんなことまで、うちの人がいったんですか」
「うむ、そのあとがもっとひどい。おれは津山へ埋蔵金を掘りに行くことにきめたから、きみからあやめに、おとなしく江戸へ帰って待っていろと、つたえてくれ。おれが津山から帰ったら、手切れ金はきっとやるから、もし好きな男ができたら、それと夫婦になってもかまわない」
「新吉さん、じゃ、うちの人はまだあの離れにいるんですね」
「いると思うな。おれは、おれの口から別れ話ができるか、とにかくあやめさんをここへよこすから、自分の口から話をつけろといってね、それがあるから、わしはわざと、あやめさんひとりを離れへやったんだが、——じゃ、おひかりギツネのやつ、さすがにぐあいが悪いんで、源さんを押し入れへでもかくしたんだな」
　すっとあやめが床几から立ち上がった。
「どうしたんだ、あやめさん」
「ほうっといてください。あたしは自分の目で、行って見てきます」
「いや、それはあぶない。おひかりギツネというやつは眷族をしたがえているし、目から鼻へ抜けるといった狡猾なやつだから、ひとりで行っちゃあぶない」
　親切ごかしに、新吉はしっかりとうしろから

肩を抱きとめる。
「いいえ、はなして——あたしだって長崎あやめです」
「いや、ひとりじゃあぶない。まあ、落ち着いて考えよう」
　新吉の手が肩を抱きこむように、右腕がいつの間にかするりとのどへ巻きついている。
「あっ、な、なにを——」
　ぎょっとして振りほどこうとしたが、もうおそかった。
「まあ、ここはわしに任せて、な、悪いようにはしないから」
　のどの腕に力がはいって、ぐいとうしろへ引きもどし、あわよくば床几の上へねじ倒そうとするけはいだ。
　——しまった。
　あやめはあやうく息がつまりそうになって、かっとなりながら、そこは鍛えぬいてあるからだである。相手の引く力を利用して、いきなりうしろざまにぐんと背中を新吉の胸へたたきつけた。
「あっ、あぶねえ、ばか」
　おもわず新吉はよろめいて、しかし執念深くのどの腕はとかず、狭いヨシズ小屋の中だから、二つのからだはかさなりあって、よろよろと横手のヨシズぎわまでよろけていき、それを半分突き破りながら、どすんと激しく突き当たった。とたんに、
「わあっ」
　新吉が絶叫しながら、あやめのからだを放したから、あやめはどっとそこへしりもちをついた。なかば夢中で、ぱっと立ち上がったあやめは、床几のところまで飛びのいて、すばやく髪から平打ちの銀かんざしを抜き取って身がまえる。
「あっ」
　見ると、新吉は両手で虚空をつかみながら、大きくのけぞり、めりめりとヨシズをくだい

て、半身は外へぶっ倒れていくところだ。外にだれかひとり、抜き身を持ったやつが黒々と立っている。
「だれだっ、そこにいるのは」
せつなく肩で息を切りながらも、あやめはきじょうにかんざしを握りしめながら、外へ声をかけた。
「おかみさん、心配しなくてもいい」
老人らしく、しゃがれた低い声が答える。
「この男は悪党だ。だから、わしが突き殺してやった。この男がいまいったことは、みんなうそだぞ。おかみさん、おまえのさがしている源太郎はな、この男のために宇津谷峠でゆうべ谷底へ突き落とされたまま、まだ生死が知れない。そら、この短筒をおかみさんにあげる。これを身のまもりにして、早く宇津谷峠へ行って、人をたのんでだんなさんをさがしてもらうがいい。運の強い人だから、きっと生きているにちがいない」
「あなたは、あなたはいったいだれなんです」
「いまにわかる。さ、早くこれを受けとりなされ。わしはからだがいそがしいでな」
黒い頭巾をかぶっている、がっしりとした老人だった。
「うちの人が、谷底へ突き落とされたって、ほんとですか」
あやめはことの意外に驚かされながら、おもわず老人のそばへ寄っていた。
「それ、これが短筒だ。おとさないようにな。人目にかかると悪い。わしも突っ走るで、おかみさんも早く行くがいいぞ。二度と会うこともあるまい。だんなさんの無事を祈っていますぞ」
黒頭巾の老人はヨシズの破れめから短筒をあやめに手わたすと、街道筋へ出て、島田の宿のほうへ走り去っていく。
「ありがとうございます、おじいさん」
あやめはそのうしろ姿へ礼をいいながら、なんだかキツネにつままれたようでもある。
——だれなんだろう。ひょっとすると、おひかりギツネについていたじいやさんじゃないかしら。
それにしても、あの人がおひかりギツネにだまされていたんでなくて、ほんとうによかった。いったい新吉はなんだってあんなうそをついていたのだろう。
いや、そんなせんさくより、あの人が新吉に昨夜、宇津谷峠で突きおとされているとしたら、新吉ならやりかねないことだし、一刻もこんなところにぐずぐずはしていられない。
——いそがなくちゃ、あたし。
どうやら息もしずまったし、そこに新吉の死体がころがっている無気味なヨシズ張りの中を出ようとして、あやめははっとそこへ立ちすくんでしまった。宿のほうからこっちへ走ってくる数人のあわただしい足音が耳についたからである。

はかなき命

あやめは大井川だと、源太郎は聞いている。無益な殺生は好まないので、裏口から宿を飛び出した源太郎は、どんどん大井川のほうへ駆け出した。とても追いつけないとわかれば、狂信徒の黒頭巾どももあきらめて引きかえすだろうと思ったのである。が、おひかりさまを手ごめにでもしたと主膳に吹きこまれているのだろうか、黒頭巾どもはいっこうにあきらめる様子もなく、どこまでもしつように追いかけてくるのだ。
いつか宿場も出はずれたし、それならいってきかせてやろうと、源太郎はヨシズ張りの小屋のあたりで立ち止まり、向きをかえて敵を迎えた。
「それ、油断するな」
「斬れ、斬れ」

はっと立ち止まった敵はたちまち剣陣を作ってくる。
「おい、はやまってはいかん。わしのいうことをよく聞け」
源太郎はぴたりと構えをつけながら、静かに口を切った。
「黙れ。教祖をおかそうとしたふらちなばち当たりめ」
「違う。おひかりギツネを手にかけようとしたのは神尾主膳だ」
「おひかりギツネとはなんだ。心にそのあなどりがあるから、おひかりさまの色香に迷いたくなるんだ」
しまったと、源太郎はおもわず苦笑が出る。
「だいいち、おまえは裏のぬれ縁のほうからひかそに忍びこんでいる。いやしい野心がなくて、武士ともあろう者が、そんなどろぼうネコのまねをするか」
「それは違う。神尾主膳があの旅宿へあわただしく駆けこむのを見て、わしは家内あやめがそのほうどものとりこにされているのではないかと見たのだ。おまえたちは人の妻を平気で縛って色餓鬼(いろがき)の手に渡せる邪教の狂信者だ。正面から掛け合ってもほんとうのことはいうまい。そう思ったから裏庭へまわったのだ。すると色餓鬼が教祖におどりかかってあやうく見えたから、わしが飛びこんで助けたので、真偽のほどは立ちかえって教祖に聞くのがいちばん早い。わしは無益な血は流したくないのだ」
「黙れ、無益の血ではない。おひかり教にあだをふくむふらち者、斬って神々へのいけにえにしてやるのだ」
「やむをえぬ、相手になろう。おまえたちこそ、わしを再三だまし討ちのわなにかけ、罪もないわしの妻まで、けだものに売ったおまえたちだ。今夜こそ、わしも遠慮なく正義の剣をふるうから、覚悟してくるがいい」
源太郎もついに決意せざるをえなくなった。

このうえ、遠慮していては、自分の身があやうくなるのである。
「うぬっ」
――狂信者どもが一瞬いろめきわたったとき、「一同、お待ち――」
さわやかな声がして剣陣のうしろから腰元姿のお光が、つと前へ進み出た。
「はっ」
ツルの一声だから、黒頭巾はいっせいに一足うしろへさがる。
「源太郎、そなたはたった今から、おひかり教の味方にならなければいけません」
おひかりさまはきぜんと源太郎の前へ立って宣言した。こうなると神がかりの娘だから、なにものも恐れぬ魂だけは持っているようだ。
「ほう、それはまた、どういうわけですな」
さんざん人の命をねらっておきながら、やぶからぼうに、そんなことをいいだす。さすがの源太郎もいささかあきれずにはいられなかった。
「神さまのお告げです」
――おひかりさまは頭から高飛車である。
「お黙り、キツネつきめ」
それまでヨシズのかげでじりじりしていたあやめが、いきなり短筒を持ってそこへ飛び出していった。
「あんた、だまされちゃいやだ。このキツネつきはあんたが大井川でみそぎをとっているなんて、あたしをさんざんだましたんです。おかげであたしは、あぶなくここで新吉の手ごめにあうところだった。くやしい、あたし、キツネを撃ち殺してやる」
あやめはかっと感情がうわずってきたらしく、つと銃口をお光の胸へつけた。あっと狂信者どもが血相をかえたとき、
「お待ち、あやめ。その短筒はだれのだえ」
源太郎が静かに手をのべて、短筒の手をおさえた。
「いま、どこかのじいやさん にもらったんで

す。そのじいやさんが、そこで新吉を刺し殺して、あんたが宇津谷峠の谷底へつきおとされたと教えてくれたんです。――まあ、その頭の布、どうしたんですよう」

はじめて気がついたように、あやめは急に源太郎の胸の中へ飛びついてきた。

「いや、これはほんのかすり傷だから、心配ないんだ。すると、わしは主膳の毒手からおひかりさまを助け、おまえは新吉の毒手から、おひかりさまのじいやに救われたことになるんだ。つまりこれで恨みっこなしということになるだろう」

あやめの気がしずまるように、肩を抱いてさとして聞かせる源太郎だ。

「やっぱり、やっぱり、あれじいやさんだったのかしら」

「そうなんだ。そして、その短筒はそこにいるおひかりさまのものなんだ。わしやおまえには不要な品だ。正しい者には、いつも天の加護があるからね。わかるかえ」

「わかるわ。あんたはおとっつぁんの憎いかたきでも、自分の手でかってに殺してはいけないと教えてくれました」

「それがわかれば、おまえは世界じゅうでだれよりしあわせな女だ」

「しあわせだわ、あたし。あなたさえ、そばにいてくれれば」

「そうか。そうわかったら、この短筒をもとの持ち主の手にもどしてあげるんだね」

「あたしがですか」

――あやめが星のような目をみはる。

「うむ、おのれに邪心がなければ、世の中にはなんにもこわいものはないはずだからな」

りんとした微笑をあたたかくたたえている源太郎だ。

「かえします、あたし」

きっぱりといって、あやめは夫の胸を離れ、

「おひかりさま――」

心なごんだ声で呼びながら、一足お光のほうへ進み出た。

きぜんと立って、またたきもせず、こまやかな愛情の世界を見まもっていたお光が、このときしずかに大地へ両ひざをついた。

「あっ」

そのままくずれるようにうつ伏せに、前へのめり倒れていく。身を恥じてか、とうていおよばぬ恋と世をはかなんでか、お光はわれとわが左の手首へ、毒蛇の指輪を押しつけたのである。銭占いに出た五人めのいけにえは、くしくもお光自身だったということになる。

「あんた」

あやめはおもわずひしと源太郎の腕にすがって、そのお光のあまりにもはかなく美しい最期を、ぼうぜんとながめずにはいられなかった。

朝霧峠

明月の美女

中秋明月があかるく更けて、目の前の大川も、対岸の柳橋から蔵前のお米蔵へかけての町並みの甍も、真昼のような青い月光に輝きながら、すでに露ふかく寝しずまっていた。

振りかえれば九十六間の両国橋が墨絵のように、満々と潮をたたえた川幅と、晴れあがったなす紺色の夜空とをくっきりとくぎり、ついさっきまでは浅酌低唱、おもいおもいに川面を流していた風流な月見船もいまはきれいに姿を消して、水にも道にもまったく人かげを見ない。

——結局、いま時分ほっつき歩いているのは野良犬ぐらいのもんだろう。

猪村大助は川ぞいに、藤堂の下屋敷の土塀についてお蔵橋の方へ歩きながら、皮肉な気持ちを通りこしておかしくさえなってきた。

仙台の奇人で六無斎という先生は、親もなく妻もなく子もなく板木なく、金もなければ死にたくもなしと歌っていたそうだが、大助もまたそれで、板木にこそ縁はないが、そのかわり今夜からきれいさっぱりと野良犬になりさがったのだ。

妙な話である。こっちはちゃんと証拠を持参して、これは実父の形見です、父の子としてみとめていただけるだろうかと名乗って出たのに、証拠の刀はたしかに亡父のものだが、お前を亡父の子とはみとめられない、遺言にもそういうことは一言もしたためてなかったと、一目会おうともせず、玄関払いをくわされた。財産をわけてくれとでもいわれては面倒と思ったか、いまさらそんな亡父の放埒は子としてみとめたくないという気持ちか、いずれにせよはなはだ手前勝手な話である。

もっとも、生まれて今日まで父の氏素姓を知らない野良犬で育ったのだから、いまさら死んだ父の子にあらずと突っぱねられたところでこっちは別に困りはしないが、しかし、それはそんな父なし子を女に産ませた亡父をも野良犬にする子の不遜だぞと、ちょいとへそも曲げてみたくもなる。

——もうよそう。一度兄弟に会ってみたいと急になつかしくなったのは、柄にもないおれの感傷だった。兄弟は他人のはじまりというからな。いっそ赤の他人の方がさばさばしていてよろしい。

幸い、大助はあまり物事にこだわらぬ性分に生まれついているから、六無斎の野良犬となって濶歩する。

——はてな。

この明月の深夜、野良犬となって濶歩するのはわれ一人と自負していたのに、藤堂の塀を出外れるころ、隣の津軽との塀の間の横町から、ひょいと野良犬が一匹川端へ出てきた。しかも、若い雌野良である。

こっちを見て、ぎょっとそこへ立ち止まったようだが、大助もまた目をみはったのは、その雌野良は十八、九とも見える腰元風のすばらしい美人で、なんと足袋はだしだ。

深夜若い娘が一人というのもおかしいし、足袋はだしとはそれ以上に尋常でない。

と見ているうちに、こっちはずんずんその前まで濶歩してしまったので、

「今晩は——」

とあいさつをした。前を通りぬけるのだから、それが礼儀である。

先方も軽く会釈はしたが、月かげをまともにうけた白いほおへ二筋三筋おくれ毛がかかり、ただならぬ目の色をしていると見たのは、こっちの思いすごしだろうか。

が、立ち止まって相手を怖がらせても気の毒だし、どうかしたんですかと聞くのはなおお節介のようだ。そう考えたから、二足三足通りす

ぎて、はっと気がついた。
「はなはだ失礼なんですが、まさか心得違いを、率直にいえば身投げなどする気じゃないんでしょうね」
飛びこまれてからではやっかいだから、これは失礼でも聞いてみずにはいられなかった。
「いいえ」
腰元はすなおにかむりを振ってみせてから、急に力なくうなだれてしまう。体に表情があるとすれば、それはこっちを悪い男ではないと見て安心した姿に違いない。
「どうも気になりますな。余計なお節介だというのなら、このまま黙って通りすぎてもいいんだが、あんたはこんな夜更けに一人でどこへ行くんです」
「浅草の花川戸まで帰りたいのですけれど」
「それは大変だ。わしは多田薬師の裏まで帰るんだが、よかったらそこまで送ってあげてもよろしい」
「あの、御迷惑でも、どうぞお願いいたします」
渡りに船というように、つと肩をならべてきた。
「信用してくれてありがとう」
なあんだ、少し余計な気をもみすぎたかなと思いはしたが、川へ飛びこまずにすんだだけでも、大助はありがたいと思わなければならない。
「あなたは足袋はだしのようですね」
「あの、それはなんにもお聞きにならないでくださいまし」
こんどは出ばなをぴしゃりとひっぱたかれた感じだ。
「失礼しました。では、なんにも聞かないことにします」
「すみませんが、もう少しいそいで歩いていただけませんでございましょうか」
足袋はだしの腰元は、なんとなくうしろを気にしながらいう。察するに、だれかに追われている身なのだろう。

「よろしい、いそぎましょう」
大助が大股に濶歩し出すと、娘の足だから、時々小走りにならなくては追いつけなくなる。
「少し早すぎますか」
「いいえ、結構でございますわ」
「どうして、そんなに、——いや、なんにも聞かないはずでしたな」
あわてて口を押さえる人のいい大助だ。
この辺は北本所へ出るまでほとんど大名と旗本の屋敷ばかりがつづく寂しい川端で、だれも通らないからいいようなものの、足袋はだしの若い腰元とこんなかっこうで歩いているところをもし人が見れば、きっと駆け落ち者と間違えるに違いない。どう見られたところで、こっちは野良犬さまだからだれに気兼ねもいらないが、相手が美しい腰元だけに、どんな身の上の娘かと、大助はなんとも気になるのである。
二、三町もそうして黙っていそいでいると、娘はたちまち肩で息を切り出した。
「少し足をゆるめますかな」
「いいえ、このままで結構でございます」
「息が苦しそうですな」
「よろしいんですの」
「すそをはしょると、少しは楽なんだがな」
「いいえ、大丈夫ですわ」
世話をやいては、はねつけられてばかりいる。もうよそうと思った。
お蔵橋をわたると、対岸に蔵前の首尾の松が黒々とながめられた。

悪用人

「あっ——」
お蔵橋をわたってまもなく、腰元はうしろを振りかえりながら、いきなり大助のたもとをつかんで、おびえたように身をよせてくる。ちょうど松平の下屋敷の塀のあたりである。
「どうかしましたか」
聞くまでもなく、しいんとした川面の水が大

地をけるようなあわただしい人の足音を敏感に伝えてくるのを大助も耳にしたので、見ると、今きたあかるい月の道を黒い人かげが二つ三つ、一散にこっちへ走ってくるのが見えた。
「あなたの追っ手ですか」
「たぶんそうだと存じますの。どういたしましょう」
　どうしようと突然相談されても、いままでなんにも聞いてくれるなと突っぱねてばかりいて、こっちは少しも事情を知らないのだから、なんとも答えようもない大助だが、もう足がすくんでしまったような娘の青い顔を見ると、冷淡に黙っているわけにもいかない。
「あなたはなにか追っ手が怖いような悪いことをしたおぼえがあるんですか」
「いいえ、そんな、そんな、わたくし――」
「よろしい。身にやましいことがなければ、わしがついている。安心して、しっかりとお掛けあいなさい」
　どうせ逃げたって追いつかれるにきまっているのだから、ゆっくり歩きながらそう力をつけてやると、
「はい。でも、大丈夫でございましょうか」
　腰元はまるでたもとへぶらさがるようにして身をよせてくるのだ。
「たぶん、大丈夫です。わしはこれで、岩見重太郎の孫よりは少し強いかもしれない」
　わざと冗談口をきいている間に、追っ手は間近に迫って、おういと声をかけてきた。
「待った、待った、お久美さん」
「御用人さまが御用だとおっしゃるんだ、待った」
　追っ手は銅輪のはまった木刀ざしの中間二人が先立ちで、後から旗本の用人とも見える立派な侍が追いついてきた。用人は家柄をはばかるか、頭巾で顔をかくしている。
「御用人さん、やっとつかまえやした」
「やっぱりこの道でござんしたね。えらく骨を

折らせやがった」
　中間二人が汗をふいている間に、用人はつかつかと腰元の前へ進んできた。
「お久美どの、なんというまねをするのだ。殿さまもひどく御立腹ですぞ」
　頭から威嚇するように殿さまを担ぎ出したが、お久美は急に意地の強い顔になって返事をしようともしない。すっかり屋敷奉公が身についているらしく、なかなか凛とした腰元ぶりだ。
「さあ、ともかく、一度いっしょに屋敷へおもどりなさい。御前様はまた取り計らいようもある。御奉公の身が、無断で屋敷をぬけ出すというのは穏便でない。わかったであろうな」
「いいえ、久美はもうお屋敷へはもどりませぬ。お暇をいただきます」
　きっぱりとした切り口上だ。
「そんなわがままは許しません。屋敷奉公には屋敷奉公のしきたりがあるのを、あんたもちゃんと心得ているはずだ」
「それは存じております。けれど、久美は行儀見習いのため御奉公にはあがりましたが、御来客の夜のお伽までしなければならないおきてがあるものとは存じませんでした。久美は、そんな、そんな遊女のような恥ずかしいまねはいやでございます」
「それは、忠義のためだと、あれほど話しておいたではないか。いや、それもいやなものなら、決して無理にとは申さんのだ。ともかくも、一度屋敷へもどりなさい」
「おことわり申し上げます。もういやでございます」
「お黙りなさい。武家奉公には武家奉公の作法というものがありますぞ。主にそむき、自まま身勝手なまねをいたせば、手討ちになってもいたし方ないのだ。のみならず、その責めは親兄弟にまで及ぶ。無断で屋敷をぬけ出すのは、男なら切腹、女は手討ち、決して軽いことではない。あまり強情を張ると、あんたのためになり

ませぬぞ」

「久美は、自分の操を守るためには、黙ってこういたすよりほか道はございませんでした。武家屋敷の作法がどうあろうと、わたくしには遊女のまねはできません」

「だから、それは決して無理にとは申さぬと、再三いってあるではないか。あんたは、遊女、遊女と一口にいうが、相手は身分のあるお方だ、なぐさみにあんたをおもちゃにしようというのではない。あんたさえよければ、ちゃんと身柄を引き取って、どのようにもお世話くださるのだ。こっちはあんたの出世だと思えばこそ、よく事情を打ちあけて取り計らったことではないか。とにかく、こんなことが世間にもれては、おたがいに迷惑することにもなる。ここは一応屋敷へもどって、お暇を願うならわしからも口ぞえをいたそう。明日あらためて表門から屋敷を出た方が、あんたの体にも傷がつかずにすむ。な、わかったであろうな」

「いいえ、久美はこのままお暇をいただきとうございます。お屋敷へは明日あらためてごあいさつにあがらせてもらいます」

お久美は一歩も譲ろうとしない。

「よろしい。そうまで強情を張るなら、なわを打ってでも連れてもどるから、それでよろしいな」

用人もついに腹をきめたようだ。そう腹がきまると、じゃまになるのはさっきからそこになんともつかず掛け合いの様子を立ってながめている大助だったろう。

「失礼だが、あんたはどなたかな」

用人は横柄に大助の方を向いた。たかが青二才の素浪人とみくびったのだろう。

「たいへん失礼だが、わが国では、人に物を聞く時は、かぶり物をぬいで問うのが作法のようでございますね」

大助はにっこりわらってみせた。

おや、というように、中間二人がこっちの顔をにらみつけている。悪用人が逃げた腰元をつ

かまえに連れてくるくらいだから、この二人の中間は相当したたか者に違いあるまい。

「やあ、これは失礼した。たしかに、わが国ではかぶり物をとってあいさつをするのが礼儀でした。しかし、わしは主人持ち、少しはばかりがあるから、かぶり物の失礼は許してください。それに、わしのうかがいたいのは、貴公はこのお久美とどういう間柄かということだけです。つまり、ただの道づれか、それともなにか縁故でもおありの方なのか、どちらですな」

用人はぐっとくだけてきた。

「いまのところ、ただの道づれです。しかし、明日はどんな関係になるか、自分でもまだわかりません」

「それでは、もうどうかお引き取りください。この腰元はお聞きのとおり屋敷の奉公人、少し事情があって召し捕ってつれ帰ります。お手出しは無用に願いたい」

少し押しをきかせてきたようだ。

「ちょっと待ってくれませんか。せっかく道づれになったんだから、人には親切をつくさなくてはなりません」

大助はくるりとお久美の方を向いた。

「どうする、お久美さん。あんた召し捕られてもかまわないかえ」

「いや、いやでございます、そんなこと——」

お久美は激しくかむりを振る。

「いいよ、いいよ。いやならいいんだ。断ってあげよう」

大助はまた用人の方を向いて、

「御用人さん、お腰元は召し捕られるのはいやだというんですがねえ。堪忍してもらえませんか」

「貴公はただの道づれなんだろう」

「しかし、窮鳥ふところに入ればというお釈迦(しゃか)さまのお教えもありますからな」

「きじも鳴かずばという老子さまのお経を知らないようだな」

「ありがとう。あいにく、義を見てせざればっていう日蓮上人の論語を知っているんでね」
「野郎っ、くたばれ」
いつの間にか横合いへ忍びよってきていた中間の一人が、いきなり木刀を取って、だっと打ちかかってきた。
「あぶない」
ひょいと身をひいて、目の前へ流れる中間の利き腕を軽く手刀で打った。
「あっ」
がらりと木刀を落とし、あわててそれを拾おうとする及び腰を、
「よいしょ」
ぽんと一つ両手で突いてやると、頭の向いている方がちょうど川だ。
「わあっ、いけねえ」
よろよろっと川っぷちまでよろけていって、踏みとまろうと両手を必死に泳がせたが、だめだ、ついにどぶうんと勇ましく自分から水煙をあげていた。
「うぬっ、やりやがったな」
残るやつは力自慢とみえてぱっと前から組みついてくる。組ませては面倒だから、ぴしゃりとその両眼へ平手打ちをくれる。
「あっ」
思いがけないふいの目つぶしは、急所だから、両手で目を押さえながら、がくんとそこへひざをついてしまった。
用人が柄に手をかけてじいっと頭巾の中からへびのような目をすえている。相当の腕前だとはその殺気をたたえた構えでもわかるが、大助は平気で自然体に立ちながら、黙って相手の出ようを見ていた。
切りこめそうでちょいと切りこめないのは、たった今、相手の敏捷な身のさばきを見ているし、抜きうちを失敗すると逆に抜きうちにかかる、ぼうとしているようでいて、その涼しい目にすばらしい気魄をたたえているのが、柄に手をかけてみてはじめてわかった。
「いい度胸だな、小僧」
悪用人はふっと柄の手を放して、にやりとわらった。
「ほめてもらうほどでもないんだ」
「刀ばかりが人を殺すものだと思ったらとんだ間違いだぜ。よくおぼえておくがいい」
「悪知恵というのがいちばん怖いな」
「怖いとも。座っていて人を殺すからな」
「わしは殺されるのはあんまり好きではない」
「お久美、武家屋敷の重い仕置きを覚悟していろよ」
じろりとにらまれて、さすがに体中がすくんでしまったようだ。あえぐように、しっかりと大助のたもとへつかまってくる。
「ふん」
鼻の先で冷笑して、悪用人はすっと踵をかえした。まるで悪魔のように、ゆうゆうと月の中をお蔵橋の方へ去っていく。
「おぼえてろ、小僧」
足もとに目を押さえてうずくまっていた中間が、ぱっと立ちあがって悪態をつくなり用人の後を追う。
「怖い、あたし」
お久美はたまりかねて、とうとう大助の胸中へひしと顔をうずめてしまった。
――窮鳥にしてはばかにきれいすぎるから困るな。
大助はさわやかな娘のにおいにむせて、ちょいと当惑気である。人目はないが、あまりにもあかるすぎる明月の夜更けだからだ。

強情

不思議な一夜があけた。それはまた当惑の一夜でもあった。
昨夜、久美を送って吾妻橋の近くまで行くと、その久美が急に、
「あのう――」

といって往来の真ん中へ立ち止まってしまったのである。
「どうかしたんですか」
「ええ」
ため息をつきながらうなだれてしまう。
「どこか気持ちでも悪くなったの」
そういえばさっきからだんだん歩く足がおそくなって、時々ため息をついていた。しかし、吾妻橋をわたればもう花川戸だから、お久美の家は近いはずである。
「歩けなければ、おぶっていってあげようか」
「あのう、お宅はどちらでございますの」
「わしの家はいま通りすぎてきた多田薬師の裏です。しかし、遠慮しなくてもよろしい、お宅まで送ってあげます」
「わたくし、困るのでございます」
なんとなくもじもじして、いいづらそうだ。
「ああ、そうか、こんな夜更けに男に送られていくと、つまらぬ誤解をうけるというんですね。なあに、わしはそんな気のきかない男じゃない。決して家のそばまではついていかないから、安心なさい」
「違うんですわ」
久美はちらっとうらめしそうな目をする。
「どう違うんです」
「わたくし家へはもどれませんの」
これはちょいと意外だった。
「どうしてもどれないんです。あんたの両親の家なんでしょう」
「ええ。でも、深い子細があるのですわ」
それはそうだろう。深い子細でもなければ、いくら夜が更けたからといって、親の家へ帰れないという法はないはずだ。が、その子細を、この娘は話したくなさそうである。
もっとも、他人の家庭の事情など打ちあけられたところで、六無斎の大助にはおそらくどうしてやれようもないだろう。
「それはどうも困りましたなあ」

大助も思わずため息をついてしまった。
「どこか親戚（しんせき）とか知り合いの家で、あんたが安心して泊めてもらえるような家はないんですか。あれば少しぐらい遠くても送っていってあげるんだが」
「ございませんの、一軒も」
ひっそりとちからなげにうなだれて、またしても肩のあたりが悲しげにため息をつく。
「ようく考えてみてもありませんか」
「ええ」
「すると、どういうことになるんかなあ」
まさか当てもなく夜っぴて歩いていくわけにもいくまいから、さしずめ宿屋でもさがすほかはないのだが、それを自分からいい出さないところを見ると、こんな夜更けに、しかも足袋はだし姿で、人に怪しまれるのを恐れているのだろう。
「わしの家へ泊めてあげてもいいんだが、あいにくわしはひとり者だし、裏長屋住まいで、とてもお久美さんが泊まれるような家じゃないんだ」
家のきれいきたないはともかくとして、男一人のところへ娘の身として泊まれもすまいと遠慮していたのだが、
「あのう、わたくし軒下でもかまいませんの、今夜一晩だけ、あつかましゅうございますけれど、泊めていただけませんでしょうか」
と、すがるような目をあげた。
「いや、わしの方はちっともかまわないんだ、あんたさえよければ」
考えてみれば、いいにも悪いにも、窮鳥の身としてはそれよりしようがなかったに違いない。
大助の家は多田薬師裏の四軒長屋の一軒で、大工の元造という者の隣になっている。華道の師匠だった母に死に別れてから、一人では広すぎる鳥越の方の家をすっかり始末して、元造の世話で今のところへ移ったので、玄関の二畳と六畳の二間きりながら、まだ建ったばかりだか

ら、そうきたないという家ではない。

　元造の女房のお仲は、もとしばらく母の家に奉公していたのを、母が世話をして元造といっしょにしたので、こっちへ移ってからの大助の日常は一切、元造夫婦の世話になっていた。

「元さん、いま帰った」

　もう寝こんでいるかもしれないとは思ったが、門口から声をかけてみると、

「ああ、お帰んなさい。若だんな、御飯はいいんですか」

と、お仲が戸越しに心配してくれる。

「うむ、すませてきた。もうおそいから、またあいさつをする。おやすみ」

「おやすみなさい」

　家へ入って灯をつけてみると、火ばちはうずみ火があって湯だけはわいているようである。

「さあ、遠慮なくお上がんなさい」

「はい」

　久美は足袋をぬいであがり、茶の間へくると、あらためて両手をつかえた。

「いろいろ御迷惑ばかりかけまして、申し訳ございません、今夜はお世話にならせていただきます」

「いや、ごらんのとおりの一人住まいだから、わしの方はかまわんのです。あんた、食事は」

「よろしいのです」

「じゃ、お茶をあげよう」

　いれて出した茶だけは行儀よくのんだが、さて話のつぎ穂もなく、今夜会ったばかりの男の家へ押しかけてきたのだから、久美はさすがに体中をかたくして、いかにも窮屈そうだ。

　しかし、こうして一つの部屋に近々と向かいあってみると、みなぎるような若さをたたえ、面立ちは少し強い方だが、まぶしいような美人である。相手があんまり美人すぎるので、いささか大助も窮屈だ。

　それに、話せば、さっきの悪用人のことといい、家へ帰れないという家庭の事情といい、聞いてみたいことはたくさんあるが、自分からなにも言い出そうとしないところをみると、話したくないのだろう。こっちから聞いても、どうせまた、どうぞなにも聞かないでくださいましとぴしゃりとやられるのがおちだ。

「さあ、もうおそいから寝ますかな。わしはあっちで寝るから、あんたはここへ寝てください」

　大助は気軽に立って、押入をあけた。少し考えがあって、鳥越の家をたたむ時、いらないものは一切始末してきたが、幸いふとんだけは客の分を一組み用意してある。それを出してやろうとすると、

「いいえ、わたくしがあちらを拝借いたします。どうぞ、かまわないでくださいませ」

　と、久美は自分から玄関の二畳へ立っていく。

「じゃ、ふとんをあげよう」

「よろしいんでございますの、夜露さえしのがせていただければ」

「よろしいたって、まさか一晩中起きているわけにはいかんでしょう」

「いいえ、本当によろしいんでございますの。——おやすみなさいませ」

　久美はていねいにおじぎをして、すうっと間のふすまを閉めきってしまった。

　——強情な娘だなあ。

　あっけにとられながらも、大助はちょいと不愉快になってきた。こっちは親切で泊めてやったのに、その好意を少しもすなおにうけようとしない。男一人の家だから、ふとんに入って横になってはあぶないとでも用心しているのだろうか。そんなにおれが信用できないんなら、ついてこなけりゃいいじゃないか。

　——どうとも勝手になさいまし。わしはお通夜のおつきあいはごめんですからな。

　大助は自分のふとんをのべて、灯を消し、さっさと横になってしまった。

　こおろぎの声がしいんと耳についた。

　やみに目がなれてくると、どこからか雨戸を

もれる月あかりがほのかに漂ってきた。
久美はまだ座っているのだろうか、ふすま一重の二畳はひっそりとして、身動き一つする気配がない。
――一晩中、座っている気かな。座っていて眠れるかな。
なんとしても気になる。強情も強情だが、よっぽど不幸せな身の上なのだろう。
話の様子では、貞操をまもるために主人の屋敷を足袋はだしでぬけ出してきた。そして、考えてみると、深い子細があって親の家へは帰れない。見ず知らずの男の家へ泊めてもらって、一晩中すわりあかす。
――一体、明日はどうする気だろう。
娘はいま座ったままそれを考えて思い迷っているに違いない。安心して眠れる家さえ持たない不幸な娘――。
おれは男に生まれて本当によかった。健康な体を持ち、人なみの分別と修業を身につけ、しかも明日への希望がある。独立独歩、だれにたよらなくても、立派に生きていけるのだ。みんな母のたまものである。
――おっかさん、ありがとう。
その母は、一生に一度の不幸な恋愛をして、自分を産んだ。それからはわが子の成長を唯一のたのしみに、一生を清くつつましく、そして雄々しく生きぬいて、この夏、世を去った。
「思い残すことなど、なんにもありませんよ。息子がこんなに立派に育ってくれたんですものね。もうおっかさんがついてあげなくても、あなたは一人で考えて、なんでもやっていけるでしょう。自分でこれはと思う道へ、力いっぱい進んでごらんなさい」
それが母の最後の教えだった。
――そういえば、母もあの娘のように、相当強情だったのかもしれないな。父の家のことなど、一度もくよくよと口にしたことはないのだから。

そんなことを考えているうちに、いつか眠ってしまったらしい。
ふっと目がさめると、朝になっていて、台所から物音がするのだ。

深い子細

「お早う」
台所へ出ていってみると、久美が七輪に火をおこしているところだ。気のせいか、痛々しいほど青い顔である。
「お早うございます。あの、朝のお支度はどうすればよろしいのでございましょう」
「いや、それは隣のおばさんがやってくれるからいいんだ」
そう言い置いて、井戸端へ顔を洗いに出たついでに、お仲の家へ寄った。朝の早い元造は、もう家にいなかった。
「若だんな、ゆうべお嫁さんがきたんですか」
中年になっても子供のないお仲は、顔を見るなり声をひそめて、からかうような若々しい目をする。
「うむ。ゆうべ帰りに大川端で拾ってきたんだ。後であいさつをさせるから、今日は飯を二人分たのむ。それから、お嫁さんの分の箸と茶わんを貸してくれないか」
「おや、大川端でねえ。道理で、さっき井戸端で足袋を洗っていましたっけ」
お仲は目も早ければ察しもよく、たちまち身投げと早合点してしまったらしい。
「まだくわしいことは聞いていないが、いろいろ事情があるんだろう」
いずれ話は後ですることにして、面倒だから大助も訂正はしないでおいた。
「きれいな娘さんですのにねえ。それに、なかなかしっかりしているようですよ。ちょうどあたしが水をくみに出たものだから、お早うございます、昨晩お隣へごやっかいになりました者でございますって、行儀よくあいさつをしてい

ました。お気の毒にねえ。若だんな、力になってあげなさい」
「うむ。力になってやるとも」
秋の水はさわやかである。顔を洗って家へ帰ると、すっかり掃除がすんでいて、久美がつつましく朝茶をいれてくれた。お嫁さんがくるとこんなにも家がにぎやかになるかと思うほど、紫矢絣が派手に目をつく。
「お久美さん、ゆうべはとうとう眠らなかったの」
大助はわらいながら聞いた。
「いいえ、少しやすませていただきました」
「座ったままでか」
久美は恥ずかしそうに微笑しながら、ほおを赤らめている。はなはだ可憐だ。
「わしの死んだおふくろさまもなかなかたのもしい強情だったが、お久美さんもそれに負けないようだな」
「申し訳ございません」
「いや、あやまらなくてもいいんだ」
「あの、わたくし、いろいろ考えましたの」
「眠れぬままに、こおろぎを相手にね」
「いびきも聞こえたようでございますわ」
にっこりとわらってみせる。
「まいったなあ。わしはいびきをかく。おふくろさまによくわらわれていたが、一人になってからついうっかり忘れていた。ことわればよかったね」
「いいえ、よろしいんでございますの」
「もっとも、ことわってもいびきをかかないわけにはいかないかもしれない」
いや、むしろいびきを聞いていた方が、娘としては気が楽に考えごとができたかもしれないとも思う。
「で、どう考えたんです」
「一通りお話し申し上げますから、どうぞお聞きくださいませ」
「よろしい。うかがいましょう。ひざとも談合

ということがあります」
大助は座りなおした。一役買ってもいいという誠意が形にあらわれたのである。
「わたくしは花川戸の米問屋佐原屋の娘で、久美と申します。父は利兵衛と申しまして、母はわたくしが七つの時、わたくしを連れ子して佐原屋へ後妻に入りました」
ところが、利兵衛はもと佐原屋の番頭で、先代が病死した後、佐原屋へ入夫した。佐原屋には先代のせがれが一人あって、利吉といい、先代の後家が病死して、久美の母が後妻に入った時には十二になっていた。つまり、久美とは五つ違いの、今年二十三になるのだという。利吉は十五、六のころからそろそろぐれ出して、佐原屋の正統はおれ一人だ、義父の利兵衛は番頭だったのだし、その義父のところへきた後妻は赤の他人だという腹があるから、わがままいっぱいに振る舞い出した。
利兵衛は律儀を見こまれて先代の後へ直されたくらいだから、ただよく働く一方で、利吉のすることにはあまり口を出さない。
「どうせ佐原屋の財産は利吉のもので、わしはあずかっているだけのものだから、利吉の勝手にさせておこう」
そういう腹でいるのだから、利吉の頭はだれも抑え手がなく、まして他人や義母や義妹などは眼中にない。
「お恥ずかしい話でございますけれど、わたくしは三年前の十五の時、あやうく義兄に手ごめにされそうな目にあいまして、つくづく家にいますのが恐ろしくなり、自分から屋敷奉公に出たのでございます」
その行儀見習いにあがった先が、本所横網町にある一千石取りの旗本牧田采女の屋敷であった。
主人采女はまだ三十を出たばかりの放蕩盛りであり、すこぶる派手っ気の上に、用人横立剛太夫というやつが相当の悪党で、勝手に財政をか

きまわしているから、いくら金があっても足りない。こんども京橋の御用達林屋孫三郎から無理な金を五千両引き出すについて、今夜林屋の大番頭弥兵衛という者を月見の宴に招待した。

　招待された弥兵衛は、前から腰元久美の美貌に野心があったから、悪用人剛太夫との間にちゃんと話ができていて牧田の屋敷へ来た。いざその場になって、何事も主家のためだからと、剛太夫に因果をふくめられた久美は、内心気も遠くなるほど驚愕したが、そこでことわれば監禁されるにきまっている。一度は承知したと見せかけておいて、すきを見て夢中で屋敷を逃げ出したのだという。

「そうか。ゆうべ追いかけてきたやつが、その横立剛太夫という悪用人なんだね」

「はい。あの川へ落ちた方の中間が勘助、もう一人の方が鎌助と申しまして、二人とも剛太夫の子分になっている悪いやつですの」

「しかし、そっちはまあ逃げてきてしまったんだからもういいようなものの、そんな事情があっては、うっかり家へ帰れないわけだね。利吉はあいかわらずお久美さんをねらっているんだろう」

「ええ。三年の約束だから、早くお暇を願って家へもどせと、義父や母にうるさく申しまして、刃物まで持ち出しかねないそうでございます」

「よっぽどやくざっぽくなっているんだな」

「とにかくお金が自由になりますので、悪い取り巻きからちやほやされて、自分ではもういい親分になった気持ちでいるのですって」

「しかし、おとっつぁんはどうなんだろうな。義理ある仲ではあるし、お久美さんさえ承知すれば利吉の気持ちもなおるだろう、なんとかいっしょにして、佐原屋をゆずりたいと考えているんじゃないのかね」

「いやです、わたくし――。小さい時から、母がいじめられているのを見てきて、義兄は大きらいなんですもの」

「まあ、きらいなものを好きになれったって無理かもしれないが、しかし、おっかさんやおとっつぁんにだけはお久美さんがここにいるってことを知らせておかなくては心配するだろう。どうせ屋敷の方から知らせが行くだろうからね」

「でも、もし義兄に知れますと、どんなまねをされるかと思いまして――」

「それは屋敷の方へ知れたってただはすまないだろう。あいにく、お久美さんはあんまり美人すぎるからなあ」

「わたくし、どうしたらいちばんよろしいでございましょう」

　久美は思いあまったようにため息をつくのである。が、いくら相談されても、これは大助にも返事ができない。

「どうも困りましたな」

「あの、あの、しばらくわたくし、御迷惑でも、ここへおいていただけませんでしょうか」

「わしの方はいつまでいたって一向かまわないが、――まあ、当分ここにおいでなさい。朝飯がすんだら、一度わしが佐原屋へ行って、それとなくおっかさんにだけでも事情を話してきてあげよう」

「どうかお願いいたします。御恩は一生忘れません」

　ほっとしたようにあらためて両手をつく久美の姿を見ると、大助はいよいよ長兵衛をきめこまなくてはならなくなってきた。

立ち話

　朝飯をすませてから、大助は隣のお仲にきてもらって、ざっと久美の身の上を話し、今後の協力をたのんで家を出た。

「いやですねえ、若だんなは。じゃ、お嬢さんは身投げってわけじゃなかったんじゃありませんか」

　気さくなお仲は、後で思い出したようにわらい出した。

「わしは身投げとはいわなかったよ。大川端から拾ってきたといっただけだ」
「それがいけないんです。大川端から拾ってきたなんていえば、気のきいた者ならたいてい身投げだと思いますよ。ねえ、お嬢さん。若だんなは口が足りないんだから」
「いや、お仲君の方が察しがよすぎるんだ」
「いいえ、すんだことはどうだっていいんです。これから佐原屋さんへおうかがいするんでしょう。あちらへ行ったら、ようくわかるようにお口をきいてくださいって御注意申し上げているんです」
「わかった、わかった」
お仲にはそういう親切気と男まさりのところがあるから、久美一人をおいていっても安心だと思った。
花川戸へきて、佐原屋はすぐにわかった。なるほど、間口の広い大きな米問屋で、手前の横町の方に内玄関がついているようだ。
大助は一度ゆっくりと店の前を通りすぎた。はたしていきなり正面から乗りこんでいっていいものか、できればまず母親を呼び出して様子を聞いてからの方がいいような気がする。その母親をどうして呼び出すか、ちょっと思案がつかない。
しばらく先まで歩いて、あんまり先へ行ってもしようがないから、道端に立ち止まって佐原屋の方を見ていると、
「あっ、若だんな、たいへんです」
そっちから駆け出してきた丁稚が一人、そんなことをいいながら前を駆けぬけた。
「どうした、長松。どこへ行くんだ」
その前へふところ手をして立ち止まった若い男の身なりが、渋い縞物の対で、一見大店の若だんな風だが、どこか着くずれしたところがある。顔色は青白いが、太々しい目つきが充血しているのは、いかにも二日酔いといったすさんだ感じだ。

「いま頭を迎えに行くところなんですが、お店はたいへんなんですよ」
「ふん、おやじが中気で倒れたとでもいうのかえ」
「あんなことを——。それなら頭んとこよりお医者のところへ飛んでいきます」
「じゃ、ゆすりか。佐原屋の利吉の家へゆすりにくるなんて、おおかたそいつはもぐりだろう。おれが追いかえしてやるから、頭なんか呼ぶことはねえ」
「違うんです。お久美さんがゆうべお屋敷をぬけ出したんですって」
「なにっ、お久美が——」
さすがに利吉はぎくりとしたようだ。
「それで、お久美はゆうべ家へ帰ってきているのか」
「いいえ、家へきません。なんでも、大切なお屋敷の宝物を持ち出したとかで、——こんなこと話してもいいかなあ」
「宝物を持ち出した。お久美がか」
「いま御用人さんが掛け合いにきて、だんなが困っています」
「そいつはいいがかりだ。お久美が屋敷のものなんか持ち出すもんか、貧乏人の娘じゃあるめえし」
「それが、御用人さんのいうには、ある男のためで、その男にそそのかされたんだろうっていっていました」
「ある男って、どんなやつだ」
「浪人者らしいっていっていました。ゆうべ御用人さんはお久美さまとその男が立ち話をしているのを見かけたんだそうです。二十四、五の、役者のようにいい男だったんですって」
「貴様じゃわからねえ。よし、おれが行ってよく聞いてやる。渡り用人のいうことなんざ、一から十まで信用できるもんか」
かっとなったらしく、利吉はどんどん家の方へ歩き出した。

そのけんまくに丁稚はびっくりしてまだ利吉を見送っているが、それよりびっくりしたのは、なにげなく立ち話を聞いてしまった大助だ。久美は盗みの汚名をきせられ、役者のようにいい男の自分は、どうやその久美の悪いひもということにされているらしいからだ。

義理ある仲

「おい、長松君——」
利吉のうしろ姿を見送りながら、若だんなが ああいうのだから、このまま店へ帰ったものか、やっぱりいいつけられたとおり頭を迎えに行ったものか、ちょっと戸惑いの形でぽかんと往来に立っている佐原屋の丁稚長松の前へ、路地口の大助はわらいながらつかつかと出ていった。
「なんです、お武家さん」
見知らぬ若い侍にいきなり名前を呼ばれて、長松はびっくりしたように顔を見あげる。
「君は佐原屋の小僧さんだな」
「そうです」
「いまあそこへ行ったのは若だんなの利吉親分か」
「違います。親分なんかじゃありません。うちの若だんなです」
いそいでいいかえすところを見ると、なかなかしっかりしているようだ。
「そうか。若だんな親分なんてのは、あんまり自慢にはならんからな」
「お武家さんはどなたなんです」
「これは内緒なんだが、君は利口者らしいから話がわかるだろう。どこかの用人がいま店へ押しかけて、ゆうべお久美さんが屋敷をぬけ出した、それには二十四、五の役者のようにいい男の浪人者がついていて、そいつがそのかしたんだといっているそうだな。わしは役者のようにいい男ではないが、ゆうべたしかに本所河岸でお久美さんを助けた猪村大助という者なんだ」
「あっ」

長松はたくましく微笑している大助の顔を見なおして、しかられるとでも思ったのか、急にもじもじしだす。
「どうだ、わしは役者のようにいい男ではないだろう」
「へえ」
「それとおなじで、その用人はだいぶうそをついているようだ。お久美さんは決して屋敷の宝物を持ち出したのではない。また、わしは前からお久美さんを知っていたわけではないんだ。いまもいうとおり、ゆうべ本所河岸ではじめて出会って悪用人どもを追っ払ってあげただけの話だが、それについて佐原屋のおかみさん、つまり、お久美さんのおっかさんにだけ会って、ことづけがあるんだ。わしがそういっていたと君からおかみさんだけの耳へ入れて、もしさしつかえなかったら、そっとここへきてもらうわけにはいかないか」
「はい、聞いてきます。お武家さんは猪村大助さんというんですね」
長松はよく事情がのみこめたように目を輝かしながらいう。
「うむ、猪村大助という浪人者なんだ」
「では、すぐ行ってまいります」
丁稚は飛んで帰っていった。
おそらく、佐原屋へ押しかけている用人というのは、牧田家の横立剛太夫だろう。久美が昨夜家へ帰ったと見て、今朝つれもどしにきた。無論すなおに帰るとはいうまいし、親もとの方でも帰したがるまい。それならそれで難癖をつけて金にする。そのつもりで乗りこんでみると、久美はまだ帰っていないという。そこで、とっさに盗みのぬれぎぬをきせ、役者のようなひもまでこしらえて、まことしやかに居直っているのだ。
——若だんな親分がどう力んで悪党ぶってみたところで、あの悪用人には歯が立つまい。
それはそれでしょうがあるまいと思う。久美

の話では、佐原屋の財産はどうせ利吉が遅かれ早かれだいなしにしてしまうものだ。いま少しぐらい悪用人にゆすられたところで、そう惜しくもあるまい。

大助としては、そんな他人のごたごたに立ち入る必要は毫もない。ただ、久美の母親に会い、あの美しい窮鳥がどうか身の立つように相談してやれば、それで自分の役目はすむのだ。

まもなく、久美の母親が長松に案内されて、路地口をたずねてきた。まだ四十前の、久美によく似た美しい人だが、これは娘と違って苦労性らしく、面立ちのどこかに沈んだところがある。

「はじめてお目にかかります。娘がお世話になっておりますそうで。久美の母、みよと申します」

「わしは猪村大助です。こんなところへお呼び立てして失礼だが、お久美さんの話を聞いてみると、お宅へはあがらない方がよさそうだ。とにかく、ここにお久美さんの手紙があるから、読んでみてください」

大助はさっそくあずかってきた手紙を出してわたした。

母親はいそいで娘の手紙に目をとおしてすぐに帯の間へしまいながら、

「ありがとうございました。そういたしますと、娘はまだお宅さまにごやっかいになっていますのでございますね」

と、気の毒そうな中にも、さすがにほっとした面持ちである。

「ごやっかいなどと、そんなおおげさな家じゃありません。多田薬師裏の四軒長屋で、大工の元造とたずねてもらえば、その隣だからすぐわかります。一度たずねてください。しかし、これは当分お母さんの胸の中だけにとめておいてもらった方がいいようですな」

「はい。いろいろ事情もございまして、どういたせばよいものやら――」

「いや、わしの方はそうあわてることはいりません。娘さんの身の立つように、よく考えてあげてください。――御心配だろうと思うから、ただ無事だということをお母さんの耳にだけ入れにきたんで。では、これで失礼します」

人目につきやすい立ち話だから、なるべく早く切り上げた方がいいと思ったのである。

「あの、娘はなにかお屋敷の宝物を持ち出したようにいわれているのでございますけれど」

母親がすがるような目をする。

「そんなことはうそです。あんな悪用人など、なんといっても相手になさらんがよろしい」

「はい。そうは存じておりますが、なにぶんにも娘はわたしのつれ子でございまして、つれあいとは義理ある仲、そのつれあいが久美のためにお屋敷の用人さまから責め立てられて迷惑しているのを見ますと、わたしは死ぬよりつろうございます。こんなわがままは申し上げられた義理ではございませんが、せめて盗みのぬれぎぬなりと晴らしてやっていただけませんでございましょうか。おすがりいたしとうございます」

手をあわさんばかりにいわれてみると、なるほど人にはそれぞれの立場がある。わが娘のために義理ある夫が当惑しているのを見ては、母親としては居ても立ってもいられないだろう。

それをそのまま振り切って帰っては、俗に仏作って魂入れずで、心なきわざになってしまう。

「そううかがってみると、ごもっともですな。よろしい、では、お久美さんとはゆうべ途中で別れたということにでもして、一度用人に会ってみましょう」

乗りかかった船で、大助はとうとう佐原屋へのりこむことになってしまった。

いいがかり

そのころ、佐原屋の奥座敷では、床の間を背にして控えている用人剛太夫の前で、若だんな親分の利吉が鉄火気取りで、しきりにまくしたてていた。みそすり用人なんかになめられてた

まるもんかという小生意気さが鼻の先にぶらさがっている。

　そばに五十年配の義父の利兵衛が困ったような顔をして、これは律儀そうにじっと差しうつむいている。

「ねえ、御用人さん、なんどいわれたって、本人の久美がまだ家へ帰っていないんだ。どんなことをやったかやらないか、一度当人の口からも聞いてみねえことには、たとえ御用人さんのおっしゃることでも、一方口ではこっちはどうしていいか始末に困りまさ。どんなもんでござんしょうねえ、ここはひとまずお引き取り願って、久美が帰り次第、こっちでもよく事情を問いただした上、あらためてお屋敷の方へごあいさつにあがる、そういうことにさせちゃいただけねえでしょうか」

「その方は当家のせがれか」

「そうでございますよ」

「まだ人前で口をきくには少し若すぎるようだな」

　剛太夫は切れ長な細い目ににんまりとあざけるような色をうかべる。

「へえ、あっしのいったことがなにか間違っているとでもおっしゃるんですかえ」

「うむ、みんな間違っている。久美はまだこの家へ帰らぬとその方はいったが、昨夜屋敷を家出したことは事実だ」

「そりゃそうでござんしょうね。無事に屋敷にいりゃ、御用人さんもうちへくる世話はない」

「その節、屋敷には来客があって、先ほど申したごとく、そのお客さまにお目にかけるため蔵から取り出し床の間においた重代の家宝、相州の住人貞宗の短刀を、久美は錦の袋ごと持ち去っておる。これも事実だ。お前はいまわしの一方口では本当にできないようなことを申したが、本当にできなければ、屋敷としては事件を町奉行へ移し、公儀の手で取り調べてもらえばいちばん早いのだ。それでは久美の体が無事ではす

まぬ。どうだ、表ざたにしてもいいか」

　こうはっきり断言されると、利吉はぐっと返答に詰まらざるをえない。

「事が表ざたになれば、罪は久美の身だけではすまぬぞ。お前はまた、久美が帰り次第と申していたが、帰れる身なら昨夜のうちにすでに帰っているはず、盗みを働いて情夫と駆け落ちをした者が、のめのめと家へ帰れると思うか。屋敷へ帰って返事を待てとは、いつまで待てばよいのか。たとえば三日のうちにお前は久美をさがし出せる当てでもあるのか」

　くやしいが、これも利吉には返事ができない。

「それみよ、お前のいうことには一つとしてなんの根もないではないか。小利口ぶって口先で人をいいくるめようとする、不埒な話だ」

「じゃ、一体おれたちにどうしろと御用人さんはおっしゃるんだね」

　利吉はとうとうやけになってきたようだ。

「お前はばかなことばかり口走る男だな。わしはどうしろとここへ指図にきたのではない。金には替えられない重宝だが、捨て値にしても五百両からの貞宗の短刀、それをさらって昨夜久美が情夫と駆け落ちをした、それでももしや当家へ帰ってはいぬか、またここへくればなにか心あたりでもありはせぬか、若い者にはありがちのことだから、なるべく事をあらだてず、穏便に取り計らってやりたいと思うから、わざわざ足を運んできたのだ。どうしろと指図をして事がすむくらいなら、とっくに公儀の手をかりて久美の行方をさがしている」

「わかった。つまり、五百両出せっていいなさるんだね」

「無礼なことをいうな。よろしい、お前の方がその気なら、わしの方ももう遠慮はせぬ。屋敷へ立ち帰って、さっそくそのように手続きをとるから、そう思いなさい」

「横立さま、お腹立ちでもございましょうが、まあ待ってくださいまし」

利兵衛が青くなってそこへ両手をついた。
「まだなにか申すことがあるか」
ただは帰りたくない剛太夫だから、むっとしたように座り直す。
「諸君、ちょっとじゃまをする」
ふと次の間のふすまがあいて、大助がぬっとそこへ顔を出した。見知らぬ顔だから、利兵衛親子はびっくりしている。
「御主人には後ほどごあいさついたす。横立さん、ゆうべは失礼しました」
大助はかまわず剛太夫の前に座った。
「だれだ、貴公は」
剛太夫はわざととぼけたような顔をする。
「お忘れかね、ゆうべ本所河岸で会った時は、あんたの方が頭巾をかぶっていたんだがなあ」
「そうか。貴公だな、昨夜久美をそそのかして逃げた情夫というのは」
「あいにく、わしはごらんのとおり役者のようにいい男ではない。したがって、わしはあのお腰元の情夫になったおぼえもないが、こんなことはいまここでわしが弁明するより、君の方がよく知っているはずだ」
「昨夜貴様は久美をどこへ誘拐したんだ。ははあ、一人でのこのこんなところへ顔を出したところを見ると、娘を監禁して当家をゆすりにきたのかね」
剛太夫がぬけぬけとそんな難癖をつけてくる。大体の様子を察したらしく、利吉の目が急に嫉妬の色をおびてこっちをにらみ出した。
「いや、せっかくだが、わしは君とは人間の出来が少し違うんだ。わしが弁明にきたのは、お久美さんは決して牧田家の重宝、貞宗とかの短刀は持ち出していないということだ」
「どうしてそんなことが断言できる」
「君こそ、どうしてお久美さんがそんなものを持ち出したと断言できるんだね。まさか、お久美さんがその短刀に手をかけたのを見ていたわけでもないんだろう。お久美さんがゆうべ屋敷をぬけ出した理由は別にある。しかし、それをいまさらここで並べてみたところで始まるまい。もうおとなしく引きあげた方が利口だと思うな。ただし、あくまでもお久美さんが短刀を持ち出したという自信があるなら、遠慮なく事件を町奉行所の手に移してよろしい。牧田家一千石の家名が断絶するだけのことだからね」
「よろしい。そっちがその気なら、もう遠慮はせぬ。おぼえておれよ」
さすがにこの辺がもう引きあげ時と剛太夫は見たのだろう、すっと立ち上がった。
「刀ばかりが人を殺すものだと思ったらとんだ間違いだというゆうべのせりふなら、ちゃんとおぼえている。わしはこれで案外物おぼえのいい方だ」
「ふん、めくらへびにおじずというやつか」
剛太夫はじろりとにらみつけて、ゆうゆうと廊下へ出ていく。
「ちょっと失礼いたします」
利兵衛がそういって、あわてて悪用人の後を追っていった。
「お前さんはどなたさまですね」
一人残った利吉が、待ちかねるようにそんな無作法な聞き方をする。
「わしは猪村大助という浪人者だ」
「お久美はゆうべあんたの家へやっかいになったんかね」
「いや、わしは吾妻橋まで送ってそこで別れたから、後のことは知らぬ」
「ふうむ」
疑わしそうな目つきをして、じろじろ顔を見ている。どこかに凶暴性がひそんでいるような、なんともいやらしい男である。
「お久美のやつ、なにも逃げ出すくらいならそんな屋敷奉公なんかしなくたってよかったんだ。ばかなやつだ。どこへ行きやがったんだろうな。あいつはおれの女房と昔から話がきまっているんだ。ほかに男なんかこしらえてみろ、

ただはおかねえから」

聞こえよがしにぶつぶついいながら、いらいらしていたようだが、ばからしいから相手にならずにいると、急にぷいと立って座敷を出ていった。

「失礼しました」

まもなく、主人の利兵衛が座にもどってきた。

「手前が佐原屋利兵衛でございます。ただいまは久美のためにお骨折りくださいまして、なんともお礼の申し上げようもございません。いま家内からうけたまわりますれば、昨夜からいろいろとお世話になっているそうでございまして」

「いや、ゆうべお久美さんとは、吾妻橋のたもとまで送って、そこで別れました。わしはただお久美さんの盗みのぬれぎぬさえ晴らしてあげれば役目はすむので、後を御両親がよく御相談の上、あの人の身の立つようにしてあげてください。さっそくですが、わしはほかにも用を控えているので、今日はこれで失礼します」

利吉という小悪魔がうろうろしているこの家へは、あまり長居はしたくない大助だ。

「御迷惑でございましょうから、お引きとめは遠慮いたします。いろいろとお心にかけてくださいまして、ただただ心からお礼を申し上げるばかりでございます」

利兵衛もそれと察したか、くどくはいわず、暗い顔をしてひたすら頭を下げていた。

雌ぎつね

――義理と義理との寄り合いで、まったく気の毒な家だな。

明るい表へ出て、大助はほっとした感じだった。なるほど、あんな家では久美が帰りたくないわけである。

一体、だれの罪なのだろうか。やくざ息子の利吉がいちばん悪いには違いないが、利吉をそんな風にわがままいっぱいに育ててしまった利兵衛にも、いくぶんの罪がないとはいえないのではなかろうか。あそこまできてしまっては、どっちももう救いようがない。

しかし、悪いといえば、横立剛太夫などは悪玉の大関格だろう。今日はおとなしく帰ったようなものの、どうしても久美を取りもどすか、それとも金にするか、一度佐原屋をねらったからには、これもただではすみそうもなさそうだ。

――はてな。

吾妻橋の通りへ出て、大助はふと気がついた。剛太夫も利吉も、ねらっているのは久美の体だ。ことによると、だれかに自分のあとをつけさせているかもしれない。

――こりゃうっかりまっすぐ家へは帰れないぞ。

大助はそれとなくあたりを見まわしてから、ゆっくりと吾妻橋をわたり出した。橋をわたりきって右へ曲がれば多田薬師の方だが、わざと左へ折れた。人通りのないところへ行けば、尾行はすぐわかる。源森橋をわたって、水戸の下屋敷の前からぶらぶらと向島土手へ出る。

昼にはまだ少しの間のある時刻だが、この辺までくるとほとんど人足はまれで、葉桜の並木もだいぶ秋にいたみ、きたならしくなって、わくら葉がしきりに道に散りおちていた。

明るい隅田川の対岸かみ手に、待乳山の森がくっきりと黒い。空はあくまで澄みきって、日ざしはまだ強いが、このあたりそぞろ歩きには捨てがたい風情がある。

牛ノ御前のあたりまで行った大助は、急にくるりと踵をかえした。

なるべく並木づたいに歩いていたらしいぬすっとかむりの中間体の男が二人、あわてて川の方を向いて景色をながめているふりをする。

――頭かくしてしりかくさずか。

いかに急場のこととはいえ、この真っ昼間、中間のぬすっとかむりはおかしい。しかも、昨夜剛太夫がつれて久美を追いかけてきたのも、

勘助に鎌助という二人の悪中間だった。
　大助はゆっくりと二人のうしろまで引きかえしていって、
「やあ、ゆうべは失礼――。景色を見物しているのかね」
　と、わらいながら声をかけた。
「なにをっ」
　二人はぎょっとしたようにふりかえる。
「君たちはなかなか風流っ気があるんだね」
「おや、お前はおれたちになにか因縁をつけようってのか」
「そういう君は、勘さんの方かね、鎌さんの方かね」
「こんちくしょう、知ってやがる」
　二人はちらっと顔を見合わせたが、
「そうとわかっちゃしょうがねえ。ゆうべの敵討ちだ、覚悟しろよ」
　いきなり二人は腰の木刀を引き抜いた。
「よした方がいいな。わしはあいにく剣術を習っているんだ」
　大助はわらいながらじりじりと少し往来の方へさがった。
「なにをぬかしやがる。――野郎っ」
　後へさがったのを逃げたとでも思ったか、一人が真っ向うからびゅんと木刀を打ちこんできた。銅輪のはまっているやつだから、まともにあたれば骨がくだけて即死する。
　ひらりとかわして横に飛んだ大助は、もう一人の方が、
「こんちくしょうっ」
　と、木刀をふりあげた胸の中へ、猛烈な体当たりをくれた。
「わあっ」
　そいつが仰向けにけし飛ばされた方がちょうど土手際になっていたので、もんどり打って土手を通り越し、どぶんと隅田川へ落ちこんでいった。
「うぬっ」

　一度空を打ってよろめいたやつが、狼狽気味に二の太刀を振りおろしてきたが、またしても大助がひょいと横へ飛んだので、
「わっ、あぶねえ」
　こんどは力一杯よろけていったのは土手際の方だ、とても踏みとまれない。自分から大きく川の中へどぶんと飛びこんでいく。
「あは、は、いわないことじゃない。君たちはよくよく川へ飛びこむのが好きな性分なんだな」
　大助が一人でわらいながら二人の落ちこんだ川の方を見ていると、
「強いんですねえ、兄さん」
　うしろで張りのある女の声がした。
　おやとふりかえってみると、いつの間にどこからきたのか、二十三、四のびっくりするような年増女が婉然とわらいながら立っている。紫の緒をかけたつぶし島田にゆって、ぞろりとあか抜けのした着物のきこなしは、無論、堅気の女ではない。
「やあ、見ていたのかね」
「拝見してました。たのもしいわ、兄さんは」
「それほどでもないんだ。相手の方が少しあわてすぎたんだな」
「あら、そんなに御謙遜なさらなくたっていいわ。お刀一つお抜きにならずに、あっという間なんですもの。よっぽどおできになるんでしょう。免許なんですか」
「どうしてどうして、ほんのすっとんきょうぐらいのところだ」
「ほ、ほ、御冗談ばかし――」
「じゃ失礼。あの二人が川からあがってくるとまたうるさいから、わしは逃げる」
　大助がそのままさっさと歩き出そうとすると、
「あ、ちょっとお待ちになって、兄さん。そのお腕前を見たんで、ぜひあたしお願いしたいことがあるんです」
　と、女はいそいでたもとをとってくるのだ。

「いや、それはよした方がいい。こう見えても、わしはなかなか女癖が悪いんだ」
「あら、どう女癖が悪いんでござんす」
「つまり、その、すぐくどきたくなるんだ」
「まあ、たのもしい。兄さんほどの男なら、ぜひくどかれてみたい」
　ぴったり肩を寄せてきて臆面もなく色っぽい目をしてみせるあたり、どうやらこれもただの雌ぎつねではなさそうだ。

すごい度胸

「話があるんなら、歩きながら聞こうかね」
　大助はわらいながら牛ノ御前のそばから土手をおりて、三囲稲荷の裏手の方へぶらぶら歩き出した。どうせこの女も悪用人横立剛太夫か佐原屋のやくざ息子利吉にたのまれてきたひもに違いないのだから、うっかり家の方へ足は向けられないのだ。
「まあ、うれしい。あたしの話を聞いてくれる、兄さん」
　女はあくまでもいそいそと肩をならべてくる。
「うむ。なるべくなら、よくわかるように、手っ取り早く願いたいな。あんまり長い話だと、前の方を忘れてしまうかもしれないからな」
「なんでしたら、どこかその辺で、おひるをつきあってくれるといいんだけれど」
「それはこの次にしよう。わしはたったいま飯をすませてきたばかりなんだ」
「うそばっかし――」
　横目でにらんで、とんと肩をぶつけてくる。うっかり出た言葉だろうが、それを知っているようでは、土手で偶然に出会ったのではない。ちゃんと花川戸からつけてきたのだ。
「うそじゃない、本当なんだ」
「だめだめ、うそついたってちゃんと知ってるんだから」
「そうかなあ」

「じゃ、あんたどこでおひるを食べてきたの。いってごらんなさいよ」
「花川戸の佐原屋でごちそうになってきたんだ」
「ふうんだ。まあ、そんなとこでしょうね」
　女の顔が急に底意地悪くなって、
「兄さん、あんたその佐原屋の娘のお久美さんをどこへかくしてあるんです」
　と、これはまたあっさりとぶつかってきたものである。
「君の話ってのはそのことかね」
「そうよ。正直にいっちまうと、あたしは駒形のお蘭ていう跳ねっかえりなんですがね。佐原屋ののら息子利吉から十両でたのまれてきた仕事なんです。はじめの方を忘れられちまうとこっちもやっかいだから、手っ取り早くよくわかるように申し上げると、浪人者で猪村大助という男が、屋敷奉公をしている妹をそそのかして、ゆうべ屋敷をつれ出し、どこかへかくしてしまった。いずれは金にする腹だろうが、少しぐらいのお金は出してもいい、妹がかわいそうだからなんとか無事につれもどしてもらえないか、それができなければ、せめて妹のかくしてあるところなりと探ってみてくれと、こうたのまれましたんでね。どんなもんでしょうねえ、兄さん、ひとつ手っ取り早く御返事がいただけますでござんしょうか」
　なるほど、この女は自分でいうとおりよっぽど跳ねっかえりにできているらしい。
「驚いたなあ。君は正気なのかえ」
「なんですって――」
「これは念のために聞いておくんだが、君は金でたのまれると、人殺しでもなんでも引きうけてくれるのかえ」
「時と場合によってはねえ」
「すごい度胸だなあ」
　大助はまったくあきれざるをえない。
「兄さん、少しぐらい剣術ができるからって、

あんまりうぬぼれない方がいいわよ。女にだってあたしのような剣術なんか少しも怖がらない生まれ損ないがたまにはいるんですからね」

「わしは気が小さい方なんだから、あんまりおどかさないでもらいたいな」

「とかなんとかいって、あんたはそらっとぼけちゃいるが、ちょいと度胸はいい方さ。ほめてあげるわ」

「ありがとう。それで、姉御は佐原屋の利吉親分とどんな引っかかりがあるんだえ」

「そうねえ。これも手っ取り早くいえば、あのばか野郎がいやにやくざぶって、あたしに色気を出しているから、しぼれるだけしぼってやろうと思っていますのさ」

お蘭はけろりとしていう。道はいつか田んぼへ出て、向こうに水戸の下屋敷から常泉寺の森が見えてきた。この辺はどっちをながめても広広とした田と畑がつづき、そのところどころに遠く近く森が点々としているのは大抵寺か神社のあるところだ。からりと晴れた東の果てに筑波の双峰がくっきりとうかんで見える。

「そこで、兄さん、さっきの御返事はどういうことになりましょうかね」

あたりに人通りもない寂しい田んぼ道へきて、女の方があべこべに大の男を脅迫しようとする。大した度胸だと、大助はなんとも妙な気持ちである。

「どうだろうな、姉御、わしがあらためて君に十両出すといったら、この仕事から手をひいてくれるかえ」

「ふうむ。じゃ、兄さんはどうしてもその娘を種に佐原屋をゆする気なのね」

「いや、わしにはそんな度胸はない」

「じゃ、その娘にほれていて、女房にでもしようっていうの」

「別にそんなことも考えていない」

「なら、どうしてあたしに十両なんて大金を出そうっていうのさ」

「つまり、あの娘は気の毒な窮鳥なんだ」

「なにさ、その気の毒な窮鳥ってのは」

「わしやたかにねらわれて逃げ場を失った鳥を窮鳥っていうんだ。窮鳥ふところに入れば猟師もこれを殺さずといってね、それが世の中の仁義というものなんだ」

「あんた変なお経を知ってんのね。坊さんの落とし種かえ」

「いや、あれは佐原屋の後妻のつれ子でね、器量がいいもんだから、女房にしようとねらったのがあの若だんな親分の利吉なんだ。知っているかね」

「へえ、あのばか野郎が追いまわしたの。初耳だわ」

「それがいやで、娘は家を出て屋敷奉公にあがった。ところが、その屋敷に悪い用人がいて、金持ちから金を引き出すために、あの娘をゆうべ人身御供にしようとした。娘は夢中で屋敷を逃げ出したものの、家へ帰れば利吉わしがつめをみがいている。行くところがなくて困っているところへ、ちょうどわしが行きあわせたというわけなんだ」

「うまくやったわねえ、あんた」

「あれえ」

「とぼけっこなしさ。それで、あんたその窮鳥を家へ引っぱりこんで、佐原屋からたんまり礼金をとろうっていうんでしょう」

「またなにをかいわんやだな」

「ついでに、あんたもう、その娘にちょっかいを出しちまっているんじゃないの」

「冗談いうなよ。おれはそんな行儀の悪い男じゃない」

「うまくいってるわ。自分でさっき、おれは女癖が悪いっていってちゃんと申し上げているくせに」

「ああ、そうか」

こんな常識外れの女につまらない冗談をいったものだと、いまさら後悔しても追っつかない。

「じゃ、兄さん、こうしましょうよ。せっかくあ

んたのふところへ飛びこんだ福の神の窮鳥を、あたしが横からじゃまをするのも気の毒だ、あんただって見たところふところは楽でもなさそうだし、こんどのところは十両で手をうってあげるわ」

「どうもありがとう」

「そこに持ってるの、十両」

「いや、ここにはないんだ」

「たぶんそうだろうと思った。いいわ、あんたは案外ばか正直そうだから、それじゃ今夜四ツ（十時）までにあたしの家まで届けてもらいましょうかね」

「そうさせてもらおう」

「そのかわり、兄さん、断っておきますがね、もし四ツまでに、約束の十両、あたしの手もとにとどかないと、お蘭はあんたの家へ暴れこみますよ」

「承知した。しかし、姉御はわしの家を知っているんかね」

「知りませんよ。いま知られちゃ、兄さん、あんたが困るんでしょう。だから、あたしは決して後もつけなければ聞こうともいわない。悪党はおたがいに仁義は守らなくちゃね。いまは四ツという約束だけであたしは黙って手をひくが、いざあたしがあんたの家をさがすとなると、半日とはかからない。あたしには気のきいた子分がたくさんついていますからね。わかった、兄さん」

「うむ、よくわかった。それで、姉御の家はどこなんだね」

「駒形堂の横手よ。あの辺へ行って駒形屋のお蘭と聞いてもらえばすぐわかるわ。じゃ、ここでひとまず別れましょうね、兄さん」

道はちょうど水戸の下屋敷の角へ出て、塀（へい）にそって右へ行けば向島土手、左へ行けば常泉寺の前から小梅村の方へ出る。お蘭はにっこりわらって立ち止まった。

「そうか。じゃ、さようなら」

「四ツを忘れちゃだめよ。きれいな窮鳥さんによろしく」

お蘭は軽い足どりに緋縮緬（ひぢりめん）をちらつかせながら、さっさと下屋敷の塀にそって歩き出す。

――どうもわからん。

大助はその虫も殺さぬようなすらりとした年（と）増（し）（ま）ざかりのうしろ姿をしばらくあきれてぽかんと見送っていた。

母　ご　こ　ろ

もうだれも後をつけている者はないとわかったが、大助はそれでも用心をして、小梅の業平（なりひら）橋（ばし）をわたり、遠まわりをしながら多田薬師裏へかえってきた。

道々どう考えてみても、お蘭という女の正体がつかめない。無知で、無鉄砲で、善悪の差別がなくて、およそ大助の常識の範囲をはるかに飛びぬけているようなのがふしぎな気さえする。

ともかくも、一通りは武芸の心得のある武士をつかまえて、場合によってはけんかをしてもいい腹でいた。ちゃんと勝算があるように男をこばかにしている。おそらく飛び道具かなにかを持っているのだろうが、そのすごい度胸には舌をまかざるをえない。

――いや、度胸というより、むしろやけで無鉄砲になっている女かもしれないな。

だから善悪の見さかいがつかない。よっぽど悪い環境に育って、悪いやつに負けまい、いじめられまいとする勝ち気な根性が、いつの間にかああいう風にひねくれて、世の中のことがすべてまともにうけとれなくなってしまったのだろう。

昔、無知に育ったために、おれの親をおれが殺したのになんで悪いと啖呵（たんか）をきった百姓があったそうだが、そういうたぐいの女なのかもしれない。

――あんな女に脅迫されて十両取られるなんてつまらんじゃないか。

大助としては、たとえあの女にどんな魔術があろうとも、別に怖いとも気味が悪いとも、そんなことははじめから相手にしてはいない。が、――あの女にはまた一面、多分に姉御気取りのところもあるようだ。そこをうまく抱きこんで話せば、案外ものがわかってくるのではないだろうか。もし、たった十両であの女の根性が少しでも人間らしくなるようなら、金などそう惜しむには足らないと思う。

　それにしても、世の中にはなんと悪党の多いことか。横立剛太夫は刀ばかりが人を殺すと思うと間違うぞとすごんでいるし、いまのお蘭は女だてらに人の娘を平気で十両で売ろうという。気の小さい正直者は、話をきいただけでも大抵ふるえあがってしまうだろう。

「お帰りなさいませ」

　家へ帰ると、お久美がいそいそと出迎えて、玄関へ行儀よく両手を仕えた。家の中が明るくてなかなかいい感じである。

「ただいま――」

　あがって両刀をとると、ちゃんと双のたもとで受け取るかっこうをする。渡さざるをえない。

「おひるはおすみになったのでございますか」

「まだです。腹がすいた。――おや、久美さんもまだのようだね」

　火ばちのそばに膳の支度ができていて、上から布がかけてあるが、茶わんは二つ伏せてあるようだ。途中で大芝居が二幕もあって、わざわざ遠まわりをしてきたのだから、昼はとっくにすぎている。

「もうお帰りになる時分かと思ってお待ちしていましたの」

「そんな遠慮はいらなかったのになあ」

「あの、母にお会いくださいましたでしょうか」

「会ってきましたよ」

「お世話ばかりかけまして申し訳ございません」

「とにかく飯にしよう。腹がすいてかなわん」

　さし向かいで飯を食うのは今朝すでに経験ずみだから、二人ともずっと気が楽だった。

「お久美さん、わしは今日おっかさんにだけそっと会ってくる気だったんだが、妙なことから若だんな親分にもおとっつぁんにも会ってきた」

「まあ」

　箸と茶わんを持ったままびっくりした顔が急に子供っぽくなる。話は食事が終わってもまだつづいた。

「わたくし、そんなに遠いところでもないのに、どうなすったのかとずいぶん心配していましたの」

「たぶんそうだろうと思ったんだが、なにしろ後をつけられちゃおしまいだからね。当分お久美さんは表へ出ないことだな」

「出ません、わたくし。――でも、お屋敷でもあんまりですわ、そんなぬれぎぬをきせるなんて」

「いや、横立の方はおとっつぁんが出向いてなんとかうまくやってくれるさ。いくらかになりさえすれば、体まで持っていこうとはいわないだろう。難物は利吉親分だな。もうわしがお久美さんをなんとかしているんじゃないかと思って目の色を変えていた。あの分じゃ、とてもあきらめそうもないな」

「いやです、わたくし。もうなんといわれても、一生義兄さんには会いません」

「会わずにすむんなら、その方が利口かもしれない」

　あの気違いじみた目を思い出すと、大助もついそういいたくなる。

「そのお蘭とかいう女のひとの方は大丈夫でございましょうか」

　久美にはその方が薄気味が悪いらしい。

「姉御の方は大丈夫だ。今夜行って、わしが金できれいに片づけてくる」

「それまでに、どうしても一度おっ

かさんに会いたいのですけれど」
「金のことなら、お久美さん、心配しなくてもいいよ」
　十両で話をつけようといい出したのは自分なのだ。相手が女だから、まさか川の中へも投げこめないが、途中でまこうと思えばまけないこともなかったのを、いわば半分は自分の物好きから金にした。これははじめから、大助、自分で責任を持つ腹でいる。
「いいえ。お金ばかりでなく、わたくし着のみ着のままなのですもの。ですから、お願いしました手紙によくたのんでやりましたのに」
　母親にだけはわがままな小娘になれるようだ。
「そのうちにきっと会いにくるさ。お久美さんよりおっかさんの方がどんなに心配しているかしれないだろうからな」
　それからそれへと話もつきないし、退屈もしない。大助はなんとなく心がうきうきしているのを感じて、我ながらこれは少し変だぞと気がついた。いつまでも久美のそばを離れようともしない自分を発見したからである。
　佐原屋の丁稚長松が大きなふろしき包みを背負ってこの長屋をたずねあてて来たのは、もう夕方に近く、久美はたすきがけで夕飯の支度にかかっていた。
「いつもあたしがするんだから今までどおりあたしがやってあげてもいいんだけれど、お嬢さんは自分でしてみたいんでしょう」
　隣のお仲がそういって、食事ごしらえの道具一通りを運んでくれたからである。
「おばさまのようにうまくわたくしにできますかしら」
「なあに、少しぐらいこげたって、生煮えだってかまやしません。はじめのうちは、男なんてなんでもおとなしく食べてくれるものなんです」
「でも、わたくしのはまだ居候のことですから」
　久美もなかなかすみにおけないことをいう

が、古女房のお仲はもっとあけすけである。
「さあ、若だんながいつまで居候の身でそっとしておきますかね」
　これにはさすがに久美も太刀打ちできなかったようである。
　そんなところへ長松がたずねてきたので、仕掛けた台所はとうとうお仲が仕上げていくことになってしまった。

甘い青春

「まあ、長松、御苦労さまでしたね」
　大きなふろしき包みを受け取ってほっとしたのだろう、久美は心からうれしそうだった。
「先生、だんなもおかみさんも、今朝ほどはありがとうございました、くれぐれもよろしく申し上げておくれといいつかってまいりました」
　こんな大切な使いがつとまるだけに、長松はあいさつのしようもしっかりとしている。
「やあ、よくきたね。利吉親分は留守だったのかね」
　家にいればとてもこんな使いは出せないはずである。
「若だんなは朝出かけてお昼ごろちょっと帰ってきましたが、また出かけったっきり帰ってきません」
「途中でだれか後からつけてくるような様子はなかったかね」
「大丈夫だと思います。わざわざ竹屋の渡しへ出て、向島へあがり、小梅の方を遠まわりしながら、なんべんも後を気をつけてきたんです」
「君はなかなかしっかり者なんだな」
「お嬢さん、だんなもおかみさんも、そのうちにいい折を見てきっとたずねるから、しばらく辛抱するようにっていっていました」
「ありがとう。こちらで親切にしていただいていますから、久美のことは心配ありませんけれど、ぜひ一度たずねてくれるように、お前からもよくたのんでおいてください」

「かしこまりました」
長松はもう一度大助に、お嬢さんをよろしくお願いいたしますとたのんで、日の暮れないうちに帰っていった。
「お久美さん、わしはこれからちょっと駒形へ行ってくる」
大助がそういい出したのは、夕飯後久美がお仲にふろへつれられていって、帰ってきてからであった。家から荷物がとどいてから屋敷風の紫矢絣を黒襟のかかった黄八丈に着かえ、髪に緋鹿の子の結い綿をかけて、久美はすっかり派手な町娘にかわっていた。
「あら、もうおいでになりますの」
なんとなく行ってもらいたくなさそうな顔をする。
「うむ、約束の四ッにはまだ早いが、早い分には文句はないだろうからね」
「どうしても行った方がよろしいのでしょうか」
「約束は約束だからね。あんまりたかをくくって、もしお久美さんの身になにか間違いが起こってからでは取りかえしがつかない」
「お話は長くかかりますかしら」
「いや、そう長くはかからないはずだ。一人で寂しかったらお久美さん、わしが帰ってくるまで隣で遊んでいるといい」
「いいえ、寂しくはございませんけれど、その女のひと、子分がたくさんいると申しますし」
「なあに、腕力になるようだったら、わしは遠慮なく逃げ出すから大丈夫だ」
「でも、おばさまは、その女のひと、ことによると白ぎつねかもしれないといいますの」
「白ぎつね――?」
「あの辺は白粉を塗って男をだます白ぎつねの巣になっているのですって」
お仲がふろの帰りにでもいろいろ知恵をつけたのだろう、久美はそんなことまでいい出す。
「わしは美しい窮鳥をふところに入れている

狩人だから、きつねには負けないよ」
「あら」
久美が赤くなっている間に、大助は気軽に立ち上がった。
「あの、ちょっとお待ちあそばして――」
いそいで立った久美は、押入へ行って自分の手文庫から二十五両包みを取り出してきた。
「母からお金がまいっていますの。これをつかってくださいませ」
さし出す白い手を軽く押さえて、
「いや、金ならわしも持っている。なるべくなら金で話をつけたくない。それより、お久美さん、今夜は、よろしいんでございますの、はお断りだぜ。大切な窮鳥なんだから、風邪をひかれちゃ困るんだ。もしわしがおそくなるようだったら、よく戸締まりをして、ふとんを敷いて先にやすんでいてください、わかったね」
と、押さえた手をそのまま放さず、かんでふくめるようにいって聞かす。
「おそくなってはいや――」
はっきりとかむりを振ってみせる久美だ。さわやかな香をみなぎらせている湯ほてりのほおがぱっと桜色になって、それでも燃えている目を逃げようとはしない。
「よろしい。では、なるべく早く帰ることにしよう」
大助はわらいながら両手を久美の肩へおいた。それだけでは物足らないし、久美も体中をかたくしながら誓いの表現を待っている風に見える。
大助は急に久美の肩を腕の中へ巻きこんで、それが当然のようにくちびるがくちびるへ行った。目を閉じた久美の全身から力がぬけて、肩も胸もあらしのようにあえいでいる。
「わしはもう、お久美さんをだれにもやらない」
大助がはっきりと久美の耳もとへささやいた。
「うれしい」

と、久美はわずかにあえいだだけである。
「さあ、わしはきつねと闘ってくる」
うっとりと久美が目をあいて、腕の中でうれしそうにやっとうなずいた。
「お久美さんをとりにくるやつはみんなたたっ切ってやる」
もう一度大助の腕に力が入って、
「久美は、久美はもうどこへもまいりませんわ」
と、久美は切なげに答える。
「よしもうどこへもやるものか」
大助はまたしてもかっと胸に甘い青春があふれてきて、そのくちびるへくちびるを押しつけていた。
まもなく、隣の元造夫婦に留守をたのんで、大助は駒形の白ぎつね退治に大手を振って川端の方へ歩いていった。
十五夜の翌晩だから、今夜も空にはすばらしく明るい月が青々と下界を照らし輝いていた。

きつねの巣

浅草並木町通りの東側は、白粉くさい白ぎつねの巣の多い町で、それが駒形にまで及んでいる。駒形堂の近くの川っぷちにあるお蘭の駒形屋もそれで、ただ変わっているのは、普通そういう店の表構えは小料理屋風になっているのに、お蘭の店はなわのれんの居酒屋になっている。
別に考えがあってそうしたわけではなく、もともと伯父の吉兵衛老夫婦が居酒屋をやっているところへ野放図にお蘭がころげこんできて、勝手に白ぎつねの巣にしてしまったのだ。つまり、ここでは一杯飲みにきた客に白ぎつねどもがしゃくをしていっしょに騒ぐ。話がまとまると白ぎつねどもはその客をつれて自分の巣へ帰っていく。
そういう白ぎつねどもの中にはお蘭をたよってきてここに寝泊まりしている者もあるが、大抵はここをかせぎ場にしてほかから集まってくる方が多い。お蘭はいつの間にかそういう女たちの親分になっていた。
かせぎ方の白ぎつねどもは、場代としてお蘭にいくらかおさめるだけで、ほかに小うるさい約束があるわけではないから、自由でかせぎいいし、飲みにくる客の方でも、浮気がしたくなければただで女に酌をしてもらっておもしろく飲んで帰ればいいのだから、自然に駒形屋は毎日よく繁盛した。
こういう店にとっていちばんやっかいなのは、土地の地回りとお上の目だが、無鉄砲でくそ度胸のすわっているお蘭はどっちも問題にしなかった。金ぐつわでいけなければ色仕掛け、それもだめなら最後は腕力で、
「兄さん、少しぐらい剣術ができるからって、あんまりうぬぼれない方がいいわよ」
と、大助を若僧あつかいにしたお蘭にはそれだけの自信もあったが、この方はまだ一度もつかわずにすんでいる。
ということは、地回りでも岡っ引きでも、男はたいてい金か色でころりと片づいてしまう。つまり、二本棒が多いわけだ。
時勢からいっても、徳川幕府はちょうど長州征伐でこずっている最中だから、江戸の治安も私娼退治にまでは手がまわらなくなっている。
そのお蘭はまた、街のちんぴら小僧どもから弁天姉御として崇拝されてもいた。彼らが腹をすかしてくると、なにか店の手伝いをさせてきっと飯だけは食わせてやるし、病気になったやつを引き取って医者にかけてやったこともある。そういう十から十四、五どまりのちんぴらどもが、いざとなると命がけでお蘭のために働いてくれるから、地回りたちもうっかり駒形屋だけは手がつけられないことになるのだ。
今夜も店の居酒屋は大繁盛で、客と女たちが勝手な憎まれ口をききあいながら騒いでいるのをお蘭は壁一重に聞きながら、板場の前の六畳

の長火ばちのそばへもどって一服していた。ここが駒形屋の帳場で、板場では伯父夫婦がせっせと板前を動いているし、店から下げられてくる皿小鉢は、今夜もちんぴらどもが手伝いにきて、もうすっかり慣れているから器用な手つきで洗っている。お燗番と銚子運びはここに寝泊まりしている女どもの係りで、店との仕切りのなわのれんを出たり入ったり、まるで戦場のようだ。

そのなわのれんをかきわけて、ぬっと板場へ入ってきたのは佐原屋の利吉だ。

「おや、いらっしゃい、若だんな」

大切な金づるだから、お蘭はにっこりとして愛想のいい笑顔になって迎えた。だれにでもほれたようなほれないような顔をするのが白ぎつねどものたしなみで、お蘭ほどの姉御になるとそれが名人芸になっている。

若だんなやくざの利吉は、いつも高い場代を払っているのだから、あたかも亭主が自分の家へでも帰ってきたような横柄な面で、むっと長火ばちの前へ座った。

「お蘭、野郎の巣を突きとめてくれたろうな」

そのために十両という大金を前銭で投げだしてあるのだ。

「それがねえ、ちょっとわけがあって、まだなんです」

「なんだ、じゃお前、途中でしくじったのか」

「まさかしくじるようなへまはしませんけど、あの猪村大助って若僧、なかなかいい度胸ですね、若だんな」

「感心していちゃしようがねえ。お前、口をきいたのか」

利吉は苦い顔をする。

「ききました。気性もさっぱりしているようだし、あたしちょいとおかぼれしちまったわ」

と、とろんとした目をしてみせて、利吉などは腹の中で男くさくも思っていないお蘭だ。

「物好きだなあ、お前も。そりゃ人の娘をかどわかしていくくらいだから、度胸もいいだろうし、口先もうまいだろう。どうせ一筋なわじゃいかねえ食い詰め浪人にきまってらあな」

「でも、食い詰め浪人にしちゃ、どこか男らしくて、品があるじゃありませんか。どなたさまかの御落胤じゃないかしら」

「天一坊じゃあるめえし、――おかぼれするのは、お蘭、お前の勝手だが、おれとの約束はどうしてくれる気なんだ」

「御安心なさいまし。そのことなら忘れちゃいませんから」

「じゃ、お前、野郎の家を突きとめてきたのか」

「そんなにあわてなくたっていいじゃありませんか、手がかりだけはちゃんとつかんできたんだから」

「いや、そうはいかねえ。妹の体に傷がついてからじゃ取りかえしがつかねえんだ。だから、十両という大金を前金で払ってあるんだ」

「それはたしかにいただきました。つかぬことをおうかがいしますけど、若だんなはそのお妹さんを自分のおかみさんにしたいんですってね」

お蘭が横目でにらんで、ぷいとそっぽを向く。

「そ、そんなことがあるもんか」

「いいえ、たとえそんなことがあったって、あたしは別にかまわないんですよ。まだ若だんなとはどうって仲でもないんですからね。ただ、若だんなの方から一度あたしに女房にならないかって相談がござんしたね。おれの女房になりさえすれば、佐原屋の身代はお前とおれのものだって、たいそううまいお口でした。その口の下から、妹がこれこれでかわいそうだからぜひ手を貸してくれって、ひとを口車にかけようとなすった。その気持ちが憎いから、あたしは途中で寝返りをうったんです。おあずかりした十両は、だまされ賃にしていただいときますからね、そのつもりでいてくださいまし」

いけしゃあしゃあとしていってのけるお蘭

だ。
「お蘭、そいつはうそだ。あの野郎がなんといったか知らねえが、お前こそあの野郎の口車にのせられたんだ」
　お蘭の体にも十分色気のつのる利吉だから、十両という金より、いまさらの愛想づかしの方が、ずんと胸にこたえるのだろう。
「さあ、あたしが口車にのせられたかどうか、まもなく猪村がここへくる時分だから、若だんな、自分でよく聞いてみるといい」
「なにっ、あの野郎がここへくるって。――本当か、お蘭」
「十両のお礼に、これだけは教えてあげるわ。あの男は四ツ（十時）までにたしかにここへくる約束なんです。家を突きとめるなり、やみ討ちをかけるなり、それは若だんなの御勝手次第ということにしときましょう」
「わかった。お蘭、野郎がきたらお前の手くだでなるたけ酒をのませて長く引きとめていてくれ。たのむぜ」
　利吉はあわててたばこ入れをしまい出す。
「若だんな、その方の礼金はどんな御相談になるんでござんしょう」
「なんだ、それは十両のほかか」
「ええ。酒をのませたり、引きとめたりは新規の仕事ですからね。口留め料もいくらかちょうだいしなくちゃ、これこれで利吉親分が途中で待ち伏せをするなんてことがうっかりあたしの口から出たら、せっかくの若だんなが骨折り損になりましょうからね」
　ころんでもただは起きない了見のお蘭である。
「水くさいことをいうぜ」
「どうせ若だんなはお久美さんをおかみさんになさる気なんでしょうから、急に水くさくなりましたのさ」
「まあいいや。その話は後でゆっくり相談するとして、とりあえず五両おいてくことにしよう」

　金で女の気を引きつけておこうという腹があるのだから、利吉は小判で五両ねこ板の上へ投げ出しておいて、そそくさと立ちあがる。
「さすがは若だんな親分、このまねだけはだれにもちょいとできない芸ですね」
　にっこりあだっぽくわらってみせて利吉がのほほんと店の方へ出ていってしまうと、お蘭はその後ろ姿へぺろりと赤い舌を出していた。
「おい、そこにいるちびは辰んべかえ」
「うん、なにか用か、ねえちゃん」
　台所で皿小鉢を洗っていた十二、三のちんぴら小僧が、いそいで上がり框のところへ飛んできた。
「お前、いまの野郎がどこへ行くか見てきておくれでないか」
「ようし、すぐ行ってくる」
「うまくやるんだよ」
「見ていてくんな、ねえちゃん」
　姉御に用をいいつけられるのは、仲間への自慢になる。辰んべはもう台所口から風のように飛び出していった。

嫉妬

「姉さん、猪村大助さんて若いお侍が表へきて、姉さんにお目にかかりたいっていってますけど」
　店の女がそういって取り次いできたのは、それからまもなくのことだった。
「ここへ通しておくれ」
　約束の四ツにはまだ一刻もある。ばかに早いんだなと思い、ああそうか、とても十両の金はできそうもない、だからいくらか持ってあやまりにきたんだなとお蘭は考えた。
　――畜生、甘く見やがったら承知しないから。
　下から、姉御、姉御とおだてられるところりと参る癖があるかわりに、少しでも頭からのしかかってくるような風が見えると、挺子でも動きたくなくなるひねくれた性分なのだ。
「やあ、今晩は」

女に案内されて板場へ入ってきた大助は、あたりの様子にびっくりした顔つきであいさつをした。
「早いんですねえ、兄さん。まあ、お上がんなさいな」
お蘭がいま利吉の座っていた長火ばちの前を指さすと、
「ありがとう」
大助は別に悪びれた風もなくのこのこ上がってきた。
「四ッまでという約束だったが、早い分にはしかられもしなかろうと思ってね」
と、行儀よく座る。
「お金、できたの」
「うむ、十両持ってきた」
ふところから無造作に紙入れを出して、小判を十枚ねこ板の上へそっとおく。後の紙入れはからっぽになったようだ。
「あら、そんな大金をよく貸してくれる人がありましたね」
あやまりにきたとばかり思いこんでいただけに、ちょいと意外で、つい皮肉が口に出てしまった。
「いや、そんな金じゃない。これは死んだおふくろさまがわしにのこしておいてくれた金なんだ」
大助は真顔になって、なんとなく居ずまいを正す。
「じゃ、大切な金なんですね」
「わしにとってはおろそかにできないおふくろさまの慈愛の形見だが、人の命にはかえられないからな」
「本当は兄さん、そういうお金をあたしにくれるのもったいないと思ってるんでしょ」
「正直にいうと、そんな気がしないでもなかった」
「まあ、あきらめるんですね。そのかわり、あの娘さえ押さえておけば、佐原屋からいくらでもお金は引き出せるんだもの」
お蘭はわざと底意地の悪い顔をして、さっさと小判を帯の間へしまいこむ。
「あいにく、わしにはそれだけの度胸がないんでねえ。まあ、お手やわらかにたのむ」
「すると、お色気の方かな。あんたその娘にほれちまったの」
「そうかもしれないな」
「それならよした方がいいと思うな。人がおもいをかけている娘なんかに手を出すと、ろくなことなさそうよ。相手は佐原屋のやくざ息子と、なんとかいう旗本の悪用人なんでしょう。どっちも十両なんかじゃ手を引きそうもありませんからね」
すなおな中にも、どこかこっちをのんでかかっているような骨っぽさがある。こんなばからしい十両も、いわば相手が女だから、ばからしいのを承知でくれてやる、そんな風に見えないでもないのだ。こんちくしょうと、お蘭は妙にからんでみたくなる。
「ありがとう、十分気をつけることにしよう」
「じゃ、あんたはどうしてもその娘をおかみさんにするつもり?」
「まだそうときまっていないんだ」
「それなら、悪いことはいわないからおよしなさい。やつらにねらわれるだけ、あんたの損ですからね」
「そうかなあ」
大助はおっとりとわらっていて相手にならない。
「いっそ、どうお——、あんたあたしをおかみさんにしてみない。あたしはこう見えても働きがあるんだから、あんたにその日の心配はさせないし、とてもかわいがってやるけどな」
とろんとした目をしてみせて、器量には自信があるし、ひょっと乗ってきたらぴしゃりと一本やっつけてわらってやるつもりだったが、
「わしはだめなんだ。とてもそんな度胸はない」

と、てんでそんな色気は感じない顔つきだ。

「おや、兄さん、妙なことをいうんですね。それじゃ、なんだかあたしがまるで度胸のある毒婦みたいに聞こえるじゃありませんか」

　仮にも自分からいろごとを持ちかけて、こんなに冷淡に突っ放された経験は一度もないから、お蘭は我にもなくむかっとして、こんちくしょう、ただ帰すもんかという意地が火のように燃える。

「ねえちゃん――」

　さっきの辰んべが上がり框のところへひょいと顔を出す。役目を果たして帰ってきたらしい。

「兄さん、ちょいと待っててくださいね」

　お蘭はいそいで立って下駄を突っかけ、辰んべを板場のすみへつれていく。

「わかったかえ」

「うむ。若だんなは三間町の地獄道場へ入っていったよ」

　三間町は大通りを一つ隔てた西側になっていて、そこに大須賀兵十郎というごろんぼ剣客が伊藤派一刀流の道場をひらいている。門弟は土地のならず者が多く、道場で剣術を教えながら、裏ではいつも賭場を開帳しているというすごい先生だ。利吉はその賭場の定連で、日ごろ兵十郎からいいかもにされている方だろうから、そこへ加勢をたのみに行ったのだろう。

「たぶんそんなところだろうと思った。辰んべ、だれにもしゃべるんじゃないよ」

　お蘭は駄賃をいくらか握らせて、長火ばちの前へ帰ってきた。

「姉御、わしはこれで失礼する。忙しいところを長居してすまなかったな」

　それを待っていたように、大助がおじぎをしようとする。

「あら、まだいいじゃありませんか、兄さん。十両ただ取りでもあんまり虫がよすぎるようだから、いま一本つけさせようと思っていたのに」

　やみ討ちを食うも食わぬもこれからの出よう

一つなんだからとお蘭は腹できめながら、しらじらしく引きとめてみた。

「いや、わしはあんまり酒はのめないんだ」

「そんなことというと、なおのませたくなるなあ」

「せっかくだが、この次にごちそうになろう」

「じゃ、あんたはどうしてもあたしを毒婦にする気なのね。だから早くこんなとこを逃げ出したいんでしょう」

「そんなことはない。姉御は親切なひとだ」

「ああ、わかった。本当は、あなた、早くその娘のところへ帰りたいんでしょ。白状なさいよ」

「察しがいいな。心配しているとかわいそうだから、早く帰ってやりたいんだ」

　それを邪気のない顔をして、あっさりいってのけるのだ。

　――勝手にしやがれ。そんな甘い野郎なんか、やみ討ちにあっても知ったことじゃない。

　へそ曲がりのお蘭は、自分を女くさくも思ってくれない男の面がむやみに小憎らしくなってきて、

「じゃ、さっさとお帰りなさいな。途中でころばないようにね」

　と、つんとそっぽを向いてしまった。

「ありがとう。ころんだら起きて帰るよ。失礼」

　にっこりわらいながら、さっさと立ち上がる大助だ。

待ち伏せ

　白粉と酒と猥雑な人いきれと、むんむんするような濁った駒形屋の店を一足外へ出た大助は、なにかほっと生きかえった気持ちだった。目の前の広々とした隅田川が、澄んだ月かげに明るい。

　――あの女はとてもわしの手などには負えない。

　なるべく金ずくではなく、人間同士の話でうまく解決をつけたいと思ってきたのだが、そんなことは世間知らずの大助の甘い夢にすぎなか

ったようだ。うっかり説教じみたことでもいおうものなら、あの女はたちまちひねくれて、善悪の見さかいなくあくたれ出す。世界の違う女として、大助は黙って十両捨ててくるほかはなかった。

――完全にわしの負けだな。

しかし、あの十両で、しばらくでも美しい窮鳥が安全に羽根がやすめられ、一方からいえばお蘭という女のおかそうとする悪事を一つだけ未然に救いえたとしたら、それは決してどぶへ捨てるような十両ではなかったと思う。

――おっかさん、許してくれるでしょうね。

大助はまぶたに母のおもかげを描いてみる。

「あなたはもう一人前の男なのですから」

母はにっこりわらってくれたようである。

その母の白い顔が、ふっと久美の顔に変わってきた。

「おそくなってはいや――」

燃えるような美しい目をして、久美ははっきりという。

――そうだ、おれはもう六無斎ではなくなったんだからな。

大助はじんと胸にあふれてくる青春をかみしめながら、吾妻橋の方へ大股に歩いていた。

母を亡くして以来、大助はまったく孤独であった。その孤独の寂しさにたえかねて、急に父の家をたずねてみる気になったのだが、たずねてみてこれは失望に終わった。

が、今は一生の苦楽を共にしようと誓う美しい窮鳥が家に待っていてくれる。孤独でないということは、なんという幸福なことだろうと思う。

「おい、待ちな、あんちゃん」

片側町の材木置き場のかげから、そんな人を食った声をかけてぬっと出てきたぬすっとかむりの男がある。と見る間に、おなじようなやくざっぽいのが、後から三人、まだ物陰に何人かいそうな気配だ。

大助はとっさに川を背にして黙って立った。まさか十両奪っておいてお蘭が裏切るはずもなかろうから、これは利吉の仲間か、それとも悪用人横立のまわし者か、まだかくれている人数があるだけに、今夜は油断ができないと思う。

「あんちゃん、お前は猪村大助っていう素浪人だろう」

「君たちはだれだね」

「おれたちは花川戸の佐原屋からたのまれてきたんだ。お前、佐原屋の娘をどこかへかどわかしていって隠しているんだってな。悪い了見だ。親御が心配しているから、すなおに渡してもらおうじゃねえか」

ぬすっとかむりで出てきて、親御が心配しているから娘を渡せもすさまじい。

「その娘さんのことなら、いずれわしが佐原屋へ送りとどけるから、君たちに心配してもらわなくてもいいんだ」

「おや、この野郎、てめえずぶといことをぬかしやがるんだな」

「そんなことはない。ぬすっとかむりなんかしてわしを待ち伏せしている君たちの方が、よっぽどずぶといようだ」

「なんだと、野郎。もう一度いってみろ」

「そんなに怒らなくてもよろしい。諸君は利吉親分にたのまれてきたのかね」

「余計なことをいうな。黙ってこっちへ娘を渡せばいいんだ」

「わしはあまり人にけがをさせたくないんだ。掛け合いならかむり物をとって、おだやかにやってもらいたいな。そうでもないと、諸君を山賊、追いはぎのたぐいと見るほかはない」

大助はのんびりとむだ口をたたきながらそれとなく材木置き場にかくれているやつらの動きを待っているのだが、これはなかなか出てこようとしない。

「こんちくしょう、てめえこそかどわかしのくせに、もう承知できねえ」

「やめたまえ。日当をいくらもらってきたか知らんが、けがをするとそれより高いものにつく」
「けがをするのはてめえの方だ」
「そうはいかん。わしはけがをしたくないから、子供の時から剣術のけいこをしているんだ。一人だと思って甘く見ると、損をするのは諸君の方だ」
　あんまりゆうゆうとしすぎていてなんとなく手出しのしにくい相手だが、
「くそっ、やっちまえ」
　お先っ走りの一人が、たまりかねて長脇差を引き抜くなり、だっと切りこんできた。
「ばかっ」
　のんびりとは見せかけていても、今夜は無事にすみそうもないと、ちゃんと腹をすえている大助だ。ひらりと川ぞいに左へ飛んで、空を切ってのびる敵の背中へ抜きうちの一刀をたたきつけた。ただし、無益の殺生はしたくないから峰打ちである。
「わあっ」
　切って出た目の前は、大助が飛びのくと川だ。敵はその川の中へどぶんと勇ましく自分から飛びこんでいく。
「それっ、やった」
「たたっ切れ」
　残る三人がいっせいに抜刀して、こうなれば命知らずの連中だからがむしゃらに殺到してきたが、
「とうっ、えい」
　大助の颯爽たる気合いが夜気をついて、先頭の一刀を跳ね飛ばし、返す二の太刀で一人の胴を。はっとうろたえる三人目の敵は、猛烈な体当たりをくらって、
「わっ」
　どぶんと川の中へ水しぶきをあげていた。
　それは一瞬旋風が巻いたかと見る間の勝負で、大助はすっと元の川端へ立つ。材木置き場にかくれた敵がいるとにらんでいるから、少し

も油断はできないのだ。
　はたして、そこからつかつかと覆面の武士が一人、月の中へ出てきた。
「おい、貴公なかなか味をやるな」
　敵は大助の前へ立って、いくぶん嘲弄するような低い声だ。そのどっしりと落ち着きのある態度から見ても、これは相当以上に腕におぼえのあるやつらしい。

乱　闘

「あなたはだれか?」
　月のあかるい隅田川を背にして立った大助は、息をととのえながら聞いた。相手がまだ刀を抜いていないので、無論こっちも刀は右手にさげたままだ。
　切ってかかったやくざ四人のうち二人は川へ落ち、一人は胴へ峰打ちをくらってのび、残る一人は長脇差をはね飛ばされてぼうぜんとしりごみをしている。
　ほんの一瞬のうちに片づいた勝負だが、その大助の前へ平気で立った黒頭巾の武士は、よほど腕に自信があるのだろう、少しもこっちを警戒する風さえ見せない。むしろ、たかが青二才と、頭からこばかにしているようだ。
「わしの名前などどっちでもいいが、貴公のやっていることははなはだよくないぞ。佐原屋の娘をおとなしく親もとへかえしてやってはどうか」
「すると、あなたも利吉にたのまれて、わしをここに待ち伏せしていた組なのかね」
「いや、だれにたのまれたにもせよだな、他人の娘を無断で監禁するなどということはごろつきのすることだ。貴公の方が絶対によろしくない」
　頭巾の武士は委細かまわず、大助を悪者あつかいにしてしまう腹なのだろう。
「君はなんにも事情を知らないようだな」
　大助はまじめに相手になるのがばからしくなってきた。

「ばかなことをいえ。なんにも事情を知らん者が、のこのここんなところへ出てくるものか。お前が佐原屋の娘を監禁して、いくらたのんでも家へもどさぬ、察するに金にでもしたい腹だろうと聞いたから、ちょいと意見をしてやろうと思って、わざわざここに待っていたんだ。もっとも、五両や十両の金なら出してもいいと親もとではいっている。どうだ、それで手を打ってやらんか」

「貴公はあまり頭がよくないようだね」

「なにっ」

「人に意見をしようという人間の方が頭巾で顔をかくし、意見される方が顔をさらしている。知らない通りすがりの者が見ると、君の方が追いはぎか強盗に見られる。まず頭巾を取ったらどうだね」

「お節介だな、お前は。人の頭巾の世話などはやかなくてもいい。問題は佐原屋の娘をおとなしく返すか返さぬかにあるんだ。返答をしたまえ」

「その返事なら、もう親もとの方へしてある。余計な心配は御無用に願いたい」

「そうか。では、娘は親もとへかえったんだな」

「佐原屋へ問いあわせてみるがよろしい」

「おい、女たらし、おれをあんまり甘く見ると、とんだ大けがをするぞ」

黒頭巾は急に居直ってきた。どうせ金でたのまれていいがかりをつけ、あわよくば腕の一本も切りおとしてやろうと考えているのだろうから、理屈をいってみたところで聞くはずもあるまい。

「では、そろそろ稼業にかかりますかな」

大助は不敵にもにっと白い歯を見せた。

「なんだ、稼業とは」

「貴公はいつもそうやって善人を脅し、横車を押して歩くのが稼業なんじゃないかね」

「無礼なことをいうな」

「間違っていたら失礼。もしそうでなかったら、わしは善人中の善人なんだから、おとなしく道を通してくれたまえ」

「ずうずうしいやつだなあ」

黒頭巾はいささかあきれているようだ。というより、大助の態度が始終冷静で、どこにも乗ずるすきがない。どうしてくれようかと、さっきから抜きうちの機会をねらっているのだ。

「よし、そう強情を張るなら仕方がない。小僧、遺言はないか」

「まあ、よした方がいい。けがをするのは心邪なる方にきまっているんだ」

「なに」

正直にむっとしたところを見ると、黒頭巾は自分でも心邪なることはみとめているらしい。

「銭をもらって罪もない人間に危害を加えるなどということは、武士のいちばん恥とすべきところだ。もし貴公がそれを恥としないようなら、貴公は良心を悪魔に食われた男なんだな」

「うぬっ、来い。たたっ切ってやる」

相手を怒らせようとかかっていた自分の方がかっとなって、黒頭巾はついに抜刀した。大助は右にさげていた一刀をとっさに青眼に直す。

「それ、やっちまえ」

はたして、材木置き場のかげから、ぬすっとかむりのやつが一人、狂気のようにどなりながら往来へ飛び出してきた。その声に応じるように、覆面の武士が二人、

「先生、いよいよ天誅を加えますかな」

と、ゆうゆうと抜刀しながら、黒頭巾の右と左へ加わってきた。

「切れ、たたっ切ってくれ」

ぬすっとかむりの男は剣陣のうしろをうろうろしながら、しきりにわめき立てている。佐原屋の利吉だ。無論、これがやみ討ちのたのみ主で、後から出た二人は黒頭巾の門弟たちなのだろう。

敵は三人、なんの恩怨もないが、こうなっては切り開いて活路を求めるほかはない。剣の中心はなんといっても先生頭巾だ。

――これは出来る。

さすがに命の切り売りを稼業にしているごろんぼ剣客、真剣の場数も踏んでいるらしく、堂堂たる青眼だ。あせっては敵の手に乗ぜられる。あくまでも敵の仕掛けを待って、後の先をとるほかはない。

「えい」

右の弟子頭巾が、気合いをかけて、ぐいと一歩踏みこんできた。

大助は無言でうけて、乗ろうとしない。うっかり乗れば、真ん中の先生頭巾の剣が殺到するからだ。

乗らないと見て、右がすっと元の位置へさがると、

「とうっ」

こんどは左の弟子頭巾が踏み出してきた。切ってこいと誘っているだけのことで、本当に切りこむ意志はないのだから、少しもすごみはない。これで相手を誘いこんで片づけるのがこの三人組みのいつもの手なのだろう。

大助はそんな小細工には目もくれず、茫洋と構えて必殺の一撃をねらっている。その底力が次第に相手を圧倒してきた。こいつ手ごわいと見ると、左右の弟子頭巾どもはうかつにちょっかいが出せなくなってきた。うっかり踏みこみそこなうと、獅子は一挙に躍りかかってくるかわからないからである。

その恐怖は真正面からねらわれている先生頭巾に一段と深いものがある。相手が弱ければぐんと強くなり、こいつ手ごわいと見ると、けがをしてはつまらないと思うから急におくびょうになる。傲慢にさえ見えた先生頭巾の構えが、いつの間にか守勢一方にかわってきた。

「なんでえ、三人に一人じゃねえか。もっとぱっと勇ましくいかねえもんかな。しっかりたのむぜ、先生。たかが相手は青二才一人じゃねえか、一太刀十両だ。だっと一本踏みこんでみねえか。火吹き達磨じゃあるめえし、にらんでば

かりいたって始まらねえや」

景気のいいのは利吉親分だけで、剣陣のうしろを行ったりきたり、夢中になって三人をけしかけている。これは是が非でもここで大助を片づけておかなくてはお久美は手にもどらないと、必死になっているのだろう。

「とうっ」

気力においてこっちが勝ると見たとたん、大助の心形刀流得意の突きが地をけって疾風のごとくだっと先生頭巾の守勢の青眼をついた。

「おうっ」

さすがに危うく飛びさがりながらわずかに引っ払って逃げた先生頭巾は、そのあまりの激しさにひやりとして足もとがもつれ、どすんとそこへしりもちをつく。

「やった」

絶叫しながら右の弟子頭巾がうろたえ気味に夢中で追いうちにくるのを、大助は前へ飛び抜けながらさっと右片手なぎにうしろへ払った。

「わあっ」

その片手なぎの方が敵の振りおろす太刀より一瞬早かったらしく、大助が材木置き場の材木を背にすっと立ち直った時には、左手をひじのあたりからぽろりと切り落とされた弟子頭巾が、悲鳴をあげてがくんと両ひざをついたところだ。

と見ると、しりもちをついた先生頭巾がぱっと立ち上がるなり、不人情にも吾妻橋の方へどんどん逃げ出した。

「いけねえ」

ぽかんと目をみはっていた左の弟子頭巾が、これは駒形の方へびっくりして逃げ出す。

素早かったのはぬすっとかむりの利吉若だんなで、どこへかくれてしまったかその時はもう影も形も見えなかった。

「ううむ、畜生、やりやがったな」

がらんと月の青い往来へころがってうめきもがいているのは、手負い頭巾一人である。

君、すまなかったな、と、人のいい大助は口まででかかったが、考えてみると一つ間違えば自分が不具者にされていたのかもしれないのだ。なにもあやまることはないと思ったので、刀をぬぐって鞘におさめ、
「君、早く傷の手当をしたまえ」
やっぱり黙っては行きかねたのだ。一言いい残して、さっさと吾妻橋の方へ歩き出した。
「兄さん、ちょいと――」
その目の前へ、材木屋の路地からつと走り出てきたのは、意外にも駒形屋のお蘭であった。

情熱の夜

「やあ、姉御うじか」
大助はにっこりしながら立ち止まった。
「あんたなかなかいいところを見せるのね」
お蘭は口ではひやかすようにいいながら、内心はいま見ていた真剣勝負の猛烈さに体中の興奮がさめないらしく、妙に目がぎらぎらと燃えている。
「見ていたのかね」
「見ていたわ。大須賀兵十郎がしりもちをついて逃げ出すくらいだから、あんた相当なもんね」
「いや、剣術が少しくらいできたって、姉御うじの前では自慢しないことにするがね、さっき君がころばないように帰れって注意してくれたのは、このことなのかえ」
ふっと思い出したので、大助は念のために聞いてみた。
「そうよ。ほんとはもっと親切に教えてやろうと思ったんだけど、いろでもない人にあんまり親切にしちゃいやらしいと思って、やめといたんです」
けろりとしていってのけるお蘭だ。
「大須賀兵十郎ってのはどこの先生なんだろうな」
「そこの三間町に一刀流の町道場を出しているごろんぼ先生さ。執念深い悪党だから、今夜は

勝ったなんてうぬぼれてると後でひどい目にあうから気をつけた方がいいわ」
「御親切にどうもありがとう」
「恩に着なくたっていいのよ。これさっきの十両のおかえしなんだから、もう早く行くといいわ。こんなとこ人に見られてかかりあいになっちゃつまらないでしょ」
「そのとおりだ。じゃ、おやすみ」
「さよなら。あたしも帰ろうっと」
お蘭はいうだけのことをいうと、ぷいと元の路地の中へ駆けこんでいった。
――変な女だなあ。
敵なのか味方なのか、大助にはお蘭の気持ちがどうしてもわからない。こっちが大須賀に切られるのをわざわざ見物にきたりすれば、これは明らかに敵だ。そうではなくて、もし切られそうになったら留めてやろうという親切からなら、家を出る前にもっとなんとかいってくれようがありそうなものだと思う。
――そうか。利吉の方からも金をとっているから、事前に待ち伏せをもらすわけにもいかない。
といって、こっちも十両の義理があるから、黙ってほってもおけない。いざとなったら留め女になってやろうという気で後をつけてきたんだな。
まずその辺のところだろうと、大助は自分なりに見当をつけてみた。つまり、敵でもなければ味方でもない、今夜はただ十両だけの義理を果たしてくれたのだろう。
すると、もし明日、利吉が二十両出すと、お蘭はたちまち敵にまわる可能性が十分あると見なければならないことになる。
――わしにはどうもわからん。
しかし、用心するに越したことはないと考えたので、大助は吾妻橋をわたりながらそれとなく尾行の有無だけは二、三度たしかめておいた。
そして、ふっと気がついた。

——こんなにびくびくしていたって、結局はどうにもならんことじゃないかな。
　利吉にしろ、横立にしろ、もし執念深く久美をつけねらうとすれば、いつまでも隠れきれるものではない。また、こっちに正当な理由がある以上、善人が悪人を恐れて逃げかくれるなんて、こんなばかげた話があるもんじゃない。むしろ堂々と悪人に挑戦していく方が本当ではないのか。大助は急にそんな気がしてきた。
「堂々と利吉や横立に挑戦するということは、まず堂々と久美と結婚するということだ」
　それには久美の両親の許しを得なければならない。そうだ、久美とよく相談して、明日は堂堂とこっちから佐原屋へ久美をもらいに行ってやろう。
　何者も恐れずと覚悟した大助は、大手を振って多田薬師裏の長屋へ帰ってきた。
「お仲、いま帰ってきたよ」
　順序だからお仲の家の前へ立って雨戸越しに声をかけると、
「お帰んなさい、うまくいったんですか、若だんな」
と、中からお仲が心配して聞く。
「うむ。大体話はついた」
「ようござんしたね。話は明日うかがうことにして、お宅にはもうちゃんとお留守番がいるんですから、お仲はお世話に行きませんよ」
「うむ、いいよ。じゃ、おやすみ」
　隣のわが家の前へきて、雨戸をあけて玄関へ入ると、
「お帰りなさいませ」
　声を聞きつけて、久美がもうそこへいそいそと出迎えていた。
「ただいま——」
　茶の間へあがっていくと、火ばちにちゃんと湯がたぎっていて、そこに針仕事が出してある。昨日まではなかったなんとなくあたたかい部屋の感じである。

　久美は両刀をうけとろうとして大助の前へ立った。さっき出かけに一度そうしているのだから、大助の手がためらいもせずその肩をぐいと抱きよせる。
「そんなにおそくはならなかったろう」
　すぐ目の下にある久美のうっとり情熱にうるんでいるような目を見つめながら、大助が甘くささやく。
「ええ。でも、寂しゅうございましたわ」
　久美が切なげに答える。珊瑚色をしたくちびるが世にも美しい。
「明日、おれは佐原屋へ行って、両親からお久美さんを堂々ともらいうけてくるつもりだ」
　大助はいきなり結論から切り出した。
「どうぞ、そうあそばして」
「もうおれの久美だ」
　胸の中へ思いきり抱きしめられた久美は、黙って目をつむった。くちびるを待っているくちびるが、あえぐように息づいている。
　大助が今夜帰りに川端で待ち伏せに会ったくわしい話をしたのは、まもなく二人で座って茶を入れてからであった。久美はびっくりして、ただ目をみはるばかりである。
「そこで、わしは考えたんだ。我々は決して逃げかくれるような悪いことはなんにもしていない。悪人を恐れる必要なんか少しもないんだ。これはいっそ明日わしが佐原屋へ行って、両親から堂々とお久美さんをもらいうけることに話をきめてくる。それでもまだ利吉や横立があきらめずに策を弄してくるなら、その時は堂々と彼らと闘ってやる。それが本当だとわしは覚悟をきめたんだがね、お久美さんはどう思う」
「おっかさんはきっとよろこんでくれると思いますけれど、義父の方がなんといいますかしら」
　久美はそれが多少気になるようだ。
「お父さんがもし反対だったら、お久美さんおれのお嫁にならない気かえ」
「違いますわ。ですから、当分の間はおっかさん

にだけ話しておけばいいと思うのですけれど」
「いや、それじゃ堂々という趣意に反する。たとえば、利吉や横立がどなりこんできた場合、堂々と口がきけないから」
「では、あなたのよろしいようになすって。久美はもうなんでもあなた次第ですわ」
　これでちゃんと約束はできた。しかし、二人はまだ両親にことわってないから夫婦ではない。だから、寝る時になって、久美は昨夜のとおりに自分の床を玄関の二畳に取り、大助のを茶の間へのべた。そして、行儀よくそこへ両手を仕えて、おやすみなさいをした。
　大助は黙って久美の方へ両手を出した。もう一度くちびるでおやすみなさいをしたかったからだ。
　久美は寝間着になってからなので、さすがに恥じらいながらそっとその手にすがってきた。若い情熱はついくちびるだけではすまなくなってしまったのである。

とばっちり

　翌朝、二人はまったく世界が違ってしまったような気持ちで、朝の食膳についた。二人だけの世界を持ってしまった二人は、世の中の幸福は自分たちだけのもののような気さえして、おたがいにその幸福をじっと胸の中でかみしめながら、澄ました顔をしている。
「久美、君はもう窮鳥じゃなくなってしまったんだね」
　大助はあくまでも初々しい久美をながめながら、胸にうずく幸福をちょっぴりもらしてみずにはいられなかった。
「なぜですの」
「窮鳥は悪い狩人がもう食っちまったからさ」
　久美は自分の胸の中をのぞかれたようにほおを赤らめながら、
「いいえ、いい狩人ですわ」
と、さすがに男の顔は見られない。

「心はとてもいい狩人なんだがねえ、ゆうべのことは堂々の趣意に少し反する。黙って窮鳥を食ってしまうなんて、やはり悪い狩人だったようだ」
　大助はちょっと反省させられる。
「もうそんなことおっしゃらないで——」
　窮鳥はいまさら反省など少しもしたくないようだ。
「あの、これから花川戸へおいでになりますの」
「うむ、行く。行って堂々とやってくる」
「あたくし、もうなんにも怖くありません」
　久美はきっぱりといって顔をあげた。もうだれがなんといっても、あなたのものになってしまったのだから、という気持ちなのだから。
「そうさ。もうなんにも恐れる必要はないんだ。久美にはおれがついている」
　大助もそれを裏書きしてやるようにはっきりと誓った。
「ゆうべはずいぶん心配しましたわ」
「心配——?」
「駒形へ行って、もしとりこになってしまったらどうしようかと思って」
　ああもうやきもちをやいていると大助はびっくりして、
「冗談じゃない。狩人がきつねに負けちゃ拳が打てなくなるじゃないか」
と、思わずわらってしまった。
「お早うございます」
　格子があいて、丁稚の長松が飛びこむように駆けこんできた。
「あら、長松、どうしたの」
　ただならぬ顔色なので、久美ははっと膳の前を立っていった。
「お嬢さん、大変なんです」
「長松うじ、まあこっちへあがれ」
　大助が茶の間から声をかけた。
「あ、先生——」
　長松はあたふたと上がってきて、それも、

「先生、お早うございます」
と、ちゃんとあいさつをすることだけは忘れなかった。
「お早う。うちは朝寝をしたわけじゃないんだが、お嬢さんの御飯こしらえだもんだから、いま朝飯がすんだところだ」
「あんなこと——」
久美が赤くなってにらみながら、いそいで食膳を台所へさげていった。
「どうした、長松うじ。大変とは、なにが大変なんだ」
大助はわざとゆっくり切り出す。
「先生は三間町の大須賀兵十郎っていう剣術の先生を知っていますか」
長松は子供ながらどうやら少し落ち着いて、話の順がほぐれてきたようだ。
「うむ、大須賀なら知っているよ」
「ゆうべ先生は大須賀と駒形河岸で真剣勝負をしたんですってね」
「よく知ってるな。本当はやつらに待ち伏せをされたのさ」
「うちの若だんなが先生を切ってくれってたのんだんだって、本当ですか」
「どうもそのようだな」
「先生はその時、大須賀の門弟の鬼村ってやつの左手を切り落としたでしょう」
「うむ、そのとおりだ」
「今朝、大須賀がその鬼村を戸板にのせて、若だんなはいるかって、お店へかつぎこんできたんです」
「ふうむ」
大助は目をみはった。
「一体、先方の言い分はなんだっていうんだね」
「若だんなにたのまれて、当家の娘を誘拐した不逞浪人だというから、猪村というやつをこらしめてやろうと思って、駒形河岸で待ち伏せした。しかるに——って、これは大須賀の口まねです、しかるに、窮鼠かえってねこをかむのたとえで、猪村は鬼村の左腕を切って逃げてしまった。逃がしたのも切られたのも時のはずみで、こっちの不覚だったのだから文句はない。しかし、この仕事はもともと利吉がたってというから、そのたのみに応じて乗りかかった仕事だ。しかるに、こっちにけが人が出たとわかると、張本人の利吉は薄情千万にもその場から逃げ出して、一度も見舞いにさえ顔を出さないとはどういう気持ちなのか。あまりにも人を踏みにじったやり方なので、堪忍いたしかねるから、手負いを当家へかつぎこんできたのだ。この手負いが全快してもう一度左手が元のようになるまで、当家で面倒を見てくれと、こういうんです」
なるほどねえ、ごろんぼ剣客ともなれば、因縁のつけようもいろいろあるものだと、大助は感心してしまった。
「それで、利吉若だんなはゆうべから家へ帰らないのかね」
「どこへ行ってしまったのか、まだ帰ってこないんです」
「それじゃ佐原屋でもなにがなんだか事情がわからず、さぞ当惑したことだろう」
「だんなはずいぶん困っていました。やっと平あやまりにあやまって、後ほどきっとごあいさつにうかがいますからと、手負いだけはどうにか引き取ってもらいました。でも、あいさつが気に入らなければまた戸板でかつぎこむと、大須賀は帰りがけにだんなを脅していきました」
それにしても、とんだところへとんだとばっちりが行ったもんだと、大助は苦笑せざるをえない。

約束ごと

「長松うじ、君がわしのところへその使いにきたのは、だんなのいいつけかね、それともおかみさんにたのまれたのかね」
大助はあらためて長松に聞いてみた。
「おかみさんにたのまれたんです。もしおさし

つかえなかったら、先生にきていただけませんでしょうかって」
　たぶんそうだろうとは思った。たとえどんなに困っても、主人佐原屋利兵衛では、せがれが切らせようとたくらんだ当の大助には申し訳なくて顔があわせられないはずである。
　しかし、こう事情がわかった以上、大助としては捨てておけない。
「よろしい。では、今すぐ支度をして行くから、君は一足先に帰って、おかみさんにそういっておくといい。お使者御苦労だったな」
「はい。先生、お願いします」
　長松は大助におじぎをして、それから久美の方へも、
「お嬢さん、お願いします」
と、頭をさげた。
「おっかさん、ずいぶん心配しているでしょうね、長松」
「寿命がちぢむ思いだって、そう申していました」
「一度久美がぜひお目にかかりたいといっていたと、お耳に入れてください」
「かしこまりました。でも、お嬢さんはまだ当分お店へはこない方がいいと思います」
　長松はそんなませたことをいって、いそいで帰っていった。
「支度をしよう」
「でも、どうなるんですの」
　久美はそれが心配そうである。
「結局、利吉が悪いんだから、金で話をつけることにはなるだろうが、しかし、常識からいえば、金で人殺しを引きうけた大須賀が、失敗したからといって佐原屋を脅迫するのはおかしい。表ざたになれば、利吉も大須賀も同罪だ。ただ、大須賀としては、佐原屋はせがれを罪人にできないだろうという弱みにつけこんでいるんだね。だから、命をねらわれた当人のわしが、おやじさまといっしょに顔を出せば、あんまり

大きな口はきけなくなると思うんだ」
「では、大須賀の道場へお出かけになるんですか」
「その方が話が早いだろう」
「なんだか心配ですわ」
「負けやしないから大丈夫だ」
　大助はわらいながら立って、久美の出した袴をつけた。大小をとって、久美がまだ浮かぬ顔をしながら前に立っている。
「お久美さん――」
「いやですわ、もうさんづけは」
　そっといって、目を逃げる。その初々しさをもうすっかりわが物にしてしまっている大助だから、
「じゃ、わしのお嫁さん――」
　ついいとしくなって肩へ手をおき、
「どうせ、わしは今日、堂々の方の話をしに行くからと思っていたんだから、ついでに悪い狩人の方の片もつけてくるつもりだ。いいね」
と、からかうように顔をのぞきこんだ。
「いいえ、いい狩人ですわ」
　久美はまたしてもそれをいいなおして、にっと恥じらいながら、
「なるべく早くお帰りになって、心配ですから」
と、体つきはもうすっかり安心して、お嫁になりきっている。
　――ふしぎなもんだなあ。
　まもなく、今日もからりと晴れた秋空の下を大川端の方へ歩きながら、何度も大助はそんな気がした。昨日とはまったく世界が違ってしまっている。こうして久美と別れてきても、はっきりと久美が体のどこかにいて、その甘い移り香さえしてくる。それはもう絶対に孤独で野良犬の自分一人ではなく、こうして一人で歩いていても、この体の中にちゃんと久美がいっしょにいて、ひどく心豊かな気がするのだ。
　――しかし、一人でにやにやわらって歩くのはおかしいぞ。

大助は気がついて、きっとくちびるを結びなおした。

それにしても、考えてみると、こんどの事件の根源は久美にある。その久美を、ふいに自分が横から飛び出してさっさと自分のものにしてしまったとわかったら、利吉がどんなに狂い出すか、ちょいと気にならないこともないが、いまさらそんなことをいったってしょうがないのだ。久美が身ぶるいをするほど利吉をきらっていたことは事実なのだし、それとは反対に、大助という男を一昨日の夜はじめて見た時から、久美はすっかり好きになっていたのだという。

「もし少しでもきらいなら、いくら行くところがなくても、女の身で、あなた一人のところへ、あたくし、まさか泊まる気にならなかったと思いますわ。あなたとこうなったことは、あたくし、前世からの深い約束ごとだったような気がしますの」

久美は昨夜窮鳥の身を悪い狩人に食われてもうお嫁になってしまってからも、ちっとも後悔しないで、この胸の中で夢の中にささやいていたのだから、こんなたしかなことはない。

「じゃ、お久美さん、ゆうべはどうして、よろしいんでございますの一点張りで、あんなにわしを怖がって二畳の方へ逃げていってしまったんだえ」

大助は念のために聞いた。

「ただ恥ずかしかったんですわ。でも、ゆうべはあなたもいい狩人で、窮鳥をそっとしておいてくれました。あたくし、あなたのいびきを聞きながら、なんという立派な狩人なのだろうと、うれしくて涙がこぼれてしまいました」

「あれあれ、それが今夜はこんな悪い狩人になったというわけか」

「違いますの。やっぱりとてもいい狩人ですから、窮鳥の方でもうどこへも行きたくなくなったんでしょ」

久美が自分の口からはっきりとそういっているのだから、だれがなんといっても、これだけはもうしようがないのである。つまり、自分たちが結ばれることは前世からの深い約束ごとで、人の力ではどうすることもできなかった、そう考えてさしつかえないことだと思う。

だから、大助は少しも悪びれずに、花川戸の佐原屋の玄関に立つことができた。

「ああ、猪村さま、よくいらしてくださいました」

心待ちにしていたとみえて、久美の母親がいそいで出迎え、すぐに昨日の奥座敷へ案内してくれた。

「この度は久美がいろいろお世話になっておりまして」

母親はまず娘の礼から先にのべる。利吉のことで気をもみながらも、この方はとにかく安心だという顔色に見える。

「いや、わしの方こそ、かえって世話になっているようなものです」

くる早々、狩人の話でもあるまいから、大助も一応あたらずさわらずに答えておく。それを切り出す機会は、後でいくらもあるはずである。

そこへ利兵衛が沈んだ顔をして入ってきて、昨日の礼をのべ、

「本来なら、猪村さんには合わせる顔がないのでございますが、どう戸惑いをしましたか、これがお迎えをさしあげましたとかで、まことに申し訳ございません」

と、律儀なあいさつである。

「利吉うじはまだ帰ってきませんか」

「はい。どこへ隠れていることやら、あれも申し訳がなくて帰れないのでございましょう」

「御主人、失礼だが、あの人は申し訳なくて帰れないのではなくて、大須賀が怖くてかくれているのと違いますか」

歯に衣をきせている場合ではないと考えたので、大助は率直にぶつかることにした。

「大きにそれもあるかと存じます」

「で、大須賀はこちらへなんといってきたのです」

「はい。利吉からたのまれたから、ゆうべ猪村さんを待ち伏せした。ところが、窮鼠かえってねこをかむたとえで、――先方の口をありのまま申し上げるのですから、どうぞお気を悪くなさいませんように――かえって猪村さんがふいに鬼村という門弟の腕を切り落として逃げ出した。逃げられたのはこっちの不覚だからしようがないが、その後利吉が見舞いにもこないのはけしからん、元の起こりは利吉にあるのだから、けが人を引き取ってくれと申しましてな、ああいう人たちのいうことは、理屈にもなにもなりません」

これは長松から聞いたことと少しも変わりはない。

「それで、御主人はどう始末をつける気です」

「利吉が本当にそんなばかなことをしたもんだとしますと、これは表ざたにもできません」

「いや、利吉うじが大須賀にわしをどうかしてくれとたのんだことは本当でしょう。わしが駒形河岸で鬼村とかいうやつの左腕を切り落としたのも事実です。いやみをいうわけではないが、一つ間違えば不具者にされたのはわしの方だったかもしれません」

「なんとも申し訳ございません。それが本当でございましたら、大須賀の方は金が目あてでございましょうから、ともかくも金を包んであやまりに行くほかないと思います」

利兵衛は申し訳なさと気苦労とでげっそりとしているようである。

「先方では、いくら持ってこいと、金額のことはいいませんでしたか」

「はい。はっきりいくらとは申しませんでしたが、十両や二十両のはした金ではということを再三くりかえしていました。まあ、五十両ほども包むほかはないかと存じます」

「そんなにはいらんでしょう。本来なら一文も

出す必要はないんだが、まあ、十両を包んでおやりなさい。よろしければ、わしがいっしょに行って話をつけてあげます」

命をねらわれた本人がねらわした者の家のために口をきこうというのだから、こんなお人よしの話はない。さすがの利兵衛も、

「お願いできた義理ではないのでございますが、そうしていただければ手前どもが助かります」

と、心から頭をさげていた。

「そこで、その後のことだが、大体この事の起こりの根本はお久美さんのことにある。これをはっきりしておかなくては、いつまでも後くされが残ると思う。幸いお二方がそろっている前だから正直に申し上げるが、お久美さんは絶対に家へ帰りたくない、つまり利吉うじといっしょになるのはいやだといっている」

いよいよそれを持ち出す時がきたと思ったので、大助はそれとなく座りなおした。そして、こんどは自分たちのことだからいささか気がひけそうになるのを、

――しっかりしろ、大助。

と、狩人はわが心にむちうつ。

迎えの駕籠

そのころ――。

大助の留守の家では、久美のところへ隣のお仲が遊びにきて、のんきなむだ話をしていた。

「大丈夫ですよ、お嬢さん。若だんなは強いんですから、めったなことで負けるもんですか」

久美が昨夜の待ち伏せの話をしても、お仲は心配そうな顔ひとつしなかった。が、白ぎつねに十両とられたことだけは、

「どうして若だんなはそう人がいいんでしょうね。なにもそんなどこの馬の骨だかわからない女におどかされて、いいなり次第に十両なんて大金おいてくることはないじゃありませんか。せめて半分の五両にでも値切ってくれればいいの

に」
と、しきりにくやしがった。
「値切るなどと、おばさま、大助さまははじめからどぶへ捨てるようなお金だと承知して、それでももしそのお金であいうひとたちの心が少しでも救えるようなら、決してむだではないと考えたのですって」
久美は大助のために弁解しておく。
「そりゃお嬢さん、十両もただもらえば、たいていのひとはありがたがりますさ。たっぷり一年遊んで食っていられるんですからね。そのかわり、自分が傘の骨を削らなければならなくなったら、若だんなどうするつもりかしら」
「大丈夫ですわ。そうしたらあたくしもお手伝いいたします」
ついそんな言葉が出る久美だ。
「お嬢さん、あててみようかな」
突然いって、お仲がにやにやわらい出す。
「なにをでございますの」
心に秘密のある久美は、はっと体中がかたくなる。はたして、お仲は、
「お嬢さんはもうゆうべから居候じゃなくなったんでしょう」
と、ずばりと図星をさしてきた。
「あら、あたくし——」
体中に大助のにおいを感じている久美は、思わず赤くならずにはいられない。
「ほ、ほ、いいんですよ、そんなに恥ずかしがらなくったって。若い殿方が、きれいなお嬢さんと二人きりで一つ屋根の下にいるんですもの、そうならずにいられるもんですか。でも、お嬢さん、若だんなはとても親切でしょう」
「ええ」
「あの人はずっと母一人子一人で育って、とてもおっかさんに孝行な人でした。おっかさんて方は、お花の師匠で、若だんなを育てあげたひとですけれど、あたしは長い間そこに奉公していたので、若だんなのことは十二、三のころか

らよく知っています。若だんなはそのおっかさんに死に別れて、心の中では一人でとても寂しかったんですね。その心の中へ、こんどはお嬢さんが亡くなったおっかさんのかわりに生きかえってきたんですものね。きっと若だんなはお嬢さんを大切にするにきまっています」
お仲はしみじみといいながら、なんだか久美をなぐさめているような口振りだ。
「あたくし、きっといいお嫁さんになるように心がけますわ」
久美は精一杯の気持ちで答えた。
「でも、お宅の親御さまたちがうまく承知してくれますかしら。こっちは御覧のとおり、今のところはなに一つない浪人者なんだから」
「母はよろこんでくれると思います」
「そういえば、今のおとっつぁんとは義理の仲とかいうことですね」
「ええ。子供のころ、母があたくしを連れ子して、佐原屋へ後添えになりましたの」
「それじゃ、佐原屋のだんなとしては、利吉さんとかいう家つきの若だんなといっしょになってもらいたかったわけですね」
「もうよろしいんですの、あたくしここの居候ではなくなってしまったのでございますもの」
だんだんお嫁度胸ができているから、久美は我ながらたのもしい。
「そうでしたね。もうだれがなんといってもしようがありませんね、お嬢さんは若だんながお好きなんでしょう」
「あら、好きでなければ、あたくし、——いやですわ、おばさまは」
やっぱり顔を赤くせずにはいられない久美だった。
「ごめんくださいまし」
ふっと戸口で聞きなれない女の声がする。
「はい」
今日はもうここの家の妻なのだという気持ちがあるから、久美はすぐに自分で玄関に立って

いった。
　二十三、四とも見える、顔に少し鋭いところはあるが、ひどくなまめかしい年増女がすらりと立っている。
「お越しあそばしませ。どなたさまでございましょうか」
「あの、お宅は猪村大助さんですね」
「はい」
「では、あなたがお久美さんですか」
「はい、久美でございますけれど」
「たぶんそうだと思いましたわ。あたしは駒形の蘭という女ですけれど、あなたゆうべ猪村さんからお聞きになっているでしょう」
「はい」
　久美も女の敏感さから、一目見た時からそうではないかと直感していたが、そう名乗られてみると、妙にぎくりとせずにはいられない。
「びっくりなすっちゃいけませんよ。実は、猪村さんがさっき三間町の大須賀の道場へ出かけていって、なにしろ相手が相手なもんですから、だまし討ちみたいな目にあいかけましてね、まあ、うまくあたしが飛びこんでいったんで、大須賀に話をつけ、猪村さんは家へ引き取りました。命にかかわるほどじゃないんですけれど、左の肩を四針ほど縫わなくちゃならないんです」
「あの、あの、いまお宅にごやっかいになっているのでございましょうか」
　久美は思わず真っ青になってしまった。
「まあ、若だんながけがをしたんですって」
　たまりかねてお仲がそこへ飛び出してきた。
「あなたはお隣のお仲さんですか、若だんなの面倒をみていらしたとかいう」
　お蘭はすかさずいいあてる。
「ええ、そのお仲なんですが、どうしてまあそんなけがを――」
「ふいにうしろからやられたんですからしようがありません。正直な人が、一人であんな地獄道場へ掛け合いなんかに行くからいけないんです。あたしは昨日、猪村さんから十両もらっているんで、義理があるもんだから、そっと後をつけてあげたんだけど、ほんとにもう少しで危ないとこでした」
「正気は、正気はあるんでしょうね」
　おろおろとお仲が聞く。
「ほ、ほ、うちまで歩いてこられたんですもの、気はたしかですけれど、うちへつくと、安心したせいか、急に甘くなっちまって、すまないが、すぐお久美を呼んできてくれって、――あたしはこんな気性だもんだから、なんですね、猪村さん、そんなことより医者の方が先じゃありませんかってしかってやったんです。いや、いまのうちにお久美に話しておきたいことがある、ぜひたのむって、まるで子供みたいなだだをこねるんですから」
　――知らないんだ、このひとは。
　お蘭はあでやかにわらってみせる。
　と、久美は胸がしめつけられてきた。大けがをして、あの人は一人で心細いに違いない。
　なんでもかでもわたしの顔がみたくなる、それはあたしだっておなじことだ。もう夫婦なんだもの、夫婦の愛情がこんなひとにわかるものか。そう思ったとたん、
「おばさま、あたくしちょっと行ってまいります。あなた、つれていってくださいまし」
　久美はそういいながら、もう押入の方へ立っていた。なんにせよ、先立つものは金だと気がついたからである。
「あたしもいっしょに行くといいんだけれどねえ」
「いいえ、おばさまにはお留守番をお願いします」
　もうおばさまのあの人じゃないのだし、あの人の待っているのはあたしなのだと考えると、久美は気もそぞろに胸がじいんと熱くなっている。
「そんな心配するほどじゃないんですよ。傷を

縫って、少し落ち着けば、戸板で帰ってこられるかもしれないんですから」
　お蘭は簡単にそういって、ちっとも心配な顔を見せない。
「では、あなた、どうぞお願いいたします。お嬢さん、もしものことがあるようだったら、すぐ迎えをよこしてくださいよ、なにをおいても飛んでいきますからね」
「ええ、すぐ川向こうなんですもの、大丈夫ですわ」
　久美はそれを自分にいいきかせるようにいいおいて、お蘭の後からいそいで長屋の路地を出た。
　横町へ出ると、町駕籠がちゃんと一丁待っていた。
「お久美さん、あんたは人にあんまり顔を見られちゃいけない体なんでしょ」
「はい」
「これへ乗っていくといいわ。こんな大騒ぎすることはないんだけれど、猪村さんは案外お坊ちゃんのところがあるのね」
　お蘭は久美の顔を見て、ちょっと意味ありげにわらった。それにしても、さすがによく細かいところまで気のつく姉御だと思う。こういうひとを、男まさりとでもいうのかしら。久美はたのもしくなり、
「では、お言葉に甘えさせていただきます」
と、遠慮なく駕籠へのった。
「駕籠屋さん、急用なんだから、いそいでおくれよ」
　お蘭はてきぱきといいつけて、自分はきりっと小褄をとる。
「かしこまりました。駒形河岸でござんすね」
「そうだよ」
「相棒、あがるぜ」
「そらよ」
　すっと駕籠があがると、ひたひたと川端の方へ走り出す。

　――早く会いたい、あなた。
　駕籠にゆられながら、久美はじっと切ない胸乳の下へ手をさしこんで、祈るように目をつむった。
　一体、あの人はどうして一人で大須賀の道場へのりこんだのだろう。おとっつぁんはなぜいっしょに行かなかったのかしら、――とは、その時少しも久美は考えてみようとさえしなかった。それほど、その時のお蘭の芝居はうまかったということにもなる。
　時刻はやがて昼に近い。

女の嫉妬

　駕籠が駒形屋の前へついて、久美は落ち着かなくてはわらわれると思い、自分ではずいぶんしっかりしていたつもりだったが、お蘭のあとから店の土間を通りぬけ、板場ののれんをくぐって、そこの切り落としの茶の間から二階へあがるまで、どこにだれがいたか、どこをどう通ったか、なんにも目には入らなかった。
　階段をあがったところが中廊下で、右と左に小部屋があるようだ。
「お久美さん、ここよ」
　お蘭はその左手のふすまをがらりとあけて、久美を先へ入れるように身をひいた。
「はい」
　そこに重傷の大助が寝かされているものとばかり信じているから、久美は気もそぞろに一足中へ入りかけたが、意外にもその六畳の座敷はがらんとしてだれもいない。
「あの、あの人はどうしたのでございましょう」
　思わずお蘭の方を振りかえると、
「いいから、まあお入りよ」
　お蘭はにやりとわらいながらあごでいいつける。
「でも、あの人は――」
「お前さん、これが見えないのかえ。変にじたばたすると、ずぶりといくよ。あの人に会いた

いと思ったら、おとなしくあたしのいうことをきくんだね」
　いつの間にかお蘭の右手に匕首が光っている。
「あっ」
　はじめてだまされたと気がついて、久美はじりじり六畳へ追いこまれながら、さっと青ざめずにいられなかった。
「そこへお座り」
「はい」
　お蘭はあとのふすまをしめきって、匕首を突きつけながら、久美の前へ男のようにしゃがみこむ。
「では、あの、あの人がけがをしたというのは――?」
　なによりもまずそれが気になる久美だ。
「あの人、あの人って、お前さんはさっきから夢中になって目の色を変えているようだけど、あの男はまだ別にお前さんの御亭主ってわけじゃないんだろう。それとも、もうすっかりおしりまでかわいがられてしまったのかえ」
　露骨な目でじろじろと体中を見まわされ、久美は顔から火の出るような恥ずかしさに、思わずはっとうなだれる。
「ふ、ふ、真っ赤になったね。親に無断で好きな男といいことをするなんて、堅気の娘のくせに、お前さんも案外たのもしいんだね。どうお、いっそあたしの家でお客をとって働いてみたら」
「いいえ、あのもうおなぶりにならないで、どうぞ帰してくださいまし」
「そうはいきませんのさ、あたしはあの男に少したのまれたこともあるんでね」
「でも、あの人がけがをしたというのはうそなんでございましょう」
「ふ、ふ、あの男のことっていうとすぐ目の色が変わるんだね。心配おしでない、猪村の方なら、けがなんかするような間抜けじゃない。腕も立つようだし、そらっとぼけているようで度

胸の方も相当なもんだ。まあ、その辺のごろんぼ剣客ぐらいじゃ、ちょいと歯が立ちそうもないな」
　手の匕首をおもちゃにしながらしきりに大助をほめ立てるのを聞いていると、久美は妙にこの女が味方のような気がしてきて、匕首が少しも怖くなくなってくる。
「あの人のいちばんいいところは、男らしくて、だれにも親切なことですわ」
「おのろけかえ、お嬢さん。よっぽどあの男はお前さんのおしりに親切だったとみえるんだね」
　じろりと意地悪くにらまれて、やっぱり赤くならずにはいられなかったが、女の敏感さから、ああ、このひとはいくらかやきもちをやいていると、久美にもそれがわかるほどの落ち着きが取りもどせてきた。
　が、お蘭という女は、世間知らずの久美が常識で考えられるほど単純な女ではなかった。
「あたしはね、お嬢さん、あの男がお前さんに親切にしたのが妙に気に入らないのさ。正直にいうと、やいているのかもしれないな。もっとも、あたしはあの男にほれたと自分ではっきりわかれば、いつでもお前さんの手から横取りしてみせる。わけのない話さ」
「いいえ、あの人はそんな、そんな節操のない男ではございません」
「ふん、生おいいでない。節操があろうとなかろうと、あたしが一度自分のものにしたいと思ったら、きっと自分の男にしなければ承知できないのさ。まあ、見ていてごらんよ」
「そんなことはありません。あの人はもうちゃんと久美の夫なのですもの」
　これだけはどうしても負けていられない久美なのだ。
「なにいってるのさ。親が許しもしない男と勝手にいたずらをしておいて、あたしの夫だなんて、お前さんも案外ずうずうしいんだね。お前さんにはほかにちゃんと親がきめたいいなずけ

があるんじゃないか。あたしはすっかり知っているんだよ。その男からぜひにとたのまれたから、少し罪だとは思ったけれど、お前さんをだましてここへつれてきたのさ」

久美はぎょっとした。

「それは、それはだれのことです」

「佐原屋の利吉っていうばか野郎のことさ。ばかでもろくでなしでも、親がきめたいいなずけを亭主にするよりしようがないんだからね」

「違います。あたくしは両親からそんなこと一度も聞いていません」

「お前さんが聞いていなくても、当人がそういうんだからしようがないな。文句があるんなら、利吉に会って掛け合ってごらんよ。あたしは百両の約束でお前さんをここへ引っぱり出したんだから、利吉にお前さんを渡せばそれで事はすむんだ。いま、うちへ約束の金を取りに行っているから、もうじきここへくるだろうよ」

「帰ります、あたくし」

こんなところであの凶暴性の利吉につかまれば、いやおうなしに手ごめにされてしまう。しかも、お蘭という女が、利吉をばか野郎呼ばわりしながらこんな仕事を引きうけたのは、百両という金より、本当は自分たちの仲を裂こうとする嫉妬があるからだ。そう直感したとたん、久美は我にもなくふらふらと立ち上がろうとした。

「おい、あたしを甘く見ると承知しないよ」

その久美のほおへ、お蘭のあいている左手が力一杯平手打ちに飛んで、あっと久美はほおを押さえながら、たわいもなくそこへひざをついてしまった。

「あんまりです、あなたは」

「ふうんだ。あの男にかわいがってもらった罰だとあきらめるんだね。逃げてみろ、ずぶりとひと思いに突き殺してやるから。なんだかあたしはお前がたまらなく憎くなってきた」

お蘭は久美の胸倉をぐいとわしづかみにしながら、匕首の切っ先を乳の下へ当て、むらむら

と激しい嫉妬に駆られてくる。

「畜生、お前はあの男にどんなふうにかわいがられたんだよう。いってごらんてば」

力まかせに小突きまわされて、そのつりあがった狂気の目を見ると、さすがに久美は恐怖のあまり口がきけず、そっと背筋へ悪寒が走ってきた。

上と下

大助はそのころ、佐原屋利兵衛といっしょに三間町の大須賀の道場をたずね、うまく話がついたので帰途についたところであった。

大助は無論介添え役のつもりだからあまり口はきかなかったが、利兵衛がせがれ利吉の不心得をわび、あらためて金子十両をけが人の見舞金としてさし出すと、

「なんだ、たった十両か」

と、兵十郎は苦い顔をした。

少なくとも五十両ぐらいは出ると当てにしていたのだろうから、あたりまえならここで利兵衛は頭から脅かされるところだったろうが、うしろに現在自分たちが昨夜ねらった大助に控えていられたのでは、あまりあくどいこともいえなかったのだろう。

「おい、貴公、一体貴公の方はいくらぐらいになったんだ」

兵十郎はぬけぬけと大助にそんなことをきく。

「いや、わしは金で雇われてきたのではない。ゆうべ貴公たちは、親に無断でわしが他人の娘を誘拐しているように誤解していた。あれは明らかに貴公たちの間違いだから、今日は親をつれて訂正にきたのだ」

「ふうむ、どう間違えたんだ」

「はじめは子細があって娘を助けた。そのことはすぐ親もとへ心配しないように知らせておいた。縁あって、こんどその娘を嫁にもらうことにした。無論、これも親の同意を得てのことだ。

今後は絶対に間違えないようにしてくれたまえ」
　大助は正々堂々といってのけた。今朝、久美の両親の前でその正々堂々の目的を達しているのだから、もうだれにはばかることもないのである。
「そうか、そいつはうまくやった。金持ちの娘をもらっておけば、一生食いっぱぐれはないからな。まあ、精々大切にしてやることだ」
　本当にうらやましそうな顔をするのだから、大助もちょいと返事のしようがない。
「どうだ、貴公、ものは相談だが、このわしの道場を買ってくれんか。格安にしておくぞ。立派な金主がついたんだし、貴公ぐらいの腕前があればきっとこの道場も繁盛する。及ばずながらわしが師範代をつとめて貴公の後見をしよう。どうだ、やってみぬか」
　転んでもただで起きぬ大須賀兵十郎だ。
「ありがとう。考えておこう」
　大助は苦笑しながら利兵衛をうながして、早早に地獄道場を辞去してきた。
「猪村さん、おかげで助かりました」
　案外事なくすんだので、利兵衛はほっとしたようである。
「しかし、いまの道場の話はどうでしょうな。あの人の師範代というのは考えものだが、少し手を入れればあの道場は使いものになるんじゃありませんか」
　娘の婿ときまれば、もうそんな心配までしてくれる利兵衛なのだ。
「いや、わしはまだ修業中だから――。それより、問題なのは利吉親分の方だ。とにかく、居どころをさがしてみなければならんでしょう」
　大助としては、久美のことは親どもが承知しても早く利吉を納得させておかなくては安心できないのだ。すべての災いの種は利吉にあるので、ほっておくとまたどんな小細工をするかもしれないのである。

「さあ、居どころをさがすといっても、ああいう風来坊のことで、どこへ行っていますことやら」
「わしに少し心当たりがある。いっしょに行ってみていただこう」
　大助は駒形屋へ見当をつけているのだ。昨夜の待ち伏せもお蘭の口から出ているようだし、お蘭は利吉をいい金づるにしている。かくまってくれといえば、また金になることだから、無論いやとはいうまい。かくれる方でも、三間町とはすぐ目と鼻の間だから、様子をさぐるに都合がいい。
　駒形河岸へ出て、見おぼえのある駒形屋の前へかかろうとすると、その辺に遊んでいた十二、三の子供がいそいでその路地へ飛びこんでいった。それがお蘭の手足になっているちんぴらどもだとは、さすがに大助も気がつかない。
「ここです」
　油障子をあけて店の土間へ入っていくと、まだ真っ昼間だから店はがらんとして客は一人もいなかった。
「たのむ」
「はい」
　すぐに板場から白粉（おしろい）の濃い若い女が出てきた。
「いらっしゃいまし」
「いや、わしは客ではないんだ。ゆうべたずねた猪村大助という者だが、お蘭姉御は家にいるだろうかえ」
「ええ、家にいます」
「ちょっと会いたいんだがなあ」
　女は板場へ引きかえしていって、
「お蘭姉さん、ゆうべの猪村さんて人が会いたいっていってますけれど、どうします」
　と、二階の方へどなっていた。
　まもなく二階からおりてきたお蘭は、
「まら、いらっしゃい。わざわざあたしに会いにきてくれたの、兄さん」
　と、にっこりのれんから顔を出す、まったく

水ぎわだった女っぷりだ。
「姉御さん、ゆうべ佐原屋の利吉親分はここへ泊めてもらわなかったろうか」
　大助は単刀直入に切り出す。
「お泊めしたわ。どうして」
「ちょっと会いたいんだが、まだここにいるだろうか」
「ついさっき、うちへ帰ってくるって出かけたけれど、きっとお金を取りに帰ったんでしょう。兄さんは三間町の地獄道場へ行ってきたんですね」
「うむ」
「うまく話はついたんですか。あの野郎、佐原屋さんへ今朝けが人を担ぎこんだんですってね。どうせ一筋なわじゃいかないごろんぼ剣客なんだから、兄さんが押しかけるんなら一度あたしのところへ相談にきてくれればよかったのに」
「ありがとう。とにかく十両で話はつけてきたから、もし利吉親分がきたら安心して家へ帰るようにいってくれないか。もっとも、家へ帰っていればわしらも会えるとは思うが」
「そういっておくわ。せっかく来たんだから、あっちで一杯やっていかない」
「いや、また出直してこよう」
「そうお。だれかさんが待ちかねているんでしょうからね。じゃ、悪どめはしないわ」
　にやりとからかうようにわらってみせるお蘭だ。
「じゃまをしたねえ」
　まさか二階に久美が監禁されているとは思いもよらないから、大助は入り口の方に待っている利兵衛をうながして、そのまま駒形屋を出てしまった。
　二階では、――
　着物をはぎ取られて白々と全裸にされた久美が、酌婦の一人に匕首を突きつけられて、恋しい大助の声をすぐ下に聞きながら、切なさ恥ずかしさに歯をくいしばりながら、じっと石のように身動きひとつできなかった。
　助けてえと一声叫べば救われる。番の女の匕首をたたきおとすぐらい、死にもの狂いになればやってできないこともないと思う。が、このあさましい姿では、どうして夫が呼べよう。まして、自分から下へ逃げ出すなど、久美にはとてもそん勇気はなかった。
　それがまたずるいお蘭のつけ目でもあった。
　――いっそ死んでしまいたい。せめて夫の声を耳にしながら。
　が、たとえ死骸になっても、こんな姿は夫に見られたくない。
　――どうしよう。どうすればいいだろう。
　ただ胸の中でもだえ苦しんでいるうちに、あの人はお蘭にだまされ、なんにも知らずに帰っていってしまった。
「かわいそうだねえ、お前さん」
　さすがに匕首の女がつぶやくようにいう。
「いま帰ったの、お前さんの御亭主なんだろう」
「ええ」
　久美はぽろぽろとわけもなく涙がこぼれてきた。ついに機会は去ってしまったのである。
「堪忍しておくれ。わたしは姉さんに恩になっているもんだから――。お蘭姉さんだっていつもはこんなひどいことをする人じゃないんだけど、――女のやきもちって怖いねえ」
　とんとんと階段をあがってくる足音がして、がらりとお蘭がふすまをあけた。

買われた体

　――畜生、この娘はなんてきれいな肌をしているんだろう。
　お蘭はそこに突っ立ったまま、あらためて久美の白羽二重のように光沢のある体中を見まわした。器量だって、肌だって、お蘭も決して久美に劣っているとは思わないが、十八という年のみなぎるような色艶だけは、二十四のお蘭にもうどうしようもなかった。

それにも増してお蘭が妙に腹立たしいのは、この肌のどこにも、目には見えないあの男の跡がちゃんとついていることだ。

――ふ、ふ、この娘は泣いている。思いがけない男の声を聞いて、さぞ恋しいんだろうな。ちょいとかわいそうな気もするが、あの男にだけはどうしても会わせたくない。

「姉ちゃん、――姉ちゃん」

下からちんぴらの声がする。

「なんだえ、辰(たつ)んべ」

「こんどは佐原屋の若だんながくるよ、姉ちゃん」

「そうかえ、わかったよ」

お蘭は下へ返事をしておいて、

「お栄、お嬢さんに着物をかえしておやり。あの野郎にこんな裸を見せると、どんなまねをしだすかわからないからね」

と、匕首(あいくち)の女にいいつけた。

そのまま茶の間へおりてくると、ちょうど利吉が店から板場へ飛びこんできたところだ。目を血走らせて、妙に血相が変わっている。

「お蘭、お久美はどうした」

「なにさ、そんな食いつきそうな顔をして。若だんなの方こそ、約束の百両できたのかえ」

「持ってきたとも。で、お久美の方はどうなったんだ」

「ちゃんと二階へつれてきておいたよ」

「よし。じゃ、百両うけとってくんな」

利吉は二十五両包みを四つふところから畳の上へころがすなり、もうあたふたと二階へ駆けあがろうとする。

「待った、若だんな」

その前へ急に立ちふさがるお蘭だ。

「まだなにか文句があるのか」

「お前さん、猪村に会わなかったかえ。いまここへくる途中で」

「会わねえ。野郎がここへきたのか」

「いまきて帰ったところさ。若だんなをさがしにね」

「あんな野郎に用はねえ」

ひどく殺気立った目をしている。

「断っとくけどね、若だんな、あの娘は二階でたしかに渡してあげるが、ここで変なまねはしないでくださいよ。一足この家を連れ出したらお前さんの勝手だが、ここで金切り声でも出されると御近所の手前ってものがありますからね」

「御念にゃ及ばねえ。おれもちっと先をいそぐ体なんだ」

「ふうむ。たぶんそうだろうと思った」

お蘭はまじまじと利吉の顔を見すえて、

「若だんな、お前留守番のおふくろをやってきたね」

と、さすがに声をひそめる。

「うむ、しょうがねえ。黙っていりゃ無事にすむものを、おれが番頭に百両出させて飛び出そうとすると、おふくろのやつが、利吉さん、娘のことはどうかあきらめてやってくれ、あれはもう猪村の家内になる気でいるようだからとぬかしやがった。ついかっとなって、匕首を抜いていたのよ」

「殺しちまったのかえ」

「そいつはわからねえ。胸から血の吹き出すのを見て、おれは夢中で飛び出してきちまったんだ」

「じゃ、ぐずぐずしていられないね。あの娘にそんなことをいっちゃだめだよ。だまして早くつれ出さなくちゃ」

「わかっている」

道をひらいてやると、利吉はいそいで階段をあがっていった。

約束の百両さえもらえば後は知ったことじゃないから、お蘭は澄まして長火ばちの前へ行ってきせるを取りあげた。

「お久美、いっしょに家へ帰るんだ」

二階で利吉がいっている。

娘の返事はなく、すなおに降りてくるかしら

と聞き耳を立てていると、やがて利吉がどかどかと先におりてきた。その後から、娘がもうちゃんと着物をきて、静かについてくる。真っ青な顔色をして、じっと足もとへ目をおとしながら……。

「お蘭、世話になったな」

「どういたしまして」

利吉は、久美が自分の履物をはくと、いきなりその右手をつかみにいった。

娘は一度それを払いのけるようにつと身を引いたが、ふたたび利吉が邪慳に手を取りに行くと黙ってなすに任せたが、体中でその手をきらっているのが、見ているお蘭にはよくわかった。

――かわいそうに、どこへ連れていかれるのかしら。

白々とした娘の肌をまぶたにうかべ、大助にやるのは承知できないが、あんなきれいな肌をぐれた利吉なんかにやるのは惜しいような気がしないでもない。

利吉は右手をふところへ入れてみせてから、ぐいと久美を自分の方へ引きつけ、台所口をあけてそこの路地へつれ出していった。

――ふん、もうなにが起こったってあたしの知ったことじゃない。

お蘭はそう思いながら、しかしやっぱり人情で、ひたひたと二人の足音が河岸の方へ消えていくのを、じっと耳で追っていた。

執念

「お久美、変なまねをすると、おれは本当にお前を突き殺すぞ。わかってるな」

駒形屋の路地を河岸通りへ出てから、利吉はもう一度ぐいと久美の体を引きつけて、その耳もとへ念を押した。

久美はできるだけ顔をそむけるようにして返事をしようとしない。しっかりつかまれている右手のねとねとと生ぬるいのも気持ちが悪いし、妙に酒くさい息も虫酸が走る。体中が利吉をきらいながら黙ってここまでついて出てきたのは、あの恐ろしい二階から出てきさえすればなんとか逃げる工夫がつくだろうと考えたからである。

それにしても、逃げ出すなら往来を歩いているうちのことだ。どこか家の中へでもつれこまれてからでは、また逃げにくくなる。

だれかたよりにできるような人が通りあわせてくれないかしら、この手を振り切って、助けてくれとその人にすがりついていったら、まさかいくら利吉が気ちがいじみていても、真っ昼間往来中で匕首もぬきかねるだろう。

が、ここは裏通りで、人の往来がわりにすくない上に、さてたよりになりそうな人となると、なかなか見あたらない。女や年寄りではだめだし、職人や小商人では心細い。侍がいちばんいいのだけれど、見わたしたところ一人も歩いていない。

秋の日はからっと晴れて、大川の潮は美しい藍をたたえ、往来も町並みもひどく明るい感じなのが、今の久美の目にはまったく自分とは違った世界のように見えた。

幾人かすれ違っていく人たちは、どっか気ちがいじみた若い男が娘の手をしっかりとつかんで、そのつかまれた娘の顔がただごとならず青ざめているから、みんなふしぎそうに一度は立ち止まろうとする。その度に利吉が血走った目をしてにらみつけるので、びっくりして道をよけてしまう。

――一体、どこへつれていく気かしら。

やがて駒形堂が近い。そこまで行けば、いやでも右へ曲がって表通りへ出るほかはないのだ。表通りへ出てくれれば、こんなかっこうではきっと人だかりがしてくるだろうし、恥ずかしいには恥ずかしいが、助かる機会が多くなる。と見ているうちに、急に利吉がつかつかと一軒の家の前に立ち止まった。船宿だ。

――どうしよう。船で運ぶ気なのだ。

はっと久美が立ちすくんだとき、

「おっと、兄い、ちょいと待ちな」

ふいに、うしろから利吉の肩をつかんで、力まかせに引きもどした者がある。

「な、なにをするんだ」

よろよろと二、三歩往来中へ引きもどされたが、さすがに踏みとまって、利吉は執念の久美の手はまだ放そうとしない。

「みっともねえぜ、兄い、いいかげんに娘の手を放したらどうだ」

にやりとわらったのは牧田家の悪中間鎌助(かますけ)で、そばに相棒の勘助もいる。いや、少し離れたところに深編み笠(ふかあみがさ)をかぶって立っているのは悪用人横立剛太夫だろう。

――悪い時、悪い人に。

久美はまったくぼうぜんと息をのんでしまった。

「おや、てめえたちは牧田の中間だな。なにしに来やあがったんだ」

利吉は右手をふところへ突っこんで弱みを見せない。

「そらっとぼけちゃ困るぜ、兄い。おめえが手をつかんでいる娘は、主家の重宝を引っさらっていろ男といっしょにお屋敷を出奔した大それた腰元なんだ。おれたちは御主人よりのいいつけで、その娘をさがしているんだ。おめえはちゃんと知っているはずだぜ。その娘をすなおにこっちへ渡してくれな」

鎌助は利吉にいって聞かせるのではなく、そろそろたかってきた野次馬どもがこれからの荒仕事に余計な口出しをしないように、あらかじめずるい手をうっているのだ。

「なにをぬかしやがる。そんな甘手にのってたまるもんか。てめえたちの屋敷じゃ、この妹を食い物にして、借金の抵当にだれかのめかけにおしつけようとしたから、久美が怖がって足袋はだしで逃げ出したんじゃねえか。あきれた地獄屋敷のくせに、大きな口をたたくねえ。変な

まねをしやがると、こっちから恐れながらと訴え出て、地獄屋敷の屋根へぺんぺん草を生やしてやるぞ」

利吉も負けてはいない。

「黙らねえか。いいたいことがあったら、てめえお屋敷へきていえ。てめえもいっしょにつれていってやらあ」

「おや、てめえたちは人さらいか」

「ばか野郎、いいから娘の手を放さねえか」

理屈をいわしておくとぼろが出そうなので、鎌助はいきなり利吉の横っ面へ平手打ちをくれた。

「やりやがったな、畜生」

義理ある母にもせよ、たった今、誤って母親を手にかけてきた利吉だから、半分気ちがいになりかけている。かっと逆上して、ふところの匕首を引き抜くより早く、体ごと鎌助にぶつかっていった。

あっと身をかわしながら飛びのいたが、かわしきれずに鎌助は右の腕を匕首でかすられ、血が吹き出す。

「野郎っ」

血を見て狂った鎌助は、腰の木刀を抜いて力まかせに打ちこむ。

左肩を強打された利吉はばったり前へのめったが、

「畜生っ」

と、すぐに跳ね起きて、またしても鎌助にぶつかっていこうとする。まるで悪鬼の形相だ。

見ていた勘助が狼狽(ろうばい)して、兄弟分があぶないと思ったから、夢中でこれも木刀を抜き、うしろから利吉の頭を追い打ちに殴りつける。ごつんという音がして、もとどりが切れ、利吉はよろよろと前へ泳いだが、

「畜生、――畜生っ」

さんばら髪の後頭部から血を流しながら、ふらふらと執念深く鎌助を追う。

その形相にぞっとした鎌助は、

「くたばれ」
死に物狂いで木刀を利吉の眉間へたたきつけた。
「ううむ」
眉間が割れて血を吹き、がくんと棒立ちになった利吉は、
「畜生、――お久美」
わなわなと血の気のないくちびるをふるわせながら、脳乱してぱったり前へ朽ち木倒れになる。
野次馬どもは思わず目をおおう。
ぼうぜんと立ちつくしていた久美は、さすがに兄と呼んで育った利吉のあまりにもむごたらしい姿に、
「兄さん、――しっかりして、兄さん」
我にもなく利吉の方へすがっていこうとした。
「おっと、待った」
その前へつと立ちはだかったのは鎌助である。
「無礼な。おどきなさい」
「そうはいかねえ」
鎌助は深編み笠の方へ、どうしようというように、ちらっと目で聞く。
つかつかと進んできた深編み笠が、
「久美、殿さまの仰せつけであるぞ、神妙に屋敷へもどりなさい」
と、しかりつけるようにいった。
「いいえ、久美はもどりません」
「そんなわがままが許されると思うか」
「わがままではございません。久美はお金で体を売られるのはいやですから、お暇を願ったのです」
「黙れっ、――鎌助、勘助、殿さまのおいいつけだ、久美を召し捕って船へ運べ」
ともかくも人一人を殺してしまったようだから、ぐずぐずしていてじゃまが入っては面倒と思ったのだろう。剛太夫は殿さまを笠にきて、

有無をいわせず中間どもに指図する。
「神妙にしろ」
うしろから勘助が躍りかかって羽交い締めにした。
「殿さまのおいいつけだ」
それを見た鎌助が前から飛びこんで、さっと両足をすくいあげる。
「あっ、なにを、――助けてえ」
久美は身もがきしながら金切り声をあげたが、たちまち体が宙にういて、もうどうしようもなかった。
前の桟橋にはちゃんと屋根船が用意してある。
ひどいことをしやがると群衆はみんな義憤にかられているようだが、深編み笠の立派な侍がついているのでちょいと口を出そうという者もないようだ。
――うまくいった。
そういう群衆をじろりと編み笠の中からにらみまわしながら、横立剛太夫はひそかに薄らわらいをもらしている。
今日はもう一度花川戸の佐原屋を脅迫する腹で船を吾妻橋へつけたのだが、その目の前を佐原屋のせがれ利吉が血相を変えて駒形の方へいそいでいく。はてな、久美のかくれ家がわかったんじゃないかなとぴんと頭にきたので、鎌助に後をつけさせ、自分は船で川っぷちを下ってきて、案の定、この拾い物をしたのだ。
ただ一つまずかったのは、利吉を殴り殺してしまったことだ。が、それもそのまま船に乗って逃げてしまえば、顔を見られているわけではなし、後はなんとでもごまかしようがある。早く船を出してしまうことだと思ったから、
「いそげ」
中間二人をせかしながら、しかし、自分はわざとゆうゆうと二人の後から桟橋の方へついていく。

走る大助

そのころ、材木町の通りを吾妻橋通りへ出てきた大助は、

「おやじどの、わしはここでひとまず失礼しよう」

と、利兵衛にいって立ち止まった。

まっすぐ行けば花川戸、右へ折れれば吾妻橋がすぐそこに見える。大須賀の方の話はついたし、利吉も無事だとおよそ見当がついたのだから、わざわざ佐原屋へ立ち寄ることもない。早く帰って久美を安心させてやりたくなったのだ。

「そうですな、時分どきだから、どこかで御飯でもといいたいところですが、久美も案じているだろうし、家でも家内が心配していることでしょう。では、またということにしますかな」

利兵衛も気軽にからかいながら、無理に引きとめようとはしなかった。

「もしよかったら今夜にでもおふくろさまを一度よこしてくださらんか、久美も会いたがっていますから」

「なるべくそういうことにしましょう。では、いろいろお世話でした」

あいさつをして、花川戸の通りへ別れていく利兵衛を見送ってから、大助は吾妻橋の方へ歩き出した。その橋のたもとで、往来の者をかき分けるようにせかせかと板橋を鳴らしてくるお仲にばったり出会ったのである。

「あっ、若だんな――」

「どうしたんだ。そんなにあわてて、どこへ行くんだ」

「けがは、けがは、若だんな」

目をみはって、頭のてっぺんから足の先までじろじろ見まわしている。

「けが――?」

「じゃ、じゃ、若だんなはお嬢さんに会ったんですか」

「久美がどうかしたのか」

けげんそうな大助の顔を見て、はっとお仲は気がついたらしい。

「大変だ、若だんな。こっちへ来てください」

にぎやかな橋のたもとではすぐ人だかりがしそうである。大助のたもとをつかんで、ぐんぐん河岸っぷちの方へ連れこみながら、

「さっきお蘭て女がたずねてきて、お嬢さんを連れ出したんです。三間町の道場で若だんながけがをしたんで、うちへつれていってある。お久美さんに会いたがっているから、すぐ来てくれって――」

お仲はもどかしそうにしゃべり立てるのだ。

「あたしもお久美さんも、すっかり本当にしちまって。じゃ、うそだったんですね。憎らしい。お嬢さんはおろおろになって、あたしもついそのお蘭って女といっしょに出してやったんですけど、家にいても、どんなけがの様子なんだかと気が気じゃありません。ちょいと見てこようと思って、我慢できなくなったもんだから駆け出してきたんですけど、畜生、どうしよう。みんなうそだったんだ」

「変だなあ」

その駒形屋へはたったいま行って、お蘭と話してきている。では、あの時、久美はもう二階へ監禁されていたのだろうか。目的はなんなんだろう。お蘭という女は相当のあばずれ姉御ではあるが、そんなあくどいことをする女だったろうか。

「なにが変なんです、若だんな」

「いや、いい。とにかく行ってみてくる」

「畜生、あたしもいっしょに行きます」

「そうか。じゃ、いっしょに行け」

いけないといったところで、すなおにいうことをきくお仲じゃない。連れ立って駒形の方へ歩き出そうとすると、

「先生、――先生じゃありませんか」

うしろから大声で呼びながら、長松が追いかけてきた。

「大変なんです。おかみさんが、おかみさんが若だんなに刺されました」
「なにっ」
大助はぐっと腹へ力を入れた。
「胸を、左のお乳の上を突かれたんですけど、気はしっかりしていて、大丈夫だから世間さまを騒がせてはいけないって」
「利吉はどうした」
「大番頭さんにお金を出させて、それから茶の間でなにか二言三言おかみさんにいっていたと思ったら、あっとおかみさんが叫んで、若だんなはそれっきり表へ飛び出していってしまったんです」
「よし、わかった。わしは利吉をさがしてすぐ後から行く。たいてい行った先はわかっているから、お前は帰って、だんなにそういっておいてくれ」
大助は大股に歩き出した。
久美の母親の傷が致命傷でないらしいのはなによりである。この方は利兵衛が帰ったからもう安心だ。
お蘭が久美を誘拐したのは、金で利吉にたのまれたからだ。
おそらく久美は死んでも利吉などの自由にはならないだろうから、下手をすると破れかぶれで、血迷っている利吉はついでに久美を刺し殺すかも知れない。
——間にあうかな。
大助の足はいよいよ早くなる。
「気ちがいに刃物では、困った男だ」
一足違いということがある。血まみれになっている久美の姿が目にちらつき出して大助は気が気ではなく、とうとう駆け出さずにはいられなくなってきた。

死者生者

「姉ちゃん、若だんなが殺されそうだよ」
表から駆けこんできた辰んべがいきなりわめきたてた。
「だれにさ、さっきの大助につかまったのかえ」
「違うんだ。そこの船芳の前で、中間二人にけんかを吹っかけられたんだ」
「本当だね、辰んべ」
お蘭はもう下駄を突っかけながら、昨日の牧田の中間たちだなととっさに考えていた。お蘭は夢中で駆け出した。
ちょうど、鎌助というやつが先立ちで、久美の両足を引っ抱えながら、いま桟橋へ逃げようとするところだ。利吉はすでに血だらけになって、往来の真ん中へ丸太ん棒のようにころがっている。
「お前さんたち、ちょいと待ってもらいたいね」
きかない気のお蘭は、血相を変えてつかつかと鎌助の前へ立ちはだかった。
「どいたどいた、姉さん、女なんかの出る幕じゃねえ」
「なにいってんのさ。だれが出てこようと、ここは天下の往来じゃないか。それとも、ここは人殺しと女さらいしか出ちゃいけない往来なのかえ」
「なにをっ」
「お前さんたち、その娘をどこへ担いでいこうっていうのさ。それは花川戸の米問屋佐原屋利兵衛さんの娘さんで、お久美さんという、ちゃんと親御さんのあるひとだよ。だれに断って、どこへ担いでいこうというんだえ」
さっきは自分が散々勝手なまねをしていたのをけろりと忘れて、人の無法は黙って見ていられない、そんな手前勝手なお蘭だ。というより、やきもちがあるから自分は久美をいじめはしたが、根は生一本の姉御気質のお蘭なのである。
「こんちくしょう、大きな口をたたきやがると後で後悔するぞ。屋敷で不埒を働いた腰元だから、殿さまのいいつけでお久美をつかまえていくんだ。文句があるんなら屋敷へきていいえ」
「ふうん。うかがいたいねえ。お前さんたちの

お屋敷はどこさ。殿さまってのはどこの何様さ。おおぜいここに聞いていらっしゃる人がある。いってごらんよ」

「なにをっ」

鎌助は思わず言葉に詰まる。こっちに無理があることを百も承知だからだ。

「いえないのかえ、おい。ここに殺されているのは、佐原屋の若だんな利吉さんて人だ。いまに戸板にのせて担ぎこんでいって、お前さんたちの殿さまに掛け合ってやるんだから、お屋敷の名前をいわないうちは一足もここは通さないからね」

「そうだそうだ、姉御、しっかり」

野次馬は義憤に燃えていたところだから、みんなお蘭の味方だ。

事面倒と見た剛太夫がすっと前へ出て、

「無礼者、どけ。じゃまだてすると、手は見せぬぞ」

半分脅しのつもりで柄（つか）に手をかけた。

「だれなの、あんたは。その編み笠をお取んなさいよ。笠をかぶったまま人の前へ出るなんて、失礼じゃありませんか」

じりじりと後へさがりながらも、お蘭は悪態をやめない。

「黙ってどけというのに――」

剛太夫はお蘭を脅しながら、道が開いたので、中間たちに早く船へ行けとあごをしゃくってみせる。お蘭は逃がすもんかと、

「人殺しいっ、女さらいだあ」

いきなりありったけの大声をあげた。

「うぬっ」

剛太夫が、本当に切る気になって大きく一歩踏み出そうとした時、

「待てっ」

大喝（だいかつ）しながら、つかつかと大助が進み出て、とっさにお蘭を背へかばった。

「横立さんですな」

一目で大助はすべてを見てとったのだ。

「くそっ」

剛太夫は一刀をふるって猛然と切って出た。機先を制する気持ちだったろうが、油断のない大助だ。しかも、胸に怒りがある。

ひらりと飛びのいて、敵が空を切り、立ち直ろうとするすき、

「えいっ」

抜きうちに剛太夫の真っ向から躍りこんでいった。一刀は深編み笠の右べりを切りそいで、したたか肩口へ切りこむ。

「ううっ」

たった一太刀で剛太夫は大きくのけぞり、どっとうしろざまに倒れていった。

ばたばたっと鎌助と勘助が夢中で駒形堂の方へ逃げ出したが、だれもまだ目をみはったまま口がきけない。

久美が真っ青な顔をして大助の前へ走り寄った。がっくりとこわれた髪が肩にみだれ、かなしげな目が必死に大助を見つめている。が、決して取り乱してすがりつくようなはしたないまねはしなかった。

「久美、無事でよかった」

「はい」

「猪村さん――」

悪びれもせずお蘭が大助の前へ出た。

「ここはあたしが引きうける、早くそのひとをつれて家へ帰った方がいいわ」

佐原屋にもけが人がいる。それをまだ久美は知らないのだ。

すなおに大助はうなずいて、

「久美、おいで」

はじめて久美の手を取った。

「しっかりしていなけりゃいけないよ」

「はい」

まだ夢心地のような久美をつれて人垣（ひとがき）の外へ出ながら、母親のことを話すのはもう少し落ち着いてからだと大助は思う。お仲が走り寄ってきて、つと久美の左側へ寄りそったが、これも

ロはきかなかった。いや、ロがきけなかったのである。

ともかくも人一人を切った大助が、利兵衛にいとしい久美を託し、江戸の地を落ちたのは、翌日まだ夜のあけないうちであった。慶応元年八月のことで、目ざす京には討幕維新の気運がようやく急になってくる時代だ。好漢猪村大助はそこにどんな新しい天地を求めるであろうか。

●江戸おもしろ事典

江戸のベストセラー

江戸期の出版とはどんなだったか

日本で出版が商売としてはじまったのは江戸期に入ってからで、寛文から元禄（一六六一〜一七〇四年）の時代である。それまで書物は写本という形態で一部の人々に読みつがれていた。それも武士・僧侶・医者といった知識階級のものといってよかった。

書物が作られる過程では、写本から木板に、そして活字にという変遷があったわけだが、日本に活字が伝わってきたのは、豊臣秀吉が朝鮮に侵入、戦ではさんざんな敗北を喫したが、その折に銅活字を発見、これを日本に移入したのである。もとより印刷機械があったわけではない。摺師がいて、木板、活字に紙を乗せ刷ったのである。

明治初年、福沢諭吉が『学問のすすめ』を著した。初版は活字で刷ったわけだが、大変な売れ行きで、需要に応じるには木板刷りの方が増刷しやすいので、再版、三版は木板刷りで刊行されている。

活字版が印刷機械によって刷られるようになったのは明治九年以降のことで、江戸時代はもっぱら木板の手刷りで、そのため彫師・摺師という者が重宝がられた。

筆者の書いた原稿を筆字の上手な筆耕者が浄書、これを桜とか黄楊の木に彫り、摺師が手刷りしたものをとじたのである。

江戸時代も元禄のころ、出版が職業としてさかんだったのは京都である。このころの出版業は、本屋・書物屋・書林・書肆などと、その名称もいろいろだった。

元禄九年（一六九六）に、河内屋利兵衛が『増益書籍目録大全』という本を出している。内容は書物の題名・発行部数・値段・出版者が記載されている。

目録には仏書教典のほか、『万葉集』『源氏物語』『日本書紀』『枕草子』、中国の古典、『本草綱目』といった薬物学の本、井原西鶴の『好色一代男』『好色五人女』といったもので、出版というものが職業として成り立ってからほんの数年というのに、約八千点の書物が売り出されるまでになっている。

これほど活況を呈した出版活動の九〇パーセントが京都に集中し、あとの一〇パーセントの本屋が大坂・江戸・金沢であった。

大坂で出版がさかんになったのは、「重宝記」とか「万宝記」といった庶民向きの実用書のたぐいや「浮世草子」が発刊されてからで、文化人向けの京都の出版物とは対象的に画期的といえる。

江戸での出版がさかんになったのは享保（一七一六〜一七三六年）のころからで、寛政から文化（一七八九〜一八一八年）時代になると、もう出版業の大勢は江戸といってさしつかえないまでになった。しかし、その要因には、京都の出版業者の出店が江戸に数多く、それが刺激を与えたといっていい。

江戸の出版業者といえば、日本橋を中心に、京橋周辺に居を構えていたのである。

本屋という形態の店ができたのは、「浮世草子」といわれる庶民向けの本が出るころになってで、書物を刊行するとともに、書物を自家で売るということになってきたのだ。むしろ、書物を風呂敷に包んで販売訪問する方が主力であった。

江戸文化を担った出版業者とはだれか

江戸での出版業者といえば、須原屋市兵衛と蔦屋重三郎の名をあげたい。

須原屋は日本橋通一丁目に店を張る須原屋茂兵衛の分家で、室町二丁目に「申椒堂須原屋」の看板をかかげていた。

須原屋市兵衛は杉田玄白、中川淳庵、桂川甫周といった蘭学者たちと交際があって、そのころ、危険を承知で『解体新書』を出版した。医学者にとっては待ち望んでいたもので、蘭学を志す者はむろん、和漢の医者たちにも大変な衝撃と刺激を与えたといわれる。

このほか、平賀国倫（源内）の『火浣布略説』、大田南畝の『寝惚先生文集』、貝原益軒の『売飴土平伝』、福内鬼外（平賀源内）の『神霊矢口渡』、熊坂宇右衛門の『西遊紀行』、杉田玄白の『解体約図』、森島中良の『琉球談』など、幅広い出版物を宝暦（一七五一〜一七六四年）から寛政にかけて続々と発刊している。幕府の厳しい目の中で、あえて世界へまで目を向けていた須原屋市兵衛の企業への情熱は称賛される。

天明年間（一七八一〜一七八九）といえば江戸時代の爛熟期である。江戸っ子気質というものが形になったのはこの時代のころからで、江戸っ子気質とは「いき」と「はり」で表現される抵抗精神だといわれる。その江戸っ子像を典型化したのが山東京伝であって、天明年間に文化・美術を燦然と輝かしたのが、戯作者では山東京伝、錦絵の歌麿である。その両者に、アイデアとかヒントを与え、作品を世に送り出したのが蔦重と呼ばれる蔦屋重三郎だ。くしくも、この三者とも江戸っ子としての気魄の持ち主であった。

この蔦重は江戸吉原の生まれで、喜多川家の養子になり、吉原大門口で書物商いの店を出したのが最初で、鱗形屋孫兵衛から『吉原細見』の出版権を手に入れ、鱗形屋版吉原細見『嗚呼御江戸』を出している。

蔦重が評判をとったのは浄瑠璃本の刊行とともに、黄表紙刊行に力をそそいだからだ。当時

の一流戯作者に『夜野中狐物』とか『虚八百万八伝』などを書かせて刊行するかたわら、大田南畝などの狂歌集を発刊した。加えて、黄表紙本に時事に取材したものを作って、同業者を瞠目させた。中でも写楽の作品を大量出版したことが彼の名を知らしめ、アイデア・プロットといった優れた編集センスはもとより、企業家としても立派な精神の持ち主といえる。

江戸期のベストセラーは何か

今日でいうベストセラーとは、ある一定の期間によく売れた本のことである。ベストセラーといわれずとも、発行部数としてはベストセラーをしのぐものもある。たとえば辞書・宝典・教科書のたぐいだ。

江戸時代に『家内調法記』『諸人重宝記』といった日常生活に必要な知識を集めた庶民向きの簡易百科が、種類・部数とも数多く出た。しかし、これをベストセラーとはいいかねる。

江戸時代の初期のベストセラーといえば天和（一六八一～一六八四年）から元禄にかけて刊行された井原西鶴の『好色一代男』『好色五人女』『本朝二十不孝』『武道伝来記』『日本永代蔵』などである。

今日のベストセラーとくらべたら、その部数に大きなひらきはあるといっても、当時としては内容の斬新さ、面白さは別格の反響があり、部数もかつてなかったほどに売れた。今日でも、井原西鶴の作品は江戸期の文学として高く評価されている。

当時、西鶴の好色本をまねて数多くの本が出た。中でも、京都の出版元である八文字屋八左衛門が刊行したものが、後に八文字屋本といわれたくらいで、元文年間（一七三六～一七四一）に至る約三十年間に渡って売りつづけた。

同じころ、教訓書として刊行された貝原益軒の『養生訓』『学道訓』『和俗童子訓』といったものがよく売れた。益軒は儒者として名高く、向

井元升に医学を学び、朱子学を主としたが、陽明学も研究し、後に福岡藩医となった。

また、井原西鶴は大坂の富裕な町人の家に生まれ、西山宗因に師事、談林派俳諧で活躍、一昼夜に二万三千五百句をよむという快挙をなし遂げている。天和二年（一六八二）から『好色一代男』をはじめとする好色もの、『日本永代蔵』といった経済もの、あるいは『武道伝来記』といった武家ものと、内容は実録的な小説で多岐にわたっている。この西鶴とならんで、当時の文学史上に足跡を残したのが『奥の細道』の松尾芭蕉であり、『曽根崎心中』『心中天網島』の近松門左衛門である。

享保から天明といえば田沼意次・意知の田沼時代で、このころでは江戸では遊里風俗を描いた洒落本、絵入りの通俗小説の黄表紙がよく売れた。この中では須原屋市兵衛の刊行といわれる『遊子方言』は江戸洒落本では第一の名作といわれる。

通俗ものではあっても、黄表紙は草双紙よりも内容が充実していて、安永四年（一七七五）恋川春町の『金々先生栄花夢』が評判で、これが黄表紙本として最初のものという。黄表紙の作者は今でいうペンネームを使用し、戯作者と呼ばれた。

恋川春町は本名を倉橋格といって、小石川春日町に住み、浮世絵・狂歌にもすぐれ、その手法を取り入れて時代風俗を描いた。

天明から天保（一七八一～一八四四年）に至って戯作者は続々と誕生した。『南総里見八犬伝』の曲亭馬琴（本名滝沢解）、『御存商売物』の山東京伝（町人で通称京屋伝蔵と呼ばれた）、滑稽本『浮世風呂』『浮世床』を書いた式亭三馬（本名菊地久徳）、『東海道中膝栗毛』の十返舎一九（本名重田貞一）、『春色梅児誉美』の為永春水（本名佐々木貞高）と、このほか狂歌で知られる大田南畝など数々の人が出てきたのである。

現代の物量的な出版とはくらべられないが、当時、正月二日に売り出されたものが、松の内の間に五千部から売りつくされたものが出たという。以上の中でも、『東海道中膝栗毛』と『南総里見八犬伝』は完結するまでに二十年も二十八年もかかり、板元も変わったが、この時代のベストセラーの代表といえる。

戯作者とはどんな人物か

封建時代である。出版が興隆し、自由に書きたいものが書け、刊行したいものが自由に発刊され、販売されるわけではない。幕府という存在があって、政治批判とか、良風美俗をそこなうものは断固取り締まられた。

出版統制に幕府がのりだしたのは元禄より先の寛文時代だ。

江戸北町奉行渡辺大隅守が、江戸板木屋仲間の棟梁甚四郎を呼び出し、つぎのことを申し渡している。

一、軍書類
一、歌書類
一、暦類
一、好色本類
一、噂事人善悪
其外何によらず、疑わしき誂に参り候はば、御番所へ御伺い申し上げ、御差図次第に仕るべく候。

抑圧された庶民感情の中には、幕政に対し、あるいは武士階級に向かっての反発といったものがあった。法令が厳しくなればなるほど、批判・揶揄といったたぐいのものが喝采をはくした。作者たちはそれを戯作に託したのである。

戯作者は町人ばかりではない。むしろ、武士も下級武士に多く、身分をいつわるということもあってペンネームが使用された。

当時は原稿を書いたから、一枚幾らという原稿料が出たわけではない。出版元の判断次第で小遣銭くらい、出版主がご苦労賃に料亭で馳走

してくれるくらいが報酬といってよかった。もっとも、ベストセラーとなった『東海道中膝栗毛』の十返舎一九とか、『南総里見八犬伝』の曲亭馬琴といった作者たちには、さすがに潤筆という名の原稿料が支払われている。これとて、現在のような稿料や印税といったものにはほど遠い金額だった。

下級武士の生活というものは、与えられている扶持では糊口をしのぐのがやっと、それもおぼつかないこともあって、必然的に内職は黙認されていた。生活費の補給となにがしかの小遣銭、加えて自分の書いた戯作が評判になる、あるいは心にあるうっぷんを筆に託すといったことで、下級武士も文筆に才能ある人たちが戯作者となった。

当時、ポルノ小説の流行作家となった恋川春町は駿河小島藩の家臣であったが、江戸の藩邸が春日町にあったところから、町名をもじって春町の名をつけた。狂歌で名声をはせた幕府の下級武士大田直次郎は南畝と号し、四方赤良・四方山人・鶯谷隠士・杏花園と数多くの名を使った。

こうした戯作者の風習は時代が下がって、町人の筆者も好んでペンネームを使うようになった。

下級武士といっても武士は武士、俗文学で名をはせても上司の覚えは悪い。そこでの戯作者名だが、それが有名になって身分がばれて筆を折った人たちも何人かあった。道楽で筆を執る人は筆を擱いてもよいが、生活に事欠くようではみすみす筆を折るわけにはいかない。

『里見八犬伝』の著者滝沢解（曲亭馬琴）は松平信綱の四男信成の家の家老滝沢興義、もん夫妻の五男として誕生、幼名を倉蔵といって、長男は左馬太郎、四男は常三郎といい、次男、三男は夭折した。ほかに妹が二人という家族であった。

松平家の本家が七万石、分家の信成はわずか

一千石、その家老だから微禄であったことはいうまでもないが、父の興義は貨殖の方法に長じていたので生活はまぁまぁといった暮らし向きだった。

その父が馬琴九歳の折に亡くなると、一家は一挙に悲惨な生活に落ち込んだ。兄弟は転々と勤めを替え、養子に入ったり、渡徒士となって生活を凌いだ。天明四年(一七八四)、倉蔵から左七、左五郎と名も変わっていたこのころ、俳号で馬琴を用い、文筆の道へ志が向いていた。その後、外桜田の有馬備後守一万石に勤めたが、ここも病を得て兄の家に身を寄せるとともに、わずかな扶持米に甘んじ得ず、二十三歳の折から戯作の道にいそしむこととなった。

江戸期の出版物取締令とはどんなものか

江戸の出版業者の多くは枕絵本・浄瑠璃本・お伽草子・仮名草子といった娯楽本を多く刊行した。ところが、綱吉が将軍職につくと、出版物の取締令を発令したのである。

このころ、世の中は凶作が続いて餓死者が続出し、大名の改易、減封があいつぎ、大名の没収された領地は百六十一万石に達した。にわかの不況、大名家の粛清と、上も下も戦々恐々となり、不満がつのった。その上に、綱吉は「生類憐みの令」という法令を出した。お犬さまをいじめたり、あやまって殺したら人間の生命がなくなるのである。

人間より犬畜生の方が重く見られたら当然文句が出る。その文句は幕政批判につながるということで、貞享元年(一六八四)の出版統制令は出版業者を金縛りにした。

元禄六年(一六九三)、『馬のものいひ』という小冊子が発刊された。これは馬や犬、あるいは鳩や雀が人間をばかにした話を書いたもので、動物や鳥は将軍や老中、あるいは大奥女中たちに擬したものだったという。

幕府はこの筆者探しに大わらわ、役人から調

書をとられたものが三十五万人を超えたといわれ、三カ月目に犯人が捕らえられた。犯人は紫園右衛門という牢人で、江戸中を引きまわされた上で斬首されている。

こうした厳しい世相の、実際にあった事件を取材して浄瑠璃本としたのが近松門左衛門で、『曽根崎心中』はその代表作となり、芝居は好評だった。しかし、こうしたノンフィクションに対しても、幕府は正徳三年(一七一三)以後強力に取り締まりを行った。とくに享保八年(一七二三)の町触れは近松の弾圧といってよかった。

この時の町奉行は大岡越前守で、寛文以後の出版取締令を整理検討したもので、出版条目によると、幕府批判、あるいは不穏当なことが書いてあったら処断する。好色本は法度。大名家のルーツをさぐってはいけない。今後の出版物には作者名、板元名を実名でいれよ、というものだった。

それでも、厳しい出版統制の目をかいくぐって黄表紙や好色本は発刊され、よく売れたのである。

天保十二年(一八四一)十二月、老中水野越前守忠邦は南北両奉行所に命じて、代表的な人情本の出版元を急襲し、多くの出版物を摘発した。

この時の北町奉行が桜の刺青で評判の遠山左衛門尉景元であり、南町奉行が悪名高い鳥居甲斐守忠耀だった。

(伊藤文八郎)

山手樹一郎長編時代小説全集21

青空浪人 他一編

発行――一九七八年八月二五日初版
著者――山手樹一郎©
装画――国貞(静嘉堂文庫提供)
装丁――玉井ヒロテル
発行者――和田欣之介
発行所――株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三―四―一六
〒一〇三　☎東京二七一―〇〇五一　振替東京〇―一六一七
印刷製本――城北印刷製本センター

◆――定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします